

# Gender and Sexuality

Journal of the Center for Gender Studies, ICU

No.10  
2015

CGS  
Center for Gender Studies  
International Christian University  
Tokyo.....Asia

## 目次

目次 .....	1
----------	---

### 研究論文

「従軍する権利」をめぐるダブルバインド：

1970年代アメリカ合衆国におけるゲイ解放運動とベトナム反戦運動

高内悠貴 .....	5
------------	---

クレイム申し立ての認識論と「出会い損ない」

——カミングアウト/クローゼット論を手がかりとして

堀真悟 .....	33
-----------	----

ジェンダーの視点からみる「母」と「ふるさと」

——明治大正期の三つの文学作品における家の構造をめぐって

リンジー・モリソン .....	61
-----------------	----

「LGBTに関する職場環境アンケート 2014」概要 .....	87
----------------------------------	----

職場における性的マイノリティの困難

——収入および勤続意欲の多変量解析

平森大規 .....	91
------------	----

### 研究ノート

「LGBTに関する職場環境アンケート 2014」における【差別的言動の事例】の  
内容分析

二木泉 .....	119
-----------	-----

フェミニスト障害学の視点からみる相互信頼、身体肯定、自己肯定

フリアナ・ブリティカ・アルサテ .....	133
-----------------------	-----

マレーシアにおける「女」同士のつながりを考える

——ムスリム女性権利運動と女性を愛するムスリム女性——

上田真央 .....	159
------------	-----

メディアにみる「家族を介護する若者」

——日本における社会問題化を考える

松崎実穂 .....	187
------------	-----

## 書評

『ウーマン イン ダークタイムス』

加藤ダニエラ ..... 203

## ジェンダー研究センター (CGS) 2014年度イベント報告

「ふわカフェ」報告 ..... 207

第2回 R-Week 報告 ..... 219

「境界と共生を問い直す」：シンポジウム開催報告 ..... 224

## ジェンダー研究センター (CGS) 活動報告・予定

多摩ジェンダー教育ネットワーク 第18-20回会合 ..... 230

2014年度 CGS 活動報告 ..... 234

2015年度 CGS 活動予定 ..... 255

## 付記

執筆者紹介 ..... 263

CGS所員リスト ..... 266

第11号投稿規程 ..... 269

編集後記 ..... 278

## Contents

Contents .....	1
----------------	---

### Research Papers

Double bind of “the right to serve”: Gay liberation movement and anti-Vietnam War movement in the United States during the 1970s. Yuki TAKAUCHI .....	5
An Epistemology of Claim-Making Activities and “Missed Encounters” Based on Theories of Coming Out/the Closet Shingo HORI .....	33
The Furusato as Mother: Gendered Perspectives on the Home in Three Meiji and Taisho Literary Texts Lindsay R. MORRISON .....	61
Summary of “Survey on LGBT Issues in the Work Environment 2014” .....	87
Challenges of Sexual and Gender Minorities in the Workplace: Multivariate Analyses of Income and Willingness to Continue Working Daiki HIRAMORI .....	91

### Research Notes

Case Analysis of Discriminatory Speech in “Survey on LGBT Issues in the Work Environment 2014” Izumi NIKI .....	119
Interdependence, Body Empowerment and Self-Esteem from a Feminist (Dis)ability Perspective Juliana Buriticá ALZATE .....	133
Thinking about Solidarities among Women in Malaysia: Muslim Women’s Rights Activism and Muslim Women-Who-Love-Women Habiba-Mao, UEDA .....	159
Media Representations of Young People Performing Caretaking Roles in Families as a Rising Social Problem in Japan	

Miho MATSUZAKI .....	187
----------------------	-----

## **Book review**

Women in Dark Times

Daniela KATO .....	203
--------------------	-----

## **CGS Events Reports**

Report “Fuwa Café” (Casual Café) .....	207
--	-----

2nd Annual R-Week Report .....	219
--------------------------------	-----

“Redefining Boundaries and Conviviality” Symposium Report .....	224
---	-----

## **CGS Activity Reports and Schedule**

The 18th-20th Meetings of the Tama Gender Education Net .....	230
---	-----

AY 2014 CGS Activity Report .....	234
-----------------------------------	-----

AY 2015 CGS Activity Schedule .....	255
-------------------------------------	-----

## **Notes**

Author Profiles .....	263
-----------------------	-----

Regular Members of the Center for Gender Studies .....	266
--	-----

Journal Regulations for Vol. 11 .....	269
---------------------------------------	-----

Postscript from the Editor .....	278
----------------------------------	-----

## 「従軍する権利」をめぐるダブルバインド： 1970年代アメリカ合衆国におけるゲイ解放運動とベトナム反戦運動 高内悠貴

### はじめに

2011年、米軍の同性愛者兵士の従軍を規制する DADT (Don't Ask, Don't Tell) 政策が撤廃されたことは記憶に新しい。1993年に制定された DADT は、軍隊が兵士に性的指向を尋ねることを禁止する (Don't Ask) かわりに、同性愛者の兵士が性的指向をカミングアウトすることを禁止してきた (Don't Tell)。DADT の撤廃は、1992年の DADT 制定過程からすでにその差別的な性格を批判していた LGBT 運動の努力が実を結んだ成果として、ひとまず評価できるだろう。さらに、DADT 撤廃はアメリカ合衆国において全国的なゲイ運動が誕生した 1950年代以来、常に運動の課題であった軍隊における同性愛者という問題に区切りがついたという意味でも画期であったと言える。

しかし、DADT 撤廃に対する反応は一様ではない。Democracy Now! が放送した DADT 撤廃運動のリーダー Daniel Choi とクィア運動の活動家である Mattilda Bernstein Sycamore の対談において、Sycamore は「軍隊に加入するための闘争は、殺すための闘争だ」として、DADT 撤廃運動がイラク、アフガニスタン戦争に加担し、LGBT 運動が軍事化されることに対する警鐘を鳴らした。Choi はそのような問いは道徳的、倫理的問いであり、DADT 撤廃の問いはあくまでも法の局面で行われているとして、Sycamore の追求を退けた (Democracy Now!, 2010)。2010年の DADT 撤廃運動では、LGBT 権利団体や LGBT の退役軍人団体、LGBT フレンドリーな議員たちはあくまでも DADT の差別的な性格に議論を集中させることで、対テロ戦争の是非や米軍のマン・パワー政策の問題といった論点を棚上げにした。彼らは高い能力を備えているにもかかわらず、愛国的な市民としての献身が評価されていない同性愛者兵士のイメージの求心力に訴え、カミングアウトして誠実に、正直に従軍できないことは同性愛者の「従軍する権利」を侵害すると主張することで DADT 撤廃への支持を獲得することに成功したのである。

LGBT 運動の軍事化を批判する Sycamore の意見は 2010年には少数派であっ

たが、1970年代の運動を知る人にとっては馴染みのあるものでもあっただろう。1970年代初頭に米国で展開したゲイ解放運動はベトナム反戦運動にも積極的に関わり、ゲイの「従軍する権利」の要求には否定的な態度を示した。彼らは軍隊が同性愛者を排除しているという事実抗議するというよりは、それを逆手にとって徴兵を避けようとしたし、時にはゲイ解放という究極の目的のためには軍隊という制度自体の撤廃が必要とさえ主張したのである。このように、70年代のゲイ解放運動が公民権運動やベトナム反戦運動、女性運動など同時代の他の社会運動との関わりの中で、異性愛主義のみならず人種主義、帝国主義、資本主義など様々な抑圧の形態に対する批判へとその運動の射程を拡大していったことはよく知られている。

1960年代に花開いた多様な社会運動の相互関係に注目する歴史研究が登場したのは近年のことである。このような研究が登場した背景には、第2次世界大戦後の公民権運動から、70年代のマイノリティ運動、さらには現在のリベラル派の運動を、その相互の関係に着目して包括的に検討する枠組みである「長い60年代」論の登場がある（Hayden, 2009）。「長い60年代」論は、それ以前の1960年代研究がしばしば当時の社会運動の内部または運動間の対立をそのまま引き継ぎ、1960年代の前半を民主主義的で広範な支持を得た公民権運動と学生運動が展開した「良い60年代」、後半をブラックパンサー、ウェザーマンらによってラディカル化、暴徒化したために運動が孤立した「悪い60年代」として切り分けて論じようとしてきたことへの批判として登場した（Hall, 2008）。「長い60年代」論の立場からは、Carl Wittmanといった著名なゲイの活動家が民主社会学生同盟（Students for Democratic Society, SDS）に参加しており、学生運動がゲイ解放運動に大きな影響を与えたことなどが指摘されてきた。しかし、このように公民権運動や学生運動がその後花開いたマイノリティ運動に与えた影響を強調し、その連続性を評価する語りにおいては、フェミニズム運動やゲイ運動がそのような運動に影響を受けつつも、そこで限界に直面したからこそ彼らを批判し、自分たちの運動を展開したという事実が後景に退きがちな。女性やゲイたちの批判を無化しつつ包含することで、批判されていたところの性差別やホモフォビアを歴史的な語りの中で反復してしまう危険は避けなくてはならないだろう。

一方、米国のゲイ解放運動についての先行研究においては、ゲイ解放運動の指導的地位が白人で中産階級のゲイ男性に占められていたことへの批判から、運動内部の差異の政治や葛藤を明らかにすることが重要なテーマの1つであった（D'Emilio, 1998; Faderman, 1991; Meyerowitz, 2004）。同時代の他の運動との関係については、フェミニズム運動やブラックパンサーとの関係（Kissack, 1995）や新左翼運動との距離（Lekus, 2004）などが取り上げられてきた。ゲイ解放運動のベトナム反戦運動への参加について直接扱ったものとしては、Justin David Suranの論考が挙げられる（Suran, 2001）。Suranは、60年代のベトナム反戦運動のラディカリズムの影響を受け、ゲイ解放運動に参加していたゲイたちが、ゲイ・アイデンティティを性的指向のみならず、政治的にラディカルであることを含意するものとして理解していたことを論じ、ゲイ解放運動のアイデンティティ政治の意義を再考している。本稿は、Suranの指摘する60年代の政治的なラディカリズムがゲイ・アイデンティティの構築に対して与えた影響に注目しつつも、同時に、軍隊からそもそも排除された存在であったゲイたちが展開した反戦運動と主流の反戦運動の間に生じた葛藤に注目し、その葛藤がゲイ解放運動の反戦運動を異性愛者のそれと異なる展開に導いたことを指摘する。さらに、ゲイ解放運動とベトナム反戦、徴兵制反対運動における人種と階級の政治に着目することで、ゲイ解放運動のラディカルさを可能にする条件やその限界に考察を進めたい。これは、70年代のラディカルなゲイ解放運動を、第2次世界大戦後から2010年代まで取り組まれてきた同性愛者の従軍をめぐるLGBTの政治運動史に位置づけるために必要な作業である。

本稿の主な分析対象となるのは、徴兵に際して自身の性的指向を隠すか否かという選択を迫られたゲイ男性による反戦運動と徴兵制反対運動である。具体的には1970年代初期のゲイ解放運動の代表的な団体であるゲイ解放戦線（Gay Liberation Front, GLF）のカリフォルニアの支部（ロサンゼルス支部、サンフランシスコ支部、バークレー支部）の活動を中心にとりあげる。ゲイ解放運動にとって、反戦運動や徴兵制反対運動への参加がどのように位置づけられ、どのような意義をもったのかを考察するためには、彼らのゲイ「解放」のヴィジョンとゲイの「抑圧」についての彼らの分析の輪郭をつかむ必要があ



る。このため、一次史料として、カリフォルニアで当時発行されていたゲイ・プレスや、GLFの発行していたパンフレットなどに著されたゲイ解放運動家たちの反戦、反徴兵制のための批評をとりあげ、分析していく。第1節ではゲイ解放運動の前史として第2次世界大戦以来の米軍における同性愛者に対する政策について振り返る。第2節では70年代のゲイ解放運動が、ゲイ解放とベトナム反戦の間にどのような繋がりを見出し、反戦運動に関与するようになったのかを明らかにしたい。続く第3節で、ゲイ解放運動がいかに同性愛者の運動とは異なる問題意識と手法をもって徴兵制に対して抵抗したのかを分析する。さらに、ゲイ解放運動がその限界に直面し、次第にベトナム反戦という「戦線」から撤退した過程を確認したい。最後に、ベトナム戦争終結後、再び同性愛者兵士の問題が注目を集めた90年代から2010年代の運動が、「従軍する権利」を要求するようになった変化の背景を理解するために、同性愛者の従軍をめぐるLGBTの政治運動史にベトナム反戦の影響を強く受けたゲイ解放運動を位置づけ、考察を加えたい。

## 1 従軍と市民権：軍隊をめぐる同性愛者の政治運動の歴史

20世紀米国のゲイ運動にとっての軍隊の問題の重要性を確認するために、まず米軍において同性愛者兵士がどのように処遇されてきたのか、その歴史を確認しておきたい。米軍においてソドミー行為の禁止に加え、同性愛者の摘発とその排除が積極的に行われるようになったのは第2次世界大戦中である。参戦にあたって多くの男性を徴兵する必要があったことから、軍隊の関心はソドミー行為の事後的な規制から、身体や人格の逸脱を検出し、先回りして同性愛者を排除することに移っていった。ソドミーの罪で除隊にする場合はソドミー行為が実際に存在したことを裁判の過程で証明する必要があったが、同性愛傾向を理由に除隊する場合には、医療の専門家に、当該兵士に同性愛傾向があり従軍に不適格であると宣言させるだけで除隊させることが可能であるためである。軍は精神科医らと協力しながら、女性的な身体的特徴、第二性徴の特徴の欠如といった目に見える身体的な特徴を、同性愛の兆候として適性検査の際にチェックした（Canaday, 2009; Lehring, 2003）。第2次大戦時に同性愛者であることを理由に除隊された場合、退役軍人に対する保障を定めた1944年の

GIビル（The Servicemen's Readjustment Act）の恩恵を受けることができなかった。このため、第2次世界大戦直後の1945年に退役軍人慈善協会（Veterans Benevolent Association）というゲイの退役軍人による自助団体が結成されているが、これは1950年代のホモファイル運動を牽引したマタシン・ソサイエティの誕生よりも早い（Bérubé, 2010, p. 249）。20世紀後半に全国的な広がりを見せるようになったとされる米国のゲイ運動の歴史において、同性愛者兵士の問題は最も早い時期から取り組まれてきた課題であり、運動の誕生を促した直接的な要因の1つでもあったといえる。ソドミー法や同性愛の病理化などに比べて直接的な利害関係者が相対的に少ない同性愛者兵士の問題が、常に重要な課題の1つであったことは意外なことと思われるかもしれない。この背景には、とりわけ米国において差別されてきたマイノリティ集団が従軍という形で愛国主義を表明し、市民としての義務を果たしたことを訴えることで「1級市民権」を獲得することができるという考え方が広く受け入れられてきたという経緯がある（Oropeza, 2005, p. 5; Westheider, 1999, pp. 2, 9）。<sup>1</sup> このため同性愛者の兵士の問題は、同性愛者の兵士たちだけでなくLGBTコミュニティ全体に関わる問題として取り組まれてきたと言えるだろう。

第2次世界大戦が終了し、マッカーシズムが社会を席卷した1950年代の米国では、共産主義者とともに同性愛者もアメリカ社会に対する脅威として弾圧されることになった（Johnson, 2004）。このため、第2次大戦直後の1946年にはソドミーを理由とした除隊を名誉除隊とすることで態度を軟化させた米軍も、48年にはそのような兵士に対する名誉除隊を定めた条項を削除した。さらに、1953年の大統領令10450では性的倒錯者は連邦のいかなる職にも就くことができないと定められた（RAND Corporation, 1993, p. 6）。結果、1950年代には軍隊の規模は第2次大戦時に比べて縮減されたにもかかわらず、大戦時と同じく毎年2000人ほどが除隊されており、第2次世界大戦時よりも除隊の割合は10倍に増えた（ibid.）。同性愛者兵士に対する規制が厳しくなるにつれ、同性愛的傾向をもつという疑いをかけられた兵士は、より重大な罰を受けることを避けるためにほとんど抵抗もできず除隊させられることになった。一連の連邦政府による政策は兵士や政府職員の同性愛者だけでなく、多くの同性愛者たちの生活を脅かした。このような事態に対して危機感を持った同性愛者

たちが展開したのが1950年代のホモファイル運動である (D'Emilio, 1998)。彼らは雇用差別の問題の1つとして同性愛者兵士の差別問題にも取り組んだが、1970年代のゲイ解放運動に参加した多くの若いゲイたちはこれに反発した。彼らにとっては、軍隊での差別の撤廃を求めることはベトナムでベトナム人を殺し、また自分の命を危険に晒す「権利」を要求することであり、到底受け入れられるものとは考えられなかったためである (Suran, 2001)。

このように同性愛者兵士の差別という問題に対するゲイ運動の態度が変化した背景にはベトナム反戦運動、とりわけ徴兵制反対運動があった。米国のベトナムへの干渉の起源は第2次世界大戦が終結した1945年まで遡ることができるが、ベトナム戦争が多くのアメリカ人にとっての関心事となったのは1964年のトンキン湾事件であり、1968年のテト攻勢で多くの米軍兵士が命を落としたことや、ソンミ村の虐殺事件によってベトナム戦争の非人道的な性格が広く知られるようになり、ベトナム戦争への反対が多数派を占めるようになった (Burns, 1990)。1965年4月のワシントンD.C.での最初の大規模な反戦デモ以降、若者を中心に全米に拡大した運動は、1968年に大きな分岐点を迎える。晩年に貧困問題と反戦運動に取り組みはじめていたMartin Luther King Jr.の暗殺や、プラハの春やフランスでのゼネストといった国外の動き、さらに1968年5月には1週間当たりの米軍兵士の最大死者数を出したことなど様々な要因が重なり、反戦運動の内部でイデオロギー的な転換が起こった。いまや、ベトナム戦争という特定の戦争とそれに対する政策が誤っているだけでなく、戦争は米国の経済的・政治的システムの論理的な帰結、つまり、米国の企業や政治的、軍隊のリーダー達が欲し、必要としているものだと考えられるようになった。彼らは戦争に対する批判をより根本的なアメリカ社会とその人種主義、帝国主義批判へと押し広げ、南ベトナム解放民族戦線 (NLF) への積極的な支持を表明した (Foley, 2003, pp. 265–272; Varon, 2004)。本稿で検討する1970年代初期のゲイ解放運動を代表するGLFの反戦運動はこのような変化の延長線上に位置づけられるものである。

1960年代後半にベトナム反戦運動が若者の間で全国的な広がりを見せた背景には、徴兵制の問題があった。1966年までに徴兵者数は1964年の水準の4倍になっており、多くの若い男性にとって、ベトナムでの戦闘に加わり、自ら

の身を危険に晒すことへの危機感は現実的なものとして感じられるようになっていた (Foley, 2003, p. 52)。加えて、徴兵制が切迫した政治問題となったのは、全体の人口比に対して労働者階級や黒人の兵士の割合が高く、さらに彼らの死亡率や負傷率が高いということが明らかになったためである (Foley, 2003, pp. 55–56)。これは徴兵の段階でどのような徴兵猶予のオプションを利用することができるか、さらに徴兵された後でどのような部隊に配属されるかという問題に関わっている。大学に通うことのできる財政的資源に恵まれ、大学生のための徴兵猶予 (2-S student deferment) を利用できる白人の中産階級の大学生よりも、労働者階級や黒人の若者の方が徴兵されやすく、高度な専門知識を要しない地上部隊に配属されやすいという構造的な問題の存在が認知されるようになった (Westheider, 1999)。1966年1月に学生非暴力調整委員会 (Student Nonviolent Coordinating Committee, SNCC) の John Lewis が徴兵制反対運動を支持したのに始まり、ラディカルな黒人運動の団体は平和的なデモよりもドラフトカードを燃やしたり、徴兵センターを閉鎖に追い込むなどの直接行動が必要だと主張した (ibid.)。徴兵制反対運動は反戦運動の一部であると同時に人種や階級の不平等との闘いでもあった。

## 2 「彼らの敵は我々の敵だ」：ゲイ解放運動とベトナム反戦運動

1960年代後半に盛り上がりを見せた反戦運動に、ゲイたちは当初から加わっていた。SDSに参加していた Carl Wittman や Allen Young、War Resistance League の創設に関わっていた David McReynolds に加え、92年の大統領選挙で LGBT コミュニティとクリントン政権を繋ぐのに大きな役割を果たした David Mixner も、当時まだカミングアウトはしていなかったが、1969年のモラトリウム運動のリーダーだった。このようなゲイの反戦運動のリーダーの例や、抗議活動やデモへのゲイの参加の例は枚挙にいとまがないが、Mixner がモラトリウム運動のなかでカミングアウトすることを躊躇したように、学生運動や反戦運動の内部にあるホモフォビアのためにしばしばゲイたちは疎外感を味わうことになった (Mixner, 1996)。Young は、「我々の闘争は、自分たちの闘争が『より広い闘争』の一部であり、自分自身を『真に革命的である』と感じているストレートの人々によって否定されている。我々が反戦デモに参加

しても、ゲイ運動が正当と認められることはない」(Young, 1971, p.58) と言  
い、ストレートの左派運動が左派の大義に賛同する存在としてしかゲイを運動  
の主体として認識せず、ゲイ解放という大義に関心をよせないことを批判し、  
広く共感を呼んだ。

主流社会や軍隊だけでなく、反戦運動内部のホモフォビアのために、ゲイた  
ちは自分たちのための運動を展開する必要を感じていた。そこで新しい運動が  
誕生する契機となったのが1969年6月のストーンウォール暴動であり、それ  
に続くGLFの結成である。<sup>2</sup> GLFはNLFにちなんだ名付けられ、GLFのNLFに  
対する支持と連帯の表明であり、GLFが68年以降にラディカル化しつつあっ  
た反戦運動の流れを組んでいることを示している。ストレートの左派運動の中  
でゲイであるがゆえの疎外を経験した彼らの運動は、ゲイであるというアイデ  
ンティティや経験を核とし、運動の目的であると同時にその手段でもあるカミ  
ングアウトを重視した(Wittman, 1969)。当時、カミングアウトは単に性的  
指向を公にすることにとどまらず、ある種の政治的な立場の表明であると考え  
られたことに注意する必要がある(Suran, 2001)。この点は、当時のゲイ・ラ  
イティングにおける「ゲイ」と「ホモセクシュアル」という単語の使い分け方  
にも見て取れる。当時、ゲイ解放運動の活動家の間ではゲイが固有名詞のよう  
に大文字でGayと表記される傾向があり、大文字の「ゲイ」であることと「同  
性愛者(ホモセクシュアル)であること」は必ずしも一致せず、大文字の「ゲ  
イ」は抵抗運動に関わる同性愛者のことであるとされた(Jackson, n.d. a)。

ゲイとしてのアイデンティティや経験を起点に思考し、カミングアウトを通  
じて他の少数派と連帯することによってあらゆる抑圧に抵抗するという態度  
は、彼らの反戦運動においても貫かれている。たとえば、ベトナム戦争の退役  
軍人による反戦運動組織VVAW (Vietnam Veterans Against the War) のゲイ  
のメンバーによって結成されたVVAWゲイ・コーカスは、VVAWの内部に存在  
するホモフォビアを告発しながら、以下のように述べている。

ゲイの退役軍人は、他の兵士とともに従軍しながら、同時に特有の精神  
的抑圧に耐えなくてはならなかった。その最たるものは、どんな残虐行  
為にも躊躇しないことが男らしさの証明であると信じるよう我々を洗脳

するためにゲイ・バッシングが用いられる基礎訓練だ。ゲイのベトナム退役軍人として、我々は軍隊が人種主義だけでなく性差別主義とゲイ・パラノイアの上に成り立っていることを理解した。ゲイの兵士として経験した抑圧によって、我々は戦争の不正義に気がついたのだ。(Gay Caucus of the VVAW, 1971)

彼らは従軍しながら、同性愛者を排除する軍隊の政策だけでなく、味方であるはずの米軍兵士から向けられる暴力、軍隊での基礎訓練など、あらゆる場面でホモフォビアと暴力を経験することになった。そのような経験から、彼らは残虐行為を躊躇することに「男らしくない」というレッテルをはるホモフォビアが、兵士たちをベトナム人への、さらには味方であるはずの同性愛者の米軍兵士への暴力に駆り立て、ひいては軍隊が戦争を遂行するのを可能にしていることを看破した。人種主義や性差別主義という観点からベトナム戦争を捉え直そうとする彼らの分析は、“No Vietnamese ever called me nigger ベトナム人にニガーと呼ばれたことはない”というスローガンを掲げて反戦の意志を表明した黒人運動や、戦争や暴力を性差別主義の観点から批判しようとした女性運動とも響き合っている。彼らにとって、自由主義陣営を代表する米国とそれに対する脅威である共産主義陣営の対立という冷戦の構図はすでに説得力を持たない。ベトナム人を人種的、性的に他者化することで彼らへの暴力を正当化する米国の「体制」こそが、まさに同じ人種主義と性差別主義に基づく差別を用いて国内においても黒人や女性、ゲイを抑圧していると彼らは考えたためである。そこでGLFサンフランシスコ支部とパークレー支部が共同で採択した「人民の平和条約へのゲイによる前文」は「彼らの敵は我々の敵だ」と宣言する。

我々トランスヴェスタイト、トランスセクシュアル、そしてゲイ男性はアメリカ政府によって行われているアジアの人々に対する虐殺的な戦争は、我々の抑圧の延長であり、この性差別主義的、人種主義的社会的必然の産物であることを認識する。…我々は戦争マシンの一部となり、このシステムと戦争を支持することによって第3世界の人々、女性、そして我々に対して権力を行使することを拒絶する。我々はMANを破壊

すると決意したのだ。

我々ゲイ男性は、ベトナム、ラオス、カンボジアの人々と交戦状態にはなく、彼らに連帯する。彼らの敵は我々の敵だ。この精神に則り、我々は愛と闘争の条約に署名する。(*"People's Peace Treaty, Gay Preambles,"* 1971)

このようにベトナム人を抑圧する構造と、自分たちが経験している抑圧の構造に連続性を見出すことによって、ゲイの反戦活動家たちは帝国主義の戦争に抵抗する第3世界の人々の闘争に共感し、時には彼らに同一化することで、彼らとの連帯を表明した。これはゲイ解放運動にのみ見られた傾向というよりは、1960年代後半から70年代にかけて展開したニューレフトや学生運動、反戦運動、女性運動などにも見られた傾向であった。彼らは、第3世界の脱植民地化に向けての運動を、米国の帝国主義や資本主義への抵抗運動のモデルとして積極的に知ろうとしていた。そこで第3世界の政治的リーダーたちは革命の戦士としてロマン化され、東洋を西洋よりも劣ったものとみなすオリエンタリズム的なヒエラルキーは転倒させられる。しかし、国境を越えるシスターフッドのもとベトナム反戦運動を展開しようとした女性解放運動を事例としてWuが論じたように、オリエンタリズム的なヒエラルキーを単純に転倒させることは、人種主義や帝国主義への抵抗というよりは、むしろオリエンタリズム的な西洋と東洋の二項対立の強化に繋がってしまう(Wu, 2013)。オリエンタリズム的な二項対立の枠組みを保持したまま、米国国内で自分たちの経験する抑圧と米国の帝国主義の被害者であるベトナムの人々の抑圧が同一線上にあると想定してベトナムの人々に同一化することは、オルタナティブな価値の源泉として第3世界を他者化してそこに留め置きつつ、自分たちは批判したい米国の「体制」から自らを切り離すことを可能にした。<sup>3</sup> そうすることで彼らは自国を批判する足場を確保し、現状とは異なる政治的な可能性を模索することができたとも言えるが、そこでの彼らの連帯の呼びかけは、米国とベトナムの人々の間の国境を越えるというよりは、そこに厳然として存在する差異と権力関係を不可視化することで、彼らのラディカル左派としての政治的アイデンティティやプロジェクトをうち固めるためにベトナム人の人種的な他者性を利用するに



留まるという限界があった。

### 3 徴兵制反対とゲイの権利保障のジレンマ

第2節ではゲイ解放運動がベトナム戦争に対してどのような態度をとったかを明らかにした。本節では徴兵制の問題に対して彼らがどのようにアプローチしたか、それがいかに同性愛者の徴兵制反対運動と異なる展開を見せたかを明らかにしたい。

米国でのベトナム反戦運動において、徴兵制に抵抗することは戦争の遂行を不可能にするための手段として重要であったが、徴兵カードを燃やすなどして徴兵制度に「抵抗する」とことと、猶予規定を利用して徴兵を「避ける」とこの間には大きな違いがあるとされていた。白人の大学生たちにとって徴兵猶予を利用するのではなく、逮捕される危険を引き受けて徴兵カードを燃やすなどして「抵抗する」とことは、「白い肌の特権」を脱ぎ捨て、不道德な戦争マシーンから自らを切り離すことをも意味したのに対して、徴兵猶予を利用して徴兵を「避ける」とことは、差別的なシステムを生き延びさせると考えられたためである (Burns, 1990, pp. 78–79; Foley, 2003)。ゲイ解放運動の中にも徴兵制に「抵抗」することと「避ける」ことを区別し、前者こそを重視する主張は見られた (Aiken, 1971)。しかし、軍隊からそもそも排除されていた同性愛者が徴兵カードを燃やすことは、同性愛者がそうする場合と同様に「抵抗」として機能するだろうか。また、軍隊から同性愛者を排除し、ベトナム人に対する暴力を作動させる軍隊の構造的なホモフォビアを告発することができるだろうか。従軍に不適格というスティグマを負わされていた同性愛者には、同性愛者とは異なる徴兵制への反対運動の手法を編み出す必要があったのである。

そこでゲイ解放運動が徴兵制への「抵抗」運動のために採用したのは、カミングアウトという手段であった。たとえば、軍隊から同性愛者を排除する政策を皮肉った *"Suck cock to beat the draft! タマを舐めて徴兵をぶっ飛ばせ!"* というスローガンがある。彼らはこのようなスローガンを掲げてゲイのセクシュアリティを公に肯定することによって、ホモフォビックな軍隊の政策を逆手に取り、軍隊に加わらない意思と徴兵制度自体への反対を主張した (Kissack, 1995, p. 109)。このようなスローガンは、大文字のゲイであることはつまり



あらゆる抑圧に抵抗することであるとして、ゲイ・アイデンティティ自体にラディカルな革命の可能性を託し、それを「カミングアウト」つまり自らを解放することでホモフォビックなシステムを破壊することができると信じる70年代初期のゲイ解放運動の基本的な態度から生まれたものとして理解できる。カミングアウトによって「従軍に不適格」を意味する分類である“4-F”にあえて分類されることにより、ストレートの若者の反戦運動で批判された徴兵猶予規定の利用を「システム」に対するラディカルな抵抗の可能性をもつ行為に読み替えようとしたと言えるだろう。だからこそ、GLFはカミングアウトによって徴兵を「避ける」ことを革命的な同性愛者の徴兵抵抗運動と呼び、“4-F”に分類されるための方法や情報を提供する徴兵カウンセリングの活動を展開した(Gay Liberation Front Los Angeles, n.d.)。

戦争と徴兵制にカミングアウトによって抵抗しようとしたGLFは、2つの種類の異なる問題と限界に直面したと言える。1つ目の問題は、徴兵制への抵抗と同性愛者兵士の権利保障の間のジレンマに関わる。たとえばGLFサンフランシスコは、「ゲイリブの態度を要約すれば『絶対に行ってたまるか』となる。ゲイたちが完全に平等になるには、同性愛者に対する差別的な法律は全て撤廃されるべきだが、徴兵される『権利』の要求は、あらゆる雇用、経済的、資格取得や、教育的、法的そして宗教的な差別が撤廃されるまで延期するべきであるという意見がゲイリブのコンセンサスである。」として穏健なホモファイル運動が軍隊で「徴兵される」権利を要求することを批判する決議を採択した(Jackson, n.d. b)。しかし戦争が続き、同性愛者も徴兵されているという状況がある限り、同性愛者兵士への差別を無視することはできない。当時ゲイ・プレスやアンダーグラウンド・プレスに記事を寄せていた活動家であるHarleigh Kyson Jr.は、「ゲイの軍隊への抵抗運動」と題された記事でGLFの徴兵カウンセリングの活動を紹介しながら、同時に以下のように述べている。

ゲイにとって、徴兵を合法的に逃れるのは簡単だ。なぜなら、政府の規則によって同性愛者の従軍が禁止されているからだ。自分のセクシュアリティを宣言するだけでいい。だが、言うておかななくてはいけないのは、ゲイであること自体が軍隊での従軍やあらゆる職業に対して不適格

であるというわけではないということだ。ゲイもストレートのように軍隊のあらゆる部門で立派に、誠実に、そして勇敢に従軍してきた。その多くはこれからも、政府の偏見をもとめせずに従軍を続けるだろう。（ゲイは連邦政府によって未だに差別されている唯一の抑圧されたマイノリティである。）だから、政府の規則を使って徴兵を回避することと、それを真に受けることは全く別のことなのだ。（Kyson, 1972）

Kysonはここで、同性愛者を従軍に不適格であるとする政府の方針を利用して徴兵を逃れることを勧めながら、同時にその方針を否定するという態度を見せている。ゲイ・アイデンティティを根拠に徴兵を「避ける」戦略には、同性愛者は従軍に不適格であり異性愛者よりも劣った存在であるという偏見を強化してしまう危険があり、既に従軍している同性愛者兵士の状況を問題化できないという限界があった。これに対してはゲイが十分に従軍する能力があり、過去にも現在にもその能力を持って貢献してきたということを示す必要があると考えられたのである。

別の問題は、カミングアウトを通じた徴兵制へのラディカルな抵抗とゲイの権利保障の間のジレンマという図式において捨象された「ゲイ」という集団内部での徴兵制にまつわる経験の差異に関わる。カミングアウトによる徴兵制への抵抗という戦略は、全てのゲイにとって可能な抵抗のオプションであったわけではなかった。たとえば、適性検査のときにゲイであることを検査官に明確に伝えたにもかかわらず徴兵されることになった黒人でドラッグクィーンのPerry Watkinsの例を思い出す時、この抵抗の戦略が有効であるのは、同性愛者であることが常にその人に徴兵からの猶予を保証するような場合のみであることに気がつく。Watkinsは「私が黒人でなければ、状況は違っていたはずだ。…ゲイであるというチェックボックスに印をつけた白人の知人たちは、みんな軍隊に行かなくてもよかった」と当時について語っている（Humphrey, 1990, p. 256）。彼は軍隊で自分の性的指向を隠さず、時にはドラッグクィーンとしてショーをすることもあったが問題視されることなく、退役の直前になって同性愛者であることを理由に除隊させられた。彼はこの件を最高裁まで争い、後に名誉除隊を勝ち取っている。第1節でも確認した通り、ベトナム戦

争時に兵士の構成は有色人種や貧困層に偏り、負傷率や死亡率も高かった。新兵を確保する必要と部隊の団結の脅威となり得る同性愛者を排除する必要の間で常に揺れている軍隊による同性愛者兵士の排除は画一的でなく、戦況や部隊の状況に合わせて時に恣意的かつ選択的に行われ<sup>4</sup>、徴兵センターにおいては同性愛者であるという事実よりも、その時点での戦況、その人の経済状況や教育状況、人種といった要因が決定的なものとなることがある。ゲイ・アイデンティティに戦争と徴兵制度への抵抗の可能性を読み込む戦略が前提としていたのは、暗黙のうちに白さと特定の階級性を帯びていたゲイ・アイデンティティであり、徴兵制度をめぐる性の政治に人種や階級の差異という変数が加わったとき、その戦略の限界が露呈した。ゲイ解放運動が多様な社会運動との連帯を目指しつつも、常に運動の主導的な地位にあったのは白人の、中産階級のゲイ男性たちであったという事実がここに反映されているとも言えるだろう。

GLFの徴兵制への抵抗運動はこのような問題と限界を抱えていたが、徴兵制への抵抗とゲイの権利保障のダブルバインドは、1969年末にゲイ活動家同盟（Gay Activist Alliance, GAA）を結成したゲイたちによって「解決」されることになった。1969年7月に結成されたGLFニューヨークから離脱したメンバーたちが新たに結成したのがGAAであったが、彼らはGLFから離脱した最大の理由として他の社会運動や少数派との連帯よりも、シングル・イシューの運動が必要であるということを挙げている。

1969年11月の非公式な会合において…我々は懸念、怒りさえ感じていた。同性愛者コミュニティの抑圧に関する社会的・政治的变化の潜在的 가능성이効果的に用いられていないことに対して。他の団体での共通の経験から、我々は構造的かつ、シングル・イシューのアプローチが、同性愛者の市民に全ての市民に保障されている権利と自由を保障するための法改正という第一歩を踏み出すための最善の策であると合意していた。（GAA, 1970）

こうして結成されたGAAは明確な構造を持つ組織によるシングル・イシューの運動を志向し、アメリカ社会において市民に保障されるべき権利と自

由の獲得を目指した。ニューヨークでGAAが結成された後、カリフォルニアでも1971年にGAAサンフランシスコが結成されている。1970年代初期の団体として、参加していたメンバーにも重複の多いGLFとGAAは、先行研究においては同じく70年代のラディカルさを象徴する運動体として評価されてきた。たしかに運動の手法として直接行動を重視するという点でGLFとGAAは共通しているが、ゲイの抑圧と第3世界の抑圧を同一線上に位置づけて彼らのとの連帯を重視したGLFと、反戦運動や黒人運動、女性運動との連帯よりも「市民としての」同性愛者の権利保障という1点に運動のリソースを集中するべきであると考えたGAAとは、そのヴィジョンにおいて大きく異なっていたことを確認しておく必要がある。

GAAのGLFからの決別は、急激に規模を拡大していったゲイ解放運動が、着実に現実的な社会変化を起こすために必要であったと評価できるかもしれない。しかし、まだベトナム戦争終結にはほど遠い1969年末に、市民としての権利保障のみに注力するべきだと考えることができるのは一体どのような人々だったのか。GLFロサンゼルス支部がカンボジア侵攻に対する1970年5月16日の抗議デモへの支持を決議した際、GLFはベトナム戦争よりもゲイの問題にのみ集中するべきという反論がGLF内部からも発された。これに対してGLFロサンゼルス支部議長のJim Kepnerは「これはゲイの問題だ。同性愛者がベトナムで死んでいる。軍隊はゲイだと言った兵士をベトナムの最前線に送るという政策をとっている。こういうことがずっと起こってきた」と決議を支持している(Jackson, 1970)。GAAにとってはベトナム戦争はもはや「ゲイの問題」ではなかったのだろうか。ここには、GAAが想定するゲイ・コミュニティのある種の偏りが反映されていると言えるだろう。そこで想定されているのは、ゲイであるがゆえにベトナムで最前線に送られるかもしれない人々というよりは、自分たちがアメリカ合衆国において当然に市民として処遇されるべきであると確信でき、アメリカ社会で差別されることになる要因が同性愛者であるという事実のみであるような人々であろう。そこでは、同性愛者の権利に直接関係はないと見なされるような課題にも同時に関心を持つ人々、つまり「ゲイ」という集団の中の黒人や女性、トランスの人々は徐々に居場所をなくし、GAAを去ることになった(Bell, 1971)。徴兵制への抵抗とゲイの権利保

障の間のダブルバインドが前者を切り捨てる形で解決されたとき、その構図において抑圧されていた人種と階級の問題もともに議論の枠外に捨て置かれてしまったといえる。

## おわりに

本稿は、1970年代にカリフォルニアで展開したゲイ解放運動の反戦運動と徴兵制反対運動への関わりを取り上げ、カミングアウトの重視と連帯の強調というGLFの運動の特徴をおさえた上で、ストレートの左派とは異なる彼らの反戦と徴兵制反対の主張と抵抗の手法の位置づけと意義を明らかにしてきた。また、彼らが直面したジレンマや限界を指摘し、様々な社会運動との関わりの中で押し広げられた運動の射程が効果的に運動を展開するために狭められたこととその理由を考察した。

徴兵制反対運動に積極的に関与したGLFも、そこから撤退したGAAも、どちらもゲイ・コミュニティ内部の差異と不平等の問題を扱い損ねたことを確認しておくことは、ゲイ運動において再び軍隊の問題が浮上した90年代以降の運動の展開を理解する上でも重要である。GAAが示した運動のスタイルとアプローチは、再び同性愛者兵士の問題が運動の最重要課題として浮上した90年代の運動で中心的な役割を担ったCMS（Campaign for Military Service）に引き継がれたためである。60年代にはモラトリアム運動のリーダーの一人であったDavid Mixnerが立役者となって結成されたCMSは、米軍におけるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルの従軍禁止を撤廃する大統領令への連邦議会と世論の支持を獲得することを目的として結成された期間限定のキャンペーン団体である。

第一に、CMSはGAAのシングル・イシューの運動というスタイルを引き継いでいる。運動の焦点を1つに絞ることには、主張がクリアになり、広く支持を得やすくなるという実的な利点があると考えられた。しかし、そもそも米軍がどのような地域でどのような作戦を遂行しているのか、その暴力を作動させる条件はどのようなものかといったGLFがベトナム戦争について分析しようとした問いを棚上げにし、市民として軍隊における平等な待遇のみを要求したとき、それは70年代のゲイ解放運動が散々批判した愛国的な市民の「従軍

する権利」の要求に横滑りして行った。彼らは同性愛者兵士の問題を「勇気と才能、そして誇りを持って従軍している多くのレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルのアメリカ人が、従軍を継続できるか否かという問題」として示し、自由というアメリカの理念のために献身する兵士のイメージを利用した(CMS, n.d.)。

ここでCMSが利用した愛国的な兵士は、常に白人の有能なゲイ男性としてイメージされていたことを指摘しておかなくてはならない。彼らは集団内部の差異の問題を意図的に棚上げすることで、運動の「主流化」を図ったのである(Vaid, 1995)。CMSが開催した公聴会に証人として呼ばれた兵士がほぼ白人男性のみで構成され、当時、名誉除隊を勝ち取った裁判によって名の知られていたWatkinsが呼ばれなかったことは、CMSが有色人種や女性たちから自らを切り離すことによって白人エリート男性の運動として自分たちの運動を展開しようとしたことを象徴している(Bérubé, 2001, pp. 239–241)。福祉がより「黒い」問題として想像される新自由主義的な福祉改革の進む1990年代のアメリカで、黒人との対比において、従軍という義務を果たそうとする愛国的で経済的に自立した市民としての同性愛者の運動をより「白く」していくことで、CMSはホワイトハウスやペンタゴンの白人エリートとの交渉を容易にし、世論の支持の拡大を図ったのであった(Bérubé, 2001)。これは1990年代に突如として生じた傾向であったというよりは、1970年代の徴兵制反対運動がゲイ・コミュニティ内部での、とりわけ徴兵と従軍にまつわる経験の差異の問題を扱い損ねたまま、運動の射程を狭めたことの一つの帰結として理解できるだろう。つまり、従軍と徴兵における人種と階級の問題に注目すると、1970年代のラディカルなゲイ解放運動と、その後の時代の運動の間の断絶だけではなく連続性が見えてくるのである。

CMSの運動は、差別的な性格のDADTが制定されることで挫折を味わったが、彼らの採用した「従軍する権利」一点のみに運動の焦点を合わせる戦略は、2000年代の米国でのDADT撤廃運動に引き継がれ、DADT撤廃を実現させたということは序論で触れた通りである。しかし、DADTが撤廃されても軍隊の性質が変わったわけではなく、70年代にVVAWのゲイ・コーカスがすでに看破していたように、人種主義や性差別主義、ホモフォビアは戦争や軍隊の

暴力を作動させる条件であり続けている。<sup>5</sup> 愛国的な同性愛者兵士が「誇り高く、誠実に」従軍することが可能になった現代の米国において、LGBT運動は戦争と暴力の問題にどのように関わっていくことになるのだろうか。DADT撤廃は同性愛者兵士の問題に一つの区切りを付けたが、それは国家と性、人種、階級、そして暴力を巡る議論の終わりを意味するものではないのだ。

本研究の一部は「卓越した大学院拠点形成支援補助金」による助成を受けて執筆された。ここに感謝の意を表する。

This research was supported in part by Grants for Excellent Graduate Schools.



## Footnotes

- <sup>1</sup> ホモファイル運動の中心的な団体マタシン・ソサイエティを創設したHarry Hayも、第1級市民権を追求する少数派はアメリカ社会に対して何かしらの貢献をするべきだと考えており、このためカミングアウトばかりを強調するゲイ解放運動は同性愛者の状況を変化させるには不十分だと考えていた (Hay, 1997, p. 298)。
- <sup>2</sup> 1969年のストーンウォール暴動をゲイ運動史における大きな分岐点として代表させるナラティブの問題点はこれまで繰り返し指摘されており、1969年以前にゲイ解放運動の特徴である直接行動を重視するという傾向を持った運動が生まれていたこともこれまでの研究で明らかになっている (Boyd, 2003)。しかし本稿は、ストーンウォール暴動自体というよりも、その結果、1968年以降の反戦運動のラディカル化の影響を受けて異性愛規範に抵抗するために他の少数派との連帯の重要性を強調したGLFが誕生したことの意義を強調するために、1969年を一つの画期と位置づける。
- <sup>3</sup> 歴史家Philip J. Deloriaは、ベトナム反戦運動においては人種的に「赤」であった先住民と、イデオロギー的に「赤」であったベトコンのイメージは重ね合わされ、ともに純粋で反近代的な原始人として若者に想像されたことを指摘している。先住民に同一化することによって、彼らはアメリカ性から自分たちを切り離し、アメリカ帝国主義の犠牲者、批判者になることができた。白人の中産階級の学生が多数を占めた反戦運動家のそのような先住民のイメージの利用は、野蛮人としての先住民のイメージの反復でもあり、必ずしも当時の先住民の置かれた社会的な現実を反映したものでもなかった (Deloria, 1998, pp. 159–166)。
- <sup>4</sup> 戦時中に同性愛者の除隊が一時停止され、戦争が終わってから除隊されているのではないかと、という批判は長らく存在していたが、政府はこれを否定し続けてきた。しかし、2005年に同性愛者の除隊について、「部隊が警告を受信するまで除隊は執行されず、兵士は現役勤務に召集される。」と述べたハンドブックが発見、公開された。文書が公開され、陸軍はカミングアウトした同性愛者兵士を戦闘地域に配備していることを認め、戦闘のための配備を避けるために性的指向を偽って申告する兵士がいるために、もし兵士がカミングアウトした場合でも、戦闘地域に兵士を配備し、部隊の動員が解かれるまでは同性愛の問題が棚上げされると発表している (Frank, 2007)。
- <sup>5</sup> Jasbir K. Puarによれば、9.11後のアメリカでは異性愛規範に基づく共同体形成が一時的に中断され、同性愛者の一部、とくに白人のゲイ男性をそのコミュニティの一員として認可し取り込むことで、愛国主義的な感情や団結を強化しようとする傾向があるという。Puarはこのような傾向を「ホモナショナリズム」と呼び、ホモナショナ

リズムのもとでの一部の同性愛者の包含は、同性愛者に対して押し付けられていた性的逸脱者というスティグマを、人種的な他者、とりわけテロリストと疑われた中東や南アジアの移民に押し付けることによって生じていると述べ、人種による排除と一部の性的少数派の包含の間にゼロサムの関係がある可能性を示唆した。Puarのホモナショナリズム批判を想起するならば、性と人種にまつわる政治を個別にではなく同時に思考する必要はこれまでになく増していると言える（Puar, 2007）。

## References

- Bérubé, A. (2001). How gay stays white and what kind of white it stays. In B. B. Rasmussen, E. Klinenberg, I. J. Nexica, & M. Wray (Eds.), *The making and unmaking of whiteness*. Durham, N.C: Duke University Press Books.
- Bérubé, A. (2010). *Coming out under fire: the history of gay men and women in World War II* (TWENTIETH ANNIVERSARY EDITION.). Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Boyd, N. A. (2003). *Wide-open town: a history of queer San Francisco to 1965* (First Edition edition.). Berkeley: University of California Press.
- Burns, S. (1990). *Social movements of the 1960s: Searching for democracy* (1st edition.). Boston: Simon & Schuster MacMillan.
- Canaday, M. (2009). *The straight state: Sexuality and citizenship in twentieth-century America*. Princeton, N.J: Princeton University Press.
- Deloria, P. P. J. (1998). *Playing Indian*. New Haven: Yale University Press.
- D'Emilio, J. (1998). *Sexual politics, sexual communities: The making of a homosexual minority in the United States, 1940-1970: (Second Edition.)*. Chicago: University Of Chicago Press.
- Faderman, L. (1991). *Odd girls and twilight lovers: A history of lesbian life in twentieth-century America* (1st Edition.). New York: Columbia University Press.
- Foley, M. S. (2003). *Confronting the war machine: Draft resistance during the Vietnam War* (1st edition.). Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Hall, S. (2008). Protest movements in the 1970s: The long 1960s. *Journal of Contemporary History*, 43 (4), 655–672.
- Hayden, T. (2009). *The long sixties: From 1960 to Barack Obama*. Boulder: Paradigm Pub.
- Hay, H. (1997). *Radically gay: Gay liberation in the words of its founder*. (W. Roscoe, Ed.). Boston: Beacon Press.
- Humphrey, M. A. (1990). *My country, my right to serve: Experiences of gay men and women in the military, World War II to the present* (1st edition.). New York, NY: Harper Collins.
- Johnson, D. K. (2004). *The lavender scare: The cold war persecution of gays and lesbians in the federal government* (1st edition.). Chicago: University of Chicago Press.

- Kissack, T. (1995). Freaking fag revolutionaries: New York's Gay Liberation Front, 1969–1971. *Radical History Review*, 1995 (62), 105–134.
- Lehring, G. L. (2003). *Officially gay: The political construction of sexuality by the U.S. military* (New edition.). Philadelphia: Temple Univ Pr.
- Lekus, I. K. (2004). Queer harvests: Homosexuality, the U.S. New Left, and the Venceremos Brigades to Cuba. *Radical History Review*, 89 (1), 57–91.
- Meyerowitz, J. (2004). *How sex changed: A history of transsexuality in the United States*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Mixner, D. (1996). *Stranger among friends*. New York: Bantam.
- Oropeza, L. (2005). *¡Raza Sí! ¡Guerra No!*: Chicano protest and patriotism during the Viet Nam war era. Berkeley: University of California Press.
- Puar, J. K. (2007). *Terrorist assemblages: Homonationalism in queer times*. Durham: Duke Univ Pr.
- Suran, J. D. (2001). Coming out against the war: Antimilitarism and the politicization of homosexuality in the era of Vietnam. *American Quarterly*, 53 (3), 452–488.
- Vaid, U. (1995). *Virtual equality: The mainstreaming of gay and lesbian liberation* (1st Anchor Books hardcover edition.). New York: Doubleday.
- Varon, J. (2004). *Bringing the war home: The Weather Underground, the Red Army Faction, and revolutionary violence in the sixties and seventies*. Berkeley: University of California Press.
- Westheider, J. E. (1999). *Fighting on two fronts: African Americans and the Vietnam war*. New York: NYU Press.
- Wu, J. T. C. (2013). *Radicals on the road: Internationalism, Orientalism, and feminism during the Vietnam era* (1st edition.). Ithaca: Cornell University Press.

## 一次史料

- Aiken, D. L. (1971, June/July). Gay draft resistance. *Gay Sunshine*.
- Bell, A. (1971, January 27). An open letter to Gay Activists Alliance from Arthur Bell. Reel 17, Series 1. Committee Files, GAA Records, New York Public Library.
- CMS, (undated). They could die for liberty. they don't even have!. Folder 2, Box 127, Copy Berg Papers, New York Public Library.
- Democracy Now!. (2010, October 22). Does opposing "don't ask, don't tell" bolster US

- militarism? A debate with Lt. Dan Choi and queer activist Mattilda Bernstein Sycamore*. Retrieved from [http://www.democracynow.org/2010/10/22/does\\_opposing\\_dont\\_ask\\_dont\\_tell](http://www.democracynow.org/2010/10/22/does_opposing_dont_ask_dont_tell)
- Frank, N. (2007, July). Research note on Pentagon practice of sending known gays and lesbians to war. Retrieved from the PALM Center website: <http://www.palmcenter.org/publications/dadt/Research%20Note%20on%20Pentagon%20Practice%20of%20Sending%20Known%20Gays%20and%20Lesbians%20to%20War>
- Gay Activist Alliance. (1970). Once upon a time. Reel 17, Series 1. Committee Files, GAA Records, New York Public Library.
- Gay Caucus of the VVAW. (1971, November 27). Open letter to Vietnam Veterans Against the War. Folder 11, Box 100, Barbara Gittings and Kay Tobin Lahusen Gay History Papers and Photographs, New York Public Library.
- Gay Liberation Front Los Angeles. (undated). Revolutionary homosexual draft resistance. Folder 15, Gay Liberation Front Los Angeles Records, ONE National Gay and Lesbian Archives, University of Southern California.
- Jackson, D. (1970). Gay lib condemns war. File 1, Don Jackson Correspondence, New York Public Library.
- Jackson, D. (n.d. a). Observations, hypotheses and assumption on the gay community. Don Jackson Subject File, ONE National Gay and Lesbian Archives, University of Southern California.
- Jackson, D. (n.d. b). Gay lib calls for draft policy change. File 2, Don Jackson Correspondence and Submissions to Gay Power, New York Public Library.
- Kyson Jr., H. (1972, January). Gay military resistance. Folder 11, Box 100, Barbara Gittings and Kay Tobin Lahusen Gay History Papers and Photographs, New York Public Library.
- RAND Corporation National Defense Research Institute. (1993). Sexual orientation and U.S. military personnel policy: Options and assessment. Retrieved from [http://www.rand.org/pubs/monograph\\_reports/MR323.html](http://www.rand.org/pubs/monograph_reports/MR323.html)
- People's Peace Treaty, Gay Preambles. (1971, June/July). Gay Sunshine.
- Wittman, C. (1969, May). Gay manifesto. Folder 30, Ctn. 4, Sexual Freedom League Records, Bancroft Library, Berkeley, University of California.

Young, A. (1971, November). Out of the closet: A gay manifesto. Ramparts, Folder 2,  
D. E. Bertelson Papers, GLBT Historical Society, San Francisco.

## **Double bind of “the right to serve”: Gay liberation movement and anti-Vietnam War movement in the United States during the 1970s.**

**Yuki TAKAUCHI**

The infamous U.S. military policy toward gay soldiers, “Don’t Ask Don’t Tell,” was repealed in 2011. Many celebrated a big victory for the LGBT movement, saying, “now gay soldiers can serve openly and honestly.” However, was “the right to serve” really what LGBT communities asked for? Looking back on the history of the LGBT movement in the U.S., “the right to serve” was not always the self-evident goal for the movement.

This article analyzes the gay liberation movement in the U.S. in the early 1970s, which actively engaged in the anti-Vietnam War movement and tried to resist against the draft. Using a historical approach, I examine the activism by the Gay Liberation Front (GLF) chapters in California. I demonstrate how the military policy that discriminated against gays as being unfit for service made the gay liberation movement’s strategy toward the anti-draft resistance different from the one by straight men. In order to radically resist against the military draft policy, GLFers chose to come out as gay and dared to be classified as 4-F deferment (unfit for service). Their resistance against the draft through coming out originated from their belief in the radical potential of coming out to change a homophobic society.

However, their strategy had two problems. The first was the double bind they faced when they needed to criticize both the military’s discriminatory policies and the military itself. Though they ultimately wanted to ban the military, they also needed to prove their ability to serve and improve conditions for gay soldiers. Unable to handle this double bind situation, GLF yielded to the Gay Activist Alliance (GAA), which claimed the necessity of concentrating their time and energy exclusively on issues directly related to the gay community. The second problem was their difficulty in taking

differences among the gay community into consideration in creating their strategy against the draft. Because of institutionalized racism and classism in the military, coming out did not always secure the 4-F deferment, especially for people of color and working class gay men.

In conclusion, I situate the gay liberation movement's efforts to oppose the Vietnam War and resist against the draft in the history of the LGBT movement in the U.S. I trace how GAA's single-issue movement of claiming their right as U.S. citizens resulted in the patriotic claim for "the right to serve" in the 1990s and thereafter.

**Key words:**

gay liberation movement, Vietnam War, anti-imperialism, gays in military, 1970s.





## クレーム申し立ての認識論と「出会い損ない」 ——カミングアウト/クローゼット論を手がかりとして 堀真悟

### はじめに

スペクター&キツセ（1990）を嚆矢とする社会問題の構築主義、その社会学的研究の中核に位置してきた概念が、「クレーム申し立て」である。人々が「〇〇は問題である」と訴える活動によって社会問題は構築され、翻ってクレーム申し立て活動は特定の手法・話法に則った規範的な概念として定義される。以来、社会学における社会問題の研究者はこの概念を用いて人々の活動を分節化することで、社会問題の記述に臨んできた。

だが、少なからぬ人にとって、こうした社会問題研究がはらむ問題点は経験的に感知されうるのではないだろうか。特定の手法・話法は、万人につねに開かれているわけではない。とすると、それに則って語ることができない人は社会問題からは疎外されているのか。しかし、「沈黙」というかたちで異議を申し立てることも、ありうべき選択だ。むしろ、とりわけ異議を申し立てることがその人の生を危うくさせる場合には、沈黙の方がより日常的に選択されるだろう。にも関わらず、クレーム申し立て概念がそうした選択の数多くを捨象してきたとしたら、社会問題の研究者はいったい何を行い、どのような地位に立ってきたのか。社会問題の研究者はある規範的な活動形態を理念型として採用した結果、あくまでそのような活動が可能な人にとっての社会問題を反復的に記述してきたのではないだろうか。

本論文は、社会学におけるクレーム申し立て概念に依拠した社会問題研究の問題点を、その原型にまで遡って批判的に検討することを目的とする。その際には、イヴ・K・セジウィック『クローゼットの認識論』を主に参照したい。というのも、クレーム申し立て概念はセクシュアル・マイノリティのカミングアウトの活動にその歴史的原型を有するからだ。これは従来の研究ですでに指摘された点だが、本論がより注目したいのはカミングアウトと対になったクローゼットの概念と、そのような対置を可能にするクローゼットの認識論である。セジウィックの議論は、カミングアウトが不均衡な権力の布置の中での行

為であることと、それゆえに伴われるリスクを示している。クレイム申し立て概念がこのカミングアウトに原型を持つのであれば、同様に検討されねばならないのはその活動を取り巻く権力の磁場、すなわちクレイム申し立ての認識論と呼ぶべきものではないだろうか。

そこで本論では、まず1で社会問題の構築主義のこれまでの議論を概観し、クレイム申し立ての原型を確認する。次いで2ではセジウィックのいうクローゼットの認識論とその要点を他のセクシュアリティ研究と比較しつつ明らかにする。最後に3では、社会問題の研究者の地位について批判的に検討しつつ、従来のそれを反復しない研究の営みがどのようにあり得るのか探索的に論じていく。

先んじて結論を述べれば、クレイム申し立ての認識論はクレイム申し立てとそれ以外といった二項対立によって人びとの活動を整除し現実を理解することを可能にする。研究者はこれに依拠することによって、現実を自らが了解可能なものとして記述してきたのである。だが、これに反して研究者が「問題」として取り上げなければならないのは、「クレイム申し立て」として理解できる活動ではなく、端的に言えば、自分にとって理解できない活動の方ではないだろうか。問題としての現実を論じることは、そのような「出会い損ない」の経験から始まる営みである。

## 1 クレイム申し立ての原型

### 1.1 社会問題の構築主義

社会問題の構築主義を定式化したスペクター&キツセは、その著書『社会問題の構築——ラベリング理論を超えて』で以下のように宣言した。

社会問題は、なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレイムを申し立てる個人やグループの活動であると定義される。(スペクター & キツセ, 1990, p. 119)

同書が発刊されたのは1977年のアメリカにおいてだが、それ以前は、社会

問題をシステムの逆機能として捉える構造 - 機能主義のアプローチが隆盛していた。そこでは、社会問題の定義は研究者の分析に依存する。しかし、その定義の根拠はいかなるものなのか。研究者の定義に対して、人々による社会問題の訴えは劣るものとするこのアプローチは、「社会学者は社会の良心であり保護者であるというイデオロギー的で大いに問題のある役割を隠蔽する」(ibid., p. 58) のではないか。対して、ラベリング理論などを発展させ登場したスペクター&キツセの議論は、社会問題を人々によって構築されるものと考え、その構築の動的な過程の分析を主題とすることを宣言する。

このためにスペクター&キツセが生み出したのが「クレイム申し立て」概念である。それは、ある状態を改善されるべき問題として想定し、主張する活動である。クレイム申し立てによって、社会問題は構築される。そして「クレイムの申し立ては、つねに相互作用の一形式である。つまりそれは、ある活動主体から他の者に向けての、ある想定された状態について何かをすべきだという要求である」(ibid., p. 123)。社会生活と政治生活にとって不可欠な、他者に自分の主張を聞かせる活動としてクレイム申し立ては定義される。後にそれは、イバラ&キツセ(2000)によってレトリック、スタイル、モチーフといった言語的構成要素へとさらに分節化された。したがってクレイム申し立てとは、シンボリック相互作用論や社会的現実の相互構成といった議論以上に、規範的な含意を持つ概念であるといえる。

## 1.2 クレイム申し立ての原型

では、社会問題の構築主義は、どのような社会的文脈の要請から生み出されたものだったのだろうか。言い換えれば、クレイム申し立てはなぜそのように定義される必要があったのだろうか。ここで象徴的な論文が、J・I・キツセ『あらゆるところからカミングアウト』(1980)である。逸脱論に出自を持つキツセはそこで「逸脱研究を社会問題の社会学と分節化するいくつかの理論的課題を特定するために、逸脱者の社会的・道徳的状況を相互行為論的に概念化することに関心がある」(Kitsuse, 1980, p. 1) と述べた。

この関心は、いわゆる「新しい社会運動」の高まりを背景としたものだ。<sup>1</sup> その先駆は1950年代、平等で豊かな民主主義国家であるはずのアメリカにお

ける黒人の惨状を問題化した公民権運動である。それは結果的に、ジェンダー・セクシュアリティ、障害といった様々なアイデンティティ・カテゴリーに依拠して市民権を要求する新しい社会運動が、支配的な逸脱の定義に挑戦することを促していった（道場 2004, p. 246）。1970年代は、これら新しい社会運動が花開いた時期だった。

こうした新しい社会運動の波を前に、逸脱研究は「逸脱者 **deviant**」から「実践者 **practioners**」へ、「スティグマ」を付与されないよう自己についての情報を管理し操作することから、それを集散的な政治の出発点として肯定的に開示する「アイデンティティ・ポリティクス」へと、理論モデルを変更することを迫られた。従来の逸脱研究は、逸脱者を社会規範への同調に腐心する「過社会化された **over-socialized**」存在として前提しており、新しい社会運動のインパクトを受け止められなかったのだ（Kitsuse, 1980, p. 67）。レニー・R・アンスパックは、身体障害者と精神患者による社会運動を取り上げ、次のように述べる。「社会学的理論は、おそらくは意図せずして、身体障害者と『精神患者』は自分では何もできないのだという神話に寄与してしまった。……逸脱の社会学は、逸脱者と呼ばれている人々が自らのアイデンティティを形成しようとする活動を説明するために、その諸概念を変えねばならない」（Anspach, 1979, p. 768）。

この潮流こそがクレーム申し立ての概念を必要としたのだが、興味深いのは、キツセはまさにカミングアウトを取り上げることで、逸脱研究と社会問題の社会学を架橋しようとしたことだ。「制度化された排除によって社会的に分離され、文化的に定義されカテゴリー化され、スティグマ化され道徳的に格下げされてきた人々は、自らの存在を公に宣言し市民権を堂々と主張しているとき、社会問題を産出する政治に参加しているのだと論じたい」（Kitsuse, 1980, p. 3）。同様にアンスパックも、ゲイ・リベレーションを例に挙げ、同化の拒否と差異の肯定に基づく、アメリカ社会における逸脱の「脱クローゼット化」が起こったと述べている（Anspach, 1979, p. 771）。当時の社会を説明する上でシンボリックな意味を与えられたカミングアウトは、こうしてクレーム申し立ての原型となっていたのである。

しかし注意せねばならないのは、キツセやアンスパックがこの際、カミング

アウトを取り上げる一方でクローゼットの状態について議論を深めなかったことだ。キツせいわく、「秘密・可視性・締め出しといった状態よりも、自己についての社会的な主張により関心がある」(Kitsuse, 1980, p. 1) ためである。だが、クローゼットの政治性・権力性についての議論を無視したままカミングアウトを社会問題の原型として取り上げることはいかなる意味を持つのか。この点を取り上げなかったことは、クレイム申し立ての概念にとって再検討されるべき重要な不備なのではないか。

## 2 「クローゼットの認識論」とカミングアウトのポリティクス

### 2.1 クローゼットの認識論

クィア理論の牽引者として知られるイヴ・コゾフスキー・セジウィックは『クローゼットの認識論』において、公/私、知/無知、カミングアウト/クローゼットといったセクシュアリティをめぐる二項対立を脱構築し、それらが逃れがたく組み込まれているホモフォビックな権力の磁場を分析した。セジウィックによれば、カミングアウトはクローゼットの中の「秘密」を明らかにする行為だが、そもそもカミングアウト/クローゼットの対立それ自体が、「無知」によって支えられた権力の磁場の中で構成されているという。

クローゼットの周囲の関係では、沈黙に発話と同じくらいの意味とパフォーマティヴな効果が与えられてしまう。それはより一般的に、そこでは無知が知識と同じくらい強力で、複合的なものだという事実をはっきり示しているのである。(セジウィック, 1999, p. 13)

確かに、カミングアウトは時に「沈黙の軽蔑、沈黙の恐喝、沈黙の魅惑、沈黙の共犯など、それぞれの力の回路を作り上げていた直観や確信を具体化」し無知の権力性を明らかにすることができる (ibid., p. 114)。しかし一方で、開示されるセクシュアリティはしばしば「公然の秘密」として、あたかもそれが何を意味するかをすでに知っていたかのような「知ったかぶり」によって処理される。すなわちクローゼットの認識論とは、クローゼットの中の秘密が、「見せ物」としてそれをまなざし消費する「クローゼットの視点」の投射関係

のなかにあらかじめ捉えられているような認識の図式に他ならない (ibid., p. 325)。これによって、見るものと見られるもの、異性愛と同性愛のアイデンティティ、それらの地位の不均衡性は遂行的に再生産されていくのである。

さらにセジウィックは、こうした「見せ物」の認識図式が作動する関係の構造を、「センチメンタリティ」として概念化する。それは「典型的には見せ物に対する作者または観客関係を伴う関係の構造であり、非常にしばしば、形容辞『センチメンタル』自体が持ち込まれる場面では、不面目と価値の切り下げを伴う構造である」(ibid., p. 206)。センチメンタリティは、否定的な形容辞を用いる場合はもちろん、肯定的な形容辞を用いる場合においても、観客と見せ物の間に権力を非対称的に配分する。つまりセンチメンタリティは、ヘテロセクシュアルの男性たちが他者のセクシュアリティをスペクタクル的に領有するとともに、自らの地位を防衛することを可能にする。「この構造においてはアンチ・センチメンタリティそれ自体が、近代のセンチメンタルな関係のエンジンであり表現そのものとなっているがゆえに、どの時点でまたいかなる目的をもってセンチメンタリティの言説に加わったとしても、ほとんど必然的に、本質的にスケープゴートを作って行くような形容辞投射の運動に巻き込まれることになる、ということだ」(ibid., p. 219)。

セジウィックの議論は、カミングアウトを権力の外部への「解放」として捉えるセクシュアリティの解放理論に疑義を示すものである。カミングアウト/クローゼットがともに、「無知」「知ったかぶり」を通じて働くホモフォビックな権力の磁場の内部に置かれているのなら、その磁場の機制を問わないままカミングアウトを権力からの解放として称揚することはできないからだ。「秘密」はつねに、ホモセクシュアリティを投射することでホモソーシャルな絆を維持するための、スケープゴートとされる危険性を伴っている。ときに感傷や憧憬のまなざしを向けられるとしてもそのことは同様であり、人々の活動はセンチメンタリティの構造の中に不可避免的に巻き込まれていくのである。

## 2.2 カミングアウトから権力の磁場へ

セジウィックによる解放理論への疑義を受けて後、マルクス主義的な「上からの」権力論からフーコー的なミクロ権力論へとパラダイムを移行させ、権力

の外部への解放ではなく、権力の内部での「抵抗」(フーコー, 1986) という視点に立脚しながらカミングアウトを論じる議論が登場してくることとなった。

ミシェル・フーコーの議論に直接的な影響を受けたマーク・ブレイシアスは、カミングアウトによる「政治的な問題化」は同時に、異性愛主義に抗うコミュニティを構築していくためのエートスでもあると考える。「もしカミングアウトがコミュニティが存在するうえでの条件であるなら、そのコミュニティは、レズビアンそして/あるいはゲイのエートスの可能性の条件となる。そうして、カミングアウトが目指すように、レズビアンやゲイ男性として自らの生を生きることができるようになるのである」(Blasius, 1992, p. 655)。

またシェイン・フェランはブレイシアスの議論を引き継ぎつつ、ポストモダン・レズビアン・ポリティクスの可能性について考察している。フェランにとってカミングアウトとは(ビ) カミング・アウト、つねに暫定的にレズビアンに「なること」である。そのようにカミングアウトを再定義することで、セックス・ジェンダー・アイデンティティ・性的欲望に一貫性を見ようとする異性愛主義に抗う可能性が模索される。「私たちのポリティクスとは、自分たち自身と、そしてまた『コミュニティ』の内部にも外部にもいる、私たちを『フィックス』(『固定する』、『矯正する』など、この言葉の実にさまざまな意味において) しようと企む人々と、ときには忍耐強く闘いつづけ、またときには辛抱など投げすててはげしい闘争を繰り広げてゆくことなのだ」(フェラン 1995, p. 237)。

さらに風間孝(2002)は論文「カミングアウトのポリティクス」において、カミングアウトは権力の外部への「解放」でも、権力に従属する「告白」でもなく、権力を再編する「抵抗」であると論じている。現在の社会では公的領域と私的領域は厳密に区分され、性的なものが後者に割り振られて秩序は維持される。だがこの秩序があくまで異性愛を前提したホモソーシャルなものであるのに対して、同性愛をカミングアウトすることは、性的なものが不在とされる公的領域の前提を揺るがすことになる。「公/私の再定義を求めるカミングアウトの実践は、同性愛を排除するために公/私の区分けを実体化してきた力学を暴く行為であり、このような実践の積み重ねにより同性愛者の置かれた現実



を変化させていく行為なのである」(風間, 2002, p. 362)。

しかし注意を要するのは、これらの議論は、カミングアウトのポリティクスの効果を新たに意味づけなおすものではあっても、カミングアウトが「うまくいく」ことを必ずしも保障するものではないということだ。たとえば常世徹(2012)によれば、カミングアウト後に同性愛者はしばしば、明示的な憎悪発言を受けるわけでもないのにつきまってくる「居心地の悪さ」を経験するという。常世はそれを、集合的アイデンティティとその差別に依拠した語りが説得力を失った個人化の時代においては問題化することが困難な経験であり、また個人化された同性愛者がそのような経験を強いられること自体が差別的な構造の結果であると論じている。

また、ウェンディ・ブラウンはアメリカの政治状況において多者への「寛容」を言祝ぐ言説が流通していることを批判的に考察し、以下のように述べている。「かくして、『寛容』は脅威となる<他者>を内部に編入し、その存在を規制する様式として現れる。こうした点で、それはデリダのいう代補の地位を占めている。つまり、それはアイデンティティ/差異、内部/外部という二項対立を概念的には解体するが、その支配的な完全性、自己充足、自己完結、連続性という想定には欠かせないものなのである」(ブラウン, 2010, p. 38)。寛容は構造の中で支配的な地位にいる者が、あくまでその地位の自明性を揺るがさないかたちで他者を配置するための策である。

これらは、カミングアウトによる抵抗を被った異性愛主義的な権力が再秩序化しようとしていることの証だといえよう。注意すべきはそのしぶとさである。クィア理論の研究者リサ・ドゥーガンは、アメリカにおけるネオリベリズムとある種のアイデンティティ・ポリティクスの補完関係を「新しい同性愛規範 homonormativity」(Duggan 2003, p. 50)と呼んで批判した。そこでの同性愛は消費社会内の私的なライフスタイルの一変種として受容されるに留まり、異性愛主義の中心性は揺らぐことがない。どころかそうした私的領域での受容の背後では、政治経済的な再配分への要求は公的領域から撤退させられ、さらに沈黙を強いられていく。権力は、同性愛のアイデンティティに基づく政治すらも規範として飲み込んでいくのである。

そのように考えると、セジウィックが言うように、カミングアウトによって

「すでに制度化された無知を劇的に表示することには、いかなる変換の可能性も見出し得ないのである」(セジウィック, 1999, p. 110) かもしれない。カミングアウトが権力の磁場の中で自らを位置づけなおそうとする遂行的な性格を持つものだとしても、「寛容」や「同性愛規範」といった権力の様態を考えれば、果たしてどのような場合に抵抗が成立しうるのかは、さらなる検討を要する問題である。

とはいえ本論は、カミングアウトによる抵抗の可能性を追求する議論を批判することを目的としているわけではない。それよりも本論が重視したいのは、この可能性を阻む権力の支配的な磁場に目を向けることの必要性である。

カミングアウトの効果が新たに理論化される一方で、カミングアウト/クローゼットをあらかじめ捉え込んでいる権力は、支配的なものとして残存しているように思われる。したがって、カミングアウトのみを社会問題の構築の原型とすることは、この権力の支配的な磁場を看過していると言わざるを得ない。カミングアウトへのまなざしがこうした磁場の内部にあるとするならば、クレーム申し立てに対する研究者のまなざしはどのような磁場の中に置かれているのだろうか。そこでは、クローゼットの認識論に類するものが密かに反復され、新たな規範を生み出してはいないだろうか。だとするとクローゼットの認識論を踏まえて、社会問題の構築主義はいかにありえるのか。

### 3 出会い損ないから始まる構築主義

#### 3.1 クレーム申し立ての認識論

おそらく社会問題の構築主義は、カミングアウト＝クレーム申し立てではなく、それをあらかじめ捉えている、クローゼットならぬクレーム申し立ての認識論に着目する必要があるのではないだろうか。セジウィックがカミングアウトをまなざし捉える認識論に着眼したように、クレーム申し立てをまなざし捉える認識論について、社会問題の構築主義は議論を行わねばならない。

セジウィックが明らかにしたように、カミングアウトはそれ自体が権力の内部に位置しており、しかもその効果は必ずしも保証されてはいない。「それはもっと暖かい関係を許すこともできるが、しかし(同時に)その関係には、非対称のもの、鏡像化されたもの、口には出さぬものという光学の中に、搾取的

部分が潜在的に組み込まれているのである」(セジウィック, 1999: 113)。対立する二項には、支配的な権力が通底している。

従来の社会問題の構築主義は、カミングアウトを原型とし、クレーム申し立てが可視的であることこそが問題的な状況であると考えてきた。翻せば、クローゼットはクレーム申し立てが不可視であることに相当し、没問題的な状況とされよう。そこでは、カミングアウト/クローゼット、クレーム申し立て/それ以外、社会問題/没問題的日常世界という二項対立が存立すると同時に、前者こそが社会問題の研究者にとって有意とみなされる。クレーム申し立ての認識論とは、現実をこうした非対称な二項対立として構築する権力のエピステーメーに他ならないのである。

ここで、ガヤトリ・スピヴァクがそのサバルタン論について「語ることと聞くことが一対になって、初めて言語行為は完成する」(スピヴァク, 1999, p. 84) と述べているのは示唆的である。サバルタンはすでに語っているにも関わらず、その聞き手の構えによって、語りは誤って聴き取られ植民地主義的な権力の正当化へと横領される。

発言を行なった場合でも、その発言を行う人はある性格分析的伝記という点から解釈されてしまい、その結果発言それ自体が、私たちがものごとを歴史的に解釈する、そのやりかたで解釈されねばならないことになるだろう。(ibid.)

クレーム申し立ての認識論は、「ものごとを歴史的に解釈する、そのやりかた」に還元するひとつの方法である。草柳千早(2004)によれば、クレーム申し立ての分析において前提されているのは、公的領域で自らのニーズを整除して発言することができる、近代主義的な「強い主体」である。逆に言えば、そのような主体像を媒介として権力からクレーム申し立てとして認識されない限りは、社会問題の構築に参加することができない。

したがってクレーム申し立ての認識論は、クレーム申し立ての主体に対してある種のアイロニーを強いるように思われる。というのも、クレーム申し立ては「いまここ」をめぐるリアリティ定義の競合である。にも関わらず、「いま

ここ」を支配する権力によって認められない限りは、活動はクレイム申し立てとしてみなされないからだ。クレイム申し立てとは、権力への従属＝主体化の産物である。

つまりクレイム申し立てとして認識されることは、活動が権力へと従属し位置づけられることであり、そこには活動がむしろ権力の既存の体制を補完する「クローゼットの見せ物」（セジウィック, 1999, p. 325）とされる可能性がつねに伴っているのではないか。クレイム申し立てが生じていることと、現実が問題化されることはイコールではない。むしろクレイム申し立てにつきまとうのは「中に隠れてその見せ物を粹にはめ、消費する方のクローゼット、すなわちクローゼットの視点」（*ibid.*）なのではないだろうか。だとすればそこには、二項対立の認識論が暗黙のうちに不問に付している、クレイム申し立てが可視的であるにも関わらず、不変の日常世界が維持されるという第三の事態が想定されねばならないだろう。<sup>2</sup> 逆も然りである。クレイム申し立てではない形で、しかし現実の問題化が起きているということもありうべき事態ではなかろうか。<sup>3</sup>

このようにクレイム申し立ての認識論は、活動を権力の内部へと位置づける。そのことは、権力の体制を再強化する危険性をつねに伴いつつ、クレイム申し立てとそれ以外を分かつ二項対立的なリアリティを反復する。カミングアウトがクローゼットの投射関係に捉え込まれていたように、人々の活動もまた、こうしたリアリティの中に時に縮減されて閉じ込められてしまうのである。活動がクレイム申し立てとして定義されることは、セジウィックが言ったような意味で「見せ物」にされることでもあるのだ。

ところで先のスピヴァクの議論は、解釈行為の持つ権力について論じることで、本論の新たな論点を示唆しているように思われる。つまり、クレイム申し立ての認識論による解釈を担い、二項対立的なリアリティを反復するのは誰なのか。スピヴァクによればそれは「性格分析的伝記」の記者ということになるであろう。クレイム申し立ての認識論の担い手は誰か、その者はクレイム申し立ての認識論に立って何を行っているのか、次節ではこの点についてさらに論じていこう。

### 3.2 研究者の権力性へのまなざし

そもそもスペクター&キツセによれば、クレイム申し立ての同定は研究者も含む社会のメンバーによって、すなわち活動の受け手によって日常的に行われるものと考えられていた（スペクター, 1990, p. 127）。クレイム申し立てを同定し社会問題を語る者は、研究者であっても、この権力から自由であることはできない。研究することは活動の意味をめぐる闘争の外部にはありえないのだ（草柳, 2004, p. 218）。言い換えれば、研究者が何をもって問題的な状況とみなしその構築プロセスを分析するのかは、研究者自身の構えに依存していると考えられる。

このことについて示唆的なのが、ポストモダン・ポスト構造主義の議論を社会問題の構築主義へと取り入れるいわゆる「ポストモダン派」（福重 1999）の社会問題研究である。その代表的な論者であるステファン・フォールとアヴェリー・ゴードンは共著論文「犯罪学的な置換——社会学的脱構築」（Pfohl & Gordon, 1986）の中で、犯罪学を例に、社会科学者の研究の営みそれ自体を分析の俎上に載せた。フォール&ゴードンによれば、社会科学の研究者は対象者を自らの手続きに則ってくまなく分析・監視しその「真実」を見出すことで、認識論的な快楽を得られる。他者の「真実」を発見する科学は、翻って、研究者の主体性を再確認し、快楽を得るという自己充足的な行為となるのである。

フォール&ゴードンの論文についてさらに検討を加えたレイモンド・ミハロフスキーによれば、彼らの狙いは「研究を行う者によって何が行われているのか」（Michalowski, 1993, p. 384）を前景化すること、そしてそれによって「社会科学者の心理の中で抑圧されたものに声を与えること」（*ibid.*, p. 396）にあったという。これに従えば、クレイム申し立ての認識論に立った社会問題研究もまた、研究者自身の主体性や快楽に結び付いていると考えられるのではないか。「見せ物」を欲しているのは、ほかならぬ研究者自身なのである。ならば、クレイム申し立ての認識論を批判的に乗り越えようとするためには、研究者自身の認識論に対する再帰的なまなざしが必要になるだろう。

だが、それは実証的な通常の科学のプロセスを逸脱したものになる（Pfohl & Gordon, 1985, p. 108）。彼らの挑戦が、絶対的な「真実」に代わり「戦略

的な真実」を、「現実」に代わり「<sup>リアル</sup>対抗的な<sup>サブリアル</sup>現実」(Pfohl, 2008)を明らかにできるのだとして、社会問題の構築主義は、クレーム申し立てに代わるその対象であり出発点をどのように据えるべきなのだろうか。<sup>4</sup> 研究者自身の営みと社会問題の構築過程が不可分であるとして、自らの認識論を再帰的に問うことから社会問題を記述する方法論はどのようにありえるのか。

### 3.3 「出会い損ない」から始まる構築主義

本節では、これまで指摘した問題点を踏まえつつ社会問題を記述する新たな方法論を探索的に論じていく。そこでまずは、従来の社会問題の構築主義が上述した問題にどのように応えてきたのかを簡潔に見ておきたい。

ポストモダン派の社会問題研究の「新しいクレームの探求」(福重, 1999)は、先述した問題を踏まえつつ、従来の社会問題の構築主義に対して新たな研究の対象を提示したものだといえる。たとえばレズリー・ミラーは支配的な文化の中でより用いられているスタイルではなく、下位文化的なスタイルにあえて依拠して行われる「下からのクレーム申し立て」(Miller, 1993)に着目している。それは確かに、研究者が自らの知の断片性や状況依存性を反省的に捉えることで明らかにできる領域であろう。しかし、権力の内部で周縁化されている語りをもクレームとして受け取る可能性を主張するこの回答は、クレーム申し立て概念自体は温存している点で不十分である。

また草柳は、あらゆる語りはクレームとして受け取りうるという認識から、「日常世界のあらゆる局面を常に潜在的に『問題』状況でありうるものとして見ることであり、いま私が自明視している日常に対する、自分自身の認識を常に疑い問い直すこと」(草柳, 2004, p. 228)を要請する。このこと自体は本論でも首肯できるが、しかし果たして、語りをクレームとして受け取ってよいのだろうか。その受け取り方では、クレーム申し立てとそれ以外という二項対立なリアリティを反復してしまうのではないだろうか。<sup>5</sup>

フォールは、社会問題の構築主義の課題は「現実の社会的構築をよりよく説明する方法を単に見つけ出すことではなく、現実の世界それ自体とより注意深く対話することを可能にする」(Phofl, 2008, p. 667)ということにあると述べていた。そのために要請されるのは研究者自身が社会的現実と対話する方法論

自体を分析の俎上に載せることであり、これは「研究を行う者によって何が行われているのか」という問いを前景化する (Michalowski, 1993, p. 384)。つまり、社会問題の構築主義を徹底させていくために必要なのは、クレイム申し立てとそれ以外の活動、社会問題と没問題的な日常世界といった二項対立的な認識論を疑い、それが現実の了解に際してどのような規範的な効果を及ぼすのかを明らかにしていくことではないだろうか。「現実の世界それ自体とより注意深く対話すること」の可能性は、その先に構想されうるだろう。

このことを考察するため、最後に本論では第三世界フェミニズムの研究者である岡真理の議論を取り上げたい。そこに記述されているのは、岡自らの、クレイム申し立てかどうかという二項対立では把握することのできない了解不可能な経験である。岡は著書『彼女の「正しい」名前とは何か』の中で、あるパレスチナ人女性との「出会い損ない」の経験について語っている。

それは「出会い」というよりもむしろ、「出会い損ない」の経験である。なぜなら、彼女をより深く知りえたかもしれないのに、そうとは気づかないまま、私はその機会があるたびに、それをことごとく逸してしまっていたのだから。私は誤った答えを彼女にしたのではないだろうか。もし、あのとき、彼女の誘いを受けていたら、私は何かを知りえていたのではないだろうか。けれども、彼女の再三の誘いをすげなく断ってしまったことで、私はその「何か」を知る機会を永遠に失ってしまったのではないか。(岡, 2000, p. 11)

学生時代にエルサレムを訪れた岡は、偶然にも一人のパレスチナ人の女性と宿を共にすることになったのだが、彼女の手料理の食卓に招かれたにも関わらず、それを断ってしまう。翌日もさしたる会話を交わすことなく彼女と別れてしまい、そのまま再会することはなかった。彼女の「正しい」名前を知る機会を、岡は逸してしまったのである。岡は、後に自らの経験を「出会い」ではなく「出会い損ない」として位置づけ、それを「トラウマ的な経験」(岡, 2000, p. 12)として引き受けていくことになる。

かつてアーヴィング・ゴフマンは出会いを対面的な相互行為の一類型として

考察し、それは注意を特定の焦点へと向け、行為の相互連関を強化することなどによって、円滑なコミュニケーションを可能にすると述べた。「出会いとは、逸脱行為を訂正的に補正することと同様に、参加者たちのあいだにある感情を循環的に流すためのコミュニケーションの基盤を提供している」(ゴフマン, 1985, p. 4)。

注意しなければならないのは、ゴフマンがゲームを例示して論じているように、出会いは相互行為に特定の秩序をもたらすとともに、この秩序にとって過剰なものを排除する性格を有するということである。「物質的なもののもつ特性がしりぞけられて出会いの相互の活動に侵入することが許されないように、参加者自体の特性のあるものは、あたかも存在しないかのように取り扱われる」(ibid., p. 7)。あたかもルールに則ってゲームが円滑に進行されねばならず、その進行にとって無関係な要素はゲームの場から締め出されるように、出会いは相互行為を形作り、その秩序における夾雑物を排除する。

このように考えると、社会問題の構築主義の研究者がクレイム申し立てを認識する上で経由しているのは、まさに出会いであると言えよう。特定の活動にクレイム申し立てとして出会うことは、その活動が行われる場の秩序を同定することであり、この秩序に無関係な何かを排除することでもある。研究者は出会いを介して、クレイム申し立ての認識論を運用する。

さて、岡は、彼女の手料理の誘いを「疲れているから」、あるいは「パレスチナ料理といっても、すでにエジプト暮らしの経験もある私には、もはやとりたてて好奇心を刺激するようなものではなかったせいか」断ってしまい、自身は寝入ってしまったと振り返る(岡, 2000, p. 10)。それはゴフマンの言う意味での出会いの経験ではあったかもしれない。岡にとって、このとき出会いが可能にしたのは一晩の借宿であり、その意味でその場は「焦点の定まった集まり」(ゴフマン, 1985, p. 4) だっただろう。

だが、出会いには「一人の参加者にとってうまくいって幸せな場面であるものが、他の参加者にとってはそうでないこともありえる」(ibid., p. 78) のではなかったか。岡が後にトラウマとして引き受けたのは、自らの「うまくいって幸せ」だった出来事が、あの彼女にとっては実はそうではなかったという可能性ではないだろうか。岡が自らに向けるのはあくまで可能性の域を出ない問



いであり、彼女が伝えようとしていたかもしれない「何か」は永遠に逸失されている。彼女の「正しい」名前を知ることとはもはやできないのである。しかし、この「何か」との出会い損ないの経験を省察することを通じて、岡は自らを「フェミニスト」として主体化していった（岡 2000, p. 28）。

岡の言う「出会い損ない」は、「出会い」が整除し、あるときには過剰とみなし排除するものとの反省的な対話の必要性を示唆している。クレーム申し立ての認識論は二項対立的なリアリティへと人々の活動を閉じ込める。出会い損ないとはクレーム申し立ての認識論が排除する経験であるが、同時にこの経験には、二項対立的なリアリティであれば縮減し削ぎ落としてしまうようなものとの間で「語りー聞く」といった相互行為が行われる可能性が——彼女の「正しい」名前を知ることとはできないとしても——見出されるのではないだろうか。そうした対話の先に、岡は以下のようなリアリティを構築していく。

彼女について語り、彼女をパレスチナ人の女性として名指すことで、私は今、これを読んでいるあなたに何を差し出そうとしているのだろう。私には分からない。ちょうど、彼女が私を「パレスチナの」料理に誘いながら何を私に差し出そうとしていたのか彼女自身もまた、よく分かってはいなかったかもしれないように。思うに、大切なことは、彼女の「正しい」名前が何であるか問うことよりも、私が彼女を何者かとして名指し、彼女について語ることで何が交渉されているのかと問うことであるだろう（ibid., p. 31）。

自らの語りに対する岡の反省的なふるまいを通じて、以下のように言うことはできないだろうか。すなわち、社会問題の構築主義の研究者に求められる営みとは、クレーム申し立てとして同定しうる活動の分析から出発することではない。そうではなく、トラウマ的に回帰し研究者の依拠する認識論の確かさを問うてくるような活動、これらとの対話の可能性を繰り返して模索することである、と。<sup>6</sup>

岡はまた、次のようにも言う。「彼女が、自己の存在に、暴力的に奪われた不透明さを回復すべく闘っているのだとしたら、そして、もし私たちが、彼女

のその痛みを分有しようと欲するのなら、私たちもまた、歴史的に透明化された自己の存在に不透明さを取り戻すことが絶対に必要なのではないか」(ibid., p. 31)。クレイム申し立ての認識論に立った出会いは、レトリックやモチーフやスタイルといったかたちで人々の活動を整除し夾雑物を排除することによって、了解可能な「透明」な世界を作りあげていく。しかし、出会い損ないは「透明化された自己の存在」に、「不透明さ」をトラウマ的に取り戻す。それは、何がクレイム申し立てなのかという問いを離れ、了解可能だったはずの世界が了解不可能なものとして立ち現れてくる、不透明さゆえの不安に満ちた契機ではないだろうか。その経験を手掛かりとして現実を繰り返し「再—想像/創造」(ibid., p.32)することこそ、社会問題の構築主義の研究者の大切な仕事であるだろう。

## おわりに

本論では、クレイム申し立ての原型であるカミングアウト/クローゼットの議論の検討を通じて、社会問題の構築主義の方法論上の問題点に関する批判的な考察を試みてきた。その上で、研究者の課題は、自らにとって了解不可能な出会い損ないの経験から社会的現実を捉え返すことである。あの時、あの人は何を言っていたのか。あの時のあの表情は何を意味していたのか。あの時、それに応答しなかった私は何を逸失することになったのか。こうしたトラウマ的な問いかけによって、社会問題と日常世界、クレイム申し立てとそれ以外といった了解の仕方、そして私とその生が根ざす現実は交渉されていくことになる。無論その営みは、フォール&ゴードンが指摘していたような自己充足的な快楽を伴うものではありえない。

しかし、おわりに考えねばならないこととして、「社会学」の「社会問題の構築主義」の「研究者」という位置取りは果たして可能なのだろうか。これまでの議論を踏まえてそのような位置取りを選択することには、どのような意味があるのか、ないのか。それに関して、三点ほど補足しておきたい。

まず本論は、社会学の社会問題の構築主義という限定的な領域の陥穽を指摘したものである。したがって、他の領域の研究者が同様の難点を抱えるのかは、さらなる検討を要しよう。とはいえ、いかなる研究者も、権力の真空地帯

に位置することはできない。たとえば、かつてエドワード・サイードは、西洋発の学知が東洋にまなざしを向ける際の地政学的な権力関係をオリエンタリズムと呼んだが、その認識図式はいまも幅広い領域——社会学・人類学・文学・哲学・政治学など複数の領域にだけでなく、ジェンダー・セクシュアリティ研究やカルチュラル・スタディーズなど「横断的」と目される領域にも——に行き渡っているのではないか。

これに関して、ダイアナ・コー (Khor, 2010) は、英語圏の研究者らのまなざしが、非一貫的なアジア・日本のセクシュアリティと対蹠するかたちで安定的な西洋のセクシュアリティを立ち上げることになっていると指摘している。こうした認識論を採用することは、日本におけるジェンダー不平等やレズビアンへのスティグマをそぎ落とすばかりか、日本のゲイ・レズビアン運動を単純化して理解させる点で、本論で指摘したクレイム申し立ての認識論とも問題点を共有すると思われる。またレイ・チョウ (2014) は、一見外部性や他者性を志向する西洋発のポスト構造主義理論 (本論も広い意味ではこれに依拠している) が、結局はそうした取り込み可能な他者を要請し生産する、自己言及的なメタ言語となっているのではないかと批判する。そのうえで「どんなに前衛的な理論的試みにおいても言及が避けられないことを認めること、そして (言及性) の拒否と排除という原初の行為を徹底的に再評価する道を開くこと」 (チョウ, 2014, p. 110) ことはいかに可能か。成否は別紙に委ねるほかないが、本論が目指したのもまたこの道だといってよいだろう。

次に、本論はクレイム申し立ての概念を用いることを批判的に論じているが、それは往々にして不均衡な資源配分のもとで行われる人々の抵抗を、社会的現実の相互構成一般への分析へと還元することではない。つまり本論は、クレイム申し立て概念を捨象することで、社会問題研究を脱政治化することを提案するものではない。そうではなく、あくまで本論が描こうとしてきたのは、社会問題の構築主義とその研究者自身の営みを反省的に問うあり方である。

そして、「出会い損ない」という岡の経験に着目することで目指したのは、クレイム申し立てに「存在の金切り声」 (北田, 2001)<sup>7</sup> という残余的な概念を対置することではない。むしろ問題にしなければならないのは、クレイム申し立て概念を運用することで他者の活動を整除しながら、ある声に対してはそれ

を「存在の金切り声」としてしか聞くことができない研究者自身の態度ではないだろうか。にも関わらず「存在の金切り声」という表象は、研究者の認識論に内在する問題を、発話不可能な他者という存在論上の問題へとすり替えてしまう。それは、研究者と聞き取られる声との関係性を不可避免的に非対称なものとして（再）構築することによりのみ終始するだろう。

以上を踏まえて、先の問いに戻ろう。「社会学」の「社会問題の構築主義」の「研究者」は何をする者としてありえるのか。これは、その新しい研究課題や方法論は何か、という問いとは似て非なるものだ。本論に従えば、そのような研究や主体の存立する秩序自体が疑われねばならないからだ。

社会問題の構築主義の研究者はクレーム申し立ての認識論を反復的に参照しながら、社会的現実の記述そして（再）構築の作業に参加してきた。逆に言えば、この反復過程の中で社会問題の構築主義の研究者という主体が行為遂行的に生産され、社会学は領土化されてきたともいえる。<sup>8</sup> 主体がその自由な意志によって反復からの脱出を克服することは——カミングアウトそしてクレーム申し立てがそうであるように——困難であるかもしれないが、しかし、そのような反復過程に変化をもたらす契機は、了解不可能な「出会い損ない」にある。私はあの人と出会うことができなかった、名を知り損ねたという逸失をみつめることの中にこそ、現実を新たに描き出す契機と責任はあるのである。

## Footnotes

- <sup>1</sup> 石川准 (1992, p. 203) によれば、それまで相互行為論的社会問題研究で主流だった烙印論的逸脱論は、逸脱者をアイデンティティの管理や社会統制への同調に腐心する受動的な存在として描くことで、主体性を持たない無力な存在として描くらしいがある。だが、こうした逸脱論的なアプローチでは、市民権の要求と社会的資源の再配分へと積極的に関与していく新しい社会運動を説明することができなかったのである。
  - <sup>2</sup> 実際私たちは、この社会でつねに誰かがクレームを申し立てていることを何かしら知っているのではないだろうか。新自由主義下における黒人共同体の階級分断と人種・男性性双方にわたる本質主義化に際してコーネル・ウェストが「政治的冷笑主義」と呼んだもの、「私たちが自分たちの社会を変革しようとしても大した違いをつくりだせないという考え方」(ウェスト, 2008, p. 80) は、黒人共同体以外にも広く行き渡っているように思われる。
  - <sup>3</sup> たとえばミシェル・ド・セルトーは「文化的差異なるものを『カウンター・カルチャー』という旗をかがけてきた集団——つとに独自なものとみなされ、時には特権化されて、一部はフォークロアにされてしまっているが——こうした集団にけっして固定化してはならない」(セルトー, 1987, p. 13) と述べ、日常実践が支配的な権力を遂行的に再分節化する可能性について考察している。クレーム申し立てという局所的な実践の周縁には、リアリティをめぐる抗争の広大な領域が隠れている。逆にいえばクレーム申し立ては、こうした実践を「存在論における恣意的な境界設定」(ウールガー & ポーラッチ, 1985=2000) によって切り取ったものにすぎないのである。
  - <sup>4</sup> たとえば中河伸俊は、ウールガー & ポーラッチ以来の社会問題の構築主義の方法論上の問題に対して、クレーム申し立てを「それに依拠して、いったん調べたい人びとの活動の観察を開始したら、その先の記述や考察にあたっては捨ててしまってもかまわない感受概念」(中河, 2006, p. 315) として用いることを提案するが、それではもはや不十分なのはここまでの議論で明らかである。
  - <sup>5</sup> なお草柳 (2006) は日常生活の自明性それ自体を、クレーム申し立てを「あらかじめ排除 **foreclose**」する権力的な作用として論じているが、本論に即せば、日常生活の自明性とクレーム申し立ての可視性は必ずしも対立しないのではないか。つまり、クレーム申し立てが可視的であるにもかかわらず、自明の日常生活が維持される事態はありふれているのではないか。
- この点に関連して「あらかじめの排除」は単にクレーム申し立ての不可視化というよ

りも、クレーム申し立ての主体が構築されるプロセスに内在する機制として用いた方が、クレーム申し立て概念を原型まで遡って検討してきた本論の観点からすれば、より生産的にも思われる。つまりクレーム申し立ての主体となることは、それ以外の生のあり方を「あらかじめ排除」することを伴っている、というようにである。

- <sup>6</sup> だが、これには、以下のような疑問も生じよう。「カミングアウト/クローゼット」がそうだったように、「出会い/出会い損ない」もまた二項対立を反復してはいないか。そして、「出会い損ない」への着眼も排除の機制を免れず、新たな「出会い損ない」を生むだけではないのか。クレーム申し立ての認識論の運用を批判的に再考する上で、岡のいう「出会い損ない」にどれほどの可能性があるというのか。しかし、注意したいのは「出会い損ない」とはトラウマ的な経験だということである。ここではトラウマについて、ジュディス・バトラー（バトラー, et al. 2002）に則って理解することが適切だろう。バトラーは、前-社会的な領域としての現実界にトラウマを描くことはせず、それを象徴界における主体の社会的構築の過程として考えようとする。バトラーがトラウマを考察するのは、社会的領域に還元不可能な生の基盤を設定するためではなく、社会的領域において生が可能になる条件を再分節化するためなのだ。

同様に「出会い損ない」への着目は、相互に排他的な二項対立を設定し、どちらかに政治的重要性を割り振ることを提案するものではない。むしろ「出会い損ない」は、「出会い」によって整除された現実の只中に「未定性（オープン・エンディドネス）」（ibid., p. 218）をもたらすような経験である。「出会い損ない」は、社会問題の構築主義の研究者に排除なき「出会い」を可能にさせるような新たなグランドセオリーを立ち上げるものではなく、そうしたグランドセオリーをつねに挫折させる。その上で、「出会い損ない」の経験を通じて「現実の世界それ自体とより注意深く対話すること」（Phofl, 2008, p. 667、傍点筆者）を、漸進とみなす理由はあれど、無限後退とみなさねばならない理由はない。それは、対話の放棄である。

- <sup>7</sup> 北田は、社会問題の構築主義において観察者が依拠する認識論の俎上には上らない「構築されざるもの」を指してこのように呼んだ。だが、観察者の認識が捉えないそれを、なぜ「存在の金切り声」として表象する必要があるのか。それは結果的に、合理性/非合理性といった二項対立を反復——しかも、支配的な認識論が捉えない当のものに後者を割り振るかたちで——しているのではないのか。この点に関しては、小松原（2007）も参照。

- <sup>8</sup> こうした主体の行為遂行的な構築の過程は、ジュディス・バトラー（1999）によっ

て明らかにされてきた。ではバトラーの言うようにその反復過程を攪乱することはどのように可能か。本論では論じることができないものの、今後の研究につながる論点として「時間性」を示唆しておきたい。「現在」を語る行為が歴史的コンテキストと切り結ぶ、この瞬間にこそ攪乱の契機があるのならば（大貫, 2009）、「出会い損ない」が呼び起こすのはどのような時間性であるのかは、研究の営みに多少なりとも「再-想像/創造」の可能性を見ようとするならば避けては通れない問いであろう。

## References

- 石川准. (1992). 『アイデンティティ・ゲーム——存在証明の社会学』. 東京: 新評論社.
- 大貫孝学. (2009). 「J・バトラーにおける「パフォーマティヴィティ」の「時間性」」.  
In 『三田社会学』. 第14号, 80-93.
- 岡真理. (2000). 『彼女の「正しい」名前とは何か——第三世界フェミニズムの思想』.  
東京: 青土社.
- 風間孝. (2002). 「カミングアウトのポリティクス」. In 『社会学評論』. 第53 (3) 号,  
348-364.
- 北田彰大. (2001). 「<構築されざるもの>の権利をめぐる——歴史的構築主義と実在論」.  
In 上野千鶴子 (Ed.). 『構築主義とは何か』. (225-274). 東京: 勁草書房.
- 草柳千早. (2004). 『「曖昧な生きづらさ」と社会——クレイム申し立ての社会学』. 東京:  
世界思想社.
- . (2006). 「社会問題研究と日常生活の自明性」. In 『三田社会学』. 第11号,  
68-81.
- 小松原織香. (2007). 「「言葉にできない痛み」とは何か」. In 『オルタ7, 8月号』.  
Retrieved from [http://www.parc-jp.org/alter/2007/alter\\_2007\\_08-09\\_tetsugaku.html](http://www.parc-jp.org/alter/2007/alter_2007_08-09_tetsugaku.html).
- 常世徹. (2012). 『「同性愛差別」再考——男性同性愛者が感じる「居心地の悪さ」から』.  
2012年度早稲田大学大学院文学研究科修士論文.
- 中河伸俊. (2006). 「構築主義アプローチの到達点」. In 平英美 & 中川伸俊 (Eds.). 『新版  
構築主義の社会学——実在論を超えて』. (285-328). 東京: 世界思想社.
- 福重清. (1999). 「社会問題研究におけるポストモダン派社会構成主義の可能性」. In  
『ソシオロギス』第23号, 182-195
- 道場親信. (2004). 「社会運動の歩み——世界システムへの挑戦者たち」. In 大畑裕嗣, 成  
元哲, 道場親信 & 樋口直人 (Eds.). 『社会運動の社会学』. (236-250). 東京: 有  
斐閣.
- Anspach, R. Renee. (1979). From Stigma to Identity Politics: Political Activism among  
the Physically Disabled and Former Mental Patients. In *Social Science &  
Medicine*, 13A, (765-773).
- Blasius, Mark. (1992). An Ethos of Lesbian and Gay Existence. In *Political Theory*,  
Vol.20, No. 4 (642-671).
- Brown, Wendy. (2010). 『寛容の帝国——現代リベラリズム批判』 (向山恭一, Trans.). 東



- 京: 法政大学出版局. = (Original work published 2006). *Regulating Aversion*, Princeton University Press.
- Butler, Judith. (1999). 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子, Trans.). 東京: 青土社. = (Original work published 1990). *Gender Trouble: Feminism and the SUBVERSION of Identity*, London & New York: Routledge.
- Butler, Judith, Ernesto Laclau & Slavoj Žižek (2002). 『偶発性・ヘゲモニー・普遍性——新しい対抗政治への対話』(竹村和子 & 村山敏勝, Trans.). 東京: 青土社. = (Original work published 2002). *Contingency, Hegemony, Universality: Contemporary Dialogues on the Left*, London & New York: Verso Books.
- Certeau, Michel. (1987). 『日常実践のポイエティーク』(山田登世子, Trans.). 東京: 国文社. = (Original work published 1980). *Art de Faire*, Paris: Union Generale d'Editions.
- Duggan, Lisa. (2003). *The Twilight of Equality?: Neoliberalism, Cultural Politics, and The Attack on Democracy*, Boston: Beacon Press.
- Foucault, Michel. (1986). 『性の歴史I 知への意志』(渡辺守章, Trans.). 東京: 新潮社. = (Original work published 1986). *La Volonté de Savoir, Volume1: de Histoire De La Sexualité*. Paris : Gallimard.
- Goffman, Erving. (1985). 『出会い——相互行為の社会学』(佐藤毅 & 折橋徹彦, Trans.). 東京: 誠信書房. = (Original work published 1961). *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, New York: Bobbs-Merrill Company, Inc.
- Ibarra, R. Peter. & Kitsuse, I. John. (2000). 「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」(中河伸俊, Trans.). In 中河伸俊 & 平英美 (Ed.), 『構築主義の社会学——論争と議論のエスノグラフィー』. 東京: 世界思想社. = (Original work published 1993). *Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems*, In James, A. Holstein. & Miller, Gale. (Eds.), *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*. (25-58). New York: Aldine de Gruyter.
- Kitsuse, I. John. (1980). Coming Out All Over: Deviant and the Politics of Social Problems. *In Social Problems*. Vol. 28, Issue.1, (1-13).
- Khor, Diana. (2010). The Foreign Gaze?: A critical look at claims about same-sex sexuality in Japan in the English language literature. *In Gender and Sexuality*.

Vol.5, (45-57).

- Michalowski, L. Raymond. (1993). (De) Construction, Postmodernism, and Social Problems: Facts, Fictions, and Fantasies at the “End of History”. In Holstein, A. James. & Miller, Gale. (Eds.), *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*. (377-401). New York: Aldine de Gruyter.
- Miller, J. Leslie. (1993). Claims-Making from the Underside: Marginalization and Social Problems Analysis. In Holstein, A. James. & Miller, Gale. (Eds.), *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*. (349-375). New York: Aldine de Gruyter.
- Phelan, Shane. (1995). 「(ビ) カミングアウト——レズビアンであることとその戦略」 (上野直子, Trans.). In 富山太佳夫 (Ed). 『現代批評のプラクティス3 フェミニズム』. (209-261). 東京: 研究社出版. = (Original work published 1993.). (Be) coming Out: Lesbian Identity and Politics. In *Signs: Journal of Women in Culture and Society*. vol.18, Issue 4. The University of Chicago Press.
- Pfohl, Stephen. & Gordon, Avery. (1986). Criminological Displacements: A Sociological Deconstruction. In *Social Problems*. Vol. 33, Issue. 6, (94-113).
- Pfohl, Stephen. (2008). The Reality of Social Constructions. In Holstein, A. James. & Gubrium, F. Jaber. (Eds.). *Handbook of Constructionist Research*. (645-668). New York: The Guilford Press.
- Sedgwick, E. Kozofsky. (1999). 『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀』. (外岡尚美, Trans.). 東京: 青土社. = (Original work published 1990). *Epistemology of The Closet*. The University of California Press.
- Spector, M. B. & Kitsuse, I. John. (1990). 『社会問題の構築——ラベリング理論を超えて』 (村上直之, 中河伸俊, 鮎川潤 & 森俊太, Trans.). 東京: マルジュ社. = (Original work published 1990). *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings Publishing Company.
- Spivak, C. G. 1999. 「サバルタン・トーク」 (吉原ゆかり, Trans.). In 『現代思想』 第27 (8)号, (80-100). 東京: 青土社. = (Original work published 1996). *Surbaftern Talk: Interview with the Spivak Reader*. London & New York: Routledge.
- West, Cornel. (2008). 『人種の問題——アメリカ民主主義の危機と再生』. (山下慶親, Trans.). 東京: 新教出版社. = (Original work published 1993). *Race Matters: With a New Preface*. Boston: Beacon Press.

Woolgar, Steve & Pawluch, Dorothy. (2006). 「オントロジカル・ゲリマンダリング——社会問題をめぐる説明の解剖学」. (平英美 & 中河伸俊, Trans.). In 平英美 & 中河伸俊 (Eds.). 『新版構築主義の社会学——実在論争を超えて』 (184-213). 東京: 世界思想社. = (Original work published 1985). Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations. In *Social Problems*. vol. 32. Issue. 2, (214-227).

## **An Epistemology of Claim-Making Activities and "Missed Encounters"**

### **Based on Theories of Coming Out/the Closet**

**Shingo HORI**

The objective of this paper is to critically examine the problems surrounding a constructionism of social problems, which is rooted in the concept of claim-making activity, by returning to its original model.

The concept of claim-making analyzes the activities of people who construct social problems, the idea for which was taken from the surge of minorities who came out in the 1960s and 70s. However, the constructionism of social problems has an underlying methodological problem, as it ignores its pair concept: that of the closet. Until now, the magnetic field of epistemological power that is able to understand people's activities in advance—what Eve Sedgwick termed "the epistemology of the closet"—has been overlooked. When researchers use the concept of claim-making, they make the activities of people both divisible and comprehensible, which in turn makes Erving Goffman's "encounter" possible. Yet, at the same time, it is an act of power that involves the removal of things that are not understandable, and through this, researchers obtain a kind of self-contained pleasure through their discovery of "truth."

The key to overcoming such problems inherent in the constructionism of social problems lies within the experiences traditionally discarded as being "incomprehensible." Third World feminist scholar Mari Oka recalled such experiences as being a type of "missed encounter." Through conducting a ceaseless dialogue with the experience of "missed encounters," which are recursive in nature like trauma, one can re-imagine/re-create the reality one has safely inhabited until the present. In fact, this may be the only significant task permitted by a constructionism of social problems.

**Keywords:**

social problems, claim-making activity, coming out, closet, missed encounters

**The Furusato as Mother:  
Gendered Perspectives on the Home in Three Meiji and Taisho Literary  
Texts  
Lindsay R. MORRISON**

## **1 Introduction**

The Meiji Restoration brought about a slew of changes to Japan's social and cultural landscape. One of these changes was a heightened, widespread sense of nostalgia for the *furusato* —the “native place” or “homeland”—as hordes of people eager to pursue newfound education and work opportunities flooded into Japan's major cities, leaving their families behind in the countryside. As the *furusato* is generally a place one recognizes only upon leaving it, the spatial, temporal, and emotional distance created by this population shift to urban areas resulted in the idealization and aestheticization of the *furusato* left behind.<sup>1</sup>

Within this nostalgia for the *furusato*, the image of mother frequently appears, to the extent that the images of the mother and *furusato* often overlap each other. So deep-seated and tenacious is this mother-*furusato* connection that anthropologist Jennifer Robertson (1988) has stated, “*furusato*, as a place redolent of ‘motherly love,’ cannot exist without ‘mother’” (p. 500-1). Similarly, writer and critic Matsunaga Goichi (1975) has claimed that for most Japanese people, the *furusato* is imagined as a maternal figure—a vision that fulfills a latent desire to return to the mother's womb (p. 138). The Japanese phrase “*haha naru furusato*” (literally, “the home that is mother”) also implies the depth of this connection, even suggesting the two images are one.

This aestheticization of the “home-as-mother,” however, has a distinct gender bias; that is to say, there is a distinct scarcity of female subjectivity in discourse on the *furusato*, especially that which portrays the *furusato* in the same positive, idealized light.<sup>2</sup> For example, ethnologist Yasui Manami

(2000) has commented that although “mothers have consistently been depicted as someone else’s *furusato*,” rarely do they discuss their own *furusato* in writing (p. 1). Additionally, Yagi Tōru (1996) has noted, “A house where a reticent, brusque old man lives by himself is not typically thought to be nostalgic or a *furusato*. Rather, places that are infused with the image of women, or mother, evoke images of the *furusato*,” admitting that such an image is “extremely male-centered” (p. 53). Christine Yano (2002) has observed a similar trend in her work on *enka*: “The figure of mother herself rarely appears in *enka* songs; she surfaces instead as ‘mother remembered,’ especially by sons” (p. 174). The mother is rarely ever the subject; instead, she is more frequently a figure imagined or remembered by someone else, typically her adult, male children. Furthermore, this “mother remembered” nearly always possesses the following characteristics: she is kind, selflessly and unconditionally loving, self-sacrificing, devoted to her children, and the representative of the warmth and security of the *furusato*.

Historian Narita Ryūichi (1998), who has written much on the *furusato* in modern Japan, has also recognized this gender bias.<sup>3</sup> He mentions that men write the majority of literature on the *furusato*, and that a man’s image of the *furusato* is significantly more aestheticized and sentimentalized than a woman’s. Narita cites the poet Ishikawa Takuboku as an example, stating that whereas Takuboku himself was famous for writing an abundance of poems on his hometown in Iwate prefecture, Takuboku’s wife Setsuko left no recorded poems on her *furusato*, preferring to disclose her feelings to her closest friends (p. 248-53). While Narita’s assessment is accurate, the central question remains unanswered: why are women reluctant to write about the *furusato*, and why do they not aestheticize it to the same degree as men?

In order to understand this gender difference regarding the *furusato*—in which the *furusato* is connected to some maternal, feminine, nurturing quality, and yet has little female subjectivity—it is important to consider

the social structure of the home (*ie*) itself. Although *furusato* and the home are not one and the same, it is arguable that the home is an integral part of the overall *furusato* “package,” especially in the Meiji and Taisho periods, in which the home and family structure affected the lives and experiences of many, and was one of the reasons behind the increased migration to the city.<sup>4</sup> Therefore, it is through analyzing the difference in how men and women relate to the home and function within the home that we may understand the difference in how the *furusato* is perceived.

Although the Meiji and Taisho periods were an era in which Western concepts and structures were being rapidly imported into Japan, the inside of the Japanese home still resembled the traditional *ie* (家 “house” or “family”) system: a feudalistic, patriarchal system in which the father assumed complete control of the family. The main role of a woman within this system was as the wife/mother — the lowest position in the household — and her primary duty was to give birth to an heir who would then inherit the house and its assets, and continue the family line. Yet, as Yamashita Etsuko (1991) has stated, in the pre-war modern period, the home was the “woman’s place, and the living incarnate of the woman become mother” (p. 14). Thus, in a strange contradiction, while the father served as the lawful and substantive head of the household, the mother became the symbolic representation of the home, and it was her memory — not the father’s — that stayed with her children, who later came to remember and yearn for her.

For women, however, the home promised little beauty or sweetness. While the wife’s low position within the household remained largely the same between the pre-modern and modern periods, the structure of the family underwent some change. In the pre-modern family, extended family members lived together or nearby, meaning several hands could assist with childrearing or household chores. Japan’s modernization included the importing of the Western-style nuclear family, meaning the responsibility



of running of the household was left entirely to the wife and mother-in-law, if she lived with the family. The contraction of the family unit ended up creating new frictions and pressures, most especially for women. Consequently, Japan's pre-war transitional period, still clinging to feudal ideals and ethics in the space of the home while simultaneously aspiring to Western ideals, left women as victims of a new modernity.

The objective of this paper is to explore the roles of men and women within the home — especially women in the role of mother — in Meiji and Taisho era Japan in an attempt to grasp the gender difference in how the *furusato* is imagined and remembered. To achieve this, the paper will examine three literary texts from the Meiji and Taisho periods: Shimizu Shikin's "The Broken Ring [こわれ指環 *Koware yubiwa*]" (1891), Mori Ōgai's "Half-Day [半日 *Hannichi*]" (1909), and Murō Saisei's "My Childhood Years [幼年時代 *Yōnen jidai*]" (1919). Literature is chosen as the medium of analysis because the *furusato*, the home, and the mother are all essentially emotional topics, ones that concern our deepest, most private memories, and literature is one of the mediums best suited for private emotional expression. Furthermore, literature allows for a multi-layered analysis, which is suitable for this paper, as the analysis is not strictly textual; by using resources from other fields, including ethnology and anthropology, the author aims at a cultural analysis that uses literature as its medium.

The selection of these stories was primarily based on the extent to which each story features various aspects of the relationship between the mother and the home, and also because of the variety in the authors' backgrounds (one daughter, one firstborn son, and one adopted son). Due to the limited selection of stories, however, an overarching analysis of modern Japanese literature is beyond the scope of this paper, and so the experiences of social groups or peoples not represented in these texts will not be treated here. This research does not attempt to represent all experiences with the *furusato* in this period; it is limited to the elements within the selected

stories, and thus tries to make a modest contribution to the field with such. In examining how male and female roles differ within the home, the paper will also explore related issues, such as marriage laws, the *ie* system, and affiliation to the home, in order to explain the scarcity of female subjectivity in representations and recollections of the *furusato*.

## 2 Literary Analysis

### 2.1 Shimizu Shikin's "The Broken Ring"

Shimizu Shikin's (1868-1933) debut novella, "The Broken Ring" [こわれ指環 *Koware yubiwa*] (1891), is modeled on Shikin's own experience with — and escape from — a bad first marriage. The story told from the perspective of a young woman who is forced into an arranged marriage by her father, and who suffers a strained and loveless married life as a result. Yet, instead of resigning herself to the marriage or committing suicide as a method of escape — as was not uncommon for the time — the narrator divorces her husband and vows to use the experience as motivation to work towards improving women's rights.

When "The Broken Ring" was published, prostitution was a profitable, government-sanctioned business, and having multiple wives or mistresses inside or outside of the home was a fairly common practice (Watanabe, 1980, p. 76). Furthermore, feudal ethics — one of which stated that a wife should be completely obedient to her husband — were still considered to be the foundation of family life. In this way, Shikin's story, which criticizes bigamy, feudal ethics, and traditional marriage laws in Japan, was unprecedented for its time. As the narrator of "The Broken Ring" states, marriage was like the "lottery," and "whether one was lucky or unlucky was not something one had no control over — one simply had to leave it up to fate" (Shimizu, 1983, p. 16). Moreover, in the Meiji period, divorce — no matter how awful the marriage — was considered to be "unimaginably shameful" (Watanabe, 1980, p. 78). For women desperate enough to use

any method to escape an unhappy marriage, death was the only option close at hand. Seen in this light, the narrator's decision to divorce was a risky, even revolutionary, one.

Despite the narrator's initial wish to become a teacher and remain unmarried, her father arranges a marriage for her upon her turning eighteen, insisting that it is a better course for her. Once the narrator enters her husband's household, however, she immediately experiences friction in adjusting to his home, wondering in despair, "Am I to spend the rest of my life in this house?" (Shimizu, 1983, p. 19). On reluctant outings with her husband, the narrator longs instead for the times when she still lived with her parents, comparing those fond memories with her present unhappiness: "Ah, if only I were here with my mother and sister — what fun that would be!" (p. 19). Time does not erase the narrator's feelings of uneasiness and alienation, and her frequent trips home to visit her mother are her only escape from the increasingly oppressive atmosphere of her husband's home.

The mother in "The Broken Ring" is portrayed as an ideal mother and wife of the Meiji period: timid, submissive, quiet, self-sacrificing, and deferential to her husband and children. The narrator describes her as someone who lives by the tenets of Kaibara Ekken's *Greater Learning for Women*, "applying them perfectly to herself and her way of life" (Shimizu, 1983, p. 16).<sup>5</sup> The narrator sees the inequality in her parents' relationship, and views it with a critical eye, observing that her mother "would only talk to [her] father if it was at a distance, bowing, with both of her hands on the floor" (p. 16). Growing up watching her mother treat her father "as if he were some kind of special guest" in their own house, the narrator comes to think of the fate of a woman "as something pitiful and empty," wishing that "somehow [she] could live [her] entire life without having to marry, and to live comfortably and carefree" (p. 16).

However, the narrator has no concrete ideas on how to escape the

typical life of a married woman, or any knowledge about alternative paths, as she explains: “around the time I married, the seeds of women’s education were finally just starting to be sowed, therefore I had not even half of the way of thinking that I possess today [...] I had never dreamed of anything like the marriages between Westerners, and knew nothing about marriage laws. I took the old Japanese customs as a matter of course” (Shimizu, 1983, p. 15). The narrator continues to describe the state of women’s education in the early Meiji period as follows:

The girl’s school where I received my education was taught in a completely ethics-based Chinese learning style, and even the books they made us read, like Liu Xiang’s *Biographies of Exemplary Women*, trained me to think solely in that way. For example, if you were engaged from the time you were a baby to marry a man whom you had never even met before, if he died, you would have to cut off your nose and ears to show that you would never cheat on him. Or, if a mother-in-law was cruel and tried to strangle her daughter-in-law, it was considered unethical for a married woman to leave of her own accord, as it was regarded the highest of virtues for a woman not to leave her husband’s house. (Shimizu, 1983, p. 15-16)

Western ideals such as romantic love and chivalry were still fairy tales in Meiji Japan; within the household, the husband had absolute power and the wife was merely a supplementary, subservient figure. Yet, while the narrator’s education was founded in a Confucian, ethics-based style of learning, the age she grew up in was characterized by the rapid importing of Western ideals and structures. This friction between old and new ways of thinking erupts within the narrator, who follows the well-travelled path of generations past, only to discover the strain it places on her, mentally and physically.

Not long into the narrator's marriage, a maid reveals to the narrator that her husband has another wife, whom he goes to visit in secret for days at a time. This revelation creates an additional strain on the marriage, which in turn takes a toll on the narrator's health. During a visit with her mother, the mother immediately notices the narrator's pale, gaunt appearance, and realizes that she and her husband have unwittingly placed their daughter in an unhappy situation. The mother's already fragile health is worsened by this knowledge, eventually leading her to "disappear along with the morning dew on the autumn of [her] nineteenth year" (Shimizu, 1983, p. 21). Once the narrator realizes that her unhappy marriage may have contributed to the deterioration of her mother's health, she becomes "indignant at the plight of women," and chooses to divorce after unsuccessful attempts to improve her own crumbling, stifling marriage (p. 21). Once her divorce is finalized, the narrator vows to devote the rest of her life to working for women's rights, so that her mother's death would not be in vain, and to neutralize the pain and suffering she experienced in her own marriage.

Underlying the narrator's discomfort in trying to adjust to her husband's home is the issue of a woman's "affiliation" (帰属 *kizoku*) to a family. Upon marriage, a woman lost her place within her parent's home and became a member of her husband's family. As sociologist Inoue Haruyo (2006) writes, "pre-war marriages, as regulated by Meiji civil law, took the form of 'the wife entering the husband's home.' At the time of marriage, the wife had to discard the environment and way of thinking of the home she had grown up in, including her preferences or the way she seasoned food, and became a member of her husband's house. Furthermore, she became a 'powerless person' with no legal rights; not only did she not have the same rights as a man, but she did not even have parental rights to the children she bore" (p. 40). For women, traditional marriage practices meant relinquishing their entire identity and upbringing.

While a wife was permitted to return to her parents' home on occasion— as the narrator of “The Broken Ring” does — these visits were neither long nor leisurely. The length was typically determined by how much the wife's presence was needed at her husband's house; for example, returning home during the harvesting season would be difficult for a farmer's wife (Hasegawa, 1988, p. 80). Other factors, such as distance and the wife's relationship with her mother-in-law, influenced the frequency and duration of these trips home (Yasui, 2000, p. 7). Consequently, a married woman's affiliation to a home was unstable, as she legally “belonged” to her husband's family, but was able—and obligated—to make infrequent trips to her parents' house, in which she was no longer legally a family member.

“The Broken Ring” presents two women whose lifestyles are determined by—and suffer as a result of—the home. The narrator's mother, who acts the part of the ideal Meiji wife, leads a “pitiful and empty life” in constant subservience to her husband, and dies partly from the guilt of having placed her daughter in an even worse situation than herself. The mother's passing alerts the narrator to the necessity for initiating change, her death symbolizing the impending destruction of feudal morality and the traditional family and marriage systems. The narrator, while able to escape her marriage, is still scarred by its mark on her life, represented by the broken ring she continues to wear. In contrast to her mother, she represents the transitional period in women's rights: she must bear the burden of former generations, while attempting to improve the situation for current and future generations of women. Within Shikin's story, we see two female characters scarred by the violent changes occurring in the family and home during the Meiji period, but also attempts towards forging new paths for women.

## 2.2 Ōgai Mori's “Half-Day”

“Half-Day [半日 *Hannichi*]” (1909) is one of Mori Ōgai's (1862-1922) more

unusual works. The piece is written in a casual, spoken vernacular — atypical for Ōgai, who preferred a rigid, formalistic style — and is also a rare autobiographical piece that exposes the relationships between the members of the Mori household: primarily, the tempestuous relationship between Ōgai, his wife, and his mother, depicted within the story as the “professor (博士 *hakase*),” “wife (奥さん *oku-san*),” and “mother (母君 *hahagimi*),” respectively.

The story takes place during the span of half a day, from daybreak until noon. The narrative takes place within the professor’s home, and revolves around a conversation between the professor and his wife about the wife’s intense dislike of her mother-in-law, who lives with the couple and their small daughter. Needless to say, stories depicting conflict between the wife and the mother-in-law are common fare in Japan. However, stories of this type usually depict the mother-in-law as a cruel bully and the wife as a hapless victim. “Half-Day” instead presents an unusual twist on this theme: the wife is illustrated as a truly monstrous being who threatens the harmony of the professor’s household with her irrational, hysterical rages towards the mother-in-law.

The wife makes no attempt to conceal her fears or her deep dislike of her mother-in-law. She complains incessantly about her mother-in-law’s voice and the fact that she has complete control over the household budget and not the wife, and refuses to be in the same room as she, referring to her as “that person” (あの人 *ano hito*). When the professor entreats his wife to call her “mother,” the wife replies, “I came to this house to be your wife, not to be that person’s child” (Mori, 1987, p. 463). As previously discussed, when a woman married into her husband’s house, her affiliation shifted to the husband’s family, and she became a member of that house. Therefore, the wife’s outright rejection of familial ties to the professor’s mother showed a flagrant disregard for feudal ethics and the traditional family system. For his part, the professor is utterly bewildered by his wife’s rejection of his

mother, and considers her seemingly irrational behavior in the following way:

In a country where such concrete ideas as filial piety exist, how could such a woman, who says awful things about her mother-in-law to her own husband, have been born? Even in Western thought, the mother is something sacred, so there is not a single woman who thinks it is acceptable to insult her mother-in-law in front of her husband. Of course, in the history of both the East and West, whether you look at novels or plays, there is no woman to be found like my wife. I suppose this, too, is one of the peculiar products of this time period, when everything is being reevaluated. (Mori, 1987, p. 481-482)

Ōgai — and presumably, the professor — “completely obeyed traditional feudal ethics” throughout his entire life, and showed his mother unending adoration and respect (Tanaka, 2005, p. 212). Moreover, as the eldest son and successor of the Mori family, the preservation of the household was his responsibility. Ōgai took the helm of the Mori family at the age of eighteen, upon his father’s death. Both his father and grandfather had been adopted into the Mori family, which likely added to Ōgai’s sense of obligation to maintain and protect the house. As women were unable to inherit, the adoption of sons was an integral part of the traditional family system, for it was only through sons that the house and family name could be preserved. For a man like Ōgai, who devotedly upheld such traditional values, the only way to understand his wife’s words and actions was to attribute them to the transitional period that they were living in, a time in which “everything [was] being reevaluated.”

Ōgai based the dysfunctional, discordant relationship between the wife and mother in “Half-Day” on the real-life conflict between his wife, Shige,



and his mother, Mineko. As Matsubara Jun'ichi (1957) indicates, Shige was the eldest daughter of Araki Hiroomi, an imperially appointed judge in the Supreme Court of Judicature, and grew up in a wealthy, cheerful, liberal, and loving household (p. 34). In comparison, the Mori household was frugal and severe. Having to adjust to this drastic change in atmosphere and economic circumstance undeniably played a role in Shige's mental deterioration. Daughter Ōgai Mari corroborates this in her memoirs by saying that the type of behavior described in "Half-Day" was seen only at the beginning of their marriage (as cited in Tanaka, 2005, p. 231). On the other hand, Ōgai's thrifty mother, Mineko, probably found Shige to be spoiled and her spending habits to be extravagant and reckless, meaning there were points of contention on both sides (p. 35). Yet, in "Half-Day," written from the professor's (Ōgai's) perspective, the blame is placed entirely on the wife's side.

Literary critic Tanaka Miyoko (2005) keenly observes that, through his depiction of their household conflict, Ōgai ends up revealing the kind of relationship he shared with his mother: that is, a relationship in which his mother had a hand in all of his daily affairs and fretted over him "as if she were his lover" (p. 233). In actuality, Ōgai's mother was well aware of the extent of power she had over her son, even claiming in a personal letter that Ōgai "would never question [her] decisions" (Matsubara, 1957, p. 35). In such a household, where the mother controls the son and assumes all of the wife's duties, the wife herself would have no place at all. Matsubara Jun'ichi (1957) claims that at the heart of the friction between wife and mother was really a struggle for Ōgai's love, but it seems too reductive to attribute the conflict to a mere grappling for the professor's attentions (p. 35). Certainly, jealousy was felt on the part of Ōgai's wife, even if her depiction in "Half-Day" was an exaggerated representation of the actual situation. However, as Tanaka (2005) reminds us, in order to evoke such an abnormal amount of jealousy from the wife, the relationship between mother and

son must have been exceedingly intimate (p. 233).

While Ōgai and his mother may have been exceptionally close, in general the traditional Japanese family prioritizes the mother-child relationship over that of the wife and husband. As Yamashita (1991) states, in this way the wife in "Half-Day" "has a more Westernized consciousness" in terms of her belief that the married couple's relationship should be the foundation of a family, and not the relationship between mother and child (p. 63). Thus, at the core of the fight between wife and mother-in-law is not merely a battle for the husband's affection, but rather a generational conflict between new and old beliefs about how the family should be structured. Yamashita calls "Half-Day" an "extremely modern" story that depicts "the transition period in which the destruction of the *ie* system was unavoidable" (p. 65). Unlike Ōgai himself, who regarded his wife's actions with a mixture of puzzlement and dread, Yamashita sees the wife's demands for an increased emphasis on the wife-husband relation as predicting "the coming of a bright, new age" for women (p. 65).

In the meantime, however, the reality for women living in this transition period was dark. The sudden change in environment — to one that was colder and sparser, and in which the mother-son relationship formed an impenetrable wall around the home — undoubtedly contributed to the onset of the wife's hysteria. However, it can also be argued that the mother in "Half-Day" was also a victim, though not in the way that Ōgai imagined her to be. As Ōgai was the eldest son and the head of the Mori household, it was customary for his mother to live with him, as the mother in "Half-Day" does with the professor. This is because, in essence, a woman had no house to call her own; her affiliation to a home was dependent on the men in her life. A Japanese proverb encapsulates this unstable relationship between women and the home: "*onna sangai ni ie nashi* (女三界に家なし)," or "women have no home in three worlds." The "three worlds" referred to here are the past, present, and future; in other words, women have no

place to call home throughout all the stages of their lives. As a daughter, a woman's home is with her father; as a wife, her home is with her husband; as a widow, her home is with her eldest son. Even if the mother in "Half-Day" wished to leave the married couple alone, she herself was bound to her son's home, as well.

Although "Half-Day" seems to present an almost comically exaggerated take on a wife/mother-in-law conflict, the story also reveals a household being upheaved by the violent changes of Japan's Meiji period, when traditional values and the family structure were being questioned. Through the depiction of this conflict and the wife's hysteria, the story also exposes the taxing effects the *ie* system had on women's mental states. The shift towards the nuclear family led to more interaction — and thus more conflict — between different generations, especially in the case of the wife and mother-in-law, who were not related by blood, and between whom power struggles would occasionally erupt. Similar to as in "The Broken Ring," "Half-Day" also shows a generational difference in expectations towards marriage. The mothers in both stories epitomize the Meiji ideal wife — devoted, self-sacrificing, thrifty, subservient — and both have resigned themselves to their situations. The narrator in "The Broken Ring" and the wife in "Half-Day," however, desired more from their marriages, were unhappy with the traditional family model, and made attempts to improve what impeded their personal happiness or fulfillment. As a result of their efforts, both stories show glances of the Meiji home teetering on destruction.

### **2.3 Murō Saisei's "My Childhood Years"**

"My Childhood Years [幼年時代 *Yōnen jidai*]" (1919) is renowned poet Murō Saisei's (1889-1962) first attempt at prose. The story is told from the perspective of a small boy, aged seven, who was adopted by another family at birth, but who maintains a close relationship with his biological

parents, particularly with his mother. The sudden death of the boy's biological father leads to the discovery that the mother was really his father's maid, resulting in the mother's expulsion from their home without even being able to say goodbye to her son. Out of desperation and sadness, the boy picks fights, wanders the streets, and prays daily to a Buddhist statue in the hope of meeting his mother again. The boy's fervent prayers garner the sympathy of an old monk residing in a nearby temple, to which the boy eventually goes to live. The new surroundings cannot replace the boy's longing for his mother, however, and the story ends in the dark, lonely winter of his thirteenth year.

Although there are two mothers depicted within "My Childhood Years"—the narrator's biological mother and his adopted mother—the narrator's emotions clearly lie with the former. He visits his biological mother upwards of twice a day, to her worry and to the adopted mother's chagrin. The home of his biological parents is depicted as an idyllic paradise, where the narrator is treated as a guest, presented with tea and sweets whenever he comes to visit, and where he is allowed to sleep on his mother's lap on long, quiet afternoons. While the narrator calls his biological mother "strict," he adds that she is also "easy to talk to," and that every time he looks at her, his heart wells up with the feeling, "this is my true mother—the mother who gave birth to me" (Murō, 2003, p. 8).

Such an aestheticized, sentimental depiction of the biological mother and the parents' home might lead the reader to expect the adopted mother and home to be cold and foreboding in comparison, but this is not the case. The adopted mother is actually more lenient than the biological mother, and sincerely cares about the narrator's well being. Yet, the narrator cannot become close to her, feeling as if "a wall were stuck in-between my mother's and my words, and in every one of our daily actions" (Murō, 2003, p. 14). As Imano Tetsu (2001) indicates, the rejection of the adopted mother's love on the part of the narrator is not the fault of the adopted

mother; rather, “the intense love and admiration for his biological mother, which dominated the narrator’s psyche, did not allow him to become close to his adopted mother” (p. 31). Saisei’s decision to portray the adopted mother as kind rather than cruel is an unusual one, for it gives the narrator no other reason to reject her love other than the fact that they are not related by blood. In this way, Saisei’s narrative suggests that nature or biology conquers all; even though the adopted mother loves the narrator and her home is not unwelcoming, the narrator still seeks his biological mother and believes that true love and understanding can only come from her.

Upon the death of the father in “My Childhood Years,” the narrator’s biological mother is driven out of the house because of her lowly position as a maid, and not as a lawful wife. The narrator had no knowledge of this at the time of his father’s death, however, and so he was merely confused as to “where [his] elegant, gentle mother had gone off to” (Murō, 2003, p. 35). The narrator’s thoughts continually turn to her, weeping at the thought “of how miserable [his] pitiful mother must be, with no place in the entire world to call home” (p. 49). Out of grief, the narrator completely rejects his adopted mother, declaring, “there is no reason that anyone should have two mothers” (p. 49). “My Childhood Years” seems to teach that one’s biological mother is an absolute entity, for which nothing can be substituted. When the narrator decides, “there is no reason that anyone should have two mothers,” he implies not only that the biological mother is irreplaceable, but also that she ought not to be replaced.

Ishiko Junzō (2006), in his research on the popularity of the mother motif in modern Japanese culture, has stated that in Japan, it is important for the mother figure to be the biological mother. In the case of stepmothers, adopted mothers, and mothers-in-law, the physical bond that unites children with their biological mothers is absent: that is, the bond created from the child having once been part of the mother’s flesh. Without this

physical bond, according to Ishiko, one cannot experience a “transcendental connection to something eternal in which complete identification is possible, like with the earth or the ocean” (p. 132). In other words, one cannot “connect to nature” (p. 132). It was this connection to “nature” that Saisei seemed to prize so highly, and that flows throughout the narrator’s longing for his mother in “My Childhood Years.”

The fate of the biological mother in “My Childhood Years” is pitifully tragic, more so than any of the other mothers examined in these three stories. As a maid, her social bearing was too low to warrant a marriage to her employer, and her status as an effectually “powerless person” meant that she had no rights to keep her own son. Moreover, she had to keep her only son away from her, for fear of what his adopted mother and society might think, and was ultimately driven out of her only home with only the clothes on her back. Saigō Takehiko (1971) comments on her tragic depiction in the story, saying, “in the world of Meiji, this was a woman’s greatest unhappiness” (p. 100). In a way, the image of the adopted mother is also a tragic one. She sees that her beloved son wants to be with his biological parents, but because of the eyes of society and how the *ie* system works, she must scold him and try to keep him in their home: “by coming here, you became a part of this house. If you keep going back to your parent’s home, people will think something is strange” (Murō, 2003, p. 13). As discussed in the previous section, when a son was adopted into a family, he became an official member of that house and lost any legal ties to his biological parents, similar to how married women became affiliated to the husband’s family—all for the sake of preserving the “home.” Unlike the previous two stories, the Meiji home in “My Childhood Years” does not show visible signs of destruction. Similarly, whereas signs of a new female image and new family structure emerge in stories like “The Broken Ring” and “Half-Day,” “My Childhood Years” paints its female characters in a ceaselessly pitiful and heartbreaking light.

Just as the narrator of “My Childhood Years,” Saisei himself was the son of a maid, who also had to relinquish her son at birth. In his novel, *Rōshishi* (弄獅子), Saisei admits the fact that he “did not really know her personality, appearance, characteristics, or even what happened to her when she died, intensified [his] love for [his] mother” (1965, p. 351). Furthermore, in Murō’s *Author’s Notes* (作家の手記 *Sakka no shuki*), he mentions that he felt no closeness or love for his father, but considered him as an “unnecessary” presence (1946, p. 10). He explains that he had no desire to learn or think deeply about his father; instead, he felt “disgusted” at his old age, and even considered him partially responsible for contributing to his mother’s unhappiness (p. 10). From Saisei’s point of view, the father was an unnecessary — even unwelcome — interference to the mother-child relationship. Yamashita Etsuko (2005) indicates that the feelings Saisei bore towards his father were neither atypical nor even unusual: “in a maternal, oppressive system that places the mother-son relationship at its core, the father’s existence is a mere formality, a mere decoration for the tokonoma” (p. 60). As in “Half-Day,” here we also see a mother-son relationship with an alarming degree of intimacy, a hollow (or absent) father figure, and a desire on the part of the son to depict the mother as a tragic victim.

Other researchers have noted the tendency to depict the mother as a beautiful, tragic figure in Japanese culture and literature. Saigō Takehiko (1971) reasons this unilaterally tragic depiction of mothers within modern Japanese literature as follows: “Perhaps it is because although Japan began its path towards modernity as a result of the Meiji Restoration, having left the feudal family system in place, the mothers of Japan had no other choice but to live in that way as they were at the bottom of that heavy, oppressive society and home” (p. 143). At the root of this depiction of the mother as a fundamentally tragic entity is a distinctly male aesthetic that longs for a sad, beautiful mother figure that stimulates Oedipal fantasies, as they imagine themselves to be the only ones who can “save” the tragic

mother. This co-dependence between mother and child was no doubt caused in part by the traditional family structure, as Yamamura Toshiaki (1977) explains:

Traditionally, the wife was viewed as a tool to give birth to children, and it was through children that the wife was able to secure her position. The mother's place in society was generally low, and she had no other options but to depend on her children to guarantee her life in old age. The wife was forced into submission by the husband/mother-in-law, and her children were her only outlets for her feelings. Free expression of love between a husband and wife was not permitted, and so if the wife were frustrated by the marriage, she would try to ease that dissatisfaction through her children. In this way, for the mother, the child became the only reason for her to live, and attachment to the child emerged. The child would then feel indignant towards the father, who tried to exert control through his power, and sympathized with the self-sacrificing, devoted mother's tragic position, and afterwards, would come to yearn for her. (p. 142)

Thus, the extreme attachment between mother and child was largely due to the wife's low position within the household and it being one of the few relationships in which an uninhibited exchange of love was permitted. Ishiko Junzō (2006) echoes this by saying, "the more the mother suffers and is unhappy, the more she is aestheticized and sanctified by the child. The mother herself also suffers in order to be more easily aestheticized and sanctified by her offspring, and clings to her children" (p. 25). Still, there remains a noticeable difference in how sons and daughters feel the tragic mother. All three children in the stories presented here are portrayed as having a close relationship with their mothers (the narrator in "The Broken



Ring," the professor in "Half-Day," and the narrator in "My Childhood Years"), but only the female narrator in "The Broken Ring" views her mother's tragic situation as something weak, pitiful, and empty, and fervently hopes for a different life for herself. In contrast, the two sons reveal a more aestheticized, sentimentalized vision of the mother. For daughters, who are able to project themselves onto their mothers, the difficult life of a married woman was a fate they hoped to avoid, but because they knew they themselves would be subject to it, it is unsurprising that they would not idealize a mother's tragedy: it could very well be their future, too. As sons lacked the same kind of identification with the mother, it was easier for them to romanticize the beautiful, tragic, loving mother figure.

Though typically viewed as a nostalgic, though highly idealized, piece on a boy's childhood, "My Childhood Years" also presents a brutal depiction of the *ie* system. Each character in the piece is somehow constrained or tormented by the home: the narrator cannot stay with his biological parents due to his adoption, the narrator's biological mother cannot marry her employer, keep her child, or stay in her lover's home, and the adopted mother must keep the narrator, whom she genuinely cares for, away from his biological parents' house against his will. "My Childhood Years" presents the reader with characters who are oppressed by the home — who must limit themselves and their desires for the sake of the home and how society expects it to function.

### 3 Concluding Remarks

As seen through these three literary texts, the frequent overlapping of the images of mother and *furusato* and the gender bias in how the *furusato* is imagined are rooted in the gender difference regarding roles within the home. Unlike men, who generally had a more clearly defined relationship with the home — they were to be successors or non-successors, and that determined their ability to stay within the natal home — women

maintained a more complicated relationship with the home and family. While a woman was bound to the home, that home was never fixed, nor was it ever truly her own. Upon marriage to another family, a woman had to relinquish her former identity and preferences in order to assimilate into the husband's family. As such, a married woman could not as easily idealize or sentimentalize the home —and by extension, the *furusato* —as a man could; for women, the home merely signified work. In the family structure of the Meiji and Taisho periods, the house was not only the wife/mother's world, but also her job, as it was her duty to maintain the household. If maintaining the home is one's job —one's everyday reality —one is unlikely to yearn after it or idealize it.

Furthermore, it was difficult for women to aestheticize a place that routinely oppressed them and chained them to a system from which they received few benefits. In short, the home was not a beautiful, sentimental place for women. As Inoue Haruyo (2006) states, “the wife birthed the successor for the continuance of the family, obeyed her mother-in-law, protected the grave and Buddhist altar of her husband's home, and entered that grave herself” (p. 40). It was a place where one had to abandon one's identity and adjust to a completely new way of life while occupying the lowest position within the family —moreover, after one had already reached adulthood and established one's own lifestyle and preferences. The word *furusato* implies a place is filled with fond memories and sentimental feelings, that it is an emotional escape from the harrowing outside world. Because of their relationship to and role within the home, however, many women in the Meiji and Taisho periods could not aestheticize the *furusato* in the same way that men could. Thus, the images of the mother and the *furusato* may intersect, but in order to reach that symbolic unification, the women in this period were made to pay a heavy price.

## Footnotes

- <sup>1</sup> An in-depth analysis of the term *urusato* and issues pertaining to it, such as urban/rural dynamics or nationalism, exceeds the scope of this paper. For a more detailed investigation of *urusato* in Japanese culture, see the author's other works: "Home of the Heart: the Modern Origins of *urusato*" (ICU Comparative Culture, no. 45, 2013) and "Kinsei ni okeru '*urusato*'-kō" (Asian Cultural Studies, no. 41, 2015).
- <sup>2</sup> Writer Hayashi Fumiko's novel *Hōrōki* (1930) is often mentioned in research on the *urusato* because of the female narrator's provocative statement, "I do not have a *urusato* (*watashi wa urusato o motanai*).” Though the narrator's upbringing is a unique one and perhaps not comparable to the average person's, it supports the claim that women do not view the *urusato* in the same overwhelmingly positive and idealized way as men do.
- <sup>3</sup> Narita's research on *urusato* can be found in the following books: "*Kokyō*" to *iu monogatari: toshi kūkan no rekishigaku* (1998), *Kokyō no sōshitsu to saisei* (2000), *Rekishigaku no narrative: minshūshi kenkyū to sono shūhen* (2012).
- <sup>4</sup> There are many differences between the two words, not all of which can be treated here, but essentially, *urusato* is the more expansive of the two, occasionally comprising the village, city, or landscape surrounding the natal place. Moreover, it is used in different contexts (as mentioned, *urusato* is the "home left behind," and not typically used to describe the place in which a person currently lives), and has very different cultural and emotional implications.
- <sup>5</sup> In Japanese, *Onna Daigaku* (女大学) — a text used for teaching women proper Confucian ethics, written by Confucian scholar Kaibara Ekken.

## References

- Hasegawa, Akihiko. (1988). Yome no sato-gaeri kankō. In T. Ōshima (Ed.), *Yome to satokata*. Tokyo: Iwasaki Bijutsusha.
- Imano, Tetsu. (2001). "Yōnen jidai" ni okeru futari no haha. *Murō Saisei Kenkyū*, 22, 27-39.
- Inoue, Haruyo. (2006). Haka ni okeru datsu "ie" genshō: Jendā no shiten kara. *Sōgō Joseishi Kenkyū*, 23, 40-42.
- Ishiko, Junzō. (2006). *Komoriuta wa naze kanashii ka: Kindai Nihon no hahazō*. Tokyo: Kashiwa Shobō.
- Matsubara, Jun'ichi. (1957). Ōgai to josei: "Hannichi" no mondai. *Bungaku Kenkyū*, 14, 33-38.
- Matsunaga, Goichi. (1975). *Furusato-kō*. Tokyo: Kōdansha.
- Mori, Ōgai. (1987). Hannichi. In M. Kinoshita (Ed.), *Ōgai zenshū* 4. Tokyo: Iwanami Shoten.
- Murō, Saisei. (2003). *Aru shōjo no shi made*. Tokyo: Iwanami Shoten.
- Murō, Saisei. (1965). Rōshishi. In *Murō Saisei zenshū* 4. Tokyo: Shinchōsha.
- Murō, Saisei. (1946). *Sakka no shuki*. Tanbaichi: Yōtokusha.
- Narita, Ryūichi. (1998). "Kokyō" to iu monogatari: *Toshikūkan no rekishigaku*. Tokyo: Yoshikawa Kōbunkan.
- Robertson, Jennifer. (1988). Furusato Japan: The culture and politics of nostalgia. *Politics, Culture, and Society*, 1 (4), 494-518.
- Saigō, Takehiko. (1971). *Bungaku no naka no haha to ko*. Tokyo: Meiji Tosho.
- Shimizu, Shikin. (1983). Koware yubiwa. In Y. Kozai, *Shikin zenshū*. Tokyo: Sōdo Bunka.
- Tanaka, Miyoko. (2005). *Shōsetsu no akuma: Ōgai to Mari*. Tokyo: Shironsha.
- Watanabe, Sumiko. (1980). Shimizu Shikin "koware yubiwa." *Nihon Bungaku*, 29 (3), 74-80.
- Yagi, Tōru. (1996). Ie, josei, haka: Josei tachi ni totte no kokyō. *Nihon Minzokugaku*, 206, 36-55.
- Yamaguchi, Reiko. (1977). *Naite ai suru shimai ni tsugu: Kozai Shikin no shōgai*. Tokyo: Sōdo Bunka.
- Yamamura, Yoshiaki. (1977). "Nihon no hahaoya." *Gendai no Esupuri*, 115, 139-157.
- Yamashita, Etsuko. (1991). *Mazakon bungakuron: Jubaku to shite no "haha."* Tokyo:

Shinyōsha.

Yano, Christine R. (2002). *Tears of longing: Nostalgia and nation in Japanese popular song*. Cambridge: Harvard University Press.

Yasui, Manami. (2000). Josei ni totte no "furusato" to wa: Sato gaeri kankō o tegakari ni shite. *Tenri Daigaku Gakuhō*, 52 (1), 1-17.

**ジェンダーの視点からみる「母」と「ふるさと」**  
**―明治大正期の三つの文学作品における家の構造をめぐる**  
**リンジー・モリソン**

近代日本文化や文学において、「母」と「ふるさと」は同一のものと見なされることが多いものの、母の視点から叙述された「ふるさと文学」は極めて少ない。ほとんどの場合において、母は主体ではなく、他人（たいていそれは大人になった息子であるが）による想像、または記憶に宿る客体なのである。近代日本は急速な西洋化を迎えたにもかかわらず、家の中はいまだに近代以前の家制度そのものであった。その家制度というのは、封建的な家父長制であり、そこでは父は絶対的権力を握っていた。家制度では、母は家制度のなかでは位が最も低く、後継者を産む道具としてしか見られていなかった。しかし、大人になった子どもがふるさとを振り返ったとき、その記憶の中では、絶対的権力をもつ父の姿はなく、献身的で悲劇的な母親像だけしか残っていなかったのである。その過程により、母はふるさとの代表的なシンボルの一つとなったのである。なぜ母はふるさとを表象するようになったのか、そしてなぜ男性はふるさとを美化し、理想化してきたものの、女性はそうしなかったのだろうか。

この論文では、三人の近代作家による三冊の短編小説の分析を通して、以上の問いを検討する。短編小説は、清水紫琴の「こわれ指環」（明治24年）、森鷗外の「半日」（明治42年）、室生犀星の「幼年時代」（大正8年）である。母とふるさとの関係とふるさと意識におけるジェンダー格差を考察するために、結婚制度や、家制度における母の位置や、家への帰属といった関連問題にも焦点を合わせる。

**Keywords:**

母、ふるさと、家、近代日本、ジェンダー



## 「LGBTに関する職場環境アンケート 2014」概要

特定非営利活動法人虹色ダイバーシティと国際基督教大学ジェンダー研究センターは、株式会社ラッシュジャパンの助成を受け「LGBTに関する職場環境アンケート 2014」を実施した。本調査は、LGBT等の性的マイノリティが働きやすい職場づくりを推進すべく、日本のデータを積み上げる目的で行われた。本調査の背景として、日本では企業や行政などの職場においてカミングアウトするLGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）等の性的マイノリティ当事者が未だ少なく、職場でどのような困難があり、どのようなニーズを持っているのか把握が難しいことがある。今後、企業や行政でダイバーシティ施策全体を視野に入れつつ、LGBT等への施策を推進するためには、その効果を明示する必要があると考えた。

アンケートは2014年2月14日から3月31日にインターネット上のアンケートフォームに入力する方法で実施された。ソーシャル・ネットワーキング・サービスのTwitter、Facebook、mixiや性的マイノリティ当事者団体のメーリングリスト、チラシ、既存の虹色ダイバーシティのクライアントへの協力依頼などで周知を行い1,815人からの回答を得た（途中までの回答者を含む）。アンケートの対象者は日本の職場で働いた経験のある性的マイノリティ当事者および当事者以外である（非正規雇用も含む）。

質問項目は次の30問で、分野は次の通り。

年齢、性自認、出生時の性別、職場での性別、性的指向、就業状況、日系/外資系、都道府県、雇用形態、会社規模、労働時間、職場のダイバーシティ意識、転職回数、求職時の困難、勤続意欲、やりがい、人間関係、ストレス、差別的言動の有無と内容、アライの有無、LGBT施策の希望と実際、カミングアウトの状況、業界、業種、パートナー関係、年収、学歴、感想。

調査で使用した質問項目および調査結果は特定非営利活動法人虹色ダイバーシティのウェブサイトに掲載されている。

<http://www.nijiiriversity.jp/>



## **Summary of “Survey on LGBT Issues in the Work Environment 2014”**

Non-profit organization Nijjiro Diversity and ICU’s Center for Gender Studies conducted the “Survey on LGBT Issues in the Work Environment 2014” with support from Lush Japan Co., Ltd. The survey gathered data on Japan so as to further the creation of comfortable workspaces for sexual minorities, such as LGBT persons. The survey was conducted because in Japan, few LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender) persons have come out at their work, whether in the private or public sector. Consequently, it has been difficult to understand precisely what kind of problems they face in the workplace, and what kind of needs they may have. In order to advance policies that benefit sexual minorities hereafter, we believe it is necessary to show their effects while keeping an overall eye on diversity measures in corporations and in the government.

The survey was conducted from February 14th to March 31st, 2014 via an online questionnaire form. We spread word about the survey through social networking services such as Twitter, Facebook, and Mixi, as well as the mailing lists of sexual minority organizations, fliers, and through the clients of Nijjiro Diversity. In total, we received responses from 1,815 people (including those who did not complete the survey). Both sexual minorities and otherwise were eligible to take the survey, as long as they had work experience in Japan (including temporary employment).

The survey consisted of 30 questions on the following areas: Age; Gender identity; Gender at time of birth; Gender at workplace; Sexual orientation; Employment status; Japanese/foreign company; Prefecture of residence; Employment type; Company size; Work hours; Diversity awareness at workplace; Number of times that you have changed jobs; Difficulties in finding work; Desire to continue working; Job satisfaction; Relationships with coworkers; Stress; Existence/content of discriminatory remarks or actions (if any); Presence of allies (if any); Desired LGBT policies

vs. actual situation; Whether you have come out or not (including at work); Industry; Type of work; Relationship with partner; Salary; Education; Comments.

The questionnaire and survey results are posted on NPO Nijjiro Diversity's website at the following address:  
<http://www.nijjirodiversity.jp/>



## 職場における性的マイノリティの困難 ——収入および勤続意欲の多変量解析

平森大規

### 1 序論

近年、日本においてLGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー<sup>1</sup>）をターゲットとする市場調査が少数ではあるものの行われるようになってきた。2006年にポータルサイト運営会社パジェンタが行った調査では、レズビアン・ゲイによる美容や交際費、旅行などの年間消費支出額が平均で異性愛者に比べて1.2倍であるという結果が出ている（日経ビジネス, 2007）。<sup>2</sup> また、2012年に電通総研が行った調査によると、LGBTによる家具・インテリア、アルコール飲料（自宅での消費分）などの1ヶ月あたり平均消費額がLGBTでない人による消費額に比べて多い（電通総研, 2012）。同様の傾向はアメリカの市場調査においても見られ、生命保険会社のプルデンシャル・ファイナンシャルはLGBTの世帯収入（中央値）がアメリカ全体での平均に比べて高いという調査結果を報告している（Prudential Financial, 2012）。

一方で、これらの調査はいずれも有意抽出法を利用したインターネット調査であり、日本においてもアメリカにおいてもインターネット調査は確率抽出法を用いた従来型の調査と比べてバイアスを持つことが指摘されている（Couper, 2000; 本多, 2005）。実際、無作為抽出法による調査であるNational Survey of Families and Households（全米家族調査）によると、異性愛女性の貧困率が21.1%、異性愛男性の貧困率が15.3%であるのに対し、レズビアンの貧困率は22.7%、ゲイの貧困率は20.5%であり、レズビアン・ゲイの貧困が指摘されている（Badgett, Durso, & Schneebaum, 2013）。したがって、レズビアン・ゲイが異性愛者に比べて裕福であるというインターネット調査による調査結果をもとにした主張は必ずしも正確ではなく、むしろ性的マイノリティに対する経済的不平等が示唆されている。

経済的不利益と収入の低さに関連して、収入が低いことは今後も現在勤務している職場で働き続けたいという意欲（勤続意欲）に対して負の効果をもたらすという研究が数多く存在する（太田 & 大竹, 2003; 大竹 & 唐渡, 2003）。こ

これらの研究によると、賃金が高いことや賃金の上昇は労働意欲に対して正の影響をもたらす一方で、企業成長の低迷などで賃金が減少すると、労働意欲が阻害される。このことを踏まえると、収入が低いとされる性的マイノリティは勤続意欲が低い傾向にあると推論される。近年、LGBTと職場環境に対する関心が高まっており、2013年にはニュースサイト『シノドス』に「LGBTが生きやすい職場のために」というタイトルの記事が掲載された（明智, 遠藤, & 村木, 2013）。さらに、第139回労働政策審議会雇用均等法分科会において「性的マイノリティの方の対する言動や行動であっても、均等法11条やセクハラ指針に該当するものであれば、職場におけるセクシュアルハラスメントになる」と確認され（厚生労働省, 2013）、2014年には厚生労働省が異性間だけでなく同性間の言動も職場におけるセクシュアルハラスメントに該当するとした（厚生労働省, 2014a）。

本研究では性的マイノリティを、LGBTを含む非規範的な性のあり方を生きる人と定義した上で、職場における性的マイノリティがどのような困難をかかえているのか把握すべく、性的マイノリティであることが収入にもたらす効果および勤続意欲にもたらす効果を分析する。特に、性的マイノリティ・収入・勤続意欲の三者の関係のうち、比較的研究の少ない、性的マイノリティと収入および性的マイノリティと勤続意欲の関係について明らかにしていく。

## 2 研究の背景

本稿では、第一に性的マイノリティであることと収入の間にどのような関係があるのか先行研究をもとに仮説を提示する。レズビアン以外は、性的マイノリティであることは収入に対して負の効果をもたらすことが示される。第二に、収入の低さと勤続意欲の低さが連関しているという先行研究（太田 & 大竹, 2003; 大竹 & 唐渡, 2003）を踏まえた上で、レズビアンを除いて収入を下げる効果をもたらすと想定される性的マイノリティであることと勤続意欲の関係について仮説を提示する。仮説においては、性的マイノリティであることそのものではなく、性的マイノリティに対する差別的言動が勤続意欲に効果を与えているのではないかと示唆される。

## 2.1 性的マイノリティと収入

まず、性的マイノリティであることと収入の関係について注目し、考察する。ここでは、性的マイノリティを性的指向におけるマイノリティおよびトランスジェンダー・シスジェンダー（非トランスジェンダー）の別におけるマイノリティの2種類に分けた上で先行研究の考察を行う。

### 2.1.1 性的指向におけるマイノリティと収入

釜野（2012）によると、アメリカにおいて大半の研究は、ゲイであることは収入を減らす効果（ゲイペナルティ）をもたらすと示している。一方、レズビアンであることは収入を増やす効果（レズビアンプレミアム）をもたらすと報告する研究も多いが、調査・分析方法によって結果が変わりやすく、有意な連関がみられない研究もある（釜野, 2012）。

アメリカの **General Social Survey**（総合的社会調査）データを分析した **Badgett（1995）** は、ゲイ・バイセクシュアル男性が異性愛男性に比べて11%から27%のゲイペナルティを被っている一方で、レズビアン・バイセクシュアル女性については有意な差を見出すことができなかったと報告している。**Badgett（1995）**によると、このゲイペナルティは雇用者が同性愛に対する嫌悪を持っていることが影響している。加えて、同性愛者が自らの性的指向を隠すために他者との交流を避けるため、欠勤や転職、生産性の低下につながる（**Badgett, 1995**）。

このように、雇用者による直接的差別やそれを回避するための当事者の行動が収入に負の効果を与える一方で、レズビアン・バイセクシュアル女性については男性が多くを占める職業に就くことで収入を増加させ、レズビアン・バイセクシュアル女性に対する差別を覆い隠すような効果をもたらす可能性がある。レズビアンは、女性に比べて高い収入を持っていると考えられている男性と結婚する見込みが少ないことから、異性愛女性と比べて労働市場におけるスキルを身に付ける一方で、ゲイは、男性に比べて低い収入を持っていると考えられている女性と結婚する見込みが少ないことから、異性愛男性に比べて研修などへの投資が少ないのではないかという指摘もある（**Black, Makar, Sanders, & Taylor, 2003**）。日本においても、レズビアンによる「セクシュア

ル・マイノリティであるので、とにかく経済的に自立しなければと思い、大学や仕事を選んだ」(性意識調査グループ編, 1998: 29) というアンケート調査に対する回答がみられる。2013 年に行われた LGBT に関する職場環境アンケートの分析においても、労働力調査による女性一般の数値と比べてレズビアンの方の非正規雇用率が低いことが指摘されており、その理由として男性に依存しない経済的自立を志向していることが挙げられている(明智, 遠藤, & 村木, 2013)。

仮説 1-1: 他の条件を一定にしたとき、レズビアンは異性愛女性に比べて収入が高い傾向にある。(分析 I)

仮説 1-2: 他の条件を一定にしたとき、ゲイは異性愛男性に比べて収入が低い傾向にある。(分析 I)

バイセクシュアルであることと収入の関係については、Canadian Community Health Survey (カナダ地域健康調査) データを分析した Lafrance, Warman, & Woolley (2009) によると、婚姻状態に関わらずバイセクシュアル男性は結婚している異性愛男性に比べて収入が低い傾向にある。女性については配偶者のいるバイセクシュアル女性のみ結婚している異性愛女性に比べて収入が低い傾向にある。アメリカの California Health Interview Survey (カリフォルニア健康聞き取り調査) データを分析した Carpenter (2005) によると、バイセクシュアル男性は異性愛男性に比べて収入が低い傾向にあるが、統制変数によっては有意な差が見られない場合もあり、バイセクシュアル女性についても同様の傾向がうかがえる。これらの分析はバイセクシュアルであることと収入の関係を明らかにした貴重な研究であるが、なぜバイセクシュアルの方が異性愛者に比べて収入が低い傾向にあり、統制変数によって結果が変化するかという理論的な説明にはいたっていない。日本においては、女性の場合のみ、両性愛者の非正規雇用率が同性愛者の約 2 倍であることが指摘されている(明智, 遠藤, & 村木, 2013)。

仮説 1-3: 他の条件を一定にしたとき、バイセクシュアルの方が異性愛者に比べて収入が低い傾向にある。(分析 I)

特定の人を好きにならない無性愛を含む、両性愛・同性愛・異性愛のいずれとも異なるような、その他の性的指向を持つ人と収入の関係については、現状では先行研究がほぼ存在しておらず、本研究においても計量分析を行う際、サンプルサイズが小さいため統計的に有意な結果が得られないと想定されるため、特定の仮説は立てない。

### 2.1.2 トランスジェンダー・シスジェンダーの別におけるマイノリティと収入

Badgett, Lau, Sears, & Ho (2007) は1999年から2005年にかけてアメリカで行われた11個の非確率抽出法による調査データを分析し、多くのトランスジェンダーが全国平均よりも低い収入を得ており、回答者の22-64%が年収25,000ドル以下であるという結果を報告している。また、インターネットおよび質問紙による大規模調査であるNational Transgender Discrimination Survey (全米トランスジェンダー差別調査) データを分析したGrant, Mottet, & Tanis (2011) によると、15%のトランスジェンダーが世帯年収10,000ドル以下であると回答している。Minter & Daley (2003) はトランスジェンダーに対する差別意識が、雇用や昇進、研修機会における差別的待遇、洗面所や更衣室の利用などで配慮がないことによるトランスジェンダーの働きにくさにも影響を与えていると指摘しており、トランスジェンダーの収入が低い傾向にある要因として考えられる。

日本においては、有意抽出法による郵送・メール・ウェブの3つの回収方法を利用した調査データを分析した松嶋 (2012) が、性別違和を持つ人の18.3%が収入なしであったと報告している。また、性別移行前のジェンダーが女性である人においては年収450万円未満の人が93.2%を占めているのに対し、性別移行前のジェンダーが男性である人においては年収450万円未満の人は69.4%を占めていた。特に、出生時の性別ごとに見た就業者における年収の分布が国税庁による民間給与実態調査の男女別年収分布と似た傾向にあることから、出生時の性別が年収に効果を与えているのではと考察している (松嶋, 2012)。一方、2013年に行われたLGBTに関する職場環境アンケートでは、性自認が女性で出生時の性別が男性であるMtF (Male to Female) の非正規雇用率および転職率が高いことが明らかになっており、MtFの収入の低さを示



唆している（明智, 遠藤, & 村木, 2013）。

仮説 1-4: 他の条件を一定にしたとき、トランスジェンダーの方がシスジェンダーに比べて収入が低い傾向にある。（分析 I）

## 2.2 性的マイノリティと勤続意欲

次に注目するのは性的マイノリティであることと勤続意欲の関係である。虹色ダイバーシティ & 国際基督教大学ジェンダー研究センター（2014）の二変量解析によると、性的マイノリティ当事者は性的マイノリティ非当事者に比べて勤続意欲が低い傾向にある（虹色ダイバーシティ & 国際基督教大学ジェンダー研究センター, 2014）。一方、Burns, Graham, & Menefee-Libey（2012）によると、アメリカにおいては性的マイノリティの労働者に対して否定的な職場環境が性的マイノリティの離職につながる。また、Ragins & Cornwell（2001）は職場での性的指向に基づく差別が組織に対するコミットメントに対して有意に負の効果を与えていると示している。したがって、たしかに性的マイノリティの収入と性的マイノリティは勤続意欲の間には連関関係があると推測され、実際に虹色ダイバーシティ & 国際基督教大学ジェンダー研究センター（2014）による二変量解析もそれを確認するものである。その一方で、性的マイノリティに対する差別的な職場環境が性的マイノリティの離職につながっているという指摘もある。本研究では、虹色ダイバーシティ & 国際基督教大学ジェンダー研究センター（2014）による研究が二変量間の関係のみを分析したものであることを踏まえた上で、以下の仮説を提示する。

仮説 2: 他の条件を一定にしたとき、職場において性的マイノリティに関する差別的言動が少なければ少ないほど、その分だけ勤続意欲がより高くなる傾向にある。（分析 II）

## 3 方法

### 3.1 データの説明

本研究では、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティによる「LGBT に関す

る職場環境アンケート 2014<sup>3</sup>」を使用する。この調査は日本の職場で働いた経験のある人を対象としたインターネット調査であり、性的マイノリティ当事者だけでなく非当事者も回答が可能である。ソーシャル・ネットワーキング・サービスのTwitter、Facebook、mixiや性的マイノリティ当事者団体のメーリングリスト、チラシ、既存の虹色ダイバーシティのクライアントへの協力依頼<sup>4</sup>などで調査の周知を行い、回答者がウェブ上のアンケートフォームで自主的に回答する形式をとっている。調査は2014年2月14日から2014年3月31日まで行われ、計1,815人が回答した。調査の詳細については虹色ダイバーシティ & 国際基督教大学ジェンダー研究センター（2014）に記載されている。

### 3.2 従属変数

分析Iにおいては収入を示す指標として、「あなたの現在の年収をお答えください。就業1年未満の方は見込みでお答えください」という質問への回答を使用した。選択肢とそのコーディングは、(1)「0-99万円」(2)「100-199万円」(3)「200-299万円」(4)「300-399万円」(5)「400-599万円」(6)「600-999万円」(7)「1000万円以上」である。数値が高いほど収入が高いという連続変数である。分析においては各コーディングの数字を各階級の中央の値である階級値（小数点第一位を四捨五入）を自然対数変換（小数点第三位を四捨五入）した上で投入した。なお、「1000万円以上」は階級値を1100万円と仮定し、算出した。「分からない」「答えたくない」および無回答は欠損値とした。

Table 1は収入の度数分布表であり、400-599万円と回答した人が18.7%と一番多く、200-299万円と回答した人が17.2%と次に多い結果となっている。また、300-399万円と回答した人は15.8%であり、約半数の回答者は収入が200-599万円である。25.7%の回答者は収入が0-199万円であり、22.6%の回答者は収入が600万円以上である。

Table 1  
収入の度数分布表

	度数	パーセント	有効パーセント
0-99万円	172	9.5	11.7
100-199万円	206	11.3	14.0
200-299万円	253	13.9	17.2
300-399万円	232	12.8	15.8
400-599万円	274	15.1	18.7
600-999万円	221	12.2	15.1
1000万円以上	110	6.1	7.5
分からない（欠損値）	22	1.2	
答えたくない（欠損値）	63	3.5	
無回答（欠損値）	262	14.4	
合計	1,815	100.0	100.0

分析Ⅱにおいては、勤続意欲を示す指標として「あなたは現在の職場で今後も働き続けたいと思うか、お答えください」という質問への回答を使用した。選択肢とそのコーディングは（5）「そう思う」（4）「ややそう思う」（3）「どちらとも言えない」（2）「ややそう思わない」（1）「そう思わない」である。数値が高いほど勤続意欲が高いという連続変数である。なお、無回答は欠損値とした。

Table 2は勤続意欲の度数分布表であり、54.5%の人が今後も働き続けたいと思う、または今後も働き続けたいとやや思うと回答しており、勤続意欲の高い人が半数以上を占めている。一方、25.9%の人が今後働き続けたいと思わない、または今後働き続けたいとやや思わないと回答しており、19.7%の人がどちらとも言えないと回答している。

Table 2  
 勤続意欲の度数分布表

	度数	パーセント	有効パーセント
そう思う	523	28.8	31.7
ややそう思う	376	20.7	22.8
どちらとも言えない	325	17.9	19.7
ややそう思わない	159	8.8	9.6
そう思わない	269	14.8	16.3
無回答（欠損値）	163	9.0	
合計	1,815	100.0	100.0

### 3.3 独立変数

分析Ⅰでは、収入を規定する独立変数として、性的指向・トランスジェンダーを投入する。また、統制変数として、年齢、最終学歴、雇用形態を投入する。分析Ⅱでは、勤続意欲を規定する独立変数として、性的マイノリティに関する差別的言動を投入する。また、勤続意欲に関する研究（厚生労働省, 2008）を参考にしつつ、統制変数として出生時の性別、性的指向、トランスジェンダー、年齢、最終学歴、雇用形態、収入（分析Ⅰにおける従属変数）、外資系企業、労働時間、やりがい、職場の人間関係、ダイバーシティ意識を投入する。コーディングの説明は Appendix の Table A、記述統計は Appendix の Table B に掲載している。

### 3.4 分析方法

本研究では、第一に、性的マイノリティであることが収入にもたらす効果について分析する（分析Ⅰ）。分析Ⅱは2つのモデルを作った上で分析を行う。まず1つ目のモデルでは性的指向およびトランスジェンダーのみを独立変数として投入し、これらが収入にどのような効果をもたらしめているのか検討するため重回帰分析を行う。次に2つ目のモデルでは、収入に対する他の社会的要因を統制した上で、収入に対する性的指向およびトランスジェンダーの直接的な効果の有無を検討する。収入に効果を与える社会的要因は性別により影響の仕方が異なると考えられ、先行研究よりトランスジェンダーの収入は性自認というよりもむしろ出生時に割り当てられた性別に大きな影響を受けていると想定されるため（松嶋, 2012）、いずれのモデルにおいても出生時の性別（女性また

は男性)で分析を分けている。

第二に、勤続意欲を従属変数とする重回帰分析(分析Ⅱ)を行う。分析Ⅱでは、勤続意欲に効果をもたらす他の社会的要因を統制した上で、職場における性的マイノリティに関する差別的言動の有無が勤続意欲に対してどのような効果をもたらすのかを検討する。

## 4 分析結果

### 4.1 分析Ⅰの結果

Table 3は、出生時の性別が女性である人の収入を従属変数とした重回帰分析の結果である。Table 3のモデル1によると、出生時の性別が女性の場合、異性愛者に比べて、同性愛者、両性愛者、その他の性的指向を持つ人は収入が低い傾向にある。また、出生時の性別が女性の場合、シスジェンダーに比べてトランスジェンダーは収入が低い傾向にある。サンプルサイズは906、調整済み決定係数は.123である。

Table 3のモデル2では性的指向、トランスジェンダーに加えて、年齢、最終学歴、雇用形態を同時に分析に投入した。分析を行った結果、両性愛者であることおよびその他の性的指向を持つことが収入に対して統計的に有意な負の効果をもたらしていることが明らかになった。統制変数として投入した年齢、最終学歴(大学院のみ)は収入に対し有意に正の効果をもたらしている。非正規雇用およびその他の雇用形態は収入に対し有意に負の効果をもたらしている。サンプルサイズは902、調整済み決定係数は.558である。

**Table 3**  
 収入 (log) を従属変数とした重回帰分析（出生時の性別：女性）

独立変数		モデル1			モデル2		
		非標準化 係数	標準誤差	標準化 係数	非標準化 係数	標準誤差	標準化 係数
定数		5.999**	.048		5.406**	.088	
性的指向	異性愛	-----	-----	-----	-----	-----	-----
	同性愛	-.344**	.077	-.158	-.102	.056	-.047
	両性愛	-.607**	.069	-.319	-.205**	.051	-.107
	その他	-.401**	.098	-.161	-.177*	.070	-.071
トランスジェンダー <sup>1</sup>		-.353**	.075	-.174	-.043	.056	-.021
年齢					.031**	.002	.324
最終学歴	高校以下				-----	-----	-----
	短大・高専				-.053	.068	-.025
	大学				.087	.061	.049
	大学院				.269**	.082	.094
雇用形態	正規				-----	-----	-----
	非正規				-.934**	.044	-.508
	その他				-1.187**	.106	-.253
調整済み決定係数		.123			.558		
N		906			902		

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

<sup>1</sup> レファレンス・カテゴリー：シスジェンダー

Table 4は、出生時の性別が男性である人の収入を従属変数とした重回帰分析の結果である。Table 4のモデル1によると、出生時の性別が男性の場合、異性愛者に比べて、同性愛者、両性愛者、その他の性的指向を持つ人は収入が低い傾向にある。また、出生時の性別が男性の場合、シスジェンダーに比べてトランスジェンダーは収入が低い傾向にある。サンプルサイズは562、調整済み決定係数は.167である。

Table 4のモデル2では、性的指向、トランスジェンダーに加えて、年齢、最終学歴、雇用形態を同時に分析に投入した。分析を行った結果、その他の性的指向を持つこと、トランスジェンダーであることが収入に対して有意に負の効果をもたらしていることが明らかになった。統制変数として投入した年齢、最終学歴（大学・大学院）は収入に対し有意に正の効果をもたらしている。最終学歴（短大・高専）、非正規雇用およびその他の雇用形態は収入に対し有意

に負の効果をもたらしている。サンプルサイズは561、調整済み決定係数は.585である。

Table 4

収入 (log) を従属変数とした重回帰分析 (出生時の性別：男性)

独立変数	モデル1			モデル2		
	非標準化 係数	標準誤差	標準化 係数	非標準化 係数	標準誤差	標準化 係数
定数	6.387**	.066		5.685**	.110	
性的指向						
異性愛	-----	-----	-----	-----	-----	-----
同性愛	-.430**	.079	-.255	-.111	.058	-.066
両性愛	-.438**	.119	-.182	-.070	.087	-.029
その他	-.667**	.174	-.187	-.353**	.125	-.099
トランスジェンダー <sup>1</sup>	-.664**	.118	-.285	-.327**	.085	-.141
年齢				.024**	.003	.266
最終学歴						
高校以下				-----	-----	-----
短大・高専				-.324**	.096	-.119
大学				.167*	.072	.099
大学院				.300**	.084	.141
雇用形態						
正規				-----	-----	-----
非正規				-.952**	.056	-.495
その他				-1.145**	.154	-.205
調整済み決定係数	.167			.585		
N	562			561		

\*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$

<sup>1</sup> レファレンス・カテゴリー：シスジェンダー

## 4.2 分析IIの結果

Table 5は、勤続意欲を従属変数にした重回帰分析の結果である。分析の結果、性的マイノリティに関する差別的言動のない職場で働いている人の方が差別的言動のある職場で働いている人に比べて勤続意欲が高くなる傾向にあることが示された。また、統制変数として投入した変数のうち、年齢、収入、やりがい、職場での人間関係、ダイバーシティ意識が勤続意欲に対して有意に正の効果をもたらしていることが明らかとなった。非正規雇用、労働時間は勤続意欲に対し有意に負の効果をもたらしている。サンプルサイズは1463、調整済み決定係数は.471である。

Table 5  
 勤続意欲を従属変数とした重回帰分析

独立変数	非標準化係数	標準誤差	標準化係数
定数	-.403	.318	
差別的言動	-.070**	.023	-.062
出生時の性別（女性）	.044	.062	.015
性的指向			
異性愛	-----	-----	-----
同性愛	.068	.076	.023
両性愛	.070	.081	.021
その他	.127	.111	.028
トランスジェンダー <sup>1</sup>	.029	.084	.008
年齢	.013**	.003	.082
最終学歴			
高校以下	-----	-----	-----
短大・高専	.006	.101	.002
大学	-.044	.085	-.015
大学院	-.093	.108	-.022
雇用形態			
正規	-----	-----	-----
非正規	-.372**	.079	-.121
その他	-.331	.170	-.040
収入（log）	.137**	.052	.084
外資系企業 <sup>2</sup>	.028	.094	.006
労働時間	-.035**	.012	-.066
やりがい	.463**	.026	.401
職場の人間関係	.319**	.031	.231
ダイバーシティ意識	.146**	.023	.140
調整済み決定係数	.471		
N	1,463		

\*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$

<sup>1</sup> レファレンス・カテゴリー：シスジェンダー

<sup>2</sup> レファレンス・カテゴリー：日系企業

## 5 考察

### 5.1 性的マイノリティと収入

重回帰分析の結果、他の条件を一定にしたときレズビアンは異性愛女性に比べて収入が高い傾向にあるという仮説（仮説 1-1）および、他の条件を一定にしたときゲイは異性愛男性に比べて収入が低い傾向にあるという仮説（仮説 1-2）は棄却された。一方、他の条件を一定にしたときバイセクシュアルの方が異性愛者に比べて収入が低い傾向にあるという仮説（仮説 1-3）については出生時の性別が女性の場合、支持された。また、他の条件を一定にしたときト



ランスジェンダーの方がシスジェンダーに比べて収入が低い傾向にあるという仮説（仮説1-4）は出生時の性別が男性の場合、支持された。

仮説1-1が棄却されたことにより、収入に対して効果をもたらしている他の社会的要因を統制した場合、出生時の性別が女性である人を対象とした分析では、同性愛者であることが収入に直接的な効果をもたらさないことが示唆された。その一方で、モデル2において統制変数として投入されている年齢、最終学歴、雇用形態がモデルに投入されていないモデル1では同性愛者であることが収入に対して負の効果を与えている。したがって、同性愛者であることが最終学歴や雇用形態という媒介を経て、収入に対し間接的に負の効果を与えている可能性がある。

同じく棄却された仮説1-2に対しても同様のことが主張できる。すなわち、出生時の性別が男性である人を対象とした分析では、統制変数を加えた場合、同性愛者であることが収入に直接的な効果をもたらさないことが示唆された。しかしながら、同性愛者であることが年齢や最終学歴（大学院のみ）、雇用形態という媒介を経て、収入に対し間接的に負の効果を与えていると考えられる。

仮説1-3については出生時の性別が女性の場合、統制変数を投入してもバイセクシュアルの方が異性愛者に比べて有意に収入が低い傾向にあったため、今回の分析において投入されなかった変数やバイセクシュアルであることによる独自の効果により収入が低くなる傾向にあると推測される。出生時の性別が男性の場合については仮説が棄却される結果となったが、上記の年齢、学歴、雇用形態などの間接的効果による要因に加えて、サンプルサイズが小さかったために分析を行うにあたって有意差が認められなかったという可能性もある。Carpenter（2005）もバイセクシュアルであることが収入に与える効果については統制変数によって統計的に有意な効果を与えるかそうでないかが変わるとしており、本研究も同様の結果となった。

仮説1-4については出生時の性別が女性の場合、統制変数を投入すると、トランスジェンダーであることが収入に対して有意な効果をもたらさなくなるという結果になった。一方、出生時の性別が男性の場合は、統制変数を投入してもトランスジェンダーであることが収入に対して有意に負の効果をもたらして

いることが明らかとなった。

出生時の性別が女性の場合と男性の場合で、年齢や最終学歴、雇用形態などによる擬似的な連関を取り除いた場合の結果が変わる要因としてはジェンダー格差が考えられる。シスジェンダー女性の収入と出生時の性別が女性のトランスジェンダーの収入の間で統計的に有意な差が認められなかった要因として、年齢・最終学歴・雇用形態を統制した場合、職場において男性として働いているトランスジェンダーについてはシスジェンダー女性に比べて給与が高くなり、トランスジェンダーであることが収入にもたらす負の効果が打ち消されるという可能性がある。また、職場において女性として働いているトランスジェンダーについても、トランスジェンダーであることそのものが直接的に収入の低さをもたらしているというよりも、トランスジェンダーであることが雇用形態や学歴に負の効果をもたらし、それらの要因が収入の低さにつながっているという解釈が考えられる。一方、出生時の性別が男性のトランスジェンダーであることが収入に対して有意に負の効果をもたらしていた要因としては、**LGBT職場環境アンケート 2014**において、出生時の性別が男性かつ性自認が女性であるトランスジェンダーの**51%**が職場において女性として扱われており（虹色ダイバーシティ & 国際基督教大学ジェンダー研究センター, 2014）、また女性の方が男性に比べて収入が低い傾向にあることから（厚生労働省, 2014b）、他の要因を統制しても有意に負の効果がもたらされるのではと解釈できる。したがって、出生時の性別に関わらずトランスジェンダーの対する経済的差別は存在しているが、その差別が他の社会的属性によって説明されるかどうかという点で出生時の性別によってその影響の仕方が異なっているということが示された。

また、その他の性的指向を持つことは統制変数を投入しても出生時の性別に関わらず有意に負の効果を収入に対して持つことが明らかとなった。理由については多数の解釈が考えられるが、ひとつの可能性として、その他の性的指向を持つ人々は異性との恋愛に関する会話など異性愛中心的な価値観に沿うような行為を行わないため、異性愛規範に従わない人たちとして他の非異性愛者と同様に嫌悪の対象になることが指摘されており (Chasin, 2014)、これら回避するための行動がその他の性的指向を持つ人々の収入を下げるような要因と

して働いている可能性があると考えられる。また、その他の性的指向を持つことは規範的女性および男性像から隔たりがあると考えられるために、他者からトランスジェンダーとしてみなされることになり、トランスジェンダーに対する差別と類似した差別を受けることがある (Chasin, 2014)。さらに、恋愛や結婚の話題など性愛中心主義的な会話がなされる状況の中で、雇用主からの差別やそれを回避するための行動が当人の収入を下げるような要因として働いている可能性がある。

## 5.2 差別的言動と勤続意欲

重回帰分析の結果、職場において性的マイノリティに関する差別的言動が少なければ少ないほど、その分だけ勤続意欲がより高くなる傾向にあるという仮説（仮説2）は支持され、性的マイノリティに対する差別的言動の有無は勤続意欲を決定する重要な要因であることが示された。その一方で、勤続意欲に対する性的マイノリティであることそのものの効果については、本研究では確認することができなかった。言い換えると、性的マイノリティに対する差別的言動の有無という要因は本分析で投入された統制変数では説明することのできない独自の効果を勤続意欲に対して持っており、他の要因を統制しても、差別的言動の少ない職場に勤める人は勤続意欲が高くなる傾向にあることが分かった。

## 6 結論

本分析により、一部の性的マイノリティ属性について、性的マイノリティであることが年齢、最終学歴や雇用形態などの媒介要因を通じて収入の減少につながっていることが明らかになった一方で、他の性的マイノリティ属性については、今回統制変数として投入した要因では説明することのできないメカニズムによって収入に対する負の効果が働いていることが分かった。これは性的マイノリティの中でも、性的マイノリティに対する経済的差別の発生するプロセスがそれぞれで異なっている可能性を示唆するものである。勤続意欲に関する分析については収入や労働時間などの功利的要因に加えてやりがいや職場の人間関係、ダイバーシティ意識など感情的要因が勤続意欲に効果を与えているこ

とが示され、差別的言動のない職場に勤めることは当人の勤続意欲に対して感情的な側面から正の効果をもたらすと解釈することができる。したがって、職場環境を改善し、性的マイノリティに対する差別的言動を減らした上で、従業員のやりがいや職場の人間関係、ダイバーシティ意識を向上させることが勤続意欲の向上につながると考えられる。

本研究は大規模調査を利用して職場における性的マイノリティの困難を統計的に描いた初めての研究であり、日本におけるデータを用いて性的マイノリティ当事者と非当事者の収入格差を考察した一方、性的マイノリティ当事者の低収入は必ずしも勤続意欲に負の効果をもたらすものではなく、むしろ性的マイノリティに対する差別的言動が勤続意欲に対して負の効果をもたらすということを明らかにしたという点で意義がある。しかしながら同時に、以下の限界点も見出された。本稿で使用したデータは有意抽出のインターネット調査であり、様々なバイアスがかかっている可能性が高い。したがって、無作為抽出や類似した抽出方法を利用した調査でも同様の結果になるか検証する必要がある、本研究における結論を過剰に一般化することはできない。本研究での結論はあくまで仮説段階にとどまるものであり、今後の研究が待たれる。加えて、有意抽出のインターネット調査など偏った抽出方法から母集団についての推測を行う際に利用されることのある傾向スコアなどによるデータ補正も本稿では行っていない (cf. 星野, 2009)。さらに、性的マイノリティをアイデンティティ、性自認、性表現、出生時に割り当てられた性別、性行動、恋愛感情、性的魅力やその複合など、どのような要素によって測定するかという困難もある。

このように本稿には限界点もあるが、日本において性的マイノリティに関する市場調査や簡易アンケートが増え、誤った情報も生産されている中で、性的マイノリティについて背景知識のある団体が調査を行うことは必要不可欠であろう。本来は公的統計や無作為抽出の大規模社会調査など代表性のある調査に性的マイノリティについての質問項目を含めることが重要であるが、現在日本においてそのようなデータが存在しない以上、性的マイノリティについて多様な調査データを用いて分析し、複数の調査で同様の結果となった結論についてはより正確なものであるとするのが次善の策だと考える。

今後の研究として、統制変数投入後も有意に収入を下げる要因であった、その他の性的指向を持つこと、バイセクシュアル女性であること、および出生時の性別が男性のトランスジェンダーであることがどのようなメカニズムで収入を下げるのかに関して質的インタビューをはじめとする詳細な調査を行うことが求められている。また、性的指向、トランスジェンダーであるかそうでないか、および雇用形態が、どのように複合的に交差し、収入に対して効果をもたらしているのかなど今回の分析をより精緻化する研究も待たれる。加えて、性的マイノリティと職場環境という観点から、性的マイノリティの貧困や精神的健康、不本意な転職の多さや就職活動時の困難などの問題にも取り組むことが必要である。

## Author Note

LGBTに関する職場環境アンケート 2014 データの使用にあたっては、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティの許可を得た。本稿の執筆にあたり、2名の匿名査読者より極めて重要な指摘をいただいた。また、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティおよび国際基督教大学ジェンダー研究センターの共同研究メンバーより多くのコメントをいただいた。英語要旨の作成にあたっては、ワシントン大学大学院社会学研究科博士課程のSarah Diefendorf氏による助言を受けた。記して感謝申し上げたい。

## Footnotes

- <sup>1</sup> 本稿では、女性として女性を性愛の対象とする人をレズビアン（女性同性愛者）、男性として男性を性愛の対象とする人をゲイ（男性同性愛者）、男女ともに性愛の対象とする人および性愛対象となる相手の性別を問わない人をバイセクシュアル（両性愛者）、出生時に割り当てられた性別とは異なる性別を生きる人をトランスジェンダー（性別越境者）と定義する。
- <sup>2</sup> 記事のタイトルでは「**LGBT**市場」（日経ビジネス, 2007）と書かれているが、調査の結果はレズビアン・ゲイと異性愛者の額のみが比較されており、**LGBT**という語を使用しているにもかかわらずバイセクシュアルおよびトランスジェンダーを不可視化していることが分かる。
- <sup>3</sup> **LGBT**に関する職場環境アンケート 2014は、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティが国際基督教大学ジェンダー研究センターによる協力および株式会社ラッシュジャパンによる助成を受けて実施している調査研究である。
- <sup>4</sup> 虹色ダイバーシティ講演時の協力依頼による回答者には大企業に勤務する性的マイノリティ非当事者が多く含まれていると想定される。したがって、本調査における性的マイノリティ非当事者は一般の非当事者と比べて高学歴、高収入という特徴を持っていると考えられるため、分析結果の解釈には注意が必要である。

## Appendix

Table A  
 独立変数のコーディング

変数	コーディング
出生時の性別	この変数は「あなたが出生時に戸籍や出生届に記載された性別をお答えください」（選択肢は男性、女性）という質問の回答から変数を作成した。男性、女性のダミー変数を作成し、男性をベースカテゴリーとした（男性=0、女性=1）。無回答は欠損値に指定した。
性的指向	<p>この変数は「あなたが現在自認している性別をお答えください」（選択肢は男性、女性、X ジェンダー・中性、その他）および「あなたが好きになる相手の性別について、お答えください」（選択肢は男性、女性、両性（男性、女性）、相手の性別は問わない、該当なし（特定の人を好きにならない）、その他）という質問の回答から変数を作成した。異性愛、同性愛、両性愛、その他の4つのダミー変数を作成し、異性愛をベースカテゴリーとした。各々のカテゴリーについては以下のように作成した。無回答は欠損値に指定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・性自認：女性、性的指向：男性=異性愛</li> <li>・性自認：男性、性的指向：女性=異性愛</li> <li>・性自認：女性、性的指向：女性=同性愛</li> <li>・性自認：男性、性的指向：男性=同性愛</li> <li>・性的指向：両性または相手の性別は問わない=両性愛</li> <li>・性的指向：該当なしまたはその他=その他</li> <li>・性自認：X ジェンダー・中性またはその他、性的指向：女性または男性=その他</li> </ul>
トランスジェンダー	<p>この変数は「あなたが現在自認している性別をお答えください」および「あなたが出生時に戸籍や出生届に記載された性別をお答えください」という質問の回答から変数を作成した。シスジェンダー、トランスジェンダーのダミー変数を作成し、シスジェンダーをベースカテゴリーとした（シスジェンダー=0、トランスジェンダー=1）。各々のカテゴリーについては以下のように作成した。無回答は欠損値に指定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・性自認：女性、出生時の性別：女性=シスジェンダー</li> <li>・性自認：男性、出生時の性別：男性=シスジェンダー</li> <li>・性自認：女性、X ジェンダー・中性またはその他、出生時の性別：男性=トランスジェンダー</li> <li>・性自認：男性、X ジェンダー・中性またはその他、出生時の性別：女性=トランスジェンダー</li> </ul>



差別的言動	この変数は「職場の中で性的マイノリティに関する差別的な言動を見聞きした事がどの程度あるか、お答えください。就業時間、休憩時間、就業時間後を含みます」という質問の回答から変数を作成した。よくある=5、ときどきある=4、どちらとも言えない=3、あまりない=2、まったくない=1、の5段階の変数を連続変数とみなして投入する。無回答は欠損値に指定した。
年齢	この変数は「あなたの年齢をお答えください」という質問の回答から変数を作成した。最小値である「14歳以下」から最大値である「67歳」の実年齢を連続変数とみなして投入する。無回答は欠損値に指定した。
最終学歴	<p>この変数は「あなたの最終学歴をお答えください。(卒業、在学中、中退含む)」という質問の回答から変数を作成した。高校以下、短大・高専、大学、大学院の4つのダミー変数を作成し、高校以下をベースカテゴリーとした。各々のカテゴリーについては以下のように作成した。「答えたくない」および無回答は欠損値に指定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学以下、高等学校=高校以下</li> <li>・ 専門学校、短大・高専=短大・高専</li> <li>・ 大学=大学</li> <li>・ 大学院=大学院</li> </ul>
雇用形態	<p>この変数は「あなたの現在の主な仕事について、雇用形態をお答えください」という質問の回答から変数を作成した。正規雇用、非正規雇用、その他の3つのダミー変数を作成し、正規雇用をベースカテゴリーとした。各々のカテゴリーについては以下のように作成した。無回答は欠損値に指定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 正規の職員、従業員、会社役員、自営=正規雇用</li> <li>・ パート、アルバイト、派遣、契約、嘱託（契約期間あり）=非正規雇用</li> <li>・ 家事手伝い、内職、その他=その他</li> </ul>
外資系企業	この変数は「あなたの職場の本社の所在地についてお答えください。(日本の本社が海外企業の子会社である場合は外資系とお答えください)」という質問の回答から変数を作成した。日系企業、外資系企業のダミー変数を作成し、日系企業をベースカテゴリーとした(日系企業=0、外資系企業=1)。無回答は欠損値に指定した。
労働時間	この変数は「あなたの1週間の平均的な労働時間をお答えください。(残業時間含む)」という質問の回答から変数を作成した。15時間未満=1から75時間以上=12の12段階の変数を連続変数とみなして投入する。無回答は欠損値に指定した。

やりがい	この変数は「あなたは今の仕事のやりがいを感じているか、お答えください」という質問の回答から変数を作成した。感じる=5、やや感じる=4、どちらとも言えない=3、やや感じない=2、感じない=1、の5段階の変数を連続変数とみなして投入する。無回答は欠損値に指定した。
職場の人間関係	この変数は「あなたの職場の人間関係について、もっとも当てはまる選択肢を選んでください」という質問の回答から変数を作成した。良好=5、やや良好=4、どちらとも言えない=3、やや悪い=2、悪い=1、の5段階の変数を連続変数とみなして投入する。無回答は欠損値に指定した。
ダイバーシティ意識	この変数は「あなたの職場は、ダイバーシティ（女性、障がい者、外国人など、多様な人材の活用）に対する理解、取り組みは浸透していると思うか、お答えください」という質問の回答から変数を作成した。そう思う=5、ややそう思う=4、どちらとも言えない=3、ややそう思わない=2、そう思わない=1、の5段階の変数を連続変数とみなして投入する。無回答は欠損値に指定した。

---

**Table B**  
独立変数の記述統計

変数	出生時の性別：女性（n=1,123）		出生時の性別：男性（n=674）	
	平均値 <sup>1</sup>	標準偏差	平均値 <sup>1</sup>	標準偏差
性的指向	-----	-----	-----	-----
異性愛	0.350	-----	0.250	-----
同性愛	0.200	-----	0.550	-----
両性愛	0.300	-----	0.139	-----
その他	0.150	-----	0.060	-----
トランスジェンダー	0.242	-----	0.142	-----
差別的言動	3.151	1.241	3.118	1.268
年齢	32.273	9.188	35.272	9.428
最終学歴	-----	-----	-----	-----
高校以下	0.143	-----	0.123	-----
短大・高専	0.211	-----	0.107	-----
大学	0.541	-----	0.578	-----
大学院	0.105	-----	0.193	-----
雇用形態	-----	-----	-----	-----
正規雇用	0.579	-----	0.704	-----
非正規雇用	0.368	-----	0.251	-----
その他	0.053	-----	0.044	-----
外資系企業	0.093	-----	0.130	-----
労働時間	6.271	2.778	7.038	2.695
やりがい	3.746	1.211	3.715	1.303
職場の人間関係	3.790	1.045	3.818	1.036
ダイバーシティ意識	2.621	1.359	2.655	1.397

<sup>1</sup> ダミー変数の場合については、割合を報告している。

## References

- Badgett, M. V. L. (1995). The wage effects of sexual orientation discrimination. *Industrial and Labor Relations Review*, 48 (4), 726-739.
- Badgett, M. V. L., Durso, L. E., & Schreebaum, A. (2013). New patterns of poverty in the lesbian, gay, and bisexual community. Retrieved August 30, 2014, from <http://williamsinstitute.law.ucla.edu/wp-content/uploads/LGB-Poverty-Update-Jun-2013.pdf>
- Badgett, M. V. L., Lau, H., Sears, B., & Ho, D. (2007). Bias in the workplace: Consistent evidence of sexual orientation and gender identity discrimination. Retrieved August 30, 2014, from <http://williamsinstitute.law.ucla.edu/wp-content/uploads/Badgett-Sears-Lau-Ho-Bias-in-the-Workplace-Jun-2007.pdf>
- Black, D. A., Makar, H. R., Sanders, S. G., & Taylor, L. J. (2003). The earnings effects of sexual orientation. *Industrial and Labor Relations Review*, 56 (3), 449-469.
- Burns, C., Graham K. C., & Menefee-Libey S. (2012). Gay and transgender discrimination in the public sector: Why it's a problem for state and local governments, employees, and taxpayers. Retrieved August 30, 2014, from <http://www.afscme.org/news/publications/body/CAP-AFSCME-LGBT-Public-Sector-Report.pdf>
- Carpenter, C. S. (2005). Self-reported sexual orientation and earnings: Evidence from California. *Industrial and Labor Relations Review*, 58 (2), 258-273.
- Chasin, C. D. (2014). Making Sense in and of the Asexual Community: Navigating Relationships and Identities in a Context of Resistance. *Journal of Community & Applied Social Psychology*. doi:10.1002/casp.2203
- Couper, M. P. (2000). Web surveys: A review of issues and approaches. *Public Opinion Quarterly*, 64 (4), 464-494.
- Grant, J. M., Mottet, L. A., & Tanis, J. (with Harrison, J., Herman, J. L., & Keisling, M.). (2011). Injustice at every turn: A report of the national transgender discrimination survey. Retrieved August 30, 2014, from [http://www.thetaskforce.org/downloads/reports/reports/ntds\\_full.pdf](http://www.thetaskforce.org/downloads/reports/reports/ntds_full.pdf)
- Lafrance, A., Warman, C., & Woolley, F. (2009). Sexual identity and the marriage premium. *Queen's Economics Department Working Paper*, 1219. Retrieved August 30, 2014, from [http://qed.econ.queensu.ca/working\\_papers/papers/](http://qed.econ.queensu.ca/working_papers/papers/)

qed\_wp\_1219.pdf

Minter, S., & Daley, C. (2003). Trans realities: A legal needs assessment of San Francisco's transgender communities. Retrieved August 30, 2014, from [http://www.hawaii.edu/hivandaids/Trans\\_Realities\\_\\_A\\_Legal\\_Needs\\_Assessment\\_of\\_SF\\_s\\_TG\\_Communities.pdf](http://www.hawaii.edu/hivandaids/Trans_Realities__A_Legal_Needs_Assessment_of_SF_s_TG_Communities.pdf)

Prudential Financial. (2012). The LGBT financial experience: 2012-2013 Prudential research study. Retrieved August 30, 2014, from [http://www.prudential.com/media/managed/Prudential\\_LGBT\\_Financial\\_Experience.pdf](http://www.prudential.com/media/managed/Prudential_LGBT_Financial_Experience.pdf)

Ragins, B. R., & Cornwell, J. M. (2001). Pink triangles: Antecedents and consequences of perceived workplace discrimination against gay and lesbian employees. *Journal of Applied Psychology*, 86 (6), 1244-1261.

明智カイト., 遠藤まめた., & 村木真紀. (2013). 「LGBTが生きやすい職場のために」『シノドス』. Retrieved August 30, 2014, from <http://synodos.jp/society/4547>

太田聰一., & 大竹文雄. (2003). 「企業成長と労働意欲」. 『フィナンシャル・レビュー』. 67, 4-34.

大竹文雄., & 唐渡広志. (2003). 「成果主義的賃金制度と労働意欲」. 『経済研究』. 54 (3), 193-205.

釜野さおり. (2012). 「性的指向は収入に関連しているのか: 米国の研究動向のレビューと日本における研究の提案」. 『論叢クィア』. 5, 63-81.

厚生労働省. (2008). 『平成20年度 労働経済の分析』. Retrieved August 30, 2014, from <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/08/>

厚生労働省. (2013). 『2013年12月20日 第139回労働政策審議会雇用均等分科会の議事録について』. Retrieved August 30, 2014, from <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000037947.html>

厚生労働省. (2014a). 『事業主が職場における性的な言動に起因する問題に関して雇用管理上講ずべき措置についての指針』. Retrieved August 30, 2014, from [http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoutoudokateikyoku/sekudara\\_tokekomi\\_6.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoutoudokateikyoku/sekudara_tokekomi_6.pdf)

厚生労働省. (2014b). 『平成25年賃金構造基本統計調査(全国)の概況』. Retrieved August 30, 2014, from <http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2013/dl/13.pdf>

性意識調査グループ編. (1998). 『310人の性意識——異性愛者ではない〈女〉たちのア

ンケート調査』. 東京: 七つ森書館.

電通総研. (2012). 『電通総研 LGBT 調査 2012』. Retrieved August 30, 2014, from <http://dii.dentsu.jp/project/other/pdf/120701.pdf>

虹色ダイバーシティ., & 国際基督教大学ジェンダー研究センター. (2014). 『LGBTと職場環境に関するアンケート調査 報告会資料 2014』. Retrieved August 30, 2014, from <http://www.nijiroidiversity.jp/app/download/5512170874/20140503職場環境アンケート報告会.pdf>

日経ビジネス. (2007). 『巨大市場「LGBT」とは: 年間6兆6000億円、同性愛者の国内市場』. Retrieved August 30, 2014, from <http://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20070223/119688/>

本多則恵. (2005). 「社会調査へのインターネット調査の導入をめぐる論点: 比較実験調査の結果から」. 『労働統計調査月報』. 57 (2), 12-20.

星野崇宏. (2009). 『調査観察データの統計科学——因果推論・選択バイアス・データ融合』. 東京: 岩波書店.

松嶋淑恵. (2012). 「性別違和をもつ人々の実態調査: 経済状況、人間関係、精神的問題について」. 『人間科学研究』. 34, 185-208.

**Challenges of Sexual and Gender Minorities in the Workplace:  
Multivariate Analyses of Income and Willingness to Continue Working  
Daiki HIRAMORI**

This research analyzes the effect of being a sexual and/or gender minority on income, and the effect of discriminatory language and behavior toward sexual and gender minorities in the workplace on willingness to continue working. Utilizing the “Survey on LGBT Issues in the Workplace Environment 2014” conducted by Nijiirō Diversity, a nonprofit organization, the multiple regression analyses reveal that being a minority in terms of sexual orientation and being a transgender individual have effects on income, without control variables. With control variables, the association between income and identifying as lesbian or gay, identifying as bisexual when gender at birth was male, or being a transgender individual whose gender at birth was female became insignificant. However, even after controlling other variables, being a bisexual whose gender at birth was female, being a transgender whose assigned gender at birth was male, and possessing other sexual orientations had negative effects on income. This suggests that economic discrimination against sexual and gender minorities affects various categories of sexual and gender minorities differently. Further, findings indicate that the existence of discriminatory language and behavior toward sexual and gender minorities in the workplace has a negative effect on willingness to continue working. As this paper used a web survey, the conclusions should not be overgeneralized.

**Keywords:**

LGBT, workplace discrimination, income, willingness to continue working, Japan

## 「LGBTに関する職場環境アンケート 2014」における

### 【差別的言動の事例】の内容分析

二木泉

#### はじめに

本稿は2014年2月から3月に行った「LGBTに関する職場環境アンケート 2014」の設問の一つである「差別的言動の事例」への自由記述内容の語句を集計したものである。本アンケート調査は特定非営利活動法人虹色ダイバーシティと国際基督教大学ジェンダー研究センターが共同で実施したものである（調査概要はp. 87参照）。ここでは「【差別的言動の事例】差別的な言動を見聞きした事がある方は、その内容やその時の気持ちについて、具体例を記載してください」に記述された内容を、テキストマイニングソフト TinyTextMiner を使用してその語句を集計した。その結果を2 LGBTを含む性的マイノリティ当事者（2.1 性自認別、2.2 トランスジェンダーおよびシスジェンダー別）、3 非当事者（性自認別）で紹介する。

本稿では、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの定義を平森氏の論文（p. 110）に準ずる。また、本稿で使用する「LGBTを含む性的マイノリティ当事者」「非当事者」「トランスジェンダー」「シスジェンダー」については、現在自認している性別（性自認）<sup>1</sup> および、好きになる相手の性別（性的指向）<sup>2</sup>、出生時の性別<sup>3</sup>の設問における変数のコーディング（p. 111）を採用し、次のように分類した。

- ・ LGBTを含む性的マイノリティ当事者：変数「性的指向」の「同性愛」、「両性愛」、「その他」にあてはまる人。変数「トランスジェンダー」の「トランスジェンダー」に該当する者。
- ・ 非当事者：変数「性的指向」の「異性愛」に該当する者。
- ・ トランスジェンダー：変数「トランスジェンダー」で「トランスジェンダー」に該当する者。
- ・ シスジェンダー：変数「トランスジェンダー」で「シスジェンダー」に該当する者。



なお、テキストマイニングソフト **TinyTextMiner** に登録されていない語や複数の語として判別されてしまう語句は、筆者がキーワード登録を行い単一語として抽出できるようにした<sup>4</sup>。同義語はまとめて集計出来るようソフトに登録を行った<sup>5</sup>。頻出語句のうち「こと」「人」「言う」「する」などの一般的な語はカウントしていない。語句の出現回数は延べ回数である。

## 1 差別発言の記入者数

本調査によると、**LGBT**を含む性的マイノリティ当事者に対する差別言動を見たことがある（「よくある」「ときどきある」）人の割合は当事者で**70%**、非当事者で**44%**であった。差別的言動の事例を聞いた設問「【差別的言動の事例】差別的な言動を見聞きした事がある方は、その内容やその時の気持ちについて、具体例を記載してください」に、何らかの内容（「特になし」や判読不可能な文字化けを除く）を記載した人は、本調査に回答した人の**36.6%**であった（1815人中664人）。本調査に回答した人のうち**LGBT**を含む性的マイノリティ当事者は**1,290**人で、そのうち当該設問に記入したのは**41.0%**の**529**人であった。一方、非当事者は調査全体で**494**人であったが、そのうち差別的言動について記入を行ったものは**25.1%**の**124**人であった。ここから**LGBT**を含む性的マイノリティ当事者の方が、差別的な言動を見聞きした内容を記入していることが分かる。

次に実際に記入した語数を集計してみると、**LGBT**を含む性的マイノリティ当事者が記入した総単語数（助詞等を除く）は**9,035**語であった。一方、非当事者が記入した総単語数は**2,135**語であった。これを一人あたりに換算すると、当事者は一件あたり平均**17.0**語、非当事者は**17.2**語で大きな違いは見られない（属性別に見た語数は下記参照）。

本設問に記載された内容は多岐に渡り、それらの内容を一概に分類するのは困難であるが、下記では単語に分けて集計することで何らかの傾向が見られるかを検討したい。

## 2 LGBTを含む性的マイノリティ当事者

以下では、まず**LGBT**を含む性的マイノリティ当事者により記載された語句

の数を検討する。

## 2.1 性自認別

LGBTを含む性的マイノリティ当事者による記述があった529件を性自認（男性・女性・Xジェンダーとその他）ごとにみると、男性のうち記載を行ったのは42.7%（505人中216人）、女性は38.2%（550人中210人）、Xジェンダー・その他は45.1%（235人中106人）であった。記載した語数はそれぞれ、男性3,283語、女性3,772語、Xジェンダーその他は2,001語で、一人当たりの平均は、男性15.1語、女性17.7語、Xジェンダー・その他が18.9語であった。このようにXジェンダー・その他の性自認の人は、本設問に記載した割合が若干高く、その語数も多かった。

実際にどのような語句が記載されたかを見てみると、次のような語句が抽出された。（Table 1）表中のパーセンテージは、記載された語句の総数に対する属性ごとの割合である。

Table 1 性的マイノリティ当事者 性自認別

語	男性 216 人 3,283 語	女性 210 人 3,772 語	Xジェンダー・その他 106 人 2,001 語
男性	67 (2.1%)	98 (2.6%)	59 (3.0%)
女性	51 (1.6%)	80 (2.1%)	41 (2.1%)
ゲイ	51 (1.6%)	61 (1.6%)	20 (1.0%)
嘲笑	49 (1.5%)	44 (1.2%)	22 (1.1%)
発言	28 (0.7%)	51 (1.4%)	22 (1.1%)
ホモ	35 (1.1%)	38 (1.1%)	17 (0.9%)
気持ち悪い	37 (1.1%)	36 (1.0%)	16 (0.8%)
職場	29 (0.9%)	25 (0.7%)	21 (1.0%)
おかま	29 (0.9%)	21 (0.6%)	17 (0.9%)
カミングアウト	21 (0.6%)	33 (0.9%)	13 (0.6%)
結婚	38 (1.2%)	29 (0.8%)	12 (0.6%)
レズビアン (レズ)	9 (0.3%)	29 (0.8%)	11 (0.5%)
差別的	11 (0.3%)	24 (0.6%)	12 (0.6%)
性的マイノリティ	9 (0.3%)	24 (0.6%)	11 (0.5%)
同僚	15 (0.5%)	19 (0.5%)	8 (0.4%)
悲しい	21 (0.6%)	12 (0.3%)	8 (0.4%)
上司	14 (0.4%)	15 (0.4%)	11 (0.5%)
理解	15 (0.4%)	14 (0.4%)	9 (0.4%)
話題	14 (0.4%)	19 (0.5%)	5 (0.2%)
社員	14 (0.4%)	12 (0.3%)	9 (0.4%)
同性愛者	19 (0.6%)	13 (0.3%)	1 (0.0%)
LGBT	15 (0.5%)	13 (0.3%)	3 (0.1%)
冗談	15 (0.5%)	12 (0.3%)	4 (0.2%)
嫌	5 (0.2%)	16 (0.4%)	8 (0.4%)
会話	7 (0.2%)	14 (0.4%)	7 (0.3%)
不快	11 (0.3%)	12 (0.3%)	4 (0.2%)
気分	12 (0.4%)	8 (0.2%)	7 (0.3%)
飲み会	12 (0.4%)	10 (0.3%)	5 (0.2%)
仕事	8 (0.2%)	10 (0.3%)	7 (0.3%)
会社	15 (0.5%)	6 (0.2%)	3 (0.1%)
ネタ	6 (0.2%)	12 (0.3%)	2 (0.1%)
そっち系	5 (0.2%)	10 (0.3%)	4 (0.2%)
トランスジェンダー	5 (0.2%)	10 (0.3%)	3 (0.1%)
噂	4 (0.1%)	11 (0.3%)	2 (0.1%)

実際に体験したり目撃したりした差別言動の例や自分の気持ちには次のようなものが記載されていた。

- ・「早く結婚すべき」と言われる
- ・「男？女？どっち？」と聞かれる
- ・「同性愛（ホモ・レズ）は気持ち悪い」と言われる
- ・「あいつ（おまえ）ホモか？」と言われる
- ・「女性（男性）らしくしろ」と言われた
- ・（差別言動を見聞きして）「悲しい」、「嫌だ」、「不快になった」
- ・（性的マイノリティに対する）嘲笑に慣れてしまった

記述された内容は多岐に渡るが、LGBTを含む性的マイノリティ当事者に対する差別言動が多く記載されている。「職場」や「同僚」「上司」という語と共に「飲み会」「ネタ」「噂」という語句が抽出された。非当事者が記述した内容（下記参照）と比較すると「嘲笑（からかい、揶揄）」という語の出現回数が多く、LGBTを含む性的マイノリティが、嘲笑の対象として扱われているのを見聞きしたことがあると記載する人も多かった。蔑称とも取れる「ホモ」「おかま」「そっち系（あっち系等、同義語を含む）」という語が抽出された。またLGBTを含む性的マイノリティ当事者に対して「気持ちが悪い」「怖い」などの発言についての記載もあった。さらに「男性は～」「女性は～」という性別のステレオタイプに基づく発言についての記述も見られた。「結婚しないのかと言われる」等、「結婚」を含む文章も多く記載されている。なお、「ゲイ」「ホモ」という語を記述している割合を性自認別でみると、男性、女性でその割合は変わらないが、「レズビアン（レズ）」<sup>6</sup>という語の記述は女性に多いことが分かる。

## 2.2 トランスジェンダー・シスジェンダー別

LGBTを含む性的マイノリティ当事者の書き込み内容を、トランスジェンダーとシスジェンダーとを分けてカウントした。トランスジェンダーで書き込みをした人は43.2%（368人中159人）、シスジェンダーが40.7%（922人中375人）であった。このように書き込みを行った割合に大きな違いはないが、総単語数でみると、トランスジェンダー3,107語、シスジェンダーは5,950語で、一人あたりの記載量はトランスジェンダーが19.5語、シスジェンダーが

15.9語とトランスジェンダーの方が多く記述している。

書き込みの中から抽出された主な語は次の通りである。(Table 2)

Table 2 性的マイノリティ当事者 トランスジェンダー・シスジェンダー別

語	トランスジェンダー 159人 3,107語	シスジェンダー 375人 5,950語
男性	84 (2.7%)	140 (2.4%)
女性	73 (2.3%)	99 (1.6%)
ゲイ	25 (0.8%)	107 (1.8%)
嘲笑	42 (1.4%)	73 (1.2%)
発言	29 (0.9%)	72 (1.2%)
ホモ	22 (0.7%)	68 (1.1%)
気持ち悪い	24 (0.7%)	65 (1.1%)
結婚	14 (0.5%)	65 (1.1%)
気持ち	27 (0.9%)	52 (1.9%)
職場	31 (1.0%)	44 (0.7%)
おかま	26 (0.8%)	41 (0.7%)
カミングアウト	29 (0.9%)	38 (0.6%)
レズビアン	17 (0.5%)	32 (0.5%)
差別的	16 (0.5%)	31 (0.5%)
性的マイノリティ	15 (0.5%)	29 (0.5%)
同僚	14 (0.5%)	28 (0.5%)
悲しい	12 (0.4%)	29 (0.5%)
上司	14 (0.4%)	26 (0.4%)
理解	14 (0.5%)	24 (0.4%)
話題	9 (0.3%)	29 (0.5%)
社員	13 (0.4%)	22 (0.4%)
同性愛者	4 (0.1%)	29 (0.5%)
LGBT	5 (0.2%)	26 (0.4%)
冗談	6 (0.2%)	25 (0.4%)
嫌	12 (0.4%)	17 (0.3%)
会話	8 (0.3%)	20 (0.3%)
不快	7 (0.2%)	20 (0.3%)
気分	12 (0.4%)	15 (0.3%)
飲み会	6 (0.2%)	21 (0.4%)
仕事	11 (0.4%)	14 (0.2%)
会社	5 (0.2%)	19 (0.3%)
好き	5 (0.2%)	19 (0.3%)
差別	4 (0.1%)	19 (0.3%)
ネタ	4 (0.1%)	16 (0.3%)
そっち系	6 (0.2%)	13 (0.2%)

Table 2 性的マイノリティ当事者 トランスジェンダー・シスジェンダー別 続き

語	トランスジェンダー 159人 3,107語	シスジェンダー 375人 5,950語
トランスジェンダー	6 (0.2%)	12 (0.2%)
怒り	6 (0.2%)	12 (0.2%)
子供	7 (0.2%)	11 (0.2%)
噂	3 (0.1%)	14 (0.2%)
先輩	5 (0.2%)	12 (0.2%)
同性	2 (0.1%)	15 (0.3%)
偏見	4 (0.1%)	12 (0.2%)
一緒	3 (0.1%)	12 (0.2%)
普通	9 (0.3%)	6 (0.1%)

トランスジェンダーとシスジェンダーの記載内容を比較すると「ゲイ」「ホモ」「結婚」「同性愛者」「気持ち悪い」という語はシスジェンダーの方が多く記載している。逆に「カミングアウト」という語の記載は、トランスジェンダーに多かった。「カミングアウト」という語が使用されている文脈は、「～出来ない」「～していない」「～したくない」「～している」「『～しちゃえばいいのに』と言っていた」「～した人への嘲笑やいじめがある」など内容は多岐に渡るが、当該アンケート調査のカミングアウトの有無を聞いた設問で明らかになっているように、トランスジェンダーは他の属性の当事者よりも職場でカミングアウトをしている（または、せざるを得ない）率が高く（LGBTを含む性的マイノリティ当事者全体のカミングアウト率が39%であるのに対し、MTFは69%、FTMは56%）職場でのカミングアウトが大きな事項であることが示唆される。

### 3 非当事者

最後に非当事者による当該質問の記載内容を検討する。まず書き込みを行った人数を性自認別に見ると、男性が20.4%（157人中32人）、女性が27.3%（237人中92人）となり女性の方がその割合が高い。記載した単語数は、男性が合計で445語、女性は1,705語であった。1件当たりの平均は、男性が13.9語に対し、女性は18.5語であった。女性の方が当該設問に記載する割合が高く、また記載した語数も多いことが分かる。

実際に書き込んだ内容の語句を見てみると次のような語が抽出された。  
(Table 3)

Table 3 非当事者 性自認別

語	男性 32人 445 語	女性 92人 1705 語
女性	5 (1.1%)	55 (3.2%)
男性	4 (0.9%)	49 (2.8%)
ゲイ	2 (0.5%)	34 (2.0%)
性的マイノリティ	6 (1.3%)	14 (0.8%)
同僚	1 (0.2%)	17 (1.0%)
不快	2 (0.5%)	13 (0.7%)
LGBT	3 (0.7%)	12 (0.7%)
職場	2 (0.5%)	11 (0.6%)
差別的	2 (0.5%)	10 (0.6%)
ホモ	5 (1.1%)	9 (0.5%)
おかま	4 (0.9%)	8 (0.5%)
冗談	1 (0.2%)	11 (0.6%)
嘲笑	2 (0.5%)	10 (0.6%)
社員	1 (0.2%)	10 (0.6%)
気持ち悪い	6 (1.3%)	5 (0.3%)
仕事	3 (0.7%)	8 (0.5%)

職場で同僚や社員同士が話している内容に関して、書き込みがあった例として、次のような文章が挙げられる。

- ・「男ならば〇〇すべき」「女ならば〇〇すべき」という発言を聞く
- ・性的マイノリティを笑いの対象とするのを見聞きしたことがある
- ・「あの人はゲイ？」などの噂を聞いたことがある
- ・「ホモ」「レズ」「おかま」などの差別語を使用しているのを聞いたことがある
- ・差別的な言動を見聞きして不快になった

記入された語句の数を見てみると「性的マイノリティ」「ホモ」「気持ち悪い」という語を記入したのは男性の方が多い一方、「女性」「男性」という性別

に関する語に言及しているのは女性の方が多かった。これは女性が普段から性別に関する差別発言を聞いていたり、それに対して意識的になる機会が多いため記述量も多くなったと考えられる。

## おわりに

全体を通して本設問への記述量も多く、内容也多岐に渡っていることから、日本の職場で多くの差別的な言動が存在し、日常的に見聞きしている人が多いことが分かる。これらの差別言動に対しては、「悲しい」「怒り」「不快」など否定的な感情が述べられていた一方で、「諦めている」「仕方がないと思っている」という記載も見られた。

職場での差別発言に関する特徴として、上司や先輩、取引先など上下関係がある場での関係の困難さを指摘する記述も見られた（例「上司や先輩なので注意をしたいができない」「上の人から化粧をしなさいと言われた」「どのように伝えていいかわからず苦笑してごまかす」）。

また「差別とまではいかないかもしれないが…」「悪気があるわけではないのかもしれないが…」「差別するつもりではないのだろうが…」という前置きを使用する人も多かった。これは、発言している非当事者は差別的言動であると意識していない言動に対して、LGBTを含む性的マイノリティ当事者は違和感や差別的であると感じているということであり、当事者と非当事者で温度差があることを示している。このように当事者、非当事者間には差別言動に対して温度差があり、また職場における差別言動は、上司、先輩などの上下関係が働いたり、職場という関係の継続性があるため、より困難な状況が生み出されていることが予想される。

これらの非当事者からの発言に対して、当事者からは「(性的マイノリティについて)勉強をしていないのだからしょうがない」「知る機会がなかったのだろう」など啓蒙不足を指摘する声もあった。LGBTを含む性的マイノリティ当事者に対する差別的な言動への取り組みは、労働者の多様性を尊重し人権を守るという点で非常に重要である。それには例としてLGBTを含む性的マイノリティに関する正しい情報、どのような発言が差別的な言動となりうるのかなどの基本的な知識や、従業員が遵守すべき行動基準などを制定したり、それを



守るための施策などの取り組みが必要であろう。

当アンケートで行った質問項目を分析すると、職場における差別言動の有無と勤続意欲に関しては、**LGBT**を含む性的マイノリティ当事者が非当事者であるかに関わらず、差別言動が無い職場にいる人の方が**1. 職場での人間関係が良く、2. 仕事に対してやりがいを感じ、3. 仕事の勤続意欲が高い**という結果が得られている。この結果からも、職場において**LGBT**を含む性的マイノリティ当事者に対する差別的な言動が無くなるように働きかけていくことは、人権の問題として早急に取り組む必要があるだけでなく、職場全体の働きやすさや、やりがいとの連関という点においても意味がある。

今回の分析では、どのような語句がどのような属性によって多く使用されていたかの紹介に留まり、各記述内容を詳細に検討することは行っていない。また使用したソフトの関係上、係り受け分析等を実施していない。今後、より詳細な分析とそれに基づく施策の提案と実施が求められる。

## Footnotes

- <sup>1</sup> 「あなたが現在自認している性別をお答えください」（選択肢：男性、女性、Xジェンダー・中性、その他）
- <sup>2</sup> 「あなたが好きになる相手の性別について、お答えください」（選択肢：男性、女性、両性（男性、女性）相手の性別は問わない、該当なし（特定の人を好きにならない）、その他）
- <sup>3</sup> 「あなたが出生時に戸籍や出生届に記載された性別をお答えください」（選択肢：男性、女性）
- <sup>4</sup> キーワードとして登録を行った語  
 気持ち悪い、きもい、キモい、きもちわるい、不愉快、飲み会、差別発言、差別的発言、そっち系、あっち系、そっち、あっち、ソッチ系、アッチ系、おかま、オカマ、ソッチ、アッチ、仕方ない、同性愛者、LGBT、クィア、LGBTQ
- <sup>5</sup> 同義語としてまとめた語（左側の語としてまとめた）

使用した語	同義語として含む語
友達	友達 友 友人 ともだち
気持ち悪い	気持ち悪い きもい きもちわるい 気持ちが悪い キモイ キモい
カミングアウト	カミングアウト カムアウト カム アウティング
ムシ	無視 しかと ムシ
ゲイ	ゲイ gay GAY ゲー
ホモ	ホモセクシャル ホモ ほも ホモお ホモセクシュアル
レズビアン	レズビアン ビアン lesbian les レズ
バイセクシュアル	バイセクシュアル バイ バイセク
パワハラ	パワハラ パワーハラスメント
悪口	悪口 陰口
性的マイノリティ	性的マイノリティ 性的少数者 セクシュアルマイノリティ セクシュアルマイノリティー セクシャルマイノリティ セクシャルマイノリティー セクマイ マイノリティ
普通ではない	普通ではない ありえない アブノーマル
そっち系	そっち系 アッチ系 そっち あっち アッチ ソッチ コッチ系 こっち こっち系 あっち系
オープン	オープン オープンリー
おねえ	おねえ オネエ オネエ おねえキャラ オネエキャラ
悩み	悩み 悩む 悩
掘る	掘る 掘られる 掘られた 掘ら
セクハラ	セクハラ セクシャルハラスメント セクシュアルハラスメント
おかま	おかま オカマ おかまちゃん
嘲笑	嘲笑 笑う 笑って 笑い話 笑 笑い
からかう	からかう からかい 茶化す ふざける ふざけて 揶揄

## 同義語としてまとめた語 続き

使用した語	同義語として含む語
トランスジェンダー	トランスジェンダー 性同一性障がい GID 性同一性障害 性同一性障碍 トランス
MtF	MtF MTF mtf
FtM	FtM FTM ftm
冗談	冗談 ジョーク
死ね	死ね 死ぬ 死ねば 死んで 死
男らしさ	男らしさ 男らしく 男らしい
女らしさ	女らしさ 女らしく 女らしい
恐怖	恐怖 怖い こわい
不快	不快 不愉快 気分が悪い
困る	困る 困惑 こまる 困った
怒り	怒り 怒る 憤り 怒
隠す	隠す 隠し ひっそり
容姿	容姿 外見
服装	服装 服 洋服
なよなよ	なよなよ ナヨっと 弱い 女性的
イライラ	イライラ イラっと いらっと
多様性	多様性 ダイバーシティ
悲しい	悲しい 悲し 悲しく 悲 悲しむ
女性	女性 女 女の子
男性	男性 男 男の子
LGBT	LGBT LGBTQ

- <sup>6</sup> レズビアンとレズという語は印象が異なるが、それぞれに数えた場合、各語の数が少なくなり抽出が不可となるため同じ語として登録しカウントした。

## **Case Analysis of Discriminatory Speech in "Survey on LGBT Issues in the Work Environment 2014"**

**Izumi NIKI**

This paper reports on discriminatory speech and behaviors directed against gender and sexual minorities — LGBT, or Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender people — in the Japanese workplace. The data was collected in the "Survey on LGBT Issues in the Work Environment 2014," which was conducted by the non-profit organization Nijiirō Diversity and the Center for Gender Studies at International Christian University in 2014. 41.0% of the LGBT people and 25.1% of non-LGBT people who answered the questionnaire elected to answer an open-ended question asking if they have seen or heard about discrimination directed at LGBT people in their workplace. Author used quantitative methods to evaluate which words were used when referencing discrimination and found that "male," "female," "gay," "ridicule," "homo," "gross," "okama (lit. "rice pot," equivalent to English "bucket," derogative euphemism for homosexual or transgender)," "coming out," "marriage," "lesbian," and "sexual minorities" were used frequently. In addition, because this questionnaire asked about a workplace context, words like "workplace," "colleague," "boss," and "employee" came up frequently, but so did "nomikai (social drinking party)," "neta (joke material)," "socchi-kei (lit. "one of those," euphemism for homosexual)," and "uwasa (gossip)."

Among LGBT people, words concerning one's identity were used more often, for instance the word "lesbian" was often used by people who identified as women, and "coming out" was frequently used by self-identified transgender people, as compared to cisgender people.

People reacted negatively to discrimination, using words such as "sad," "offended," "discomfort," and "anger," and some people stated that they had "given up" or "resigned" themselves to the situation. From this

research, it is apparent that discrimination towards LGBT people in the workplace is closely related to the traditional Japanese social hierarchy. This organizational uniqueness, closeness, and the continuity of relationships within the workplace make it more difficult for LGBT people to deal with a discriminatory environment.

To encourage equity and to eliminate discrimination in the Japanese workplace is an urgent human rights issue, and at the same time, promoting diversity in the workplace is meaningful as it engenders positive attitudes toward the organization from both LGBT and non-LGBT people.

**Keywords:**

LGBT, sexual minorities, workplace, discrimination, discriminatory speech and behaviors

## **Interdependence, Body Empowerment and Self-Esteem From a Feminist (Dis) ability Perspective Juliana Buriticá ALZATE**

### **Introduction**

Feelings of isolation, loneliness and personal insecurity are closely related to contemporary ideas of success and myths of independence and self-sufficiency. It is also common to find evidence of both men's and women's dissatisfaction with their bodies or with who they are. How can we replace these feelings with a sense of togetherness and empowerment? Through an account of different representations of bodies and exploring the myriad of ways people can feel about their own bodies, this paper offers a possible path to embrace our bodily existence and its connection to self-esteem. The experiences of shame and pride are not mutually exclusive, instead they "dance, spar, sit at the same table" (Clare, 2012, pp. 461-462). Therefore, an openness to the nuances between shame and pride, and between. body hatred and body love, is required.

This paper explores the theme of interdependence in connection to body empowerment and self-esteem from a feminist disability perspective.<sup>1</sup> Instead of defining interdependence univocally, this paper takes in its multiple meanings within feminist disability scholarship. Feminists and scholars of gender, sexuality and disability have studied interdependence and caring from different angles. On the one hand, they offer critical views on dependency and independency issues, or problematize how caring for others has been considered an integral part of the social role of women, or stress the importance of including an ethics of care in conversations about social justice (Taylor, 2014, p.109). On the other hand, disability scholars have studied what it means to be cared for, how that care often becomes another form of oppression, and the importance of building an inclusive and accessible society (p.109). Feminism, gender,

sexuality and disability intersect, overlap and inform each other in several ways (McRuer, 2003, p.97). Therefore, when adopting a feminist disability perspective a particular view of interdependence and new possibilities for body empowerment and self-esteem emerge.

As an able-bodied researcher, I am confronted with the question of entitlement and what authority I have to write about the experience of disabled bodies from an outsider's point of view. In order to learn about disability and raise awareness of the multiple ways a feminist disability perspective enriches studies of embodiment and self-esteem, there is a need to listen to and engage directly with stories about living with disability and academic accounts on disability. Just as feminism, queer activism and a larger civil rights movement need all kinds of allies, disability scholarship and activism is certainly open to able-bodied allies. That being said, this paper takes interest in the experiences of physically disabled bodies, and argues that a feminist approach allows us to understand that we are all interdependent, and that this recognition can contribute to positively inform our body image and self-esteem.

Henrietta L. Moore's notion of "ethical imagination" is significant to this paper's approach. In her words, ethical imagination refers to "the forms and means through which individuals imagine relationships to themselves and others... the way in which technologies of the self, forms of subjectification and imagined relations with others lead to novel ways of approaching social transformation" (Moore, 2011, p.291). Basically, it is the recognition of the fact that we share this world with others, with all different kinds of others, who live a differently embodied life; and our awareness of others, and being different from them, is indispensable to our own sense of self.<sup>2</sup> In fact, according to Butler (2004), "my very formation implicates the other in me ... my own foreignness to myself is, paradoxically, the source of my ethical connection with others" (p.46). Moreover, there is a fundamental dependency on anonymous others; that is, there are people I do not know

or/and will never know on whom my life depends (p.xii). Hence, even when there is an issue that affects others and does not affect us directly, we have the capacity to engage with this issue, to put oneself in another's shoes, and connect with and learn from their experiences.

Society is not composed of two split groups; with self-sufficient, individual, able-bodied subjects on the one hand, and marginal, dependent, disabled subjects on the other. We are all dependent on each other, or rather, we are all interdependent (Taylor, 2014, p.111). Dependency is a basic human condition: "human beings begin life dependent on others and most of us will end life dependent on others" (p.112). In other words, "the body is itself — whatever else it is — a site of dependency. None of us come to the world independently" (Butler in Taylor, 2009, p. 210). Thinking about interdependence involves challenging the fiction of independence by simply acknowledging that "no one escapes dependency in a lifetime" and that "interdependence begins with dependence" (Kittay, 1998, pp.xii-xiii).

Sunaura Taylor — artist, writer and activist whose research areas include animal rights and disability — points out that disabled people have been labeled as dependent and stigmatized as burdensome (Taylor, 2014). Moreover, able-bodied people often pose as if they have overcome this basic dependency and live in a delusion of independence (Taylor, 2014; Taylor, 2009). These ideas of self-sufficiency and independence are a kind of social myth that affects the image of disabled people. They are perceived as more dependent, when in reality "we are all interdependent, that is, dependent on different structures and on each other" (Taylor, 2009, p.187).

As Taylor (2014) emphasizes, the main issue here "is not that able-bodied people and disabled people are equally dependent, but rather that the dichotomy between independence and dependence is a false one" (p.113). Dependency is a real part of being alive in this world but manifests itself in varying degrees. An alternative to the dichotomy between independence



and dependence is interdependence. In fact, “the whole planet is interdependent” (p.113). The notion of interdependence will be further explored in three main sections about: 1) mending the gap between body and self and intersubjectivity, 2) reciprocity and care, and 3) body empowerment and self-esteem through experience-based accounts of disability.

### **1 Body, Self and Intersubjectivity**

Action is anchored to our bodies, yet it is via our bodies that we become vulnerable to the actions of others. Butler (2004) stresses that “the skin and the flesh expose us to the gaze of others, but also to touch, and to violence, and bodies put us at risk of becoming the agency and instrument of all these as well” (p.26). In other words, the body implies vulnerability and agency, and it has both a material and personal dimension as well as a discursive and social one. In this way, the body is partly created within social life, which means that—without us wanting to, or even being aware of it—our bodies already connect us to others. To claim that the body is autonomous and independent is a denial of this social dimension, of this “primary and unwilling physical proximity to others” (p.26).

The idea that we possess a body is evidenced through the expression “my body,” which implies a division between our body and our mind or self. The dualism between body and mind plays a cognitive role in figures of speech; however, the myth of the supremacy of the mind over one’s body has been widely refuted.<sup>3</sup> The lived experience of disability reshapes the relationship between body and self (Lindgren, 2004, p.148). For instance, “the notion of having a body implies that the self exercises control over and even ownership of the body. Illness and disability reveal that the body has a mind of its own” (Lindgren, 2004, p.152). Hence, the accounts of people with disabilities do not at all solidify the idea of the self as stable and unified—based on the mind/body dichotomy—but rather support ideas

of selfhood grounded in bodily experience (Lindgren, 2004, p.148).

This approach leads to incorporating difference and change into models of subjectivity and identity. Feminism, studies of gender, sexuality (especially queer theory) and disability converge in conceiving identity as being fluid, fractured and multiple.<sup>4</sup> Similarly to gender and sexuality, disability also brings to light the dynamism of identity:

Disability is an identity category that anyone can enter at any time, and we will all join it if we live long enough. As such, disability reveals the essential dynamism of identity. Thus, disability attenuates the cherished cultural belief that the body is the unchanging anchor of identity. Moreover, it undermines our fantasies of stable, enduring identities in ways that may illuminate the fluidity of all identity... The body is dynamic, constantly interactive with history and environment. We evolve into disability. (Garland-Thomson, 2004, pp.267-268).

This insight blurs the boundaries between ability and disability, depicts identity as contextual and historic, and brings together embodiment and our sense of self. The links between body and self are also displayed in the phrase "our bodies, ourselves," which was originally a slogan inspired by the women's health movement in the 1960s and '70s in the United States that spread globally.<sup>5</sup> It fosters the recognition of the intimate connection between body, mind, self and subject:

However alienated male-dominated culture makes us from our bodies, however much it gives us instruments of self-hatred and oppression, still our bodies are ourselves. We move and act in this flesh and these sinews and live our pleasures and pains in our bodies. If we love ourselves at all, we love our bodies. (Young, 2005,

p.80)

Here Young (2005) asserts the connection between the social and personal dimensions of the body, as well as the vulnerability and agency entailed in our bodily existence. From this passage we can also infer that the connection between loving our bodies and loving ourselves can translate into a connection between body empowerment and self-esteem. When we understand our existence as “embodied selves” we can grasp how our body image affects our self-esteem and vice versa.

Reiterating the social dimension of the embodied-self, a subject is always caught up in relationships with other subjects. Following Butler’s (1990) postulates regarding gender, no one gets to have a gender on their own. We need recognition for one’s gender identification, which in turn, requires a supporting response from the surrounding context (Taylor. 2009, p.208). Similarly, nobody (or no body) gets to understand their own place in the social order without the recognition of others, hence the importance of addressing the notion of intersubjectivity.

Intersubjectivity evokes “a performance and its reception, the origination of an idea and its recognition. Because of the indeterminacy of the body and its variable relation to gender, gender is an interdependent phenomenon” (Abrams, 2011, p.78). This suggests a connection between intersubjectivity and interdependence, and how both phenomena shape our subjectivity and identity (Butler, 1990; 2004). For instance, gender, sexuality and disability are constructed through intersubjective and interdependent relationships and shape our subjectivity and sense of identity. Therefore, the processes towards body empowerment and self-esteem can also be thought of as interdependent, intersubjective and with a direct impact on our identity and subjectivity. We are all entangled in interdependent relationships with others and the environments that surround us; which require a positive take on dependency, vulnerability

and agency.

## 2 Reciprocity and Care

Intersubjectivity not only entails interdependent relationships but also subject-subject relations. The main issue here is how we can recognize the other as someone “with whom it is possible to have a dialogue based on mutual recognition” (Moore, 2007, p.72). This subject-subject model requires recognizing others as both “like” and “other than” me; thus, it incorporates ideas of equality and difference.

Following Nussbaum (2001), a model that conceives citizens as “rough equals,” who cooperate with each other only through supply-and-demand relationships, needs to be revised because it “effaces the more asymmetrical forms of dependency that human life contains: the need for care in infancy, extreme age, and periods of severe illness or a lifetime of severe disability” (B9). There is a need to create a new model in which the needs of the cared for are met with dignity, without exploiting the providers of care (who are largely women — putting the equality of women at stake) (B9). In other words, “instead of picturing one another as rough equals making a bargain, we may be better off thinking of one another as people with varying degrees of capacity and disability, in a variety of different relationships of interdependency with one another” (B9). This position is also supported by Kittay (1998) who proposes the development of “an equality wherein the condition of its possibility is the inevitability of human interdependence: the interdependence which is featured both literally and metaphorically in the aphorism that we are all some mother’s child” (p.50). The notion of interdependence needs an extended notion of reciprocity that recognizes relations of nested dependencies, and the ethics behind the colloquial phrase “what comes round comes round”; so that “if someone helps another in her need, someone, in turn, will help the helper when she is needy” (p.107).

Taking this into account, reciprocity does not necessarily mean equality but rather mutual dependency. A feminist disability perspective emphasizes the need for mutual care as well as an awareness of the asymmetries of care relations between givers and receivers of care. However, this type of reciprocity is threatened by ideas of independence that feed notions of inequality within these relationships. For example, inequality emerges when there are cases of economic dependence, helplessness and subordination (Morris, 1991; Wendell, 2004). In this case, when we prize individualistic autonomy and independence, we fail to notice that we all need care and assistance to live (Garland-Thomson, 2004, p.268).

Interdependence implies dependence. However, the word "dependence" has both negative and positive meanings; it can be associated with helplessness and subordination, or with reliability and trust (p.268). In order to have a positive view on interdependence we must overcome the negative connotations of dependence and embrace its positive aspects; that is, to move closer to a model of reciprocity and mutual trust.

One of the effects of negatively judging dependency, or preferring independence over dependence, is that asking for help becomes a sign of weakness (Taylor, 2009, p.196). Therefore, help is associated with embarrassment and insufficiency (p.196). As Wendell (2006) writes, "dependence on the help of others is humiliating in a society which prizes independence" (p.252). Yet, whether disabled or nondisabled, everybody needs help. In this context, the very act of asking for and providing help or assistance is already a way of challenging the type of individualism that is based upon an ideal of independence.

In addition, there are particular groups of people who need constant help from others to survive, and as long as independence is considered a strength and a necessary condition for respect and self-esteem, these groups are doomed to be devalued (p.252). Consequently, when people

living with disabilities see the possibility of living independently (as any other able-bodied person is pretending to) they will likely pursue it. In a way, the pressure and oppression attached to the ideal of independence can be diminished if we embraced dependence instead. In other words, “acceptance of dependency may fit the needs of some much better than the struggle against it” (Miller & Gwynne, 1972, p.88, quoted in Morris, 1991, p.131).

Embracing our mutual dependencies points to simultaneously “caring” and being “cared for,” to both asking for and providing help. According to Wendell (2006), women who became disabled as adults experience a transformation from being “carers” (taking physical care of others, often husbands and children) to being “cared for” (p.252). Wendell (2006) also points out that when looking at the stories of recently disabled adult women, it is possible to identify their struggle with shame and loss of self-esteem, which suggests that there is indeed a cultural correlation between independence, pride and self-esteem (p.252).<sup>6</sup> It is thus pertinent to question individualistic discourses that entrench normative prejudices related to ability, sexuality and embodiment.

Eli Clare (2012) — poet, essayist and speaker about disability, queer and trans identities, and social justice — explains how this theme belongs to a broader discussion about gender roles and disability:

To be female and disabled is to be seen as not quite a woman; to be male and disabled is to be seen as not quite a man. The mannerisms that help define gender — the ways in which people walk, swing their hips, gesture with their hands, move their mouths and eyes as they talk, take up space with their bodies — are all based upon how nondisabled people move ... The construction of gender depends not only upon the male body and the female body but also upon the nondisabled body. (Clare, 1999, p.112)

The intimate relationship between gender identity and ability often leads to misconceiving disabled people as genderless, or less female or less male, and by extension, sexless (p.112). However, gender categories are fabrications that rely on heterosexual and able-bodied assumptions (Butler, 1990). To be aware of how ideals regarding gender, ability and independence are interrelated and socioculturally constructed, is a necessary step towards moving away from trying to fit these impossible ideals, but rather accept and affirm gender, sexual and bodily diversity together with interdependence.

"To be caring" has been considered a quality generally assigned to (able-bodied) women. Yet, we all need to be caring and cared for in multiple ways throughout our lives. In this way, "care and needing care are sites that rather than trying to avoid, we need to be radically attentive to" (Taylor, 2014, p. 124). Interdependence and reciprocity are ways of paying attention to care and the need for it.

Wendell (2006) points out that women with disabilities often interact with their care-givers through models of reciprocity (p.252). Reciprocity is an attempt to recognize each other's needs and build relationships in which we can rely on each other, ask for, receive and provide help, cultivate feelings of empathy and trust and respect each other's boundaries (p.252). This model of reciprocity is a concrete example of how a positive view on interdependence and an abandonment of our cultural obsession with independence and gender roles can benefit all of us.

### **3 Body Empowerment and Self-Esteem**

Disability is often regarded as a private matter, a personal or family issue, rather than a matter of social responsibility (Wendell, 2006, p. 246). However, from a feminist disability perspective, the well-known expression "the personal is political" can be extended into the notion that disability is socially constructed. This posture aligns with the so-called social model of

disability, which “views the restrictions in the lives of disabled people as a result of environmental, behavioral and institutional structures in society” (Inahara, 2009, p.9).<sup>7</sup> This model claims that people are being disabled not only by their bodily conditions or medical diagnoses, but also by society itself. Therefore, disability is not only an individual or personal issue but also a social and political one.

Experiences of disability are available to us through literature—fictional, nonfictional and academic. It is through authors with disability and their account of their bodily experience that we can access their personal and social realities and reflect about them as well. This section looks at different accounts from four disabled authors (Inahara Minae, Ototake Hirohada, Eli Clare and Sunaura Taylor) through the lenses of interdependence, body empowerment and self-esteem.

Firstly, we will look at Inahara Minae’s story — professor and researcher on feminist psychoanalysis, disability theory and philosophy of the body. For Inahara (2009) the search of an image of physical disability that she can identify with is crucial: “an image that does not suggest pity or misfortune, but one that reflects the complexity, fluidity, multiplicity, and vulnerability of all modes of embodiment” (p.3). This suggests that rather than considering disability —or any other mode of embodiment —negatively, we must recognize that all bodily life brings in vulnerability, change and diversity.

As previously mentioned, we share this world with all kinds of others, so intersubjectivity/inter-corporeality is a main aspect of our bodily life. Inahara (2009) embraces intersubjectivity and interdependence in terms of love and connection: “love becomes an expansive feeling for the connection to others that is vital to all of us” (p.164). In fact, she proposes that our images of embodiment are deeply related to connection and love:

Love operates to connect others together. Love is, to me, crucial in



the experience of othering the self and in the process of undoing that otherness. Thus, the process of undoing this otherness is to return the self-love; this functions to encourage us to accept the "Other." I love my body with a nostalgia for the pre-symbolic stage, when my body was not distinguished as the disabled "Other." I keep loving my body rather than forcing myself to distinguish it as the "Other" — the lack of able-bodiedness. (p.163)

This is the conclusion of Inahara's last chapter in her book, *Abject Love*, in which she explores the shift from self-denial to self-acceptance of her own physical disability through an account of the movie *E.T The Extra Terrestrial*, while also addressing Julia Kristeva's (1982) theory of abjection and her notion of being a stranger to oneself (Inahara, 2009, pp.133-134).<sup>8</sup> Inahara accounts the process of re-signifying the "Other" through returning to self-love at the moment where society and language had not yet turned her into the "Other." Inahara (2009) undergoes a process of expelling everything that is not the subject, expelling the negativity and embracing the fluidity — the changing nature — of her body (p.134). She is following personally and theoretically Kristeva's (1982) ideas on abjection and subjectivity: "I expel myself, I spit myself out, I abject myself within the same motion through which "I" claim to establish myself" (p.3). Hence, abjection is necessary to the formation of the subject. The impact of Kristeva's theory in Inahara's process of achieving self-esteem is contained in the following statement:

Without imaginary abjection, the image of *E.T.* would have left me with a negative image of physical otherness. When I watched this film, I reconstituted the images of both *E.T.* and myself as "lovable" and acceptable, and I started loving my embodied self. (Inahara, 2009, p.159)

This passage shows how Inahara managed to see otherness within herself and develop a positive image of physical otherness in order to love and accept her embodied self. The process of loving our bodies, accepting ourselves and developing self-esteem is difficult. There are two reasons—the first being the need to go through a process of re-signifying otherness and difference, and the second having to face the pressure imposed by the ideal of the able-bodied independent subject. Along these lines, in an interview for the Japan Times, Inahara observes that:

Thinking about disability equals contemplating ability. It questions human existence. “Be normal!” we are told. But what does that mean? We have to free ourselves from the archetypes of what a human being is. I want to share my perspective that every disabled and every abled person has a different view on life. All are worth looking at and all are beautiful. (Kawaguchi, 2012, para. 3)

This insight also brings together disability and ability, and serves as an invitation to recognize and celebrate body diversity. This may result in the proliferation of alternative visions of beauty and the deconstruction of normalcy. The very notions of a normal and ideal body are herein challenged.

Next, we will look at Ototake Hirotada’s story—he is a sports journalist, a primary school teacher, and has published several books about his own experience that are widely read in Japan. In Ototake’s autobiography *Gotaifumanzoku* 五体不満足 *No One’s Perfect* (1998/2003), we find clues on how interdependence is a key element in developing body empowerment and self-esteem. It is a narrative about acceptance, on personal and societal levels, and it is also a tale about care and interdependence. For Ototake (1998/2003), the support of his family, friends and teachers was very important to his development and self-esteem. He learned the importance

of interdependence and assistance at a very early age. In his own words:

In today's competitive society where one is always expected to excel, we're losing sight of what's obvious — when you see someone having trouble, you lend a hand. We've been hearing for a long time now about the breakdown of communities whose members used to help one another. It could be that the people who come to the rescue, the people who can rebuild a more fully human society, will be people with disabilities. (Ototake, 1998/2003, p.81)

Ototake (1998/2003) puts forward a model of interdependence and reciprocity, of “doing something for other people, for society. Living in a caring way. Understanding and being understood by as many people as possible” (p.169). In other words, we could say that both assistance and care are at the heart of all human connectivity, which can be understood as a fundamentally human feature: “connection is why we are here. It's what gives purpose and meaning to our lives” (Brown, 2010).

Body empowerment and self-esteem boil down to having a deep sense of worthiness — being worthy of love, belonging and connection — to being able to say, without hesitation: “I'm good enough” (Brown, 2010). This is needed to strengthen human relations and put in practice interdependence with reciprocity. Ototake's story exemplifies this feeling of “being enough,” of loving oneself in a fully comprehensive way. An example of positive reaffirmation in his life is the way he appreciates the scars on his back due to several operations he underwent when he was growing up. His physical scars are not a source of shame or disgust, but rather, of pride. As he himself said, they became his medals: “V” for victory (Ototake, 1998/2003, p.54). Clearly, he incorporates all of his physical traits into a positive discourse of himself. Ototake (2013) declares that, “I am by no means a perfect person. Even so, I like myself. Everything about me,

including all my incompetence, my faults, my weaknesses and the fact that I don't have arms or legs; I am Ototake Hirotsada, and I'm a lovely person" (p.238).<sup>9</sup> In this process of loving himself, Ototake also thanks all of those who helped him, in particular, his parents. He extends his sense of gratefulness by addressing, in general, parents who raised children who can practice positive self-affirmation (p.238).

We can also find the importance of connection, interdependence and pride in Eli Clare's story — previously introduced as a poet and writer on disability and queer issues. Clare (1999) points out that "*queer* and *cripple* are cousins: words to shock, words to infuse with pride and self-love, words to resist internalized hatred, words to help forge politics. They have been gladly chosen — *queer* by many gay, lesbian, bi, and trans peoples, *cripple* or *crip*, by many disabled people" (p.84). Accordingly, one path towards empowerment is re-signifying language that has been used to reproduce shame and oppression.

Clare (2012) also tackles the ways in which shame inhabits our bodies and how to resist its habitation. According to Clare (2012) "shame lives in the mirror and the camera, and its impact is huge, ranging from low self-esteem to addiction, from infrequent healthcare to suicide" (p.456). Due to its impact, dealing with body shame is a priority, and one way of doing it is by making our bodies home (p.464). The process of re-signifying the body into a positive experience requires personal commitment:

In the mirrors, I would see *ugly, stupid, wrong*. And I would say back, "Beautiful, strong, right"... Sometimes I would believe myself, other times not... Slowly one by one, I unpacked the lies that backed my shame. I sat in community. I pounded words out onto paper. I read disability politics. I cannot say I am done; I doubt there is one definite end to this struggle, one complete passage between shame and pride. (Clare, 2012, p. 463)

As we can elicit from this passage, making our bodies our home is a constant challenge and dealing with shame, a daily effort. Yet, it is through interacting and sharing his experience with others, reading and writing that Clare (2012) manages to articulate his bodily experience and embrace his embodied self. He also turns to interdependence and the importance of being part of a supporting network of care in order to be able to build a positive body image. Addressing the providers of assistance, Clare (2012) writes:

We need services that are nonjudgmental, that partner with us as we work to make our bodies home, that grant us self-determination, that frame trans-ness not as a pathology but as a human variation, that give us resources and tools in resistance to shame. Sometimes our lives depend on it. (p.463)

This passage highlights the importance of interacting with providers of care on a reciprocal level together with an appreciation of body and gender diversity. From this account we can learn that the task of making our bodies home — of accepting our bodies — is both personal and political; making it a matter of social responsibility. As Clare (2012) puts it: “if we are to make a sustaining community that profoundly challenges shame, we need to acknowledge the collective and political implications that trail our personal, individual decisions” (p.464).

This posture aligns with the task of thinking of body empowerment, self-esteem and connection in political terms. For Sunaura Taylor — previously introduced as an artist and scholar on disability and animal rights — the moment when she went from body shaming to body acceptance was when she realized her issues were not only personal, but also involved others around her, triggering a new connection within her. Taylor (2009) remarks that:

I think all the feelings that I had grown up with—that my body was abnormal, that I was deformed, that it was a tragedy—all these sorts of things that I'd really sort of internalized as being my own personal problem suddenly blasted open and then I just realized how much they're political and they're civil rights issues, so it made me more determined to figure out a way of interacting physically with the world. (in Taylor, 2009, p.196)

Stressing the theme of interdependence in political action, Taylor highlights that disability is not personal, but social and we can identify the ways in which empowerment is involved in that very recognition. We cannot find solutions to problems of ability, disability and gender normativity on our own (Butler in Taylor, 2009, p.209). There is a limit to individualism because we are part of a social space, we need different kinds of recognition and also, it is only in joint action with others that we can change what is normative and ideal and what is not (p.209). Therefore, "underlying all this is the idea that we are interdependent as we try and attract certain social transformations that affect us at very personal levels" (p.209).

For Taylor, art is a fundamental part of who she is, and has played a significant role in her way of viewing and understanding both herself and the world around her. Amongst Taylor's paintings, we find several self-portraits that articulate her disability, illustrate ways of building positive body images, and link art to self-empowerment. In her own words, "my paintings are not at all only about the body, but the body is inevitably an aspect of my relationship with whatever it is that I am seeing" (Taylor, 2006). Taylor's works are not only personal and emotional portraits but also political statements on war, ideas of normalcy, and issues of identity (Taylor, 2004). Hence, her art and exhibitions serve as a platform to activism. Both Taylor's art and scholarship show consistently the links

between the personal, social and political.

Finally, Taylor (2014) goes straight to the point when she writes that “vulnerability and dependence can be unsettling as they are states that require intimacy, empathy, and self-reflection, but they also hold the potential for new ways of being, supporting and communicating — new ways of creating meaning across differences” (p.124). Based on this assertion, both vulnerability and dependence are key elements of interdependence, and once we embrace them we will be able to re-signify our body image and self-esteem.

## **Conclusion**

This paper explored the theme of interdependence while drawing on personal and theoretical accounts from authors with/on disabilities. Interdependence is a basic condition shared by all human beings, and it is a key term that dismantles the myths of independence and self-sufficiency. From a feminist disability perspective — by bringing together aspects of disability studies and gender and sexuality studies including queer theory — we are encouraged to challenge ideals of normalcy and re-examine the notion of independence as a sign of liberation and a condition to self-respect and self-esteem. Interdependence is featured as a way to approach body empowerment and self-esteem. Coming to terms with interdependence implies embracing our mutual dependencies, vulnerabilities and adopting relationships of reciprocity and mutual care. Through four stories of body empowerment and self-esteem, taken from testimonies by a few selected authors with disability on disability, we can understand that there is not just one magic formula to achieve body empowerment and self-esteem; rather, these processes emphasize fluidity, multiplicity and fragmentation.

The word “body empowerment” involves thinking of the body in terms of ability, in terms of the power of action, as a bundle of different

capacities. Also, the word “self-esteem” highlights the importance of respect of one’s own body. It also indicates love, appreciation and gratefulness for being who we are.

We are all wired to be interdependent, to both give and receive, to ask for and provide help, to mutually depend on each other. Yet, interdependence does not deny multiple modes of embodiment or particular experiences; on the contrary, it affirms fluidity and diversity. In short, interdependence is about acknowledging that inherent vulnerability and dependency, and how it connects us with each other.



## Footnotes

- <sup>1</sup> Morris (1991), Wendell (2004) and Garland-Thomson (2004; 2005) have worked extensively on feminist theorizing from a disability perspective. For more on feminist disability studies see Silvers (2013). Also, feminist philosophers such as Annette Baier (1987), Eva Kittay (1998), Martha Nussbaum (2001), and Iris Marion Young (1990) have worked on theories of inclusion that have been both influenced by and influential to disability studies. Their works address ethics of trust, care, virtues of dependency and equality. Specifically, Baier and Nussbaum address the theme of interdependency.
- <sup>2</sup> Intersectional identity has been theorized extensively within feminist scholarship (see Butler, 1990; Bordo, 1993; Clare, 1999; Smith, B.G. & Hutchison, B, 2004). On the difference between identity and identification, see Butler, 1990.
- <sup>3</sup> For theories challenging the Cartesian mind-body split, particularly, the primacy of mind over body, see feminist philosophy and/or post-structuralist thought. For example: Irigaray, 1985; Deleuze & Guattari, 2004; Grosz, 1994.
- <sup>4</sup> The fluidity of identity and subjectivity has been theorized within gender and sexuality studies, queer theory and disability studies. (See Grosz, 1994; Butler, 1990, Bordo, 1993; Garland-Thomson, 2004; Davis, 2006)
- <sup>5</sup> Our Bodies, Ourselves (OBOS) also known as the Boston Women's Health Book Collective, is a non-for-profit organization promoting girls' and women's reproductive health and sexuality. "Our Bodies, Ourselves" is their landmark publication and has been translated into 25 different languages. The first edition was published in 1970. This best-seller has also been translated into Japanese as *からだ・私たち自身 karada watashitachi jishin*. OBOS coined and spread this slogan globally for the body politics movement.
- <sup>6</sup> This loss of self-esteem and experiences of shame are not exclusive to recently disabled adult women, but also to adult men. For example, newly disabled athletes (either men or women) would find it particularly challenging to embrace their new life with disability.
- <sup>7</sup> Within disability studies there is an important distinction between the medical model of disability and the social model of disability, as well as between impairment (biological) and disability (social). Inahara (2009) explains: "the

medical model finds the problem with disabled individuals rather than with society and it suggests that the way in which we solve the problem is to change the disabled individual to fit into society, rather than improve social conditions to accommodate the disabled individual" (p.8).

<sup>8</sup> According to Kristeva (1982) what causes abjection is "what disturbs identity, system, order. What does not respect borders, positions, rules. The in-between, the ambiguous, the composite" (p.4). For more on theory of abjection see Kristeva, 1982; Kristeva, 1991.

<sup>9</sup> The English is my own translation from the original text in Japanese:

「僕は、けっして完璧な人間などではない。それでも、自分が好き。至らない自分、欠点だけの自分、弱い自分、手足のない自分——そんなあれやこれやを全部ひっくるめて、僕は乙武洋匡という人間を、いとおしく思っている」(Ototake, 2013, p. 238).

## References

- Abrams, K. (2011). Performing interdependence: Judith Butler and Sunaura Taylor in the Examined Life. *Columbia Journal of Gender and Law*, 21 (2), 72-90.
- Baier, A. (1987). The need for more than justice. In M. Hanen & K. Neilson (Eds.), *Science, morality, and feminist theory. Canadian Journal of Philosophy*, supp. vol.13, 41-56.
- Bordo, S. (1993). *The unbearable weigh: feminism, western culture and the body*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Brown, B. (2010, June). The power of vulnerability [Video file]. Retrieved January 30, 2015, from [https://www.ted.com/talks/brene\\_brown\\_on\\_vulnerability](https://www.ted.com/talks/brene_brown_on_vulnerability)
- Butler, J. (1990). *Gender trouble: feminism and the subversion of Identity*. London: Routledge.
- Butler, J. (2004). *Precarious life: the powers of mourning and violence*. New York: Verso.
- Clare, E. (1999). *Exile and pride: disability, queerness and liberation*. Cambridge: South End Press Classics.
- Clare, E. (2012). Resisting shame: making our bodies home. *Seattle Journal for Social Justice*, 8 (2), 455-465.
- Davis, L. (Ed.). (2006) *The disability studies reader*. New York: Taylor & Francis Group.
- Deleuze, G. & Guattari, F. (2004). *A thousand plateaus: capitalism and schizophrenia* (B. Massumi, Trans.) London: Continuum. (Original work published 1980).
- Garland-Thomson, R. (2004). Integrating disability, transforming feminist theory. In B.G. Smith & B. Hutchison (Eds.), *Gendering disability*. New Jersey: Rutgers University Press.
- Garland-Thomson, R. (2005). Feminist disability studies. *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 30 (2), 1557-1587.
- Grosz, E. (1994). *Volatile bodies: toward a corporeal feminism*. Bloomington: Indiana University Press.
- Inahara, M. (2009). *Abject love: undoing the boundaries of physical disability*. Lexington: VDM Verlag Dr. Müller.
- Irigaray, L. (1985). *Speculum of the other woman* (C.G.Gillian, Trans.). New York: Cornell University. (Original work published 1974).
- Kawaguchi, J. (2012, May 22). Minae Inahara, part-time lecturer at Rikkyo University.

- The Japan Times*. Retrieved January 30, 2015, from <http://www.japantimes.co.jp>
- Kittay, E. (1998). *Love's labor: essays on women, equality and dependency*. New York: Routledge.
- Kristeva, J. (1982). *Powers of horror: an essay on abjection* (L.S. Roudiez, Trans.). New York: Columbia University Press. (Original work published 1980).
- Kristeva, J. (1991). *Strangers to ourselves* ( L.S. Roudiez, Trans.). New York: Columbia University Press.
- Lindgren, K. (2004). Bodies in trouble: identity, embodiment and disability. In B.G. Smith & B. Hutchison (Eds.), *Gendering disability*. New Jersey: Rutgers University Press.
- McRuer, R. & Wilkerson, A.L. (Eds.). (2003). Desiring disability: queer theory meets disability studies. *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 9 (1-2).
- Moore, H.L. (2007). *The subject of anthropology: gender, symbolism and psychoanalysis*. Cambridge: Polity Press.
- Moore, H.L. (2011). *Still life: hopes, desires and satisfactions*. Cambridge: Polity Press.
- Morris, J. (1991). *Pride against prejudice: transforming attitudes to disability, celebrate the difference*. London: The Women's Press.
- Nussbaum, M. (2001). The enduring significance of John Rawls. *The chronicle of higher education*, Section 2, July 20: B7-B9.
- Our Bodies Ourselves. (2005) Boston Women's Health Book Collective, Inc. Retrieved January 30, 2015, from <http://www.ourbodiesourselves.org/>
- Ototate, H. (1998). *Gotai fumanzoku*. Tokyo: Kodansha.
- Ototate, H. (2003). *No one's perfect* (H. Gerry, Trans.). New York: Kodansha International. (Original work published 1998).
- Ototate, H. (2013). *Jibun o aisuruchikara*. Tokyo: Kodansha.
- Silvers, A. (2013). Feminist perspectives on disability. In E.Zalta (Ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Retrieved January 29, 2015, from <http://plato.stanford.edu/archives/fall2013/entries/feminism-disability/>
- Smith, B.G. & Hutchison, B. (Eds.). (2004). *Gendering disability*. New Jersey: Rutgers University Press.
- Taylor, A. (Director). (2008). *Examined life* [Documentary]. United States: Zeitgeist

## Films.

- Taylor, A. (Ed). (2009). Judith Butler with Sunaura Taylor: interdependence. *Examined life: excursions with contemporary thinkers*. New York: The New Press.
- Taylor, S. (2006). Statement. *Wynn Newhouse Awards*. Retrieved January 30, 2015, from <http://www.wnewhouseawards.com/sunaurataylor.html>
- Taylor, S. (2014). Interdependent animals: a feminist disability ethic-of-care. In C.J. Adams & L.Gruen (Eds.), *Ecofeminism: feminist intersections with other animals and the earth* (pp.109-127). New York: Bloomsbury.
- Young, I.M. (2005). *On female body experience "throwing like a girl" and other essays*. New York: Oxford University Press.
- Wendell, S. (2006). Toward a feminist theory of disability. In L. Davis (Ed.), *The disability studies reader* (pp.243-273). New York: Taylor & Francis Group.

## フェミニスト障害学の視点からみる相互信頼、身体肯定、自己肯定 フリアナ・ブリティカ・アルサテ

この論文は、フェミニスト障害学を通して、身体肯定と自己肯定の関連における相互信頼（interdependence）の問題について論じる。著者は「倫理の想像力」の概念に目を向けつつ、障害のある身体の実験に対して関心を持っており、このアプローチが、身体を恥じることから身体を肯定することへの文化的態度の変化という提案して大きく寄与することを論じる。

相互依存に対する肯定的な視点は、身体についての肯定的なイメージと自己肯定のより高い感覚を明るみに出す。相互依存の概念は次の三つのセクションで論じる。第一のセクションでは、間主観性の概念について明らかにし、身体と自己の間に生じる断裂を修復することに焦点を当てる。第二のセクションでは互惠関係とケアの概念について論じ、自立という理想に挑む。第三のセクションでは、自らの身体を肯定することおよび自尊心の観念と照らし合わせ、相互依存の概念について論じる。

相互依存は、障害者にも健常者にも影響を与えるもので、自立と自己充足の神話を解体する鍵となる語である。フェミニズムの障害学的視点からすると、我々は自由のしるしとしての自立の概念について再検討することが推奨される。相互依存は、自らの身体を肯定することと自尊心に対する一つのアプローチとして考えられる。相互依存を受け入れることは自分の弱さを受け入れることである。

身体障害者の経験から得られる重要な教訓とは、自己受容、ケア、そして他者の受容という三者の関係性や、身体は決して単独で存在しないという事実を含んでいる。つまり、相互に信頼しあうこととは、我々が関わりあう主体としての他者のことを慮るよう我々に促すものである。他者と関わりあうという行為は、団結と互惠モデルにとって決定的なものである。ゆえに、相互依存は我々を身体肯定と自己肯定に近づける。

### Keywords:

相互信頼、身体肯定、自己肯定、フェミニズム、障害



## **Thinking about Solidarities among Women in Malaysia: Muslim Women's Rights Activism and Muslim Women-Who-Love-Women**

**Habiba-Mao, UEDA**

### **1 Introduction**

Within the context of Malaysia, social issues affecting Muslim women including Muslim Women-Who-Love-Women<sup>1</sup> (here after, 'WWLW') and other sexual-and-gender-marginalized communities have continued to be complicated through the politicization and implementations of Islamic morals and laws. Understanding these barriers contextualized the importance of Muslim women's solidarity and considering how to incorporate Islamic values and morals when addressing Muslim women's social issues. The broad purpose of this research was to provide a theoretical foundation for understanding the situations of sexual-and-gender-marginalized groups in Malaysia and to bring attention to the multilayered intersections of female sexuality, religious norms and social values in the context of Malaysia. More specifically, the research explored the situations of Muslim women and WWLW in Malaysia through examining the perspectives of individuals who were aware of and/or involved in activism related to social issues in general affecting Malay Muslim women.

This research looked at the challenges that women's rights groups and sexuality rights activists have been faced with when engaging their work within religious Islamic paradigms. More specifically through the perspectives and ideologies of Sisters in Islam (SIS), the only organization in Malaysia that had developed an agenda of social justice and basic human rights for Muslim women and collaborated with other groups to address sexual diversity issues, this research attempted to understand the situations of why Muslim women including WWLW have faced continued obstacles while trying to gain acceptance in society. Thus, this research



focused on gaining insight into the challenges of not only being a woman in a strongly patriarchal religious, specifically Islamic, society but also the added complexities of being a WWLW in a heteronormative society.

### **1.1 About This Research**

The central research questions of this study were framed in a way to gain more insider knowledge and perspectives within the Muslim women's activism community in Malaysia. The questions were also designed in a way to highlight issues around what it means to be a Muslim woman in Malaysia, and how the current Muslim women's rights movement has been informed and impacted by growing Islamization. Moreover, what this meant ultimately for not just Muslim women in general, but Muslim WWLW in Malaysia.

This research qualitatively explored the perspectives of 14 participants through in-depth semi-structured interviews and observations over a 2-month period between June and July 2013. Gaining emic perspectives through such interviews allowed insider access to the target communities and to understand social issues from those who experienced them firsthand. Initially, target groups of informants were those who were either involved with SIS at the time of the interviews or had been involved in the past. However, in order to gain a richer understanding of specific community issues, the target groups were later expanded to include other sexuality rights activists who were active in a range of diverse support groups for sexual-and-gender-marginalized communities in Kuala Lumpur, Malaysia.

Given the sensitive nature of the research topic and the difficulty in identifying participants through a more typical recruitment process, a convenience sample of 9 informants was recruited through snowball sampling (Biernacki & Waldorf, 1981). Through my own networking between 2011 and 2013, I came to know 7 of the 14 informants on a

personal level. Through building such relationships, my own personal perspectives came to be strongly informed by the social and cultural situations of these community members.

Each participant signed consent and confidentiality agreement forms before their interviews. They were informed that any information disclosed during the interviews would be protected and that pseudonyms would be used to ensure privacy. All participants received their own copy of the confidentiality agreement forms.

## **1.2 What Does It Mean to be Malay?**

The Malay population is the largest within Malaysia; what it means to “be Malaysian” depends not only on ethnicity and culture, but also religious (i.e. Islamic) beliefs and practices. It is important to note that religion, including Islam, is an identity marker in Malaysia. The Malaysian Federal Constitution defines a Malay person to be one who speaks the Malay language, conforms to Malay customs, and professes to the religion of Islam. Thus, there are definitive relations between the ethnic category of Malay and religious category of Islam. Lee elaborated this point as “when a non-Muslim embraced Islam, that he or she had become Malay rather than having become Muslim” (2011:98). Even though Malays comprises slightly more than half of the total population,<sup>2</sup> Malay ethnic groups have continued to dominate in Malaysia’s political arena since Malaysia gained independence from Britain in 1957 (Lee, 2011). It gradually gained more political power with the process of Islamization. Timur described the current tendency of Malaysia as “what we have in Malaysia is actually a process of forced nationalization, a rigid monolithic monoculture nationalism. And religion is one of its most powerful weapons” (“A Malaysian Inquisition?”, 2014). The next section will further discuss how both of the modernization process and Islamization process have impacted the situations of Muslim women in Malaysia.

## **2 Islamization and Political Context of Malaysia**

From all the interviews that were conducted, there was a very strong theme related to the politicization of Islam. Everybody spoke strongly on how Muslim women have continued to face increased discriminatory attitudes and other social barriers under Islamic legislations. According to Sarah, since the 1980s, the Malaysian government began to implement more Islamic morals into their legislatures to build a more modern Islamic country and as a result, "... slowly Islamization became very very strong and as ... in fact, Syariah law is much more than Civil law". Such sentiments were also echoed through other informants that people's attitudes and behaviors had changed especially after the Islamic resurgence emerged in Malaysia in the late 1970s. Jannah, very much like Sarah could feel that Malaysia was progressively becoming more and more conservative and extreme in its religious interpretations compared to previous years due to the politicization of Islam:

... When you look at the trend and change on the Muslim behavior today, as compared to the 70s or early 80s ... the concern is that the Muslim society in Malaysia today, majority ... is more, more and more conservative, and ... extreme in their understanding of Islam as compared to the 60s, 70s and early 80s. And we blame it so much on the politicization of Islam. Because then you know it involves power struggle. And wanting to appear as the upholder of Islam. And who becomes the victims would be those in the lower class society, lower middle class women, children, and sexual minority groups. (Jannah)

According to Jannah, as Islam became more politicized within the context of Malaysia, such strategies were implemented with the goal of making Malaysian society more modernized, while strongly upholding Islam. As a result, as religious authorities had steadily gained more control

over past decades, it was clear to Jannah that such conservative perspectives had contributed to a culture of restricting and denying women's rights access to equal rights, as well as allowing discrimination on a systematic basis against women and other sexual-and-gender-marginalized groups.

Rayhana also shared in her interview that as Malaysian society had become more racially segregated, religious mores were strategically utilized to gain more power to control the Malay Muslim community. Throughout her interview, Rayhana spoke of the generally limited knowledge of Islamic interpretations amongst Malay Muslims and the spread of the notions of Islamization in Malaysia. According to Rayhana, the Islamization process had deepened racial boundaries between Malay and non-Malay, and created more intolerance and hostile attitude towards differences among Malaysians. Thus, anything that did not reflect mainstream Islamic morals was deemed as wrong. In some cases, as Rayhana indicated, such actions were even labeled as "attacks" on these religious morals even though people " ... used to be quite tolerant, but I think increasingly with this Islamization ... becoming more intolerant against differences. Yeah, so whatever they see or deem as 'different' from the mainstream, I think now a bit more ... hostile in certain degrees".

This change towards more extremist interpretations clearly changed people's attitudes and behaviors over the last few decades. According to both Jannah and Sarah, this was especially after the Islamic resurgence which emerged in Malaysia in the late 1970s. Both participants, as well as others indicated clearly that this cultural shift in attitudes towards Islam had direct consequences on Muslim women and their community.

## **2.2 How Islamization and Moral Policing have Impacted Muslim Women and Muslim WWLW**

The issues surrounding Islamization have had direct effects on all Muslim

communities in Malaysia, but especially for women and those living non-heteronormative lifestyles. The legal regulations for Muslims living in Malaysia are considered to be more complicated than those for non-Muslims. This is because Syariah laws are the primary body of control at the state level, except with respect to the Federal Territories. In particular, the socio-political and legal climates are hostile to sexual-and-gender-marginalized individuals. Such hostile environments had gradually built up since the early 1990s during the Mahathir administration (1981-2003), especially when the criminalization of non-normative sexual acts under Syariah Criminal Offences Acts (SCOAs) were slowly introduced and implemented across all states.<sup>3</sup>

The provisions under SCOAs contained 'personal sins' which when interpreted under traditional jurisprudence were considered as "crimes against the state" and "morally dangerous to society." Jamilah indicated in her interview that SIS identified 50 percent of their cases under SCOAs as issues related to 'moral policing'. Moral policing has had direct consequences for Muslim women in terms of how they were expected to conform to certain "norms" and "standards" that were directed by religious morals. In terms of such "norms," Rayhana shared her slight frustration with making sense of how one would begin to define what is appropriate or not for women:

So how, you know a lot of women wear pants, wear shirts, so how do you define the way they are? How? You know, even mother sometime like wear, you know so it really just ends up harassing you all the time. (Rayhana)

Rayhana pointed out because even mothers wear pants and shirts, i.e. clothing that could be perceived as "un-feminine" according to moral policing standards, it would be extremely difficult to set a general norm

through which all women presented themselves in the same “feminine” way. Instead women would end up receiving more criticisms about their appearance, even when simply wearing shirts and pants. Sheena echoed similar sentiments to Rayhana by questioning how acceptable “norms” for women should be defined to begin with.

[Religious authorities] are just trying to target [girls and women] who dress like boys. They are all girls, all women, regardless of their sexuality, to dress like stereotypical women do, or what is, you know, the accepted gender norm for women in terms of dress code, right? (Sheena)

The idealization of how Muslim women should dress and behave was thus manifested through the religious authorities’ attempt to control women’s bodies through stigmatizing gender non-conforming self-expressions. The implications would affect all Muslim women and how they were expected to conform to heteronormative standards.

An extreme example of moral policing and how it has affected Muslim women came in 2008, when a fatwa<sup>4</sup> against tomboyism was issued to selectively target and prosecute Muslim women that were considered “not feminine enough” in their appearance (“Fatwa on tomboys”, 2008). The Director General of the National Fatwa Council, Datuk Wan Mohamad Shiekh Abd Aziz clearly stated that the fatwa aimed to “save these women (from becoming lesbians)” (“Malaysia’s fatwa council explains how ‘tomboys’ become lesbians”, 2008), as ‘being lesbian’ could allegedly lead to greater “crimes” such as “indulgence in lesbian sex” (“Malaysian religious council issues ban on lesbian sex”, 2008). It should be noted that although this fatwa did not end up becoming an actual force of the law, it became clear that the fatwa was not just about “lesbian sex”, or “women becoming lesbians” but also had the implicit message of defining what is “acceptable”

for women under the guise of “protecting” religious morals.

Moreover, because the type of awareness created by the media and the government was consistently one-sided and negatively biased, it contributed further to a growing culture that remained unaware of the complexities of Muslim women and WWLW’s sexuality issues within the current social paradigm. The next section will talk about development of Muslim women’s rights activism and discuss how Islamic feminist perspectives have impacted the issues concerning sexual-and-gender-marginalized communities in Malaysia.

### **3 Islamic Feminism in the Context of Malaysia: Sisters in Islam**

Although “feminism” is not a term usually associated within religious discourses, many can argue that SIS is in fact an organization that takes an Islamic feminist approach. Islamic feminists have articulated Muslim women’s issues within an Islamic paradigm. Such approaches were based on progressive interpretations of the Qur’an which raised awareness among women seeking to reclaim Islam and the Qur’an for themselves. In the context of Malaysia, the groundswell of Islamic resurgence resulted in developing political feminist activism in the 1980s. SIS has been one of the foremost Muslim women’s rights groups in Malaysia since 1988. They have focused their work in research, advocacy, and public education to end discrimination against women in the name of Islam. Furthermore, one of SIS’s goals has been to question the “male-biased aspects of the Syariah and to counter patriarchal authority by highlighting the gender-justice essence of the Qur’an.” SIS has sought to ‘redefine, reclaim, and contribute to an understanding of how Islam has been codified and implemented in ways to consider the realities and experiences of Muslim women’s lives.’ Thus, SIS found that it is possible to reconcile and unify Islamic teachings with a stronger and more positive feminist approach.

### 3.1 Why SIS is Important? (Overall Political Impact)

According to Jannah, SIS began advocating for Muslim women mainly due to "... the dissatisfaction of Muslim women not getting their rights in the Syariah courts. That's why [SIS] became an organization fighting and demanding, and advocating what is right". Hanifah shared in her background story of SIS that before SIS started to advocate for justice in equality for Muslim women, they had simply started off as a study group to learn more about basic principles of Islam with other female Muslims:

And what is different in our [SIS's] approach is that we're working through a religion and going back to the text which is quite radical because nobody had done that before we ... don't believe that many of the injustices that are perpetuated, perpetuated against women ... in the name of Islam actually have Islamic basis, so we're going back to the text and doing a lot of research and all that to, to seek out that actual source of the discriminations which we believe is actually cultural ... and just basic patriarchy. (Hanifah)

Thus, the particular approach that SIS chose to question gender inequalities was to revisit the religious text to seek the actual sources of the discrimination that subjugated Muslim women in Malaysia. Understanding these sources would allow SIS to address the existing barriers within the specific context of Islamic morals. From the standpoint of SIS, it was necessary to address such issues strategically by understanding how to create more effective arguments on controversial issues. By referring to specific verses of the Qur'an, their direct connections to the constitution, as well as lived realities, the position that SIS would take would enable them to advocate for Muslim women more strongly.

Prior to the establishment of SIS as an organization, the founding members of SIS comprised of lawyers, academics, journalists, and activists,



came together to discuss issues associated with the implementation of new Islamic Family Laws which were legislated in 1984, and enforced in 1987 ('The SIS Story', n.d.). Muslim Family Law reform had been the initial mission of SIS, yet inevitably their work expanded to other women's rights issues. However, challenging the status quo of religious norms is never simple or straightforward, as speaking up on such matters and advocating for full women's rights within the Malaysian Islamic context are still considered highly sensitive.

Among many other challenges, SIS has conducted advocacy campaigns against the *Hudud* enactments adopted by the Islamic Party of Malaysia (*Parti Islam Se Malaysia*)-led Kelantan state government in 1993, and the Terengganu state government in 2002 by submitting memoranda to the Federal Government on law reform (Ng, Mohamad & tan, 2006). While the Islamization process has brought about many changes to Malaysian society over the past decades, the unequal situations of Muslim women have been justified particularly under Islamic legislations. Thus, the continuing work of SIS for the rights of Muslim women within the framework of Islam has benefited the feminist movement in Malaysia greatly by bringing attention to these women's rights issues.

However, as one of the women's rights activists, Liu, reflected that "... [SIS's] work is extremely important ... additionally very sensitive. Perhaps 3/4 of the country doesn't agree with them. Probably, because of the ... patriarchy, 'cause one that women are speaking up and, and then two ... they're progressive on Islam". SIS has continually received criticisms from the Malay Muslim communities, because standing up against and questioning the mainstream understandings of Islamic beliefs and practices are highly stigmatized. Thus, discussions of these issues still remain very controversial especially within the strongly religious political context of Malaysia. Under such circumstances, SIS has been drawing more attention to issues regarding Muslim women, and the continuous efforts of SIS over the past

twenty years have played a significant role in challenging the existing status quo on contemporary patriarchal Islamic institutions.

### **3.2 How has SIS's Activism Impacted Muslim WWLW and Sexual-and-Gender-Marginalized Community?**

SIS has played an extremely important role in bringing more awareness to Muslim women's issues. The activism that SIS continues to push forward has brought about a big change for sexual-and-gender-marginalized communities.

While SIS promoted basic human rights for all and continued to advocate for equality and non-discriminatory practices in Malaysia, an ideological clash between the concept of human rights and culturally embedded notions of Islam have created more barriers on the work of SIS. This ideological clash was evident through the lack of support combined with negative attitudes from the public. Such attitudes manifested themselves through a culture of moral policing against women, negative public associations on sexuality-related issues, as well as the lack of religious-based discourses and research on sexuality.

Jannah stated that SIS was against any type of moral policing against women:

... when it comes to ... problems under the Syariah Criminal Offences Act that [SIS] disagrees, ya, the whole ... whole moral policing and this ... punishment for the same-sex ... acts, also falls under what's viewed as ... moral policing, which Sisters in Islam is against. (Jannah)

SIS recognized discriminatory actions against sexual-and-gender-marginalized individuals and communities as basic violations of human rights, which they stated needed to be acknowledged on a larger societal level to enact long term changes. Moreover, SIS believed that all individuals

regardless of sexual orientation and gender identity should be able to receive fair treatment without exceptions. Jannah stated that,

We [SIS] still argue on the basis of religion [that] nobody should be discriminated against ... no matter how you deem the person to be sinner or whatever and this involves also in moral policing because we're very much against moral policing which is happening here in this country. (Jannah)

As Jannah indicated in her interview that while issues related to sexuality were highly stigmatized especially by religious authorities, such issues needed to be addressed within Islamic discourses. She elaborated that it was necessary to widen the scope of how such sensitive issues were received and discussed, instead of dismissed:

We [SIS] appeal for the more gentler and humane understanding within the religion ... to address the issues of LGBTIQ, and not to just brush them off as ... how do you say, sinners, you know. (Jannah)

Because non-mainstream understandings of Islam were considered 'deviant,' SIS was constantly faced with public criticisms of their credibility, putting the organization in a vulnerable position within the Islamic community in Malaysia.

As a result, SIS took strategic actions especially when discussing topics related to sexuality and religion. This was necessary because according to Rayhana, there was still a lack of awareness when addressing diverse perspectives on sexuality even within intellectual discourses in the Muslim community. Rayhana elaborated on the difficulties of gaining support from the Islamic community due to the lack of effective discourses of other (Islamic) perspectives:

...SIS has been attacked from many sides and to embark the issue, then you're totally alone. I mean, the Islamic community, there will be no *Ulama* no *Ustazo*, even support you in any way even the progressive one isn't supporting you ... even the intellectually, in the intellectual discourse in the Muslim world, they have not been much ... discourse on the other perspectives. (Rayhana)

As Rayhana continued in her interview, she claimed that in order to address the controversial issues and defend oneself from potential critics and opponents, it was imperative to have effective research based arguments, as well as solid references from basic religious studies to further support the political position of SIS.

The lack of more intellectualized Islamic discourse on sexuality has meant that there is essentially not a platform to discuss these issues in a more culturally and religiously appropriate manner. Islamic interpretations on sexuality have not yet been constructed on both the regional and global level. Thus, as Jannah indicated that SIS was also still not in the position to utilize intellectualized evidence-based support of Islamic interpretations on sexuality (specific to same-sex sexual relations), mainly because such topics were still considered off-limits by the majority of Islamic discourses. Sheena expressed her concern that without the research support, SIS as an organization would not be able to claim that discrimination based on sexual orientation and gender identity were violations of basic human rights:

Our [SIS's] only concern is that because we [SIS] are not all well versed in theological arguments when it comes to sexuality, as an organization, we can't go further than saying "do not discriminate". If we had the theological backing, then we would be able to, if we had the theological argument lined out, and there's a case to be made,

then well versed in it, you can defend it. (Sheena)

This is especially important as sexuality issues in particular are more stigmatized and considered controversial compared with gender issues in Malaysia. Clarifying SIS's position on such sensitive issues required a certain amount of knowledge and skills. Without these perspectives, SIS would not only be unable to advocate for their own mission as an organization, but sexual-and-gender-marginalized groups would continue to face more discrimination without support.

However, while the lack of research has been a barrier to further discussions, SIS has also made public statements in support of the local sexual-and-gender-marginalized communities by advocating that discrimination against all human beings regardless of sexuality is wrong.<sup>5</sup> Because there were no other organization that specifically challenged and advocated for sexuality rights issues from Islamic perspectives in Malaysia, SIS took an important step by issuing public statements to promote anti-discrimination practices through the human rights approach. This has implications for all sexual-and-gender-marginalized communities including Muslim WWLW. The situations that face them are complicated further through not only being a woman in this highly patriarchal society, but also as another minority group within the already minoritized community.

### **3.3 Protection Issues for SIS Members**

Given the social, political, and historical situations that face SIS and different sexual-and-gender-marginalized communities in Malaysia, individuals and organizations that continue to advocate for these marginalized communities need to have an extensive knowledge about how to challenge potential backlash and advocate to bring about change. Due to the controversial nature of the issues that SIS dealt with, it was not surprising that the working environment within SIS tended to be highly

pressured. Azura commented that, "it is a real risk for all the people involved, you know, and that's one of the biggest things, like you have to think about all the risks and all the protection for everyone involved. Like it's ... it's dangerous, and especially for Muslims ..." As SIS was the only Muslim women's rights organization that addressed culturally specific social issues within this religious context, they could essentially become 'easy scapegoats' and be scrutinized publicly, making all its members vulnerable to potential attacks from the government, media and the mainstream Muslim communities. Furthermore, considering the complex situations of sexual-and-gender-marginalized communities within a heteronormative religious society, drawing unwanted attentions due to the less strategic actions that SIS took could potentially result these communities getting targeted for the further discrimination and violence. Thus it was necessary to be strategic about decreasing the potential vulnerabilities on every level.

For SIS members, to feel "safe enough" to go against the grain of society and normalized religious values, they need to feel "protected" on a personal and professional level, in order to advocate in a unified way as an organization. Because as the topics themselves were "... very sensitive and very complicated because it's ... considered new knowledge for ... feminists even to work on within the Islamic or faith tradition. Yea, very, very difficult", as Jannah said. She elaborated that this was especially because issues related to sexuality were still considered highly sensitive topics and remained difficult for some SIS staff to discuss openly even within the human rights framework.

Jamilah also explained the significance of why such a strategy was necessary for staff, to not only defined SIS on a professional level but also on a personal level:

We [SIS] have staff ... who may not be as progressive as the other [SIS]

Members, and even among the Member have different points of views. It's about keeping everybody in same page to be formed what the realities on the ground is. You know, what the challenges on the ground. (Jamilah)

Jamilah and Sheena stated in their interviews that prior to any kind of public statements being issues, SIS conducted knowledge building training and meetings for staff, in order to position themselves on controversial and sensitive topics. For example, when SIS issued a statement against the *Seksualiti Merdeka* ban in 2011, there were also concurrent knowledge and capacity building trainings for their staff. It was due to the sensitive nature of the issue as Jannah explained that the levels of understanding might vary amongst the individual staff members. This point was further highlighted by other staff members of SIS, including Sheena who recognized the issue of “protection” and being “prepared” not only for the communities they advocated for, but also for themselves:

... [when] you get attacked from working at the organization [SIS], and if you are not prepared, then that can be like, feel like ‘oh my god’ you really feel threatened. So [SIS] also has considered to take care of staff as well. (Sheena)

It was important for SIS to address the varied perceptions and knowledge base of all members within SIS. Through such professional development, SIS staff would essentially be able to gain the language in order to fully advocate for Muslim women's rights. It was necessary to be strategic about decreasing the potential vulnerability of SIS within the larger context but also on an individual level for those involved in SIS. There was also a general consensus for the need for such awareness building trainings for SIS staff to essentially “protect” themselves not only

from Islamist criticisms but especially in personal relationships:

... to be able to talk about the issue to the family, or sometimes they [staff] get criticized by the family about, friends about, neighbors about SIS's position in this issue. So they need to be well informed to feel confident about talking it, and know how, why the SIS, even if they don't agree. But to understand why SIS takes the position that it takes ... they may not necessarily support all the positions that SIS takes. But they should be able to explain ... why we take that position. (Jamilah)

In other words, regardless of how the individuals within SIS feel about these issues on a personal level, it was extremely important for everyone to understand the nature of the core issues that SIS was striving to challenge. Because the topics are controversial not only on a societal level but also potentially on an individual level, it was necessary for everyone in SIS to be able to "speak confidently" about these issues with friends and family as well. By creating a safe learning environment for each individual within SIS, all SIS members would be able to gain the knowledge that would essentially help them to "protect" themselves when advocating for Muslim women's rights.

#### **4 On Going Women's Activism in Malaysia**

In order to address the issues of "protection" on an individual level for all SIS members, SIS conducted ongoing staff group trainings. However, this issue of strategically positioning SIS as an organization for protective measures required not only for each individual within SIS to be well-versed in the political challenges, but also called for SIS to render support from outside. Given that sexuality issues were still not consistently included as part of any discussion on a broader national level, it was important for SIS



to find as much support as possible in order to advocate more effectively. By joining forces with other women's organizations in Malaysia, SIS gained more outside support to challenge the status quo and essentially add another layer of "protection" for the organization as a whole. This support network was built through collective efforts that can be known as 'Joint Action Group for Gender Equality' (JAG).

JAG consisted of a small network of 9 coalitions formed by women's rights groups<sup>6</sup> and activists aiming to gain more recognition to specific problems, issues and needs of women in Malaysia ("Joint Action Group", n.d.). The uniqueness of these collaborative efforts was mainly due to the ways in which different women's organizations and activists came together in order to address issues that directly affected women in Malaysia. Because of the flexibility in deciding what issues to address and how to support one another effectively, members of JAG were well in tune with controversial issues and events. Liu shared these insights as a member of JAG:

Basically there's 9 NGOs in JAG, and collaboratively ... these NGOs decide what to do or what to say together. So ... there's no like, one NGO or there's no like one director of JAG ... It just like 9 groups do the same thing when something happens, we do together ... So that's the thing about JAG. Everyone is in tune with what's going on at JAG. (Liu)

One of the main goals of collaboration for JAG members was to strengthen the political participation and voices of women to achieve gender equality and increase public awareness of such issues in Malaysian society. Because there was still little general support from the public, those who were involved in JAG recognized the strengths in supporting each other through creating public awareness. Both Rayhana and Azura also reiterated the importance of all activists working together to support one

another:

When it comes to activism ... maybe because we're such a small community and it's hard to do anything anyway, that you need everyone you can get support from. And which include everyone, you know. (Azura)

Being in the, you know, in this activism world, I mean you have to support each other, yea. Because if not, you'll be left alone, if you're in trouble. But I think in general, the activism scene in Malaysia, I think most activists and NGOs are supportive to each other. (Rayhana)

Liu elaborated further on how their strategic efforts strengthened JAG's political stance, given the fact how small the community was to begin with and with the obvious lack of public support:

There's only 9 groups, but all ... the work that JAG does is extremely ... active. And if you do a press statement, first statement is in one area with JAG taking place ... each NGO have their own thing, so if something happens and issues a warrants and responds in media ... JAG is quite cohesive ...I like coming out with these statements and sometimes press conferences, if ... needed. (Liu)

Through creating stronger networks of support, JAG members were essentially able to pool together their resources to collectively address controversial issues affecting women. Because each representing organization within JAG had their own specific focus, JAG members were also able to draw from each other's expertise and knowledge to strengthen the political power of JAG. As there was a range of existing women's issues,

group collaboration was a strategic move in order to challenge larger, more complex issues that individuals alone could not do.

For example, of the 9 groups within JAG, SIS was the only organization that dealt specifically with women's issues within the context of Islam. Sheena stated that "... we [SIS] challenge the ... popular understanding and the monopoly that religious authorities have over the interpretations of religion". Furthermore, SIS's involvement in JAG provided deeper cultural and religious insight into women's issues, especially for the Islamic sexual-and-gender-marginalized communities.

Although activism by JAG was still fairly new and at the beginning of creating alternative ways to openly discuss policy changes and issues related to sexuality topics (or any case perceived to be violating fundamental liberties), it was an important platform for existing women's groups. By using JAG as a platform to further delve into Muslim women's issues, SIS was able to advocate much more effectively for the community, while also contributing to more awareness for other JAG members and the public. Thus, it was clear that SIS played an important role in JAG to discuss sexuality issues with regard to Islam.

## **5 Conclusion**

Through this study, I gained a better understanding of the social and political situations of what Muslim WWLW were facing through examining the multilayered obstacles that existed in Malaysia for Muslim women activists and sexuality rights activists. Muslim WWLW were increasingly subjected to the threat of moral policing in Malaysia yet, studies reflecting these experiences and situations are still limited. It is interesting to note that through this study I realized that while women's rights advocates have considered different sexuality rights issues, the voices and experiences of Muslim WWLW were still underrepresented. Moreover, issues regarding sexual diversity and sexuality rights were not topics that were openly and

actively discussed in the women's activist movement, due to their sensitive nature. Some research has also suggested that women's groups in Malaysia have had difficulty focusing on specific sexuality-related topics within the context of women's rights. However, women's rights advocates have gradually addressed issues that different sexual-and-gender-marginalized communities are facing. More recently, the transwomen community, sexuality rights activist groups, and women's rights groups have supported each other to take up the critical issues facing the transwomen (*mak nyah*) community, including criminal charges under the Syariah court, etc.

A big limitation of this study was that there are very few studies on this topic in the Malaysian context. This was especially when women's issues fell outside the framework of heterosexual norms, such as with women's anatomy over sexual preferences, identity and practices. There were still issues to be further explored in the existing advocacies of women's rights groups. That is not to disregard the changes accomplished and the progress made through their organized efforts and actions thus far. However, there are overlapping issues that affect both Muslim women and Muslim WWLW, thus, all dimensions of women's experiences should be explored. In particular, *pengkids*,<sup>7</sup> who tend to come from working class backgrounds continue to experience violence (i.e. harassment, rape) due to their "masculine" appearance. Women who did not live up to traditional gender images were easily targeted for harassment and violence. Thus, further work in research and in women's advocacy movement should consider all possible realities affecting women's lived realities and situations.

Considering the limitations identified above, further studies will need to look at how issues are framed in the activist groups and what the effects may be. Also, taking a closer look into the individual experiences of Muslim WWLW might reveal different social class backgrounds, as well as other ethnicities. Through gaining such perspectives, further studies should

examine the ways in which Muslim WWLW continue to negotiate living out their religious faith and same-sex partnerships in Malaysia. Such possibilities found within Muslim women's sexuality rights in the Malaysian Islamic context will shed light on sexual-and-gender-marginalized communities, and also enable both women's rights activism and sexuality rights activism to break down the heteronormative and patriarchal systems.

## Footnotes

- <sup>1</sup> The term “lesbian” carries different connotations across diverse cultural settings. It also holds very different self-identification values for each women-loving individual. The purpose of adopting the term ‘Women-Who-Love-Women’ throughout this study was to capture more nuanced connotations of women’s same-sex sexual relationships in the local context of Malaysia.
- <sup>2</sup> The estimated population in Malaysia was approximately 28.3 million in 2010. The Malaysian citizenry is made up of three major distinct ethnocultural groups: 67.4% *Bumiputera* (literally, ‘son of the soil’), followed by 24.6% Chinese, 7.3% Hindi, and 0.7% other groups. The category of *Bumiputera* is comprised of Malay and non-Malay indigenous groups such as the *Orang Asli* in Peninsular Malaysia and East Malaysia, as well as *Kadazans* and *Ibans* in the states of Sabah and Sarawak. Amongst these Malaysian citizens, Malays are considered the predominant ethnic group in Peninsular Malaysia constituting 63.1% (Malaysia, 2010)
- <sup>3</sup> Examples of criminalization of sexual transgressions include: “sexual intercourse out of wedlock” (*zina*), “sexual relations between male persons” (*liwat*), “sexual relations between female persons” (*musahaqah*). Furthermore, cross-dressing provisions (*pondan*) under SCOA are also used against those who transgress heterosexist norms (Syariah Law, n.d.)
- <sup>4</sup> Fatwas are “theological and legal reasoning given by a mufti (the top religious official at the state level) to enlighten and educate the public about Islam ... (and) are regarded as advisory opinion” (Anwar, 2001:240). Yet such fatwas are given automatic force of law under the Syariah criminal law once they were gazetted. The reason why such legal ‘opinions’ are able to have such authority was due to the Administration of Islamic Law (Federal Territories) Act 1993, which granted state mufti’s the authoritarian power to amend or repeal any fatwas previously issued (Anwar, 2001)
- <sup>5</sup> Press statement issued by Sisters in Islam to opposes ban on *Seksualiti Merdeka* (Sisters in Islam, 2011)
- <sup>6</sup> Current membership of JAG: All Women’s Action Society (AWAM), Perak Women for Women (PWW), Persatuan Kesedaran Komuniti Selangor (Empower),

Persatuan Sahabat Wanita Selangor (PSWS), Sabah Women's Action-Resource Group (SAWO), Sisters in Islam (SIS), Women's Aid Organization (WAO), Women's Center for Change (WCC), Tenaganita ('Joint Action Group', n.d.)

- <sup>7</sup> "localized synonym for a masculine-looking Malay-Muslim lesbian" (Wong, 2012, p. 436)

## References

- A Malaysian Inquisition? (2014 January 6). In *New Mandala*. Retrieved from <http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2014/01/06/a-malaysian-inquisition/> (Accessed January 6, 2014).
- Anwar, Z. (2001). What Islam, Whose Islam?: Sisters in Islam and the Struggle for Women's Rights. In R. W. Hefner (Ed.), *The Politics of Multiculturalism: Pluralism and Citizenship in Malaysia, Singapore, and Indonesia* (pp. 227-252). Honolulu: University of Hawai'i Press
- Biernacki, P. & Waldorf, D. (1981). Snowball Sampling: Problems and Techniques of Chain Referral Sampling. *Sociological Methods & Research*, 10(2), 141-163
- Fatwa on tomboys. (2008 October 24). In *The Star Online*. Retrieved from <http://www.thestar.com.my/story.aspx?file=%2f2008%2f10%2f24%2fnation%2f2362908&sec=nation> (Accessed September 26, 2013)
- Joint Action Group. (n.d.) In AWAM. Retrieved from <http://www.awam.org.my/advocacy/jag/> (Accessed January 6, 2014)
- Lee, J.C.H. (2011). *Policing Sexuality: Sex, Society, and the State*. London & New York: Zed Books.
- Malaysia. 2010. *Population Distribution and Basic Demographic Characteristic Report 2010*. Putra Jaya: Department of Statistics, Malaysia.
- Malaysian religious council issues ban on lesbian sex. (2008 October 23). In *The Associated Press*. Retrieved from [http://www.google.com/hostednews/afp/article/ALeqM5izKo\\_RKkF40cfljjbbi3Yai-5Tw](http://www.google.com/hostednews/afp/article/ALeqM5izKo_RKkF40cfljjbbi3Yai-5Tw) (Accessed September 27, 2013)
- Malaysia's fatwa council explains how 'tomboys' become lesbians. (2008 November 27). In *Pink News*. Retrieved from <http://www.pinknews.co.uk/2008/11/27/malaysias-fatwa-council-explains-how-tomboys-become-lesbians/> (Accessed September 27, 2013)
- Ng, C., Mohamad, M., & tan, b. h. (2006). *Feminism and the Women's Movement in Malaysia: An Unsung (R)evolution*. London and New York: Routledge.
- Sisters in Islam (2011 November 3). *Press Statement: Sisters in Islam opposes ban on Seksualiti Merdeka*. Retrieved from <http://www.sistersinislam.org.my/news.php?item.922.98> (Accessed September 27, 2013)



- Syariah Law. (n.d.). In *E-Syariah Official Portal*. Retrieved from <http://www.esyariah.gov.my/> (Accessed July 25, 2013)
- The SIS Story (n.d.). In *Sisters in Islam Empowering Voices for Change*. Retrieved from <http://www.sistersinislam.org.my/page.php?35> (Accessed January 14, 2014)
- Wong, Y. (2012). Islam, Sexuality, and the Marginal Positioning of Pengkids and Their Girlfriends in Malaysia. *Journal of Lesbian Studies*, 16 (4), 435-448

## マレーシアにおける「女」同士のつながりを考える —ムスリム女性権利運動と女性を愛するムスリム女性— 上田真央

著者は、マレーシアにおいて女性を愛するムスリム女性（WWLW）を取り巻く社会状況と問題を分析するにあたり、WWLWに関する記述が極端に限られている状況に直面した。そのため本稿では、90年代後半にセクシュアリティ・ 이슈の重要性を示唆したムスリム女性権利団体シスターズ・イン・イスラーム（SIS）に注目し、これまでSISの中でWWLWに関わる問題がどう扱われてきたのか、またその限界と今後の可能性を分析した。調査はSISのメンバーを中心に、セクシュアリティ・ ライツ運動に携わる活動家などを含む14人に個別の半構造化インタビューを実施した。調査の結果、80年代以降推進されたイスラーム化政策とそれに伴う宗教法の改正・ 施行がWWLWを含むムスリム女性や、セクシュアル・ マイノリティを取り巻く問題に強く影響していることが示された。さらに、その宗教政治的な影響により、セクシュアリティや性の多様性などの 이슈を扱うことは「害悪」とされ、啓発活動や支援活動に多くの障壁を生みだしていることも示された。障壁の一つとして、セクシュアリティに関する宗教的議論の脆弱性が強調され、潜在的なリスクへの懸念から活動に関わる人たちやコミュニティの安全確保に関して多く語られた。また、障壁を乗り越え活動を行うため団体という枠を超えた「女」同士の連帯が、他の女性団体やセクシュアリティ・ ライツ運動、トランスジェンダー・ コミュニティとの協働という形で発展してきていることが明らかになった。しかし、WWLWを取り巻く問題が女性権利運動とセクシュアリティ・ ライツ運動の双方から周縁化されていることも示された。そのため、草の根活動でどのように問題の取り組みがされているのか等の調査と、WWLWの経験や社会生活についての実証研究を推進していくことが今後の課題になるだろう。

### Keywords:

マレーシア、女同士のつながり、女性を愛するムスリム女性、イスラミック・ フェミニスト・ アプローチ、イスラーム化政策



## メディアにみる「家族を介護する若者」 ——日本における社会問題化を考える

松崎実穂

### はじめに

日本において「家族を介護する若者」が注目されつつある。「ヤングケアラー」「若年介護者」等呼称はさまざまだが<sup>1</sup>、近年メディアに元経験者を中心とした声が多く取り上げられはじめた。

外部に開かれた大きなイベントで「ヤングケアラー」がはじめて前面に押し出されたと考えられるのは「第9回市民発！介護なんでも文化祭」（2013年10月6日・於上智大学四谷キャンパス）内で（社）日本ケアラー連盟が実施したセミナー「10代で家族のケアを担うということ～ヤングケアラーが語る介護と看取り」である。この時プレスリリースへのメディアの反応は4社ほどだったが、2014年2月23日のシンポジウム「介護を担う10代・20代の子どもたち」（成蹊大学文学部澁谷智子研究室・日本ケアラー連盟主催、於成蹊大学）を機に注目が集まり、イベントや当事者への取材内容が大きく報道されはじめた。<sup>2</sup> また若年認知症家族の子ども世代の集まり「まりねっこ」を2012年12月よりクローズドで開催してきた『若年認知症ねりまの会 MARINE』（東京）は初めて外部公開した企画「若年認知症と向き合う子どものつどい」を2014年3月に開催。<sup>3</sup> その後東京以外でのヤングケアラー、若者介護を冠した名称の集まりも行われ<sup>4</sup>、日本ケアラー連盟2014年フォーラムは「ヤングケアラー支援の輪を広げよう～若者たちが人生や夢をあきらめないために」と題された（7月23日、於憲政記念館）。こうして家族を介護する若者は支援の対象としてみられはじめ、社会問題化しつつある。では家族を介護する若者を描くメディアにおいては何が問題とされているのか。またその言説において家族を介護する若者はどのような主体として現れているのか。

本稿では、メディア上に日本における家族を介護する若者がどのような主体として現れているかを考察し、今後の研究における課題や論点——ジェンダー差異、社会的排除の構造、若者への支援と介護の社会化など——を提示したい。前述した経緯からヤングケアラーまたは家族を介護する若者がメディアか

らの注目やイベントを通じ社会問題化される動きが本格化したのは2014年2月以降と考えるため、本稿の分析で扱うメディア資料の時期は同年2月～7月とする。また、新聞記事は全国紙（朝日、読売、日経）からの8記事、雑誌記事は全国的な週刊誌（週刊朝日）からの1記事、テレビ番組はNHK総合で放送された1つを対象とした。

今回扱うメディア資料の特徴を次に挙げる。家族を介護する若者として登場するのは元経験者が多く、介護が始まった年齢は10代～30代である。介護が始まった理由は全てが家族の発病や発症であり、主に認知症、脳梗塞、進行性の難病である。

家族の介護を行う若者や子どもについては現在用語や定義が充分整理されていないが、紙幅の都合からそれらの検討はせず、文献について述べる際は参照元の用語をそのまま使用する。筆者自身の考察を述べる際は「家族を介護する若者」とする。

## 1 家族を介護する若者の「ライフコース選択の機会における困難」

家族を介護する若者を取り上げたメディアにおいては何が主な問題とされているのだろうか。今回参照した資料に登場する現役、または元・家族を介護する若者の年齢は9名が25歳以上であるが、ほぼ全ての者のライフコースに介護による影響が生じたことが描かれている（高校生のAさん<sup>5</sup>と大学生のBさんを除く）。高校を中退したEさん（読売新聞社, 2014, Mar. 25）、就職一年目で退職したCさん（朝日新聞社, 2014, Feb. 6）、就職活動ができなかったFさん（朝日新聞社, 2014, May 6；日本経済新聞社, 2014a, Jun. 18; 2014b, Jun.18）とGさん（日本経済新聞社, 2014a, Jun. 17; 2014b, Jun.17）、大学生だったが国家資格取得を断念したKさん（飯塚ほか, 2014, Jun. 17）といった介護による退職や学業中断、就学や就職機会を逸したことが挙げられ、学業や有償労働など若者が従事するとされている活動が介護により妨げられ将来に支障が出る、と問題視されている。そうした意識は記事見出しや番組タイトルにも現れている（「親の介護で未来を奪われる若者」（日本経済新聞社, 2014b, Jun. 17）、「介護で閉ざされる未来」（飯塚ほか, 2014, Jun. 17））。またEさんの「介護をしていたのにニートのように見られてしまう」（中津海, 2014, p. 158）という言葉

が取り上げられ、介護が終わってもその経験が評価されない、そしてキャリア中断や不形成がその後の人生に影響を与えることが描かれ、キャリア形成支援の必要が示されている。現状ではメディア言説において家族を介護する若者は、ライフコース選択の機会を逸し、自らのキャリア形成における困難を抱えた主体として描かれているといえる。

しかしこの「ライフコース選択の機会における困難」の乗り越え方に着目すると、その取り上げられ方には偏りがある。例えば「困難の物語」の描かれ方のジェンダー差異である。今回の資料に登場する家族を介護する若者は11名（内男性6名、女性5名）である。その中で男性の6名中4名については「ライフコースにおいて困難に直面し、苦闘したその結果または将来を考えて行っている現在の取り組みまで」という一連の物語が描かれる。例えばEさんについては、介護の負担により高校を退学せざるを得なくなり、介護後も就職活動が上手くいかなかったことと、パートタイム勤務を経て起業したことまで（中津海, 2014, p. 160）、高校生の時から介護をしていたFさんは大学生の時に就職活動ができず、奮起して自宅で行政書士として開業し、さらには若い介護者への支援を訴えて議員となってからの活動まで（朝日新聞社, 2014, May 6; 日本経済新聞社, 2014a, Jun. 18; 2014b, Jun. 18）が記されている。同じく就職機会を逸したGさん（日本経済新聞社, 2014a, Jun. 17; 2014b, Jun. 17）や、介護による様々な負担から会社を退職したCさん（朝日新聞社, 2014, Feb. 6）については、取材の時点においても介護を必要とする家族がいるか、介護が終わってから日が浅い状態だが今後の再就職について悩む姿や、介護経験を生かす道を模索する様子が描かれる。またGさんの登場する記事の結びは「若者介護で失ったものを取り返す歩みが始まろうとしている」（日本経済新聞社, 2014a, Jun. 17; 2014b, Jun. 17）であり、ここでのGさんは、介護後にその経験を生かしながらこれまで失われた様々な機会を取り戻そうとする主体である。

一方女性は、正社員から非正規パートになったDさん（朝日新聞社, 2014, Feb. 6）、就職の際非常勤を選択したHさん（中津海, 2014, p. 156）、退職したJさん（中津海, 2014, p. 158）、国家資格取得を断念し在宅介護を続けるKさん（飯塚ほか, 2014, Jun. 17）がキャリアへの明らかな影響を受けたことが示される。しかし介護が終わっている場合も、その後のキャリアの状況についてはあ

まり触れられない。現在も在宅介護が続くKさんのみ、介護をしながら近所の病院で受付をしていること、将来については先が見えないという本人の言葉が取り上げられている（飯塚ほか, 2014, Jun. 17）が、他は介護のため別居婚をしながら育児もしていたJさんが祖母亡き後、夫の元に引越すこと（中津海, 2014, pp. 158-159）のみである。Bさん（朝日新聞社, 2014, Feb. 6）、Hさん（中津海, 2014, p. 156）については在宅介護が終わった後のキャリアについて触れられず、Iさん（中津海, 2014, p. 158）については今後介護者の支援をしたいという思いがあることは記されるものの、困難の経験とその乗り越えについては書かれない。

介護のためライフコース選択の機会を逸し、自らのキャリア形成における困難を抱えた主体としてメディアに現れている家族を介護する若者であるが「キャリア上の困難に直面し、それを克服したか克服しようとしている」主体として表象されるのは男性であるといえる。この表象におけるジェンダー差異には、若者が介護役割を担うことに対する受け止められ方そのものにジェンダー差異または格差があることが反映されているのではないか。職業的キャリアが形成できて当然とされやすい若年男性が、介護でキャリアを中断または形成すらできないことは重大事とみなされる。だからこそメディア言説においてかれらが「困難に直面し乗り越える」までが物語として成立しやすいのではないか。一方若年女性の場合、そもそも結婚や妊娠・出産、介護等によるキャリア中断が未だにありふれたことであるがために、介護の「その後」が注目されにくいのではないか。だが女性の家族依存モデルを前提とした若年女性の貧困問題への軽視が現在批判されているように<sup>6</sup>、注目されないからといってそこに問題がないわけではない。

ヤングケアラー研究ではケアを引き受ける子どもに女子が多くまた女子の方が介護に費やす時間が長いというジェンダー格差がみられることは既に指摘されている（三富, 2000, p.411; 2010, pp. 298-299）。また土屋（2006）はALS患者の親を持つ子どもに焦点化した研究で、介助者である子どもに女兒が多く、また親や周囲の者から期待されるケア役割の重さにジェンダー格差があることを指摘する。だが、本稿で検討している社会問題化の過程で起こる主体化にまつわる機制、そこにみられるジェンダー差異についてはあまり論じられてこな

かったと思われる。十分な規模や内容の調査が行われていない日本の現状では、現在の社会問題化の過程で若い介護者がメディアにおいて主体化されまた「何が問題なのか」が論じられていく一方で「問題」としてみなされないことにも注意しながら、今後の研究や支援を考えてゆく必要があるのではないかな。

## 2 家族を介護する若者の「孤独や孤立という困難」

先行研究ではケア役割を担っている子どもが学校や近隣において差別的な扱いやいじめを受けることが報告されている（Aldridge & Becker, 2003, p.75; 三富, 2008, pp. 300-301）。また親をケアする子どもは親の状況を話せば自分がマイノリティの側とされたり（土屋, 2006, p. 115）、自分も親も「人と違う」と非難される（森田, 2010, p. 6）ため、他者へ「カムアウト」を行わないと指摘される。またケアを行う子どもは障害者福祉や児童福祉の狭間で認識されにくく（澁谷, 2012, pp. 3-4）、児童福祉の対象からも外れる年齢となると、かれらを直接支援する仕組みは存在しない。

今回のメディア資料においても家族を介護する若者の「孤独や孤立という困難」が取り上げられている。高校で友人に理解されず、教師に話しても何ら対処が講じられず精神的に孤立したEさん（読売新聞社, 2014, Mar. 25）、家族の認知症のことや失禁の始末など、介護について誰にも言えなかったFさん（朝日新聞社, 2014, May 6）とIさん（中津海, 2014, p. 158）の経験である。また家族を介護する若者が行政や福祉の制度を利用する機会や情報を得にくい困難として、役所を訪ねたものの「お母さんと来て」と言われ門前払いされたFさん（朝日新聞社, 2014, May 6）の経験も取り上げられている。ここでは若者が友人とのつながりや学校から孤立し、さらには行政や福祉制度へのアクセスもしづらいという「孤独や孤立という困難」を抱えた主体として現れている。

しかしこうした困難は、若者が介護を引き受けているからこそ与えられるスティグマと社会的排除の存在を示しており、それは介護に対する社会の認識や対応そのものを問うものである。その点では先に述べたライフコース選択の困難についても同様である。

澁谷（2008）は「家族ケアを行う子どもという存在は、親が子どもをケアし、非障害者が障害者をケアするとされてきた、従来のケアの方向性を問う」



(p. 2) と述べ、社会においてケアの捉えられ方が偏っていることと、こうした子どもの存在が不可視となることを指摘する。今後は福祉制度上にかれらが捕捉されないことだけではなく、若い介護者の社会的排除の構造についてさらに検討されてもよいのではないか。例えば社会における介護に対する規範的意識と若者に対する役割期待との不和や、それに基づくスティグマや、学校をはじめとしたシステムからの排除について考察を深めるなどである。

### 3 家族を介護する若者への支援と介護の社会化

以上、現在の日本のメディア言説において家族を介護する若者が問題を抱えた存在という主体として描かれる様子、また社会問題化過程におけるこうした主体化のあり方からは見えづらいことについて述べた。本節ではこれらを踏まえ、今後の研究や支援に向けてどのような注意点や課題があるか述べたい。

まず、家族を介護する若者の「キャリア形成における困難」に関しては女性の「困難への対処とその克服」の状況が重視されづらく、問題視されない代わりに不可視化される可能性に注意すべきである。一方男性が「介護によって失ったものを取り戻す」というのが当然の帰結とされるのなら、キャリアを再形成できない場合どんなプレッシャーがかれらにかかるのかについても考えて然るべきである。介護によって失ったものを取り戻すという物語が家族を介護する若者（介護中であれ、介護が終わった後であれ）に与える影響について考察し、家族を介護する若者の「困難を克服し/ようとする」物語が成立する時に、そこに回収されないかれらの経験やニーズが何であるかを考えていく視点が必要である。

次に、家族を介護する若者が孤立し排除されるという問題を抱えた主体であり、だからこそ支援されるべきという見方に関していえば、むしろ支援は重要である。英国では90年代にヤングケアラーという子どもへの焦点化および定式化に関する議論の結果、介護者支援制度における家族全体へのアプローチが理論的基盤となっている（三富 2008, pp. 287-288）。今後日本でもこうしたアプローチをとることの重要性については北山（2012, pp. 72-73）も指摘する。家族を介護する子どもや若者が「問題を抱える」状況は、そもそも家族への支援が不十分なことを背景にしていることを考えれば、家族に包括的支援をし、

子どもや若者のニーズに対応しようとする見地は重要である。しかし、家族の介護をする若者が社会との横断的な接点において、まさに介護を担っているからこそ経験する孤独や孤立は、社会がかれらをどうみているか、またはどう無視しているかを表すものである。こうした社会的排除の状況と、また支援に介在する権力作用（荒井, 2014, pp. 32-38）について自覚的であることが、今後家族を介護する子どもや若者に対する支援を考えていく上で求められていると考える。支援が考えられる際に「何が問題なのか」を専門家が指定し、子どもや若者から介護負担を減らそうとするだけでは、結果的に介護の必要な者を含む他の家族成員の負担が増したり、介護を担ってきた子どもや若者が納得しづらい形での支援になる可能性も考えられる。この点については今後さらに議論がなされるべきであろう。

また現状の介護の社会化（またはケアの分有）の議論自体は、確かに有意義であろう。しかし、またフォーマル/インフォーマルセクターの協調や、地域のつながりを作り出してコミュニティケアを進めるといった取り組みは、果たして家族の介護をする子どもや若者の存在を包摂した介護の社会化につながっていくのだろうか？現在日本で進められようとしている介護の社会化（特に高齢者の介護）の文脈における家族介護者とは、例えば「仕事と介護の両立支援」のように、仕事や介護を誰かと分有できる者が想定されており、学業やキャリアの積み上げが少ない状態で仕事に従事するなど、社会的活動と介護をそもそも他者と分有しづらい子どもや若者についてはほぼ考えられていない。介護の社会化という過程、またそれによって生み出される新たな介護やケアの仕組みの内に、家族を介護する子どもや若者の存在は包含されていないのではないか。さらに、介護を担う家族の存在が暗に想定された現行の介護保険制度（藤崎, 2014, p. 619）においては、その家族が誰なのかは不明確であり、むしろ介護をする子どもや若者については考えられてもいないだろう。

今後は、介護やケアの仕組みに家族を介護する子どもや若者をいかに包摂するかが、研究や支援の上で課題となってゆくのではないと思われる。また実態を把握するために、今後家族を介護する子どもや若者に対する量的調査、さらにある程度の年齢以上の若者に対しては深層インタビュー等がなされる必要がある。「家族を介護する若者が問題を抱えている」として社会問題化され

る過程への懷疑は既に述べた。今後研究や調査が行われていく段においても、「何が問題か」を専門家や研究者が予め措定して取り組むのであれば「問題とされない」「目が向けられない」ことが生み出される可能性を考えなくてはならない。

また、単にニーズを把握して「かれらの問題」を解決しようとするのではなく、家族を介護する子どもや若者の存在から社会がどう問われているのかを考察することは、今後の介護の社会化を考えて行く上で欠かせないこととなる。そうであるなら、まず、非常に個人的なものになりがちな介護経験について、また社会との横断的な接点における排除を含んだ経験について、また現状のさまざまな制度との関わりについて、かれら自身の言葉と解釈枠組みを大事にしながら聴く営為が必要となるだろう。

## おわりに

家族の介護をする子どもや若者が取り上げられる時、まず社会からの視線は介護をしているその個人、およびその家族に向く。そして子どもや若者が家族の介護をすることは、少子高齢化や核家族化といった家族変動を背景に起こっている「家族の問題」とされ「そんな問題を抱えた個人や家族を支援しよう」ということになる。

だが、上述した通り、家族を介護する子どもや若者の存在によって問われているのは、この社会における介護に対する考え方、その結果として形成されている仕組み、そして子どもや若者というものをどのような存在として見なしているか、である。また、それらが社会的排除を生み出していることに対して向き合うことなしに、家族を介護する子どもや若者を包摂した今後の介護やケアの仕組みを考えてゆくことはできない。家族を介護する子どもや若者を包含した介護の仕組みづくりのためには、現状に対して必要な支援を打ち出すことに加え、かれらの経験や経験への解釈、またその中に現れる社会のあり方に接近し、介護の社会化を再考してゆく作業が必要となるだろう。

Figure 1 メディア資料一覧

メディア	日付	メイン見出し/番組名	サブ見出し/ サブタイトル	登場する「家族を 介護する若者」	備考
朝日新聞	2014年2月5日	認知症とわたしたち の手前で <sup>1</sup>	50代の父が、まさか	Aさん (高校生) Bさん (大学生)	
朝日新聞	2014年2月6日	認知症とわたしたち の手前で <sup>2</sup>	失火…見守るため、長 男は退職 介護の仕方めぐり父子 3人に溝 精神的に孤立、進学断 念 ネットを通じグループ	Cさん (26歳男性) Dさん (30歳女性、 Cさん姉)	
読売新聞	2014年3月25日	家族介護悩む若者を支援 同世代で情報交換の動き	高1から父支え8年 重い責任 心の負担に	Eさん (25歳男性)	
朝日新聞	2014年5月6日	若い介護者「ヤングケア ラー」、社会で支援を		Fさん (28歳男性)	
日本経済新聞夕刊	2014年6月17日	若者が介護する日 (上) 認 知症の父 就職あきらめ 守った <sup>20代</sup>	晩産化・ひとり親…増 加の兆し	Gさん (29歳男性)	
日本経済新聞電子版	2014年6月17日	親の介護で未来を奪われる 若者 ある <sup>20代</sup> の場合	晩産化・ひとり親…増 加の兆し	Gさん (29歳男性)	上列と同内容
日本経済新聞夕刊	2014年6月18日	若者が介護する日 (下) 親 が失禁 友達に言えますか		Fさん (28歳男性)	
日本経済新聞電子版	2014年6月18日	親を介護する若者の絶望 みんなに知ってほしい		Fさん (28歳男性)	上列と同内容
週刊朝日	2014年6月24日	孫たちの祖父母介護	「介護経験あり」2割も 就活あきらめ住宅で… 30代までの男女500人 にウエブアンケート	Hさん (34歳女性) Eさん (26歳男性) Iさん (39歳女性) Jさん (36歳女性)	
NHK総合	2014年6月17日	クローズアップ現代	介護で閉ざされる未来	Kさん (25歳女性) Cさん (26歳男性)	

## Footnotes

- <sup>1</sup> 1980年代末から行政的対応や支援の蓄積がある英国ではこうした子どもはヤングケアラー (young carer) と呼ばれる。ソール・ベッカーはヤングケアラーを「家族メンバーのケアや援助, サポートを行なっている (あるいは行うことになっている) 18歳未満の子ども。こうした子どもたちは, 恒常的に, 相当量のケアや重要なケアに携わり, 普通は大人がするとされているようなレベルの責任を引き受けている。ケアの受け手は親であることが多いが, 時にはきょうだいや祖父母や親戚であることもある。そのようなケアの受け手は, 障害や慢性の病気, 精神的問題, ケアやサポートや監督が必要になる他の状況などを抱えている」(Becker, 2000/2010) としたが、年齢や関わるケアの量に関して議論があり、より広い定義を取っている民間非営利団体もある (澁谷, 2012, p.20; 三富, 2008, pp. 282-283)。近年 18歳未満を young carer、18歳以上 24歳以下を young adult carer と概念として区別するようになっていいる。日本でも「ヤングケアラー」という語が使われ出したが、中高年以外の比較的若い介護者全般に対して使われている。
- <sup>2</sup> (社) 日本ケアラー連盟事務局の野手香織氏よりメールでご教示いただいた (2014年 8月22日)。
- <sup>3</sup> ブログ「若年認知症ねりまの会 MARINE」内記事「若年認知症と向き合う子どものつどい」(2014年2月4日) より。 [http://blog.canpan.info/team\\_marine/archive/63](http://blog.canpan.info/team_marine/archive/63) (2014年8月22日最終アクセス確認)
- <sup>4</sup> 「ヤングケアラーのしゃべり場」(2014年3月20日、介護者サポートネットワークケアむすび主催、於仙台市市民活動サポートセンター)、「若者介護をしゃべろう会」(2014年4月12日、介護者の集いオアシス主催、於草加市立中央公民館)、「第1回若年介護者のつどい」(2014年7月13日、男性介護者の会みやび主催、於高岡市男女平等推進センター)、「あなたも〈ヤングケアラー〉? 介護を担う若者たちの声」(2014年7月19日、岡山大学文学部主催、於岡山大学)。富山では2014年1月18日と2月20日に「ヤングケアラー支援を考える交流会」(男性介護者の会みやび主催、於コミュニティハウスひとのま)があり、後者は2月23日成蹊大学シンポの登壇者を招いた。
- <sup>5</sup> 今回参照した資料内の「家族を介護する若者」は実名と仮名、氏名不詳が混在するため、資料の日付順と登場順に応じたアルファベット名とした。人物と資料の対応は Figure 1 参照。なお今回の資料に登場する人物のうち、『週刊朝日』に掲載の「孫たちの祖父母介護」内 41歳男性のみ、介護開始年齢が 40歳 (中津海, 2014, p. 159) で

あるため、分析対象からは除外した。

- <sup>6</sup> 日本では、若年女性の貧困化は、家族が女性を扶養する前提に基づく女性の家族依存モデルを隠れ蓑に不可視化されてきた。一方男性労働者の非正規化のみが問題視され、男性フリーターやニートへの否定的言説が生み出された（江原, 2013, July 13）。

## References

- Aldridge, Jo. & Becker, Saul. (2003). *Children Caring for Parents with Mental Illness: Perspective of Young Carers, Parents and Professionals*. Bristol: Policy Press.
- Becker, F. & Becker, S. (2008). *Young Adult Carers in the UK: Experiences, Needs and Services for Carers Aged 16-24*. London: The Princess Royal Trust for Carers.
- Becker, Saul. (2010). 「家族ケアを行なう子ども（ヤングケアラー）の定義」（澁谷智子, Trans.）. 『澁谷智子のホームページ』. （最終アクセス 2014/8/30）Retrieved from <http://shibuto.la.coocan.jp/sub7.html> = （Original work published 2000）. 'Young carers', in Davies, M. (ed.). *The Blackwell Encyclopaedia of Social Work*. Oxford: Blackwells, p. 378.
- 荒井浩道. (2014). 『ナラティブ・ソーシャルワーク “〈支援〉しない支援”の方法』. 東京: 新泉社
- 朝日新聞社. (2014, February 5). 「認知症とわたしたち 老いの手前で1」『朝日新聞』第27面
- 朝日新聞社. (2014, February 6). 「認知症とわたしたち 老いの手前で2」『朝日新聞』第35面
- 朝日新聞社. (2014, May 6). 「若い介護者「ヤングケアラー」、社会で支援を」『朝日新聞』第23面
- 江原由美子. (2013, July 13). 「講演1 「非正規問題とジェンダーの関連性」労働政策研究・研修機構主催, 労働政策フォーラム「アンダークラス化する若年女性：労働と家庭からの排除」開催報告（最終アクセス 2014/8/30）Retrieved from [http://www.jil.go.jp/event/ro\\_forum/20130713/houkoku/02\\_ehara.htm](http://www.jil.go.jp/event/ro_forum/20130713/houkoku/02_ehara.htm).
- 藤崎宏子. (2014). 「ケア政策が前提とする家族モデル—1970年代以降の子育て・高齢者介護」. 『社会学評論』. 64 (4), 604-624.
- 飯塚一朗, 中島慎治（プロデューサー）, 寺澤敏行, 先崎壮（ディレクター）. (2014, June 17), 「介護で閉ざされる未来～若者たちをどう支える～」『クローズアップ現代』[テレビ放送]. 東京: 日本放送協会
- 北山沙和子. (2011). 「家庭内役割を担う子どもたちの現状と課題—ヤングケアラー実態調査から」（修士論文, 兵庫教育大学大学院学校教育研究科, 兵庫, 日本）（最終アクセス 2014/8/30）Retrieved from <http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/3991/1/YV20310012.pdf>.
- 三富紀敏. (2000). 『イギリスの在宅介護者』. 京都: ミネルヴァ書房

- 三富紀敬. (2008). 『イギリスのコミュニティケアと介護者—介護者支援の国際的展開』.  
京都: ミネルヴァ書房
- 森田久美子. (2010). 「メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験—不安障害の親をケアする青年のライフストーリー」. 『立正社会福祉研究』. 12 (1), 1-10.
- 中津海麻子. (2014, June 24). 「孫たちの祖父母介護」. 『週刊朝日』. 第119巻第28号通巻5257号, 156-160.
- 日本経済新聞社. (2014a, June 17). 「若者が介護する日（上）認知症の父 就職あきらめ守った20代」『日本経済新聞夕刊』第9面
- 日本経済新聞社. (2014b, June 17). 「親の介護で未来を奪われる若者 ある20代の場合」『日本経済新聞電子版』
- 日本経済新聞社. (2014a, June 18). 「若者が介護する日（下）親が失禁 友達に言えすか」『日本経済新聞夕刊』第9面
- 日本経済新聞社. (2014b, June 18). 「親を介護する若者の絶望 みんなに知ってほしい」『日本経済新聞電子版』
- 澁谷智子. (2008). 「子どもがケアを担うとき—ヤングケアラーになった人/ならなかった人の語りと理論的考察」. 『理論と動態』. 5, 2-23.
- 土屋葉. (2006). 『『障害』の傍らで—ALS患者を親に持つ子どもの経験』, 『障害学研究』. 2, 99-123.
- 読売新聞社. (2014, March 25). 「家族介護悩む若者を支援 同世代で情報交換の動き」第16-17面



**Media Representations of Young People Performing Caretaking Roles  
in Families as a Rising Social Problem in Japan**  
**Miho MATSUZAKI**

In Japan at present, young people who perform caretaking duties within their families have begun to receive attention from the media as being targets of aid. This trend entails the following questions: what exactly is being highlighted as problematic by the media, and what kind of subjects does the media portray these young people as? This paper will analyze the recent Japanese media coverage of young people in caretaking roles within their families, and pay particular attention to what is overlooked when this situation is recognized as a social problem. Additionally, this paper will not only focus on what is, but also what is not being discussed as “problematic.” Finally, through these issues, the author hopes to present additional tasks and discussion points for future research on this subject.

In the media, young people who perform caretaking duties for their families are depicted as subjects who have lost the opportunity to choose a life path, and who experience difficulty in launching a career. However, there is a gender bias in how such “difficulties” are depicted, reflecting the existing gender bias or discrepancy in how society responds to young people who assume caretaking duties. This does not fit into the storyline of young people who nurse family members “trying to overcome/overcoming difficulties,” and so there is a need to recognize the oft-overlooked variety in the experiences or needs of said young people.

Furthermore, in media coverage, caretaking youths are portrayed as isolated from friends and school, or even as subjects who are removed from the systems related to caretaking entirely. Consequently, they are thought to require aid. Yet, the very loneliness or isolation that these young people experience due to caretaking is founded on the way in which society views caretaking and young people. Considering the present

caretaking system, the attempt to provide aid to young people performing caretaking duties does not respond to such issues.

The existence of young people who perform caretaking roles within their families is not taken into account within the current long-term care insurance system in Japan and the discussions on the socialization of caretaking.

In future research, a detailed discussion of the experiences taken from first-hand accounts of young people performing caretaking duties, as well as a reexamination of current debates on the socialization of caretaking and the systems in place, will become necessary.

**Keywords:**

Young people who perform caretaking roles within their families, Young carer, Young adult carer, Media, Social problem



**Book review**

**Jacqueline Rose. *Women in Dark Times*.**

**London: Bloomsbury, 2014**

**Daniela KATO**

**Hiroshima Jogakuin University**

In the current ideological climate, what can one expect from a book that makes a passionate plea for a “bold, scandalous feminism?” Perhaps an upbeat feminism that asks us to stand on chairs and shout “I’m a feminist,” while advising us what to do with our pubic hair and reassuring us there’s nothing “unfeminist” with having body image issues and eating disorders – another version of the young hip feminism that now colonises the weekly columns of Anglophone newspapers and magazines, and churns out best-sellers with catchy titles full of “sass” and confidence-building, nonchalantly equating female emancipation with a self-pampering consumerism?

The high seriousness and integrity of *Women in Dark Times* could not be further removed from this. Without decrying the value of other forms of contemporary feminism, Jacqueline Rose’s new book is a radical departure from their rhetoric and illusions. “It is time to return to what feminism has to tell us,” Rose proposes in her preface. And, indeed, *Women in Dark Times* is in many ways an attempt to return feminism to what it has lost sight of in the past two decades, with its focus on the micropolitics of individual emancipation, at the expense of a more wide-ranging political engagement linking the urgent political issues of violence perpetrated against women, discrimination, inequality, and misogyny with the psychoanalytic complexities of inner life. In sum, a reaffirmation of the motto “the personal is political” that informed the debates of the second wave of feminism. And a reaffirmation, too, of its founding idea put forward by Juliet Mitchell in the mid-1960s: feminism is “the longest revolution,” a struggle for women’s freedom that is far from won and continues,

unabated, despite periodical setbacks and backlashes.

The foregrounding of the link between the deeply personal and the political through an emphasis on “the unspeakable” – that which cannot be admitted to consciousness and forms thereby the subject of psychoanalysis – has been one of the abiding concerns of Jacqueline Rose’s work over the past thirty-five years. It has given birth to definitive contributions to feminism, film theory, psychoanalytic criticism, as well to compelling meditations on the most difficult political and historical issues of our time: apartheid, Zionism, suicide bombers, and honour killings. Hence it is perhaps more accurate to say that *Women in Dark Times*, rather than a throwback to a feminism that has fallen out of fashion, is a distillation of Rose’s long-standing interrogations and insights, particularly in relation to women who, in her view, most compellingly straddle the divide between political and inner life. In line with her previous work, the book is a deft combination of psychoanalytic interpretation, political manifesto, feminist art history, and personal reflection, in an ambitious attempt to connect the conflicts, traumas and struggles that make up the dark times of today with those that shaped the twentieth century, namely the two world wars and the Holocaust.

And yet, it is not easy for the reader to apprehend all these complex connections, as the book seems at first sight more a compendium of engagingly written articles rather than a unified, coherent work. This entails certain losses, but also significant gains. Reading *Women in Dark Times* is an unpredictable journey requiring time and concentration to follow its many twists and turns. Indeed, only gradually tease do we manage to out the subtle threads that weave together the diverse life stories and works of the nine women on which Rose focuses.

The book is organised into three distinct sections. In the first section we are introduced to Rosa Luxemburg, the revolutionary socialist murdered by right-wing henchmen in the aftermath of the First World War, to Charlotte

Salomon, the German-Jewish painter who died in Auschwitz, rather surprisingly, and to Marilyn Monroe. Rose's purported aim here is to "add their names to the already distinguished ancestry, the foremothers, of modern feminism", not because "they saw themselves as feminists – they did not," – but because of the way "each of them trawls the darkness of their inner life, where their most anguished voices reside, in order to understand what impedes them but also in search of the resources to defy their own predicaments" (p. 2).

In view of this, it becomes difficult, at first, to grasp the purpose of the book's central section, where Rose examines "honour" killings with reference to the case studies of three victims: Shafiea Ahmed, a teenage Bradford resident murdered by her parents in 2003, Heshu Jones, killed in 2002 by her Iraqi-Kurdish father, and Fadime Sahindal, a Kurdish immigrant to Sweden equally murdered by her father in the same year. Here Rose explores the link between the unconscious and the political at the level of the nation state, by showing how the hidden anxieties and fears in which honour killings are steeped do not exclusively originate in non-Western "unenlightened" nations. Such anxieties and fears also betray the delusions of Western nations in their presumed "enlightened" difference and distance from such horror, delusions that have translated into an intensifying anti-immigration rhetoric and racism affecting migrant women with particular intensity.

The final section turns to the work of three contemporary artists: the Lithuanian-born and multimedia artist Esther Shalev-Gerz, the Israeli video artist Yael Bartana, and the English abstract landscape painter Thérèse Oulton. This section weaves together all the previous thematic threads – overlooked, invisible working lives, exile and rootlessness, democracy, war and militarism (also adding, from Oulton, the ravaging of the environment) – to shine an artistic light on the chronic insecurity and darkness of modern life through the eyes of women who faced such insecurity and darkness

head-on, despite their intense personal vulnerability.

The intricate dynamic of darkness and light becomes, indeed, the master trope uniting all the essays. This is an idea that Rose takes, of course, from Hannah Arendt's classic *Men in Dark Times* (1968). It is worth quoting Arendt's key passage in this respect: Even in the darkest of times we have the right to expect some illumination, and such illumination may well come less from theories and concepts than from the uncertain, flickering, and often weak light some men and women in their lives and their works, will kindle under almost all circumstances and shed over the time span that was given to them on earth.

What becomes potentially problematic in the appropriation of Arendt in *Women in Dark Times* is Rose's insistence on women as "custodians of the night" who confront "dark with dark" (p. ix). I find it hard to accept that this follows necessarily from the book's overarching argument that some women remain best positioned to tackle the darkness of modern life due to their ability to immerse themselves in the experience of others, to tolerate negative, vulnerable states, to actively accept the unpredictable and the unruly, to creatively remind us of the limits of enlightenment thinking. Such perfunctory associations of women with darkness and unreason risk relapsing into old-time "angry" essentialisms and binary oppositions of which feminism should remain extremely wary.

Yet, we should also remain wary of throwing away the baby with the bathwater. Thus I shall retain what is to me Rose's most valuable, heartening proposal in *Women in Dark Times*: Let feminism, then, be the place in our culture which asks everyone, women and men, to recognise the failure of the present dispensation – its stiff-backed control, its ruthless belief in its own mastery, its doomed attempt to bring the uncertainty of the world to heel. Let feminism be the place where the most painful aspects of our inner world do not have to hide from the light, but are ushered forth as handmaidens to our protest (p. 268).

## 「ふわカフェ」 報告

上田真央

ジェンダー研究センター 研究所助手/準研究員

### はじめに

CGSでは「ジェンダー・セクシュアリティに関して”ふわっと”話せる場がほしい」という学生からの要望に応える形で、2012年12月から学期期間中に毎月1回のペースで「ふわカフェ」を開催してきました。この新たな取り組みである「ふわカフェ」について、ここでは発案者の一人である筆者が、もう一人の発案者である杵田光（2012～2013年度CGS研究所助手）の報告<sup>1</sup>を参照しながら、これまでとこれからについて考察します。

### 「ふわカフェ」ってなに？

CGSは開設当初より、4月と9月の入学式の時期に合わせ、新入生を含むICU構成員にCGSやジェンダー・セクシュアリティ研究メジャーを紹介する機会として、ティーパーティーを開催してきました。しかしこのティーパーティーは、いわばCGSが自己紹介をする機会であり、学生が自分のことを思うように話すことを促す場ではありません。「セクシュアリティにちょっと悩みや違和感があるけれど、なかなか自分のことが話せない」、「悩みをうまく言葉にできない」といった学生の声を聴くことは少なくないため、自分のことを安心して話せる場が必要なのではないか、と感ずることが多々ありました。また発案者自身も、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーといった言葉では自分を表現しきれなかったり、いわゆる既存の“コミュニティ”の集まりに参加しても、そこが自分の居場所では必ずしもないように思えたりするなど、明確に言葉にしづらいような違和感や、行き場のない“もやもや”とした感覚を抱えてきており、このようなことについて話し合い、受容できるようになる場をつくりたいと考えていました。これらの学生の要望と発案者の思いが重なり、「ふわカフェ」が始まることになりました。

「ふわカフェ」のコンセプトはRainbow Action<sup>2</sup>の「ゆるカフェ」、「かもカフェ」を参考にしています。「ふわカフェ」の「ふわ」は、言葉にすることが



難しいジェンダー・セクシュアリティにまつわる違和感や揺らぎのことを念頭に置いた表現になっています。「ふわカフェ」は、「同性が好きかもしれない」、「男女両方が好きかもしれない」、「自分は恋愛とか興味がない」、「いまの身体は女性だけど、男性として見られたい」、「いまの身体は男性だけど、女性として見られたい」、「性別で自分のことを決めつけられたくない」、「自分の性の在り方をひとつに決めつけたくない」…または、これらには当てはまらないけれど、気になること、話してみたいことがあるという人たちを対象にしており、そんなジェンダーやセクシュアリティのことをみんなで“ふわっと”おしゃべりできる空間を参加者と一緒に作ってきました。

### これまでの「ふわカフェ」について

2013年度は筆者と杵田光の2名が、2014年度は筆者と加藤悠二（CGS 事務局長）が世話人（ファシリテーター）として運営を担当してきました。当初は「ゆるカフェ」「かもカフェ」同様、フリートーク形式で参加者に自由に話してもらうことを考えていましたが、単純な世間話が多くなってしまったり、話を切り出すことが苦手の参加者が発言できず、世話人を含むジェンダー・セクシュアリティの話題に関して普段から話し慣れている人の発話中心になってしまったりと、意図していなかったかたちで会が進行されることが続きました。その反省から、4回目より実験的にトークテーマを導入しました。その結果、「ふわカフェ」の場合テーマを設定することで世話人の負担が軽減されるだけでなく、参加者がよりジェンダー・セクシュアリティの話題に集中して話することができることが分かりました。そのため、第6回目以降はトークテーマを設定する方向で開催しています。

Table 1

開催日	テーマ	参加者数
2012.12.13（木）	フリートーク	12
2013.1.25（金）	フリートーク	14
2013.2.25（月）	フリートーク	6
2013.4.30（火）	今学期、なんとかやっていけそう？	30
2013.5.27（月）	フリートーク	5
2013.6.12（火）	つきあうって、なに？	12

2013.8.17 (土)	ジェンダー・セクシュアリティ研究	3
2013.9.24 (火)	留学どうだった？	8
2013.10.21 (月)	カミングアウト	10
2013.11.8 (金)	就活/働くこと	6
2013.12.18 (水)	研究と進学	6
2014.1.20 (月)	就活とジェンダー	20
2014.2.4 (金)	出張ふわカフェ@外大 (海外事情研究所)	9
2014.2.19 (水)	好きってなに？	8
2014.4.18 (金)	女/男らしさってなに？	14
2014.5.19 (月)	宗教とジェンダー・セクシュアリティ	28
2014.6.4 (水)	スキってなに？	20
2014.9.24 (水)	自分のからだを考える	7
2014.10.20 (月)	カミングアウト	14
2014.11.4 (火)	トモダチってなに？	12
2014.12.12 (金)	就活とジェンダー	11

「ふわカフェ」の運営・進行方法に関しては、事前打ち合わせのほか、閉会後に世話人同士で反省会を行っています。また、第17回目からはクローズド・エンドとオープン・エンドのアンケートを実施するなど、参加者からのフィードバックをもらうことで運営の改善を図っています。

2015年1月現在の運営としては、参加者が安心して過ごせる場になるよう、開始時間をCGSが閉室した後の18時半から21時までに設定し、進行役として世話人を2名置いています。気軽に立ち寄れる場にしたいため、予約制度や参加費は設けず、開催時間中は自由に出入りができるようにしています。また、より多くの方がアクセスできるように、時間帯は固定ではありますが、開催する曜日を毎月変えています。参加者には、「今日よばれた名前」が記入できるネームカードとグランドルール（今日のおやくそく）<sup>3</sup>を入口で配布しています。グランドルールは開会時をはじめ、新たに参加者が来たときや、トイレ休憩の時間の後などにも繰り返し読み合わせをすることで、参加者にリマインドを促したり、会話に一息をつく機会としています。2015年1月現在使用しているグランドルールは添付資料をご参照ください。

グランドルールを確認した後は、アイス・ブレイキングを兼ねた簡単な自己紹介の時間を設けています。お題は「今日呼ばれた名前」と「今この瞬間のキモチ」で、後者については「今日のふわカフェで話したいこと」に限らず、

## グランドルール



# グランドルール

(今日のおやくそく)

## 1. 今日のお話は、ここだけのお話

ふだんは話しづらいことを話せる雰囲気を作りたいので、今日ここで聞いた話は、ここだけのお話に留めておいてください。「こんなイベントに参加したんだよ!」ということはどうしてもシェアしたい場合は、個人名や個人情報を出さないように、気をつけてください。

## 2. ここにはさまざまな人がいることを忘れず、否定をしない

ふわカフェに集まる人は、さまざまな価値観(恋愛観、セクシュアリティ、ジェンダー、それぞれの課題など)を持っています。お互いを尊重し合えるような話し方を心がけ、ほかの人の気持ちや心、在り方を否定しないようにしましょう。

また、セクシュアリティは見た目や振る舞いで判断することはできません。お互い勝手にレッテルを貼らないように、気をつけましょう。

## 3. 言いつばなし、聞きつばなし

個々人の体験はその人だけのものです。相手の話を聴くことも、自分を知ることに関がります。必ず誰かが同意をするなどの反応をしなければならない、ということはありません。アドバイスは、特に求められたときだけに留めましょう。

## 4. 話したくないことは話さない、話せなかったことで諦めない

話したくない話題のときには、無理に話をしないで大丈夫。答えを求められたときには断ってよいですし、無理に他の人から答えを求めることも控えるようにしましょう。

また、本当は話したかったことが、どうしても話せなかった、ということもあるかもしれません。今日話せなかったことも、次回は話せるかもしれませんから、今日話せなかったからといって、諦めたり、自分を責めたりしないようにしましょう。

## 5. 一度に話すのは、ひとりだけ。

活発なディスカッションも楽しいけれど、今回のふわカフェでは、「一度に話すのは、ひとりだけ。」というルールにチャレンジしてみたいと思います。話しているひとが満足できるまで、他のひとは一生懸命聞きましょう。普段の会話とは違うカタチのコミュニケーションになりますが、その分、新しく見えるものがあるかもしれません。

参考：紅色ダイバーシティ <http://www.nijirodiversity.jp/>

『キリストの風』集會 <http://homepage3.nifty.com/christ-kaze/>

NPO法人発達障害をもつ大人の会(DDAC)、2013、「大人の発達障害生活ガイドブック2013

～セルフヘルプグループをつくらう!～」

関西ほっとサロン <http://adhd-west.net/>

2013.5.27. 初版/2015.4.1. 改訂



名札



「おながが空いた」、「緊張している」、「試験の息抜きに参加した」などを一言ずつ話してもらっています。また、グランドルール1番「今日のお話は、ここだけのお話」を徹底する意味と、会を通して新たに出てきた“もやもや”や、引きずってしまいそうな感覚をいったん置いて帰ってもらいたいという思いから、会の終わりに一言ずつ「今この瞬間のキモチ」をシェアもらうようにしています。また、「話をしたそうだけど、切り出せないのかな？」と思われた参加者がいた場合には、閉会後にそれとなく話をかけてみたり、世話人の在室日を伝えたりしています。

広報活動は、オープンキャンパスや新入生へ配布される資料への封入、学内ポータル（電子掲示板）上の告知、学内におけるポスターの掲示、CGS Online や facebook ページ、twitter などでの情報発信で行っています。

## 効果

参加者数は開催日やテーマにより変動が見られますが、毎月5～20名ほどの参加者が集まります。CGSを日頃から利用している参加者だけではなく、各種広報やSNS上を含めた口コミを通じて、学内外からもご参加頂いています。固定参加者数は回を重ねるごとに増えていますが、ほぼ毎回、初参加の人、こ

れがCGSに足を運ぶ初めての機会になった人がみられています。CGSは、ジェンダー・セクシュアリティについて安心して話することができる場所として認識・利用してくださる方がいる一方で、これまで様々な理由から足を運ぶことがためらわれるといった声も聴いてきました。「ふわかフェ」は、そのようなためらいを緩和し、これまでCGSに来られなかった人たちも想いを語ることができる場になりつつあるのではないのでしょうか。実際に参加者の中には、「同じ思いをしている人がある」、「自分だけじゃないんだ」、「この感情はこういうことだったんだ」といった気づきがある人たちや、「いろんな視点があるんだ」、「自分の思いを否定しなくてもいいんだ」、「自分の気持ちを話してもいいのかな」と思えるようになったという人たちがいます。こうした反響は運営をしていてとても嬉しく思います。

しかし、たくさんの人が参加してくれることを嬉しく思う反面、参加者数の増加に伴い安心して話せる環境が確保しづらくなってきている、という課題も表出しています。会場となるCGSの収容人数の問題、それぞれが発言しやすい人数の問題から、現状の運営方法では10名程度が適切な参加者数ではないかということが、アンケート結果からもみえてきています。

また、世話人自身が思い入れのあるテーマの際によく起こりがちなのですが、参加者それぞれが安心して話することができる雰囲気を確保できず、反省することもありました。「もやもや」を言葉にすることで、かえって自分が傷ついてしまうかもしれない」「他の人にどう受け止められるのか分からない」など、語ることへの不安があるなかで、どうしたらより安心して話することができる空間をつくれるのかについては、回を重ねても常に大きな課題として残されています。

### これからの「ふわかフェ」について

前節で検討した課題について、参加者の増加への対応としては、「同テーマで月に2回開催する」「予約制の少人数開催のイベントを別途開催する」などの案が、アンケートへの回答からも出てきています。スケジュールの都合もあり、これらのアイディアは未だ実施できていませんが、2015年度以降に試験的に実施したいと考えています。

また、今後の課題として、世話人の代替わりについても考えていく必要があります。「ふわカフェ」を担当する世話人たちは、ファシリテートをするための特別なトレーニングを受けてきたわけではありません。どのように場を作っていくのか、グランドルールに反する発言にどう対応するのかなど、手探りで運営をしてきました。世話人が変わることでの場の雰囲気がある程度変わってしまうことは否めませんし、それぞれの世話人が手探りをし続けることも必要であるとも考えられるため、マニュアルのようなものが作れるかはわかりません。しかし、「ふわカフェ」のコンセプトを引継いだ場をスムーズに受け渡していけるように、運営に関わってきた世話人たちのこれまでの経験を今後何らかの形で共有していきたいと思います。引継ぎのために用意する資料は、何らかの形で学内外に広く共有したいと考えています。「ふわカフェ」は“CGS だけからできる”ということではない、と感じています。2014 年 2 月に、東京外国語大学で開催した「出張ふわカフェ@外大」では、参加者から継続開催に関して大きな期待が寄せられています。また、「ふわカフェ」のような場をつくりたいという思いから、他大学の教職員や学生が話を聞きに来てくれたこともありました。ジェンダー・セクシュアリティに関して話せる場が増えてほしい、「ふわカフェ」のような場が増えてほしい、「私たちにもできるんだ!」と、背中を押すきっかけになりたい、という気持ちを込めながら、資料を作っていきたいです。

筆者自身、いつまで続けていけるか正直わからない面もありますが、この場を必要とする人たちがいる限り、「ふわカフェ」を続けていきたいし、続けていって欲しいと考えています。

## 註

- <sup>1</sup> CGS Newsletter #17: ICUのなかで、想いを語る場をつくる『「ふわカフェ」で「もやもや」を語る、ということ』参照
- <sup>2</sup> Rainbow Action (<http://rainbowaction.blog.fc2.com/>)
- <sup>3</sup> 「ふわカフェ」 グランドルールはさまざまな当事者グループのピアミーティングにおけるグランドルール等を参考に作成している。参考文献はグランドルールに記載。

## **Report on "Fuwa Café" (Casual Café)**

### **Habiba-Mao UEDA**

#### **Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS**

### **Intro**

Since December 2012, CGS has held "Fuwa Café (Casual Cafe)" once a month during semesters, in response to student requests for a space to casually talk about gender and sexuality.

### **What is "Fuwa Café?"**

The concept for "Fuwa Café" was borrowed from Rainbow Action's<sup>1</sup> various café events, such as "Yuru Café" and "Kamo Café." The expression "fuwa" (soft, relaxed, light) was chosen while keeping in mind the discomfort or fluctuation that surrounds gender and sexuality, which is often not easily put into words. "Fuwa Café" was created as a space to casually chat about gender and sexuality, particularly for those who have felt the following: "I might be attracted to people of the same sex;" "I might be attracted to both men and women;" "I'm not interested in romance;" "I have a woman's body, but I want to be seen as a man;" "I have a man's body, but I want to be seen as a woman;" "I don't want others to judge me based on my gender;" "I don't want to put a label on my sexual identity." The café also welcomes those who may have something on their mind, or who want to talk about feelings other than the ones mentioned.

### **Managing "Fuwa Café"**

As of January 2015, "Fuwa Café" is run as follows: to create a safe, comfortable space for participants, the café is held from 6:30pm until 9:00pm (after CGS has closed), and two facilitators are placed as discussion coordinators. In order to encourage casual participation, we have chosen not to implement a reservation system or a participation fee, and



participants are allowed to enter and leave freely during café hours. Additionally, while the café hours are fixed, the day of the week on which the event is held changes every month so that more people can participate. Name cards on which participants can write the name they want to be called by and ground rules<sup>2</sup> are distributed at the entrance. The ground rules are read aloud at the beginning of the event, whenever a new person joins, after restroom breaks, etc. in order to remind participants of the rules and to provide a break from the discussion.

### **Outcome**

The number of participants changes depending on the day or theme, but generally 5-20 people participate every month. These numbers include people who utilize CGS on a daily basis, as well as people from inside and outside of ICU who learned of the event through advertisements or SNS. The number of regular participants increases with each session, and nearly every time there is a new participant, making “Fuwa Café” the reason behind some people’s first visit to CGS.

### **The Future of “Fuwa Café”**

One of the future assignments for “Fuwa Café” is to raise the next round of facilitators. We intend on making the materials used to instruct successive generations of helpers widely accessible inside and outside of the university. Our desire is that the number of spaces where people can talk about gender and sexuality will increase—that places like “Fuwa Café” will continue to grow in number. Therefore, we plan on creating the materials with the hope that they will push others to form similar spaces.

## Footnote

- <sup>1</sup> Rainbow Action (<http://rainbowaction.blog.fc2.com>)
- <sup>2</sup> The ground rules of "Fuwa Café" are created by referencing the ground rules used in peer meetings of self-help groups. A reference list is included in the ground rules document.



## 2014 年度 CGS イベント報告

### 第 2 回 R-Week 報告

堀真悟

ジェンダー研究センター 研究所助手/準研究員

2014 年 6 月 2 日（月）～7 日（土）、ジェンダー研究センター主催「第 2 回 R-Week」が実施された。R-Week とは、ジェンダー・セクシュアリティを中心にキャンパスで学生が経験するさまざまな問題に対して、声をあげられる環境づくりを目指すプロジェクトである。

2013 年に続く第 2 回は、イベントウィークを設定し、レクリエーションや講演会をおこなったほか、API フェローでジェンダー研究センター研究員のシエコ・レト氏によるアート作品の展示「Trans & Dance: Trans\*Issues Transcending Three Continents」と「R-Week 関連書籍フェア」を図書館内で開催した。そこでは、第 1 回以上にイベントの内容・形式は多様化し充実したものになった一方、次年度以降の課題も浮き彫りになってきた。以下では、各日のイベント内容の報告を行うとともに、今後の課題を挙示していく。

まず、初日の 2 日（月）12:45-13:00 には「レインボー・フラッシュモブ@ICU～学内の多様性に"Yes!"～」を、バカ山（本館前・屋外芝生エリア）にて行った。これは学内の LGBIT サークル「Sumposion」からの持ち込み企画として実現したものだ。フラッシュモブとは、インターネットなどで呼びかけを受けた不特定多数の人が、公共の場に前触れなく集合しパフォーマンスを行うことである。約 35 名が参加した今回のフラッシュモブでは、昼休みで人通りの多いバカ山を使い、ジェンダー・セクシュアリティをはじめとする学内の多様性を表現し、かつそれを肯定するメッセージを発信した。

続く 3 日（火）13:50～15:00 に CGS で行ったのは、レクリエーション「レインボーゼリーを作ってみよう!」である。やはり Sumposion 発の企画であるこのレクリエーションでは、6 色のゼリーを作りつつ、ジェンダー・セクシュアリティについて気軽に話す機会を設け、約 10 名が参加した。

4 日（水）15:00-17:00 には、講演×アートセラピー「Trans\*mission: Sharing Session & Art Therapy Workshop」を本館 252 号室にて開催した。こ

ここでは先述したシエコ・レト氏を講師として迎え、アジア3カ国のトランスジェンダーを取り巻く状況についてのレクチャーとアートセラピーワークショップを行い、約8名が参加した。氏は現在研究期間を終え帰国しているが、CGSでは今後も交流を深めていきたい。

5日(木) 12:50-15:00には、ワークショップ「依存症からの回復—アルコール依存・薬物依存・摂食障害をどう生き延びてきたか」を本館302号室にて開催した。講師は、ダルク女性ハウスの施設長で、自身もアルコール依存・薬物依存・摂食障害からの回復者である上岡陽江氏。依存と依存症が特定の人の問題ではなく、あらゆる人の生に関わる問題であることを踏まえ、当事者研究の見地から、自らの抱える問題を把握し他者に伝える方法を紹介する氏の語りには、30名の学生や教職員が耳を傾けた。本ワークショップは小規模で密にできるよう、予約制での開催としたが、定員30名の枠は募集開始からほとんど埋まったことから、このテーマへの関心の高さが伺える。

そして、最終日の6日(金) 12:50-15:00に本館367号室で行ったのは講演会「大学生活と『多様性』 —セクシュアル・マイノリティへの『寛容』から考える」である。講師は、中京大学国際教養学部教授で社会学を専門とする風間孝氏。セクシュアル・マイノリティへの「寛容」な態度が、差別的な相互行為秩序を再生産し、マジョリティとマイノリティ間の社会的資源の格差を温存することが明快に論じられ、約60名が参加する白熱した講演会となった。なお、この企画のきっかけは、「セクシュアリティの多様性が、寛容な態度で受容されることへの納得のいかなさ」という学生の声である。「いいじゃん、セクマイ!」「友だちにたくさんいるよ!」といった寛容さの問題点を明らかにすることは、「多様性」が守られるキャンパスとはどのような空間なのか、どうすればそれは作られるのかという、R-Weekにとって核心的な問いにもつながっていた。

以上が、第2回のR-Weekの概要と報告である。レクリエーションからワークショップ、講演会までその内容は充実しており、R-Weekが当初から目指していたように、学生のニーズを具体化して実現することもできた。また、ゲスト講師を迎えた三つのプログラムでは、今後のR-Weekでも継続して取り扱っていくべきテーマが示された。

反面、そうした重要なテーマをどのように学内に発信していくのかという点では、困難も浮き彫りになった。1、2 日目のレクリエーションの参加者はごく少数かつ、普段から CGS を利用しているか、Sumposion メンバーである場合がほとんどだったのだ。確かに、野外でのフラッシュモブや CGS への訪問自体が、参加を妨げる障壁となっている可能性は常にある。だが、その上で CGS と学生との連携不足があったことも否めない。

実際に学生からアイデアやニーズが出されたとき、R-Week はそれをどのように具体化することができるのか。その方法論の確立は、今後の課題である。これは、主体となる学生が年ごとに入学・卒業していく中で、R-Week を持続可能かつ発展性のあるプロジェクトにしていくためにも、取り組まれるべきだろう。

**AY2014 CGS Event Report**  
**2nd Annual R-Week Report**  
**Shingo HORI**  
**Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS**

The second annual R-Week chaired by CGS was carried out from June 2nd (Mon) to the 7th (Sat), 2014. R-Week is a project in which we aim to create an environment where students can raise their voices about the problems they experience on campus, primarily related to gender and sexuality.

**June 2nd (Mon): “Rainbow Flash Mob at ICU: Celebrate Diversity on Campus”**

Place: Bakayama (grassy area in front of Honkan)

Participants: 35 (approx.)

The on-campus LGBT circle, “Sumposion,” gave the idea for this plan.

**June 3rd (Tues): “Let’s Make Rainbow Jelly!”**

Place: CGS

Participants: 10 (approx.)

This plan was also based on an idea from Sumposion.

**June 4th (Wed): Lecture x Art Therapy, “Trans\*mission: Sharing Session & Art Therapy Workshop”**

Place: Honkan 252

Participants: 8 (approx.)

Here, we welcomed Shieko Reto as a lecturer to talk about the situation concerning transgender people in three different Asian countries, and to hold an art therapy workshop.

**June 5th (Thurs): Workshop “Recovery from Dependence: How Did I Survive Alcoholism, Drug Addiction, and an Eating Disorder?”**

Place: Honkan 302

Participants: 30

The lecturer, Harue Kamioka (facility director at DARC Women’s Halfway House), is a survivor of alcoholism, drug addiction, and an eating disorder.

**June 6th (Fri): Lecture, “Campus Life and ‘Diversity’ — Regarding ‘Tolerance’ for Sexual Minorities”**

Place: Honkan 367

Participants: 60 (approx.)

The lecturer, Takashi Kazama, is a professor at Chukyo University’s School of International Liberal Studies who specializes in sociology.

The contents of every event — whether recreation, a workshop, or a lecture — were meaningful, and we were able to materialize and fulfill student needs, which was the aim of R-Week from the outset.

On the other hand, the difficulty in how we should spread these important issues around campus was also made apparent. Furthermore, it is undeniable that there was a lack of cooperation between CGS and students.

How should R-Week materialize student ideas or needs when we are presented with them? Our task for the future is to establish a method for doing such. As students — the subjects of R-Week — enter the university and go on to graduate every year, this issue needs to be tackled in order to make R-Week a sustainable and evolvable project.



## 「境界と共生を問い直す―ナショナリティ、身体、ジェンダー・セクシュアリティ」：シンポジウム開催報告

### 高松香奈

CGSは2014年11月23日に、CGS開設10周年シンポジウム「境界と共生を問い直す：ナショナリティ、身体、ジェンダー・セクシュアリティ」を開催した。シンポジウム全体の目的は、人と人、そして人と社会を分断する「境界」の編成を、ナショナリティ、身体、ジェンダー、セクシュアリティの視点から問い直すことであった。このシンポジウムは第1部「対立を語り直す―ジェンダー・セクシュアリティの視点からレイシズムを考える」、第2部「留学生の身体の周縁化―「性」の議論の不在を問う」、第3部「ディスカッション」の構成で行われた。以下、シンポジウムの概要について報告する。

第1部ではレイシズムや「ヘイト・スピーチ」に対し、ジェンダー・セクシュアリティの視点からの語り直しが試みられた。堀真悟氏（CGS研究所助手/準研究員）は、まず新大久保で行われてきた「ヘイト・スピーチ」や「レイシズム」に対するカウンター行動への批判や反批判の言説を整理し、その上で「在特会」に反対する意志を持つものであれば参加が可能となる「カウンター」の「開放性」と、他方「カウンター」に内在する問題について批判を不能とする「閉鎖性」について指摘し、これを解消するには問題の重層性、すなわち人と人を分断する境界の重層性に目を向けていく必要性を主張した。つぎに菊地夏野氏（名古屋市立大学）はこれまでの「慰安婦」問題についての動きをまとめた上で、「ヘイト・スピーチ」が「=レイシズム」と理解され、セクシズムが抜け落ちている問題を指摘した。これまで「バックラッシュ」勢力はフェミニズムと同時に執拗に「慰安婦」問題を攻撃してきた事実があり、フェミニズムの否定、そして「慰安婦」問題の排除の背景には、政治的/社会的勢力の存在があった。そして、近年のナショナリズムの高まりや、新自由主義のインパクト、そしてジェンダー秩序による分断はあらゆる暴力への抵抗を脆弱化させたことが指摘された。そして、これに対抗するために分断を超える社会的連帯の必要性が強調された。鄭暎恵氏（大妻女子大学）は、ジェンダー・セクシュアリティの視点から「ヘイト・スピーチ」を考察した。日本での「ヘイト・ス

ピーチ」がジェンダー・セクシュアリティという差異をはじめ様々な「マイノリティ」への攻撃として表出していることに着目し、レイシズムとセクシズムの「共犯構造」を指摘する。すなわち、レイシズムという人間を差異化する境界線を引く行為が単独で行われるのではなく、性差別や異性愛主義と同時並行的に折り重なって成り立っている点、そしてこの点に留意することが極めて重要であると指摘する。

第2部の目的は、ジェンダー・セクシュアリティに関わる規範や制度が留学生の生活に与える影響を明らかにすることである。高松（国際基督教大学）は、事例の考察を通し留学制度と出産について報告し、妊娠・出産する身体が留学制度の中で周縁化されるプロセスについて言及した。実際の事例では、妊娠・出産は「選択の問題」であり、「個人化」かつ「個人の事情化」されており、その根底には留学制度、大学に内在するナショナリズム・セクシズムの問題が指摘される。虎岩朋加氏（名古屋大学）は、日本の留学生教育の政策と実践に内在する象徴暴力について、その一形態としての「コンデセンション」という分析枠組みからアプローチをした。「コンデセンション」とは、権力を保持する側による「善意ある」言葉や行動が、その受け手に対し象徴暴力として作用することを意味し、このような権力関係が留学政策に組み込まれ、かつ「留学生支援」という実践の中で繰り返し起こされている問題点に言及し、このような構造の中に置かれている留学生は、ジェンダーに基づく差別などあらゆるハラスメントを受けやすい立場にある現状について言及がなされた。田中京子氏（名古屋大学）からは、大学における文化の多様性について、名古屋大学の宗教の多様性に関する取り組みを例に報告が行われた。具体的な取り組みとは、学生、受入教員等から多くの相談が寄せられた「ムスリム学生」について、宗教の多様性を理解する目的のために、『ムスリムの学生生活～ともに学ぶ教職員と学生のために』という冊子が学生の協力もあり作成が行われた。これらの活動を通し指摘されたのは、日本人と対比し語られることの多い「留学生」は、宗教、出身国、ジェンダーなどによりカテゴリー化され、ステレオタイプ化され、大学において周辺化される可能性がある点であり、「留学生」/「私たち」、「ムスリム学生」/「非ムスリム学生」に示されるような、「二項対立の構図」から抜け出すことが個人の多様性を尊重する環境整備には不可欠で

あることが示された。

第3部のディスカッションでは、登壇者間、そしてフロアから活発な意見や質問が出された。各発話者からの意見や質疑を通し、「レイシズム」「セクシズム」「ナショナリズム」の相互作用とその共犯性が、第一部、第二部のテーマの根底に共通する課題であることが再度確認され、引き続き今後も注視していかなくてはならない課題であることを明記しておきたい。

**"Redefining Boundaries and Conviviality: Nationality, Body, Gender  
and Sexuality" Symposium Report**  
**Kana TAKAMATSU**

CGS held its 10th Anniversary symposium, "Redefining Boundaries and Conviviality: Nationality, Body, Gender and Sexuality" on November 23rd, 2014. The symposium consisted of three sessions. The purpose of this symposium was to debate the idea of boundaries that divide individuals from each other and their communities from the perspectives of nationality, body, gender, and sexuality. The first session was "Reframing Conflicts: Approaching Racism from the Perspective of Gender and Sexuality." The second session was "Marginalization of the Body: International Students and the Absent Debate on Gender and Sexuality," with a third discussion session following. A report on this symposium is as follows.

The purpose of the first session was to reframe racism and hate speech in Japan from a gender and sexuality perspective. Shingo HORI (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS) organized the discourse on criticisms and anti-criticisms of the counteractions taken against the hate speech and racism that have been occurring in Shin-Okubo. Moreover, he pointed out that counter movements are both open — in that anyone can participate as long as they are against the Zaitokukai (Association of Citizens against the Special Privileges of the Zainichi) — as well as being occlusive, in that it is impossible to criticize the problems inherent within the movements. In order to solve these issues, the speaker emphasized the necessity of keeping an eye on the multiple layers of boundaries that divide people. Natsuno KIKUCHI (Nagoya City University) summarized the actions taken against the issue of comfort women. Hate speech is widely understood as a form of racism, but sexism is often left out of the discussion. The backlash against feminism has also attacked the issue of

comfort women, and there are political/social forces behind this attack. The recent wave of nationalism, the impact of neoliberalism, and the fragmentation of the gender order have weakened society's resistance to all kinds of violence. The speaker highlighted that social coalition is necessary to overcome this fragmentation. Yeonghae JUNG (Otsuma Women's University) analyzed hate speech from the perspective of gender and sexuality. The speaker indicated that hate speech in Japan is taking place as an attack on minorities, and that it is complicit with racism and sexism. That is to say, it should be highlighted that racism, which creates boundaries between peoples, is not done alone, but also through gender-based discrimination and heterosexism.

The purpose of the second session was to discuss how the norms and institutions of gender and sexuality impact the daily lives of international students in Japan. Kana TAKAMATSU (International Christian University) presented a case study that analyzed how pregnant students, especially international students, are marginalized through the system of exchange/scholarship programs. Pregnancy and childbirth are considered to be "issues of choice," and treated as "a student's matter." Tomoka TORAIWA (Nagoya University) examined condescension as a form of symbolic violence that is inherent in the policy and practice of international student education. Condescension is when well-intentioned acts or words by those in power function as symbolic violence toward the receiver of the actions or words. This power relationship is embedded in the policies for international students, and is continually repeated through international student support practices. Students in this power relation are extremely vulnerable to all types of harassment, including gender-based harassment. Kyoko TANAKA (Nagoya University) discussed religious diversity on campus through the case of Nagoya University. Nagoya University published "Life of a Muslim Student in Nagoya University" as an introduction for their advisors and peers to understand religious diversity. International students

are often contrasted with Japanese students, in addition to being categorized, stereotyped, and marginalized by nationality, country of origin, and gender. The dichotomy of "we/the other" or "Muslim students/non-Muslim students" can be coercive, and it is necessary to break free from this dichotomy to create diversity.

The third session was an open floor discussion. The opinions and questions raised in this session reconfirmed that the interactions and complicity between racism, sexism, and nationalism were shared issues throughout both sessions, and that we should continue to address these issues.

## 2014年度多摩ジェンダー教育ネットワーク 第18回～20回会合 加藤恵津子

### 「多摩ジェンダー教育ネットワーク」について

2009年11月に発足、第1回の会合を開いた「多摩ジェンダー教育ネットワーク」（以下「ネットワーク」）は、専任・非常勤を問わず、多摩地区の大学でジェンダー教育に携わる人々の「人間関係」です。

ジェンダー関連科目はあっても、ジェンダー教育がプログラムや専攻として制度化しにくい日本の諸大学にあって、その教育に携わる人々は孤立しがちです。当ネットワークはそのような人々をつなぎ、経験、スキル、そして直面している問題点を分かち合うことで互いをエンパワーすべく始めました。

これには「顔の見える」「地つづき」の関係づくりが重要と考え、まずは行き来のしやすい多摩地区の大学教員をメンバーと定めています。主な参加者は、職場の所在地または居住地が多摩地区である方々ですが、中には「越境」参加者もおられます。また大学院生、NPO等の活動家、自治体職員（2013年度より多摩市男女共同参画担当の方々も参加）、出版社勤務の方など、ジェンダー・セクシュアリティ教育・研究に関心のある様々な方にもご参加いただいています。

会合は3～4か月に一回、平日の夜19～21時、多摩地区の諸大学およびTAMA女性センター（京王線 聖蹟桜ヶ丘駅前）で、持ち回りで開催しています。メンバーによる教育・研究実践の報告の他、特定のテーマに基づき、外部講師をお招きしてのレクチャー形式の会合も開催しています。

参加をご希望の方、また参加を勧めたいお知り合いのいらっしゃる方は、どうぞお気軽に、以下の代表アドレスまでご連絡下さい。

**メールアドレス：**[tama.gender.education@gmail.com](mailto:tama.gender.education@gmail.com)

**世話人（2014年度現在）：**

石川照子（大妻女子大学比較文化学部）

加藤恵津子（国際基督教大学ジェンダー研究センター）

木本喜美子（一橋大学ジェンダー社会科学研究センター）

**事務担当：**松崎実穂（国際基督教大学ジェンダー研究センター 研究所助手/  
準研究員）

## 報告

### 〈第 18 回会合〉

日 時：2014 年 5 月 26 日（月）、19:00～21:00

テーマ：「少年雑誌に見る「男性性」の変容―日清・日露戦争からアジア・太平洋戦争を時間軸に」

発表者：内田雅克（東北芸術工科大学）

場 所：国際基督教大学

出席者：11 名

近代日本の複数の少年誌において、理想とされる少年像が、雑誌によって異なったり、時期によってゆらいだりしながらも、第二次世界大戦期に向かって次第にミソジニー（女性嫌悪）と「ウィークネス・フォビア」の傾向を強めていく様が、豊富な史料をもとに明快に論じられた。前回の少女雑誌についての報告との比較も含めて、「少女らしさ」「少年らしさ」の近代における生成について、多層的な議論が交わされた。

### 〈第 19 回会合〉

日 時：2014 年 7 月 28 日（月）、19:00～21:00

テーマ：「売買春史でひらく社会秩序の動態論―1910 年代アメリカの事例から」

発表者：松原宏之（横浜国立大学）

場 所：TAMA 女性センター

出席者：11 名

20 世紀初頭のアメリカで、キリスト教系の（特に女性の）ソーシャルワーカーが先鞭を付けた売買春、貧困、性病等の問題に、医師らの「科学的な」手法や言説が次第に介入してくる様、とくに第一次世界大戦を契機に、「兵士の性（のコントロール）」との関連で国家プランとなっていく様を豊富な史料に基づいて論じていただいた。21 世紀の日本にいる者にも示唆に富む内容で、



質疑応答に続いて活発な議論が行われた。

### 〈第20回会合〉

＊一橋大学 CGraSS（ジェンダー社会科学研究センター）、第28回公開レクチャーシリーズに合流

日 時：2014年11月21日（金）、16:30～19:00

テーマ：「日本占領と性一性暴力、売買春から親密な関係まで」

発表者：平井和子（一橋大学）、茶園敏美（京都大学）

場 所：一橋大学（司会：佐藤文香）

終戦直後の日本における、進駐軍兵士のための慰安所（平井氏）と、米兵に対する売買春を職業とした女性「パンパン」（茶園氏）の実態という、重なりも多いテーマを、偶然にも同時に研究していたお二人が出会い、貴重な史料をもとに詳細に事態を論じられたことで、「米兵」とも「敗戦の犠牲者である女性たち」とも一枚岩的に言えない、数々の複眼的な視点が得られた。来場者も、中部屋に50名を超え、椅子や配布資料が足りなくなるほどだった。

## **From 18th to 20th Meetings of the Tama Gender Education Network**

**2014**

**(Summary)**

**Etsuko KATO**

The Tama Gender Education Network (hereafter, "Network") is an association of full-time and part-time lecturers who teach gender-related courses at universities in the Tama district. These lecturers tend to be isolated from one another in the Japanese academic environment, which marginalizes gender and sexuality studies. The Network launched in November 2010 in order to support the mutual empowerment of its members through sharing experiences, teaching skills, and any hardships faced. The Network, which started within Tama to enhance face-to-face communication, now welcomes members from outside of the district. It also encourages the creation of a network beyond academia, such as with activists, publishers, local governments, etc.

For inquiries, please feel free to contact the Network.

**E-mail:** [tama.gender.education@gmail.com](mailto:tama.gender.education@gmail.com)

### **Organizers (as of 2014):**

Teruko Ishikawa (Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University)

Etsuko Kato (Center for Genders Studies, ICU)

Kimiko Kimoto (Center for Gender Research and Social Sciences, Hitotsubashi University)

### **Clerical Staff:**

Miho Matsuzaki (Research Institute Assistant, Center for Gender Studies, ICU)

## 2014年度ジェンダー研究センター（CGS）活動報告

### ■春学期

4月15日（火）・16日（水）・17日（木）

オープンセンター・pGSS説明会開催

4月18日（金）

第13回 ふわかフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS研究所助手/準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学  
嘱託職員 CGS事務局担当）

4月29日

CGS Open Holiday

5月9日（金）～春学期読書会 開催

1. 『今を生きるシェイクスピア―アダプテーションと文化理解からの入門』

編 著：米谷郁子

担当者：樋口優也（ICU学部生）

日 時：5月9日～（毎週金曜日）

2. 映画鑑賞会

担当者：上田真央（CGS研究所助手/準研究員）

日 時：5月14日～

5月19日（月）

第14回 ふわかフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS研究所助手/準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学  
嘱託職員 CGS事務局担当）

5月26日 (月)

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第18回会合

場 所：国際基督教大学

5月26日 (月) ～6月13日 (土)

展覧会：Transcendence: Trans\* Issues Transcending Three Continents

アーティスト：Shieko RETO (API フェロー /CGS 研究員)

場 所：国際基督教大学 オスマー図書館 地階ブレイクエリア展示スペース

6月2日 (月) ～6月7日 (土)

第2回 R-Week イベント週間

6月2日 (月)

R-Week 野外イベント：レインボー・フラッシュモブ@ICU ～学内の多様性に

“Yes!” ～ Rainbow Flash Mob at ICU: Celebrate Diversity

共 催：ジェンダー研究センター /ICU LGBT サークル「Sumposion」

場 所：国際基督教大学 バカ山 (本館前芝生エリア)

6月3日 (火)

R-Week レクリエーション：レインボーゼリーを作ってみよう！

共 催：ジェンダー研究センター /ICU LGBT サークル「Sumposion」

場 所：国際基督教大学 ジェンダー研究センター

6月4日 (水)

R-Week 講演×アートセラピー：Trans\*mission: Sharing Session & Art Therapy Workshop

講 師：Shieko RETO (API フェロー /CGS 研究員)

場 所：国際基督教大学 本館 252 号室

6月5日 (木)

**R-Week**スペシャルワークショップ：依存症からの回復 - アルコール依存・薬物依存・摂食障害をどう生き延びてきたか

講 師：上岡陽江（ダルク女性ハウス 施設長）

場 所：国際基督教大学 本館 302 号室

6月6日（金）

**R-Week**特別講演会：大学生活と「多様性」ーセクシュアル・マイノリティへの「寛容」から考える

講 師：風間孝（中京大学 国際教養学部 教授）

場 所：国際基督教大学 本館 367 号室

6月2日（月）～6月7日（土）

**R-Week**特別展：R-Week関連書籍フェア

場 所：国際基督教大学 大学図書館 本館 1F エントランスホール

6月11日（水）

第15回 ふわカフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS 研究所助手/準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 CGS 事務局担当）

6月28日（土）

**CGS Open Weekend**

7月5日（土）

**RIA 研究成果発表会**

博士論文発表「不気味な家・怪奇な住居ーゴシック文学における女性の不安の表象ー」

発表者：サマンサ・ランダオ

コメンテーター：生駒夏美（国際基督教大学 上級准教授 CGS センター長）

場所：国際基督教大学 第一教育研究棟 (ERB-1) 347 号室

7月28日 (月)

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第19回会合

場 所：TAMA 女性センター

8月9日 (土)

CGS Open Weekend

## ■秋学期

9月 CGS ニュースレター 017 号発行

9月18日 (木)・19日 (金)

オープンセンター・pGSS 説明会開催

9月24日 (水) ～秋学期読書会 開催

1. 『近代日本における女同士の親密な関係』

著 者：赤枝香奈子

担当者：上田真央 (CGS 研究所助手/準研究員)

日 時：9月24日～ (毎週水曜日)

2. The Sexuality of Migration: Border Crossings and Mexican Immigrant Men

編 者：Lionel CANTU, Nancy A. NAPLES, et al

担当者：吉田 匡 (ICU 学部生)

日 時：9月25日～ (毎週木曜日)

3. クィア文献購読『ジェンダー・トラブル』他

担当者：松田英亮 (ICU 学部生)

日 時：9月26日～ (毎週金曜日)

9月24日（水）

第16回 ふわカフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS研究所助手/準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学

嘱託職員 CGS事務局担当）

10月20日（月）

第17回 ふわカフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS研究所助手/準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学

嘱託職員 CGS事務局担当）

11月4日（火）

第18回 ふわカフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS研究所助手/準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学

嘱託職員 CGS事務局担当）

11月21日（金）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第20回会合

（一橋大学 CGraSS（ジェンダー社会科学研究センター）、第28回公開レクチャーシリーズに合流）

場所：一橋大学

11月23日（日）

ジェンダー研究センター 開設10周年記念シンポジウム

境界と共生を問い直す：ナショナルリティ、身体、ジェンダー・セクシュアリティ

第1部「対立を語り直すージェンダー・セクシュアリティの視点からレイシズムを考える」

登壇者：

堀真悟（早稲田大学大学院、CGS 研究所助手/準研究員）

菊地夏野（名古屋市立大学）

鄭暎恵（大妻女子大学）

司 会：上田真央（CGS 研究所助手/準研究員）

第2部「留学制度と身体の周縁化—「性」の議論の不在を問う」

登壇者：

高松香奈（国際基督教大学 準教授 CGS 副センター長）

虎岩朋加（名古屋大学）

田中京子（名古屋大学）

司 会：生駒夏美（国際基督教大学 上級准教授 CGS センター長）

第3部：ディスカッション「境界と共生を問い直す」

司 会：生駒夏美（国際基督教大学 上級准教授 CGS センター長）

場 所：国際基督教大学 ダイアログハウス 2F 国際会議室

12月12日（金）

第19回 ふわカフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS 研究所助手/準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学

嘱託職員 CGS 事務局担当）

## ■冬学期

12月17日（水）～ 冬学期読書会 開催

1. 『中断された正義—「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』

著 者：ナンシー・フレイザー

監 訳：仲正昌樹

担当者：堀真悟（早稲田大学大学院、CGS 研究所助手/準研究員）

日 時：12月17日～（毎週水曜日）

2. BLをよむ『ユリイカ 2007年12月臨時増刊号 総特集=BL（ボーイズラブ）』



スタディーズ』他

担当者：樋口優也（ICU学部生）

日 時：1月8日～（毎週木曜日）

### 3.『ジェンダーセクシュアリティの教育を創る』

著 者：浅井春夫他

担当者：鈴木菜月（ICU学部生）

日 時：12月17日～

1月19日（月）

第20回 ふわカフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS研究所助手/準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学

嘱託職員 CGS事務局担当）

1月30日（金）

第3回 みたかジェンダー・セクシュアリティ映画祭 上映&セッション

『トークバック 沈黙を破る女たち Talk Back』

監督・制作・編集：坂上 香

トークバックセッション

ゲスト：

坂上 香（「トークバック」監督）

上岡陽江（ダルク女性ハウス 施設長）

場 所：国際基督教大学 本館402号室

2月12日（木）、2月16日（月）、2月19日（木）

ジェンダー研究へのアプローチ：スペシャルゲストウィーク

【第1弾】大学院での研究

日 時：2015年2月12日（木）

Part 1. 社会問題の構築とフェミニズムの問い

講 師：堀真悟（早稲田大学大学院博士後期課程/CGS研究所助手/準研究員）

**Part 2. 日本文化における母親の理想像—「母なる故郷」の「母をめぐって」**

講 師：リンジー・モリソン（ICU 大学院博士後期課程 / CGS 研究所助手）

場 所：国際基督教大学 本館 262 号室

【第2弾】家族への / からのカミングアウト—LGBと親の経験から日本社会を考える

日 時：2月16日（月）

講 師：三部倫子（お茶の水女子大学講師（研究機関研究員）、早稲田大学大学院、明治学院大学、流通経済大学他非常勤講師）

場 所：国際基督教大学 理学館（N館）220号室

【第3弾】ICUから始まった—教育現場でセクシュアリティ・暴力防止を伝える活動

日 時：2015年2月19日（木）

講 師：飯田亮瑠（セクシュアルヘルスアドバイザー、暴力防止教育ファシリテーター、工学関係会社員（建築・土木・製造業））

場 所：国際基督教大学 理学館（N館）220号室

2月12日（木）

第21回 ふわカフェ開催

場 所：ジェンダー研究センター

世話人：上田真央（CGS 研究所助手 / 準研究員）、加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 CGS 事務局担当）

2月14日（土）

YoRAP 2015 研究成果発表会

理想化される母：日本文学における事例研究

発表者：

生駒夏美（国際基督教大学 上級准教授 CGS センター長）

“To Miss the Missing Mother: Absence of Real Mothers in Japanese Literature by Male Authors”

フリアナ・ブリティカ・アルサテ（ICU 大学院博士後期課程）

**"Nearer to or Farther from the Idealized Mother: Portrayals of Motherhood by Japanese Women Writers"**

リンジー・モリソン（ICU大学院博士後期課程 / CGS研究所助手）

**"In Search of What Is Real: the Role of Nature in Japanese Literature on the Mother and Home"**

場 所：国際基督教大学 アラムナイハウス

2月24日（火）

YoRAP（Young Research Action Project） CGS研究成果発表会

学士論文発表：

吉田匡（ICU学部生）

東京はゲイの楽園？：東京在住の地方出身者ゲイのためのオンライン掲示板に見られる言説分析

修士論文発表：

佐々木裕子（東京大学大学院 総合文化研究科 修士課程、CGS研究所助手）

痛み、傷、からだ―自傷行為と身体改造における<回復>ナラティブの批判的考察

研究中間報告：

佐久間明日香（CGS研究所助手/準研究員）

バレエにおけるジェンダー & セクシュアリティ

場 所：国際基督教大学 第一教育研究棟（RB-1）347会議室

2月27日（金）

トークセッション「みんなで語ろう！大学での子育て #4」

コーディネーター：生駒夏美（国際基督教大学 上級准教授 CGSセンター長）

場 所：国際基督教大学 ERB-1 357会議室

3月4日（水）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第21回会合

場 所：一橋大学

3月8日（日）

ジェンダー研究センター開設 10 周年記念 YoRAP（Young Research Action Project）シンポジウム

希望をつなぐ〈場〉をつくる

スピーカー：

宇佐美翔子（NGO レイプクライシス・ネットワーク アドボケートカウンセラー / Community cafe & bar Osora ni Niji wo Kake Mashita 共同オーナー）

岡田実穂（NGO レイプクライシス・ネットワーク代表 / Community cafe & bar Osora ni Niji wo Kake Mashita 共同オーナー）

村木真紀（特定非営利活動法人 虹色ダイバーシティ代表）

新山賢（HaaT えひめ代表）

山下梓（ゲイジャパンニュース 共同代表 / 岩手レインボー・ネットワーク主宰）

砂川秀樹（レインボーアライアンス沖縄 共同代表）

司会・コーディネーター

加藤悠二（国際基督教大学 嘱託職員 CGS 事務局担当）

場 所：国際基督教大学 ダイアログハウス 2F 国際会議室

3月 CGS ジャーナル『ジェンダー & セクシュアリティ』第 10 号発刊

## 注

CGS 公式ウェブサイト「CGS Online」、ツイッター公式アカウント、facebook では随時、情報を更新しています。

CGS ニュースレター、CGS ジャーナル『ジェンダー & セクシュアリティ』は「CGS Online」でダウンロードできます。

## AY 2014 Activity Report, ICU Center for Gender Studies (CGS)

### ■ Spring Term

Tuesday, 15th – Thursday, April 17th

Open Center at CGS, pGSS Briefing Sessions

Tuesday, April 18th

Fuwa Cafe #13

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Tuesday, April 29th

CGS Open Holiday

From Friday, May 9th, 2014: Spring Term Reading Groups

1. *Ima wo ikiru sheikusupia-adaputesyon to bunkarikai karano nyumon*

Editor: Ikuko KOMETANI

Organizer: Yuya HIGUCHI (Undergraduate, ICU)

Date: Fridays, 30th April

2. Film Screening

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS)

Date: From Thursday, May 14th

Monday, May 19th

Fuwa Cafe #14

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Monday, May 26th

18th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: International Christian University

Monday, May 26th - Friday, June 13th

Exhibition: Transcendence: Trans\* Issues Transcending Three Continents

Artist: Shieko RETO (API Fellow/CGS Researcher)

Venue: Othmer Library, Ground Floor, Break Area Exhibition Space, ICU

Monday, June 2nd-Saturday, June 13th

R-Week Project #2

Monday, June 2nd

"Rainbow Flash Mob at ICU: Celebrate Diversity on Campus"

Co-host: ICU LGBTI circle "Sumposion"/ CGS

Venue: BAKAYAMA, International Christian University

Tuesday, June 3rd

"Let's Make Rainbow Jelly! "

Co-host: ICU LGBTI circle "Sumposion"/ CGS

Venue: CGS, International Christian University

Wednesday, June 4th

Lecture×Art Therapy: Trans\*mission: Sharing Session & Art Therapy  
Workshop

Lecturer: Shieko RETO (API Fellow/CGS Researcher)

Venue: Room H-252, International Christian University

Thursday, June 5th

Workshop: Recovery from Dependence: How Did I Survive Alcoholism, Drug Addiction, and an Eating Disorder?

Lecturer: Harue KAMIOKA (facility director at DARC Women's Halfway House)

Venue: Room H-302, International Christian University

Friday, June 6th

Lecture: Campus Life and 'Diversity' — Regarding 'Tolerance' for Sexual Minorities

Lecturer: Takashi KAZAMA (Professor, International Liberal Studies, Chukyo University)

Venue: Room H-367, International Christian University

Monday, June 2nd-Saturday, June 7th

"R-Week Special Exhibition: R-Week Book Fair"

Venue: Entrance hall, Library, International Christian University

Wednesday, June 11th

Fuwa Cafe #15

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Saturday, June 28th

CGS open weekend

Saturday, July 5th

RIA Research Achievement Presentations

Doctor Thesis: Uncanny Houses, Sinister Homes — the Architecture of

Feminine Anxiety in Gothic Literature —

Presenter: Samantha LANDAU (Former Research Institute Assistant, CGS/  
Graduate School, ICU)

Commentator: Natsumi IKOMA (Senior Associate Professor, ICU/CGS  
Director)

Venue: Room ERB-347, International Christian University

Monday, July 28th

19th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: TAMA Women's Center

Saturday, August 9th

CGS open weekend

■ Autumn Term

September

Publication of the CGS Newsletter, No. 017

Thursday, 18th -Friday, 19th, September

Open Center at CGS, pGSS Briefing Sessions

From Wednesday, September 24th: Autumn Term Reading Group

1. *Kindainihon ni okeru onnadousi no kizuna*

Author: Kanako AKAEDA

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate  
Research Fellow, CGS)

Date: Wednesdays, from 24th September

2. *The Sexuality of Migration: Border Crossings and Mexican Immigrant Men*

Organizer: Masashi YOSHIDA (Undergraduate, ICU)



Editors: Lionel Cantu, Nancy A. Naples, et al

Date: Thursdays, from 25th September

3. Reading queer theories: *Jendaa toraburu and others*

Organizer: Eisuke MATSUDA (Undergraduate, ICU)

Date: Fridays, from 26th September

Wednesday, September 24th

Fuwa Cafe #16

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Monday, October 20th

Fuwa Cafe #17

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Tuesday, November 4th

Fuwa Cafe #18

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Friday, November 21st

20th Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: Hitotsubashi University

Sunday, November 23rd

CGS 10th Anniversary Symposium:

"Redefining Boundaries and Conviviality: Nationality, Body, Gender and Sexuality"

1st Session: Reframing Conflicts: Approaching Racism from the Perspective of Gender and Sexuality

Presenter:

Shingo HORI (Graduate School, Waseda University, Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS)

Natsuno KIKUCHI (Nagoya City University)

Yeonghae JUNG (Otsuma Women's University)

Chair: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS)

2nd Session: The Marginalization of the Body: International Students and the Absent Debate on Gender and Sexuality

Presenter:

Kana TAKAMATSU (Associate Professor, ICU/Vice-Director, CGS)

Tomoka TORAIWA (Nagoya University)

Kyoko TANAKA (Nagoya University)

Chair: Natsumi IKOMA (Senior Associate Professor, ICU/Director, CGS)

The final session: Open-floor Discussion

Chair: Natsumi IKOMA (Senior Associate Professor, ICU/Director, CGS)

Moderator: Kana TAKAMATSU (Associate Professor, ICU/Vice-Director, CGS)

Venue: International Conference Room, Dialogue House 2F, International Christian University

Friday, December 12th

Fuwa Cafe #19

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

## ■ Winter Term

From Wednesday, December 17th: Winter Term Reading Group

1. *Tyudan sareta seigi—“posuto syakaisyugiteki” jouken wo meguru hihanteki kousatsu*

Author: Nancy FRASER

Translator: Masaki NAKAMASA

Organizer: Shingo HORI (Graduate School, Waseda University, Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS)

Date: Wednesdays, from 17th December

2. Reading BL, *“Yuriika, soutokusyu, BL studies” and others*

Organizer: Yuya HIGUCHI (Undergraduate, ICU)

Date: Thursdays, from 8th January

3. *Jendaa sekusyuariti no kyoiku wo tsukuru*

Author: Haruo ASAI and others

Organizer: Natsuki SUZUKI (Undergraduate, ICU)

Date: Fridays, from 17th December

Monday, January 12th

Fuwa Cafe #20

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Friday, January 30th

Mitaka Gender & Sexuality Film Festival in ICU #3

*“Talk Back”*

Director: Kaori SAKAGAMI

Talk Back session guest:

Kaori SAKAGAMI (Director of *“Talk Back”*)

Harue KAMIOKA (facility director at DARC Women's Halfway House)

Venue: Room H-402, International Christian University

Thursday, 12th, Monday, 16th, Thursday 19th February

Program in Gender and Sexuality Studies, "Approaches to Gender Studies"

Special Guest Week

Volume 1: Graduat Student Research Presentations

Thursday, February 12th

Part 1. The Construction of Social Problems and Feminist Inquiries

Lecturer: Shingo HORI (Graduate School, Waseda University, Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS)

Part 2. The Mother as Home: Idyllic Representation of the Mother in Japanese Culture

Lecturer: Lindsay MORRISON (Doctoral Candidate, ICU/Research Institute Assistant, CGS)

Venue: Room H-262, International Christian University

Volume 2: Coming out to/from the Family: Viewing Japanese Society from the Experiences of LGB Persons and Parents

Monday, February 16th

Lecturer: Michiko SANBE (Lecturer at Ochanomizu University, Part-time Lecturer at Waseda University Graduate School, Meiji Gakuin University, Ryutu Keizai University, etc.)

Venue: Room N-220, International Christian University

Volume 3: It All Started ICU: Teaching about Sexuality/Violence Prevention in the Classroom

Thursday, February 19th

Lecturer: Akiru IIDA (Sexual health advisor, Facilitator of Violence Prevention Education, Engineer)

Venue: Room N-220, International Christian University

Thursday, February 12th

Fuwa Cafe #21

Organizer: Habiba-Mao UEDA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS), Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: CGS

Saturday, February 14th

CGS, YoRAP (Young Research Action Project) Research Presentation

Idealization of Mother: Case Studies in Japanese Literature

Presenters:

Natsumi IKOMA (Senior Associate Professor, ICU / Director, CGS)

"To Miss the Missing Mother: Absence of Real Mothers in Japanese Literature by Male Authors"

Juliana Buritica ALZATE (Doctoral Candidate, ICU)

"Nearer to or Farther from the Idealized Mother: Portrayals of Motherhood by Japanese Women Writers"

Lindsay R. MORRISON (Doctoral Candidate, ICU/Research Institute Assistant, CGS)

"In Search of What Is Real: the Role of Nature in Japanese Literature on the Mother and Home"

Venue: Alumni House, 2nd Floor Lounge, International Christian University

Tuesday, February 24th

CGS, YoRAP (Young Research Action Project) Research Presentation

Presenter:

Senior thesis:

Masashi YOSHIDA (Undergraduate, ICU)

Is Tokyo a Gay Heaven?: Qualitative Analysis of Narratives on the Online Board for Gay Migrants in Tokyo

Master thesis: Yuko SASAKI (Graduate School, Tokyo University, Research

Institute Assistant, CGS)

Pain, Wounds, and Body: A Critical Analysis of Reclaiming Narratives of Self-Injury and Body Modification

Interim report: Asuka SAKUMA (Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS)

Gender & Sexuality in the Ballet

Venue: Room ERB-347, International Christian University

Tuesday, January 28th, 2013

Talk Session: Let's talk about Parenting on Campus #4

Coordinator: Natsumi IKOMA (Senior Associate Professor, ICU/Director, CGS)

Venue: Room ERB-357, International Christian University

Sunday, March 8th

CGS 10th Anniversary YoRAP-Symposium

title

Speakers:

Syoko USAMI (Advocate Counselor, NGO Rape Crisis Network/Co-owner, Community cafe & bar Osorani Niji wo Kake Mashita)

Miho OKADA (Executive Director, NGO Rape Crisis Network/Co-owner, Community cafe & bar Osorani Niji wo Kake Mashita)

Maki MURAKI (Representative, Nijiirō Diversity)

Satoshi NIIYAMA (Director, Haat EHIME)

Asuza YAMASHITA (Co-Director, Gay Japan News/Founder, Iwate Rainbow Network)

Hideki SUNAGAWA (Co-Representative Director, Rainbow Alliance Okinawa)

Moderator & Coordinator:

Yuji KATO (Part-time employee, ICU/Secretariat, CGS)

Venue: International Conference Room, Dialogue House 2F, International Christian University

March

Publication of the CGS Journal, *Gender and Sexuality*, Vol. 10

**Note:** Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website, Twitter and facebook. The CGS newsletters and journal may also be downloaded from the site.

## 2015年度ジェンダー研究センター（CGS）活動予定

### オープンセンター（兼pGSS説明会）

日時：2015年4月

場所：ジェンダー研究センター

### 春学期読書会

日時：2015年4月～6月

場所：ジェンダー研究センター

### 第22回 ふわかフェ

日時：2015年4月

場所：国際基督教大学

### 第22回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2015年5月

場所：国際基督教大学および周辺大学

### 第23回 ふわかフェ

日時：2015年5月

場所：国際基督教大学

### 第3回 R-week開催

日時：2015年6月

場所：国際基督教大学

### 第24回 ふわかフェ

日時：2015年6月

場所：国際基督教大学



**第23回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング**

日時：2015年7月

場所：国際基督教大学および周辺大学

**オープンセンター（兼pGSS・GSS説明会）**

日時：2015年9月

場所：ジェンダー研究センター

**CGSニューズレター018号**

発刊予定：2015年9月

**第25回 ふわかフェ**

日時：2015年9月

場所：国際基督教大学

**秋学期読書会**

日時：2015年9月～11月

場所：ジェンダー研究センター

**第26回 ふわかフェ**

日時：2015年10月

場所：国際基督教大学

**第24回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング**

日時：2015年10月

場所：国際基督教大学および周辺大学

**CGSシンポジウム**

日時：2015年11月

場所：国際基督教大学

**第27回 ふわカフェ**

日時：2015年11月

場所：国際基督教大学

**冬学期読書会**

日時：2015年12月～2016年2月

場所：ジェンダー研究センター

**第28回 ふわカフェ**

日時：2015年12月

場所：国際基督教大学

**第29回 ふわカフェ**

日時：2016年1月

場所：国際基督教大学

**第25回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング**

日時：2016年1月

場所：国際基督教大学および周辺大学

**トークセッション「みんなで語ろう！大学での子育て Vol. 4」**

日時：2016年1月

場所：国際基督教大学

**第4回 CGS映画祭**

日時：2016年2月

場所：国際基督教大学

**第30回 ふわカフェ**

日時：2016年2月

場所：国際基督教大学

**若手研究者による研究ワークショップ (YoRAP)**

日時：2016年2月

場所：国際基督教大学

**第26回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング**

日時：2016年3月

場所：国際基督教大学および周辺大学

**CGSジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』第11号**

発刊予定：2016年3月

**注**

CGS公式ウェブサイト「CGS Online」、ツイッター公式アカウント、facebook  
では随時、情報を更新しています。

CGS ニュースレター、CGS ジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』は  
「CGS Online」でダウンロードできます。

## **AY 2015 CGS Activity Schedule**

### **Open Center**

Date: April 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **Spring Term Reading Groups**

Dates: April - June 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **Fuwa Café Vol. 22**

Date: April 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **22nd Meeting of the Tama Network for Gender Education**

Date: May 2015

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

### **Fuwa Café Vol. 23**

Date: May 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **R-week project Vol. 3**

Dates: June 2015

Venue: International Christian University

### **Fuwa Café Vol. 24**

Date: June 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **23rd Meeting of the Tama Network for Gender Education**

Date: July 2015

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

### **Open Center**

Date: September 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **CGS Newsletter No.018**

Slated for publication: September 2015

### **Fuwa Café Vol. 25**

Date: September 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **Autumn Term Reading Groups**

Dates: from September to November, 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **Fuwa Café Vol. 26**

Date: October 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **24th Meeting of the Tama Network for Gender Education**

Date: September 2015

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

### **CGS Symposium**

Date: November 2015

Venue: International Christian University

### **Fuwa Café Vol. 27**

Date: November 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **Winter Term Reading Groups**

Dates: December 2015 to February, 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **Fuwa Café Vol. 28**

Date: December 2015

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **Fuwa Café Vol. 29**

Date: January 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

### **25th Meeting of the Tama Network for Gender Education**

Date: January 2016

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

### **Talk session: Let's talk about Parenting on Campus Vol. 5**

Date: January 2016

Venue: International Christian University

**CGS Film Festival**

Date: February 2016

Venue: International Christian University

**Fuwa Café Vol. 30**

Date: February 2016

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

**Research Workshop by Young Researchers (YoRAP)**

Date: February 2016

Venue: International Christian University

**26th Meeting of the Tama Network for Gender Education**

Date: March 2016

Venue: International Christian University and other universities in Tama region.

**CGS Journal Gender and Sexuality Vol.11**

Slated for publication: March 2016

**Note:** Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website, Twitter and facebook. The CGS newsletters and journal may also be downloaded from the site.

## 執筆者紹介 Author profiles

高内 悠貴

東京大学総合文化研究科 地域文化研究専攻 博士課程

専門：アメリカ史、クィア研究

Yuki TAKAUCHI

Ph.D student, Department of Area Studies, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo

Specialization: U.S. History, Queer Studies

堀 真悟

早稲田大学大学院 文学研究科社会学コース 博士課程後期

専門：社会学、カルチュラル・スタディーズ

Shingo HORI

Ph.D student, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Sociology Course, Doctoral Program, Waseda University

Specialization: Sociology, Cultural Studies

リンジー・モリソン

国際基督教大学大学院 アーツ・サイエンス研究科 博士後期課程

専門：日本文化論

Lindsay R. MORRISON

Ph.D. student, International Christian University, Doctoral Candidate

Specialization: Japanese Cultural Studies

平森 大規

ワシントン大学大学院社会学研究科 修士課程

専門：計量社会学、クィア・スタディーズ/フェミニズム

Daiki HIRAMORI



M.A. student, Department of Sociology, University of Washington  
Specialization: Quantitative Methodology, Queer and Feminist Studies

二木 泉

トロント大学大学院 社会福祉学部、国際基督教大学ジェンダー研究センター  
準研究員、日本財団国際フェロー

専門：社会福祉学、高齢者介護、ジェンダー研究

Izumi NIKI

University of Toronto, Factor-Inwentash Faculty of Social Work, Master of  
Social Work

Center for Gender Studies, International Christian University, Research  
associate

Nippon Foundation International Fellow

Specialization: Social Work, Gerontology, Gender Studies

フリアナ・ブリティカ・アルサテ

国際基督教大学大学院 アーツ・サイエンス研究科 博士後期課程

専門：比較文化学、比較文学、ジェンダーとセクシュアリティ研究

Juliana Buriticá ALZATE

Ph.D. student, International Christian University, Graduate School of Arts and  
Sciences, Ph.D. Candidate

Specialization: Comparative Culture, Comparative Literature and Gender and  
Sexuality Studies

上田 真央

国際基督教大学 ジェンダー研究センター 研究所助手/準研究員

専門：社会学、ジェンダー&セクシュアリティ、レズビアン・スタディーズ

Habiba-Mao UEDA

Research Institute Assistant/Associate Researcher, Center for Gender Studies,  
International Christian University

Specialization: Sociology, Gender & Sexuality, Lesbian Studies

松崎 実穂

国際基督教大学 ジェンダー研究センター 研究所助手/準研究員

専門：社会学

Miho MATSUZAKI

Research Institute Assistant/Associate Researcher, Center for Gender Studies,  
International Christian University

Specialization: Sociology

加藤 ダニエラ

広島女学院大学 国際教養学部 准教授

専門：イギリスにおけるモダニスト詩、女性作家の紀行文、フェミニズムとエコクリティシズム

Daniela KATO

Associate Professor, Department of Liberal Art, Hiroshima Jogakuin University

Specialization: Modernist British poetry, women's travel writing, feminism and ecocriticism

**国際基督教大学ジェンダー研究センター（CGS）所員**  
**Regular Members of the Center for Gender Studies, ICU**  
**2015年3月現在**  
**as of March, 2015**

有元 健

Takeshi ARIMOTO

Cultural studies

マット・ギラン

Matthew A. GILLAN

Music, Ethnomusicology

半田 淳子

Atsuko HANDA

Language Education, Japanese Language Education

池田 理知子\*

Richiko IKEDA \*

Communication

生駒 夏美（センター長、運営委員）\*

Natsumi IKOMA (CGS Steering Committee Member) \*

Contemporary English Literature, Representation of the Body in British and Japanese Literature

伊藤 亜紀

Aki ITO

Storia dell'arte italiana, Storia del costume italiano

上遠 岳彦

Takehiko KAMITO

Biology

加藤 恵津子（運営委員）＊

Etsuko KATO (CGS Director, Steering Committee Member) ＊

Cultural Anthropology, Gender Studies

菊池 秀明

Hideaki KIKUCHI

The Social History of China in the 17th-19th Centuries

ツベタナ・Ｉ・クリステワ

Tzvetana I. KRISTEVA

Japanese Literature

マーク・Ｗ・ランガガー＊

Mark W. LANGAGER

Education, Comparative and International Education

ジョン・Ｃ・マーハ

John C. MAHER

Linguistics

ショウン・マラーニー

Shaun MALARNEY

Cultural Anthropology

森木 美恵（運営委員）

Yoshie MORIKI (CGS Steering Committee Member)

Cultural Anthropology, Demography

那須 敬

Kei NASU

History of Religion, Culture and Politics in Early Modern England

西村 幹子（運営委員）

Mikiko NISHIMURA (CGS Steering Committee Member)

Sociology of education, International cooperation in educational development

大森 佐和

Sawa OMORI

International Public Policy, International Political Economy

クリストファー・サイモンズ

Christopher E. J. SIMONS

English Literature

高松 香奈（運営委員）

Kana TAKAMATSU (CGS Steering Committee Member)

Politics, International Relations

高崎 恵\*

Megumi TAKASAKI \*

Cultural Anthropology, Religious Studies

高澤 紀恵

Norie TAKAZAWA

Social History of Early Modern Europe

\* 編集委員 Editorial Board Members

## ICU ジェンダー研究所ジャーナル

### 『ジェンダー&セクシュアリティ』

#### 第11号投稿規程

2015年3月現在

#### 1) ジャーナル概要

『ジェンダー&セクシュアリティ』は、国際基督教大学ジェンダー研究センターが年一回発行するジェンダー・セクシュアリティ研究分野の学術誌である。研究部門では、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的研究や理論的考察に関する論文（綿密な学術的研究と、独創的な考察から成る、学術界に広く貢献しうる論考）、研究ノート（学術的研究・考察の途上にあつて、学術界に広く貢献しうる論考）を掲載する。フィールド部門では、活動家によるケーススタディ、組織・国内・国際レベルにおけるジェンダー関連活動に関するフィールドレポート（様々な領域の専門家、および研究者が、日々の実践の中から現状の一側面を報告するもの）を掲載する。

#### 2) 第11号発行日：2016年3月

#### 3) 第11号論文投稿締切：2015年8月31日（月）消印有効

#### 4) 原稿提出先：国際基督教大学 ジェンダー研究センター 編集委員会

郵送：〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2 ERB301

Eメール：cgs@icu.ac.jp

#### 5) 応募要綱

##### a) 原稿

- ・本誌に投稿される原稿は、全文あるいは主要部分において未発表であり、他誌へ投稿されていないものとする。
- ・使用言語は日本語または英語に限る。

- ・原稿の様式は、Publication Manual of the American Psychological Association (2010年発行第6版)の様式に従うこと。様式が異なる場合は、内容の如何に関わらず受理しない場合がある。見本が必要な場合は、CGSホームページ上の過去のジャーナル（以下URL）を参照するか、CGSに問い合わせること。

<http://web.icu.ac.jp/cgs/journal.html>（日本語）

[http://web.icu.ac.jp/cgs\\_e/journal.html](http://web.icu.ac.jp/cgs_e/journal.html)（English）

- ・第一言語でない言語を使用して論文および要旨を執筆する場合は、投稿前に必ずネイティブ・チェックを通すこと。書かれた論文および要旨に文法的な問題が見られるなど不備が目立つ場合は、その理由により不採用になる場合がある。

- ・姓名・所属・専門分野・Eメール・住所・電話およびFAX番号は別紙に記載する（姓名・所属・専門分野は、日本語と英語で記載すること）。審査過程における匿名性を守るため、原稿の他の部分では執筆者氏名は一切伏せること。

- ・原稿料の支払い、掲載料の徴収は行なわない。

- ・本誌が国際的に発表される学術誌であることを踏まえ、たうで原稿を執筆すること。

- ・本規程に沿わない原稿は、改訂を求めて返却されることがある。

#### a-1) 研究部門（研究論文・研究ノート）

- ・研究論文は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で16,000-20,000字、英語の場合は6500-8500 wordsの長さとする。

- ・研究ノートは、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字以内、英語で5000 words以内の長さとする。

- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。

- ・日本語/英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。

- ・研究論文として投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、研究ノートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は研究論文に準ずる。

a-2) フィールド部門（フィールドレポート）

- ・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字、英語で5000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語/英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。
- ・研究論文・研究ノートとして投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、フィールドレポートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は、研究論文・研究ノートに準ずる。

b) 図表および図版

- ・図表は別紙で添付し、本文内に取り込まないこと。
- ・図版は直接印刷に耐える画質のものを添付すること。
- ・本文中における図表・図版のおおよその位置を原稿上に示すこと。
- ・画像やイラスト、図表など著作権が著者にはないものについては、署名された掲載使用の許可書を同時に提出すること。

c) 提出原稿

- ・原稿は、印刷コピーと電子ファイルの2種類を提出する。
- ・印刷コピーは、A4用紙に印刷したものを上記住所に3部提出する。
- ・電子ファイルは、Eメールに添付して上記アドレスに提出する。
- ・電子ファイルの保存形式
  - ーできる限りMicrosoft Word形式（ファイル名.doc）で保存したものを提出すること。拡張子.docxの提出は認めない。
  - ー.doc形式でのファイル保存が困難である場合は、Rich Text形式（ファイル名.rtf）、またはプレーンテキスト形式（ファイル名.txt）で保存したものを提出すること。
  - ー上記以外の形式、特に紙媒体から読み込んだ画像データによる本文及び要旨の提出は認めない。



- ・添付ファイルおよび印刷コピーの内容は、完全に一致したものであること。
- ・提出された原稿等は返却しない。

#### 6) 校正

校正用原稿が執筆者に送付された場合、校正のうえ提出期限内に返送すること。その後、文法、句読法などの形式に関する微修正を、編集委員会の権限で行うことがある。

#### 7) 審査過程

投稿原稿は編集委員会が指名する審査者によって審査される。審査では独自性、学術性、論旨の明快さ、重要性および主題のジェンダー・セクシュアリティ研究に対する貢献度が考慮される。原稿の改稿が求められる場合、審査意見および編集コメントが執筆者に伝えられる。投稿の受理・不受理の最終判断は編集委員会が下すものとする。

#### 8) 著作権

投稿を受理された論文の著作権は、他の取り決めが特別になされない限り、国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会が保有するものとする。自己の論文および資料の複製権および使用権に関して、執筆者に対する制限は一切なされないものとする。

#### 9) 原稿の複写

原稿が掲載された執筆者には3冊（執筆者が複数いる場合は5冊まで）の該当誌を贈呈する。なお、それ以上の部数については別途ジェンダー研究センターに注文することができる。

#### 10) 購読申込

該当誌の購読の申し込みはEメール [cgs@icu.ac.jp](mailto:cgs@icu.ac.jp) で受け付ける。

当規程は予告なく改定されることがある。

**The Journal of the Center for Gender Studies, ICU  
Gender and Sexuality  
Journal Regulations for Vol. 11  
as of March, 2015**

1) Journal Overview

Gender and Sexuality is an academic journal on the study of gender and sexuality, published by the Center for Gender Studies at the International Christian University. The journal's research section shall consist of research papers on empirical investigations, theoretical discussions on gender and sexuality studies (\*1), and research notes (\*2). The field section shall feature case studies by activists, and field reports (\*3) concerning gender-related activities at institutional, domestic, and international levels.

\*1 Research papers should be based on thorough academic research, contain original and creative viewpoints, and contribute to a wider academic field.

\*2 Research notes should contain discussions that are still in progress but show their potential to contribute to a wider academic field.

\*3 Field reports should report on the author's daily practice, focusing on one aspect of the field being studied.

2) Publication Date of Volume 11: March, 2016

3) Manuscript Submission Deadline for Volume 11: Monday, August 31, 2015, as indicated by the postmark on the envelope.

4) Address for Manuscript Submissions:

Center for Gender Studies Editorial Committee

Postal Address: ERB 301, International Christian University

3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo, 181-8585

E-mail: cgs@icu.ac.jp

## 5) Rules for Application

### Manuscripts

– Manuscripts submitted to this journal must be previously unpublished, in full or in part.

– Only Japanese or English manuscripts shall be accepted.

– Manuscript format must be in accordance with the Publication Manual of the American Psychological Association (6th Edition, 2010). Manuscripts submitted in other formats may be rejected regardless of their contents and their scholarly worth. For examples of the necessary formatting, please review past issues of the journal, which can be accessed from the CGS home page at the following URL (s), or contact the CGS directly with any inquiries about formatting.

<http://web.icu.ac.jp/cgs/journal.html> (Japanese)

[http://web.icu.ac.jp/cgs\\_e/journal.html](http://web.icu.ac.jp/cgs_e/journal.html) (English)

– Manuscripts (papers or summaries) that are not in the author's native language must be proofread by a native speaker of that language. Manuscripts with obvious inadequacies such as grammatical errors shall be rejected.

– The author's name, affiliation, specialization, e-mail address, postal address, telephone number, and fax number should be written on a separate title page. Name, affiliation and specialization should be indicated in both English and Japanese. To ensure anonymity during the screening process, the author's name should not appear in the text.

– There shall be no payment involved for manuscripts or for insertion.

– Manuscripts should be written in a style appropriate for an internationally-circulated academic journal.

– Manuscripts that do not conform to these guidelines may be returned with

a request for revision.

a-1) Research Section

- Research papers should be between 16,000 to 20,000 Japanese characters or 6,500 to 8,500 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Research notes should be less than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Titles should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- An abstract (including the title) of 500 words in English should be attached on a separate sheet with a list of five keywords in English.
- An abstract (including the title) of 800 Japanese characters should also be attached on a separate sheet with a list of five keywords in Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper may be accepted as a research note, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers.

a-2) Field Section

- Manuscripts should be no longer than 12,000 Japanese characters or 5000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- The title should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- An abstract (including the title) of no more than 500 words in English should be attached on a separate sheet with a list of five keywords in English.
- An abstract (including the title) of 800 Japanese characters should also be attached on a separate sheet with a list of five keywords in Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper or research note may be

accepted as a field report, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers or research notes.

#### b) Figures and Graphic Images

- Figures should be attached on a separate sheet. Do not include them in the text.
- Graphic images should also be attached on a separate sheet, and should be of a quality high enough to resist degradation during printing.
- The approximate position of the figure/image in the document should be indicated.

#### c) Manuscript Submission

- Manuscripts should be submitted in both digital and hard copy.
- Three hard copies should be submitted. They should be double-spaced on single-sided A4 paper.
- The digital copy should preferably be submitted in MSWord (filename.doc) format. Files may also be submitted in Rich Text format (filename.rtf) or Plain Text format (filename.txt).
- Files in formats other than those listed above, such as .docx extension files or scanned copies of images or text, shall not be accepted.
- The digital copy shall be submitted as an e-mail file attachment to cgs@icu.ac.jp.
- The digital and hard copies should be completely identical.
- Manuscripts submitted will not be returned.

#### 6) Revisions

If a manuscript is returned to the author for revision, the manuscript should be revised and sent back by the specified date. Note that slight modifications (grammar, spelling, phrasing) may be carried out at the discretion of the

editorial committee.

#### 7) Screening Process

Submitted manuscripts shall be screened and chosen by reviewers designated by the editorial committee. Factors for selection include originality, scholarliness, clarity of argument, importance, and the degree of contribution that the manuscript offers for the study of gender and sexuality. In the event that a revision of the manuscript is required, opinions and comments by the editorial committee shall be sent to the author. The final decision for accepting or rejecting an application rests in the hands of the editorial committee.

#### 8) Copyright

Unless a special prior arrangement has been made, the copyright of an accepted manuscript shall belong to the Editorial Committee of the ICU Center for Gender Studies. No restrictions shall be placed upon the author regarding reproduction rights or usage rights of the author's own manuscript.

#### 9) Journal Copies

Three copies of the completed journal (or five in the case of multiple authors) shall be sent to the author of the accepted manuscript. Additional copies may be ordered separately.

#### 10) Purchasing Orders

Orders for the journal can be submitted by e-mail to [cgs@icu.ac.jp](mailto:cgs@icu.ac.jp).

Note that these guidelines may be revised without prior notice.

**編集後記**  
**加藤恵津子**

ここに第10号をお届けできることを嬉しく存じます。年を追うごとに、より多くの論文・研究ノートのご応募があり、編集委員一同感激しております。また今年も海外の方、海外出身の日本在住の方からもお問い合わせ・ご投稿をいただき、当ジャーナルを日英バイリンガルで発行していることの効果を感じます。その分、多くの査読者の方にご協力いただくこととなりました。その適切かつご丁寧な論評に、心から感謝申し上げます。最終的には研究論文4本、研究ノート4本、書評1本を厳選させていただきました。読者の皆様にはぜひお楽しみいただきますよう、そして今後とも当ジャーナルをご愛読下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、編集・発行作業にあたってくれたCGS関係者の皆様、今回も本当にありがとうございました。

**Postscript from the Editor**  
**Etsuko KATO**

It is with great pleasure that we present the tenth volume of Gender and Sexuality. We are delighted to have received an unprecedented number of manuscript submissions for this volume. In particular, the large number of enquiries and submissions from researchers overseas and foreign researchers in Japan has reinforced our original objective to publish a bilingual journal in Japanese and English. The diversity of submissions required the assistance of many referees to whom we are indebted for their detailed evaluations. In the end, four research papers, four research notes and one book review were selected for publication. We trust that you will find them insightful and stimulating. Finally, I would like to thank all those at CGS who were involved in the editing and publication of this volume.





*Gender and Sexuality*

Journal of the Center for Gender Studies,

International Christian University

Printed and Published on March 31, 2015

Editor International Christian University  
Center for Gender Studies Editorial Committee

Publisher Center for Gender Studies  
International Christian University  
ERB 301, 3-10-2 Osawa, Mitaka city, Tokyo 181-8585 JAPAN  
Tel & Fax: +81 (422) 33-3448  
Email: cgs@icu.ac.jp  
Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Printing Hakuhosha Co.,Ltd.

© 2005 by Center for Gender Studies, Japan.

All rights reserved.

国際基督教大学ジェンダー研究センター ジャーナル

『ジェンダー & セクシュアリティ』

2015年3月31日印刷・発行

編集 国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会

発行 国際基督教大学ジェンダー研究センター  
〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 ERB301

Tel & Fax: (0422) 33-3448

Email: cgs@icu.ac.jp

Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

印刷 株式会社 白峰社

著作権は論文執筆者および当研究センターに所属し、  
著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。

